
ポケモン不思議のダンジョン・レオンの探検隊＋アスカの救助隊

バクフーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン・レオンの探検隊＋アスカの救助隊

【Nコード】

N0549G

【作者名】

バクフーン

【あらすじ】

アスカがポケモンの世界にやって来てから七年の年月が過ぎていた。アスカの活躍により自然災害はなくなり世界は平和になった。しかし、そんな平和になったポケモン達の世界にまた新たな危機が迫ろうとしていた……

プロローグ

ここはとあるギルドの建物がある場所。

ギルドとは救助隊とは違い世界にあるお宝を探したり未開の地へと冒険したりする探検隊が集まった場所である。

そんなギルドの前に一匹のポケモンが。

「ここがああの超有名な探検家、プクリン親方のギルドかあ！

やっぱり、一流の探検家になるんだったら超一流の探検家、プクリン親方の弟子になるのが一番！良し！行くぞ〜！」

気合いを入れて中に入ろうとしているポケモン。だけど！

突然ギルドの中から大きな叫び声が聞こえた！

その叫び声が聞こえた刹那、凄い衝撃波と共に三匹のポケモンが吹き飛んできた！

中に入ろうとしたポケモンは慌てて近くにあったポケモンの顔を象ったトータムボールに隠れた。

「イタタタ・・・やっぱ親方は強いっすよ（汗）とてもじゃないけど、俺達じゃあ歯がたたないっす。」

三匹のうちの一匹。

ストライクが悔しそうな表情をしながら言った。

「くっ！これからもあいつに俺達の稼ぎをぶんどられるのか！」

「悔しいっすねえ！」

残りの二匹、ザングースとサンドパンも悔しそうな表情で言った。

「一体何が？」

トーテムポールに隠れているポケモンがザングース達に聞こえない程の小さな声で呟く。

その時、ギルドの中からまた新たに二匹のポケモンがやって来た。

「ヘイヘイヘイ！チームかまいたち！まだこんな所でうろついてるのかあ？」

二匹のうちの二匹。

ヘイガニがザングース達に挑発的な態度で言う。どうやらザングース達も探検隊で、チームかまいたちというチーム名らしい。

「早く次の仕事に行かないと、まゝた親方様のお仕置きだよ？」

意地悪そうにもう一匹。ペラップがザングース達に言う。

「い、今から行こうと思ってたんだよ！

お前達、行くぞ！」

「「お、おう！」」

ザングースがチームかまいたちのリーダーらしい。サンドパンとストライクを連れてギルドから去って行った。

「うはあ（汗）やっぱギルドって厳しい所なんだなあ（汗）」

まだトーテムポールに隠れているポケモンは誰にも聞こえないよう小さな小声で呟く。

その時、チームかまいたちが遠くまで行ったのを確認したペラップとヘイガニはギルドの中へ戻ろうとした。

「侵入者注意！侵入者注意！」

ペラップとヘイガニが戻ろうとしたまさにその時、突然地面から一匹のポケモンが侵入者注意！と叫びながら現れた！
モグラポケモンのディグダだ。

「侵入者だと！？その不屈き者は一体何者でい！？」

ヘイガニが少し怒った口調でディグダに聞く。

するとディグダは入口付近に移動した。

その付近には誰かポケモンの足跡が。

「足跡はポツチャマ！足跡はポツチャマ！」

ディグダが足跡を見ながらそう叫ぶ。

「ギクッ！？」

それを聞いて驚いているのは先程からずっとトーテムポールに隠れているポケモン。

そのポケモンこそがポツチャマなのだ。

ポツチャマは思わずその場から逃げ出した。

「ハア、ハア、な、何で僕逃げてんだろ？」

探検隊になる絶好のチャンスだったのに……」

ギルドから南側にある小さな海辺まで逃げていたポツチャマ。

走りながらあの場から逃げてしまった事を後悔しているようだ。

「ハア、ハア、ん？な、何だ？」

しばらく海辺を走っていたポツチャマは、遠くの方の砂浜に倒れている何かを発見する。

「うゝん……」

目を凝らしてじーっとその何かを見るポツチャマ。

「えっ！？あれポケモンじゃないか！？」

ポツチャマは驚いた表情をしている。

それは当然だろう。

砂浜に一匹のポケモンがうつ伏せで倒れているのだから。

ポツチャマは慌ててそのポケモンに駆け寄る。

このポケモンとの出会いが世界の命運を賭けた大冒険への幕開けになるとは、この時のポツチャマはまだ知らなかった。

プロローグ（後書き）

プロローグ完成です。

探検隊と救助隊をコラボしてみました！

第一話 見知らぬ場所。(前書き)

今回は主人公視点です。

第一話 見知らぬ場所。

・・・・・・・・何処からか波の音が聞こえる。

俺は海の近くににいるのか？何でそんな所に・・・・・・・・

「・・・・・・・・ねえ？」

ん？誰かの声が聞こえる。誰だ？聞いた事がない声だ・・・・・・・・

「ねえ大丈夫？しっかりして！」

「・・・・・・・・うつ。」

俺はゆっくりと目を開ける。まず最初に見えたのは砂だ。うつ伏せで倒れていたみたいだな。

何か顔にたくさん砂が付いてる（汗）

俺は顔に付いた砂を払いながらゆっくりと身体を起こす。

そして声が聞こえた方へ顔を向ける。

「良かった！気がついたんだね？」

・・・・・・・・まだ意識がはっきりしないのかな？幻聴だと思うんだけど、何かポツチャマが俺に喋りかけてるように聞こえる（汗）

「うん？僕の顔に何か付いてる？」

幻聴じゃなかった！？

「・・・・・・・・ええ！？ポ、ポツチャマが喋った！？」

俺は思わずそう叫んだ。

「な、何？」

お、落ち着け、落ち着けよ俺！これは夢だ夢！
そうに違いない！

だってポケモンが言葉を喋るとかあり得ないだろ！？これが夢かどうかはっきりさせるには……………やっぱあれか！

「……………イタタタタ！？」

頬を思いっきり引っ張って見たらスゲー痛かった（汗）って事はこれ夢じゃないのか！？

「何してるの君（汗）
変わった奴だなあ？」

やっぱ喋ってるよ（汗）

「何でポケモンなのに言葉を喋ってるんだ！？」

俺はそう叫ばずにはいられなかった。

「ポケモンなのにとって……………何言ってるのさピカチュウ？」

……………へっ？

ピカチュウ？

「誰がピカチュウ……………」

「君この辺りじゃあ見ない顔だね？」

何処から来たの？」

って俺の言う事スルーかい！？まあ良いや、多分俺の聞き間違いだよな、うん。とりあえず俺が何処から来たのか答えないと……・ってあれ？俺……・何処から来たんだ？

「どうしたの？」

ポツチャマが首を傾げながら俺に聞く。

「あ、いや、その……俺、何処から来たのか解らないんだ
(汗)」

隠してもしようがないから俺は正直に解らないと答えた。

「解らないって、大丈夫ピカチュウ？」

やっぱり聞き間違いじゃなかったか！

「何で俺の事をピカチュウって呼ぶんだ？」

「だってピカチュウでしょ？」

またピカチュウって言ったこいつ！

「俺はピカチュウじゃない！俺は人間だ！」

何処をどう見てピカチュウと人間を見間違えるんだよ？

「人間？どっからどう見てもピカチュウだよ？」

あゝまたか！もういい加減にしろよ！

「だから俺はピカチュウ・・・・・・・・」

俺はピカチュウじゃないって言おうとしたんだけど、その時何処から綺麗な泡が一つ俺の前に浮遊してきた。

その泡に反射して俺の顔が鏡みたいに映し出された。

「ええ！？」

俺はまた叫んでしまった。その泡に映った顔が人間の顔じゃなかったからだ。

俺が叫んだ事で泡が割れてしまった。

「い、今のは見間違いだよ・・・・・・・・まさかそんな事が・・・・・・・・ど、何処か水溜まりみたいな所は・・・・・・・・あった！」

11

俺は急いで水溜まりがある場所へ走った。

頼むから嘘であってくれよ・・・・・・・・

俺はゆっくりと水溜まりに顔を近づける。

水溜まりには覗き込む俺の顔が映し出される。

そこに映し出されたのは人間の顔ではなかった。頭の上に長い耳。

円らな瞳。

頬にある電気袋。

何処からどう見てもピカチュウそのものだ（汗）

「マジかよ・・・・・・・・」

念のため身体を確認してみた。

身体中黄色い体毛で覆われていた。

それにピカチュウの特徴でもあるギザギザの尻尾もある。

マジで俺ピカチュウになっちゃってるよ(汗)

何で俺ピカチュウになっちゃったんだ？

・・・・・・・・ダメだ(汗) 何にも解らない・・・・・・・・何も思い出せない・・・・・・・・

「ねえ、君もし良かったらだけど・・・・・・・・僕と一緒に探検隊にならない？」

いつの間にかポツチャマが俺の近くまで来ていた。探検隊だって？

「世界中にある秘宝を探したり、未開の地へと冒険したりするんだ！僕、ずっと探検隊になるのが夢だったんだ！」

目をキラキラさせながら語っているポツチャマ。

「今はそれどころじゃないんだよ！」

俺の身に何があったのか、それを調べないとならないんだからな！」

ポツチャマには悪いけど、探検隊とかやってる場合じゃないんだ！俺はその場から去ろうとした。

「あつ待つてよ！」

調べるってどうやって調べるのさ？」

「あっ(汗)」

ポツチャマのその言葉を聞いて俺はその場で止まった。

言われてみれば・・・・・・・・どうやって調べれば良いんだ(汗)

「いきなり探検隊になろうとか言ってごめん。

でも、探検隊になれば世界中を旅する事になるから君の事が何か解

るかもしれないよ？」

「……探検隊ねえ。まあ確かにポツチャマの言う通り俺の事を調べようにも手がかり無しだし……」
探検隊になって少しずつでも情報を集めた方が良いのかな？

「それと、もしかしたらプクリン親方なら何か知ってるかもしれないよ？」

プクリン親方？

「誰だそいつ？」

「とっても有名な探検家なんだ！」

プクリン親方はいろんな所に旅をした事があるからもしかしたら君の事を何か知ってるかもしれない。」

プクリン親方か………会ってみる価値はありそうだな。

「ポツチャマ、そのプクリンがいる所へ案内してくれないか？」

「じゃあ、僕と探検隊組んでくれるの！？」

またポツチャマの瞳がキラキラと輝く。

「それはプクリンが知っている情報によるとにかく案内してくれよ。」

「解った！ついて来て！」

ポツチャマは元気良く走り始めた。

まだ探検隊になるとは言っていないんだけどなあ（汗）

「あっそうだ！」

急にポツチャマが急停止して俺の方に振り向いた。なんだ？

「まだ名前言ってなかったね！僕の名前はポツチャマ！君は？もし覚えていたら教えて！」

名前はまんまポツチャマかい（汗）

まあ良いけど。

俺の名前か・・・・・・・・良かった。これは覚えている。

「レオン・・・・・・・・俺の名前はレオンだ！」

俺はポツチャマに俺の名前を伝えた。

「レオンだね？OKレオン、早くプクリン親方がいる所に行こう！」

再び走りだしたポツチャマ。俺もあとを追いかける為に走り始めた。

第一話 見知らぬ場所。 (後書き)

第一話完成です。

第二話　ギルドへ。

ピカチュウになってしまったレオンはポッチャマと共にプクリン親方がいるギルドの前に来ていた。何故自分がポケモンになってしまったのか、それを知っているかもしれないプクリン親方に会う為だ。

「なあポッチャマ、本当にそのプクリンは俺がポケモンになった理由を知ってるのか？」

レオンは腰に手を当てながらポッチャマに聞いた。

「多分ね。」

「多分って(汗)」

「あ、いや、きっと知ってるって(汗)」

慌てて訂正するポッチャマ。レオンは疑いの眼差しでポッチャマを見る。

「とにかく中に行こうよ！きっとプクリン親方なら答えてくれるって！

………実際は会った事が無いから本当に答えてくれるか解らないけど(汗)」

小言でボソツと言うポッチャマ。

「今何か言ったか？」

ポッチャマの顔を覗き込むようにレオンが聞いた。

「う、うんうん何でもないよ(汗)
ア、アハハ・・・・・・」

笑って誤魔化すポツチャマ。

「そうか？まあ良いや。それより、中に入ろうぜ。」
「あつ待ってよレオン！」

建物の中には下に降りる為の階段が。

ギルドはこの階段を降りた先にあるらしい。

二人はギルドの中へ入ろうとした。

「侵入者注意！侵入者注意！」

だけどその時、二人の背後からいきなり声が！
ディグダだ！

ディグダの声に驚いた二人は足を滑らせて下の階へ落ちてしまった！
その時、ディグダの声に気づいた一匹のギルドのポケモンがいた。
そのポケモンは大声ポケモンのドゴームだ。

「何！？ふ・・・・・・・・・・侵入者だぞおお！！！」

息を大きく吸ったあと、大声でそう叫んだドゴーム。
その大声はギルド中に響いた。

「ヘイヘイヘイ！侵入者は許さねえぜ！」

猛ダッシュで走るヘイガニ。

「キャー！侵入者ですわー！」

何故か楽しそうなキマワリ。

「すぐに親方様の所に連行だ！」

急いで飛んでいくペラップ。

「連行でゲス〜！」

のんびりと走るビッパ。ギルドにいる様々なポケモンがレオン達の所に集まり二人を取り囲んだ。

「ヘイヘイ！観念しやがれ！」

「連行だ連行！」

ヘイガニとドゴームがレオン達を睨みながらそう言う。

「こんな歓迎聞いてなかったぞポツチャマ？」

ポツチャマに囁くように言うレオン。

ポツチャマは笑って誤魔化すしかなかった。

その後レオンとポツチャマはペラップ達に連れられて、このギルドの親方であるプクリンがいる部屋にやって来た。

「侵入者なの？」

プクリンがペラップに聞いた。

「はい、ピカチュウにポツチャマでございます。」

「やあ。僕はプクリン。このギルドの親方だよ。君達、ひよつとして探検隊になりたいからここに来たんじゃない？
そうなんでしょ？」

プクリンは笑顔でレオンとポツチャマに聞いた。

「はい！」

「いいえ。」

ポツチャマは即答ではいと答えたのだが、レオンはいいえと答えてしまった。すると、笑顔だったプクリンが急に険しい表情に変わった。

その表情を見た瞬間、周りにいるドゴームやビツパ達が脅え始めた。

「お、親方様に盾突くなんて（汗）」

「だ、大丈夫でゲスカ（汗）」

ビツパとこのギルドに所属しているチリーンが心配そうにレオン達を見る。

「俺は、俺の身に起きた不思議な出来事をあんたなら……」
「わああああ！？ ちょ、ちょい待ち！？」

ペラップが慌ててレオンの前に立った。

「親方様、しばしお待ちを・・・・・・・・お前バカか！？相手は親方様だぞ！敬語を使え敬語を！」

小言でレオンに言うペラップ。

「な、何でだよ？」

「親方様に何を聞きたいのかは知らないけど、親方様を怒らせたならその聞きたい事が聞けなくなるぞ！それに、親方様が怒ると私達もとぼっちりを受けるんだ！」

頼むから親方様を怒らせるような事はしないでくれ！」

レオンに必死で懇願するペラップ。

余程プクリンが怖いらしい。

「わ、解ったよ。」

怒らせないようにしなければ良いんだな？」

レオンは承諾した。

「頼むぞ・・・・・・・・お待たせしました親方様！」

「ペラップ、一体何を話してたの？」

首を傾げながら質問するプクリン。

「あ、いや、ちょっとした世間話を。」

ア、アハハ・・・・・・・・（汗）」

笑って誤魔化すペラップ。

「変なペラップ。まあ良いや。それで、何を話そうとしたのかな？」

「あ、ああ。俺の身に起きた不思議な出来事を親方様なら知ってるかもしれないって、このポツチャマに聞いてここに来たんだ。」

「不思議な出来事？」

レオンはプクリンに話した。自分は本当は人間で、気がついたらポケモンになっていた事を。

そして自分は記憶を失っている事も。

「ふーん。人間がポケモンに。確かに不思議な話だね。」

この話にプクリンは興味をもったらしい。

「俺は何でポケモンになっちゃったんだ……もし、その答えを知っているなら頼む！

教えてくれ！」

レオンはプクリンに自分がポケモンになってしまったその答えを求めた。だけど、プクリンからは何も返事が帰ってこなかった。

「……………すー……………すー……………」

返事の代わりに何やら寝息がプクリンから聞こえてきた。その場にいた皆はプクリンに注目した。

「うゝん？」

ペラップがプクリンのすぐ近くまで飛んでいき、様子を確認する。

「ふむ。寝ておられる！」

「がくっ！？」

プクリンが寝ていると聞いて思わずレオンはずっこける。

「寝てるって(汗)」

しかも目を開けたままかよ(汗)」

「仕方ない。親方様の代わりに私が答えよう。」

ペラップがプクリンの代わりにレオンの質問に答えるらしい。

「お前が？」

「私はこう見えてもこのギルドの情報通なんだ。親方様が知っている事は私も知っているって事。っでお前が人間からポケモンになっってしまった訳だが・・・・・・・・それは解らん！」

きっぱりと言ったペラップ。

「やっぱ知らないか・・・・・・・・」

レオンは肩を落として残念がる。

「だが、人間からポケモンになったという話。お前以外にもいるのは知っている。」

ペラップのその言葉を聞いたレオンはすぐにペラップに近寄った。

「それ本当か!？」

「あ、ああ本当だ。」

「教えてくれ! そいつは一体誰なんだ!？」

「お、教えるから少し離れてくれ。顔が近い (汗)」

「あっ悪い (汗)」

レオンは少し後ろに下がった。

「さて、その人間からポケモンになった者はアスカと言う名前だな。」

「アスカ？」

「あっ!？ その名前なら知ってるよ!

七年前に世界の危機を救った伝説の救助隊のリーダーでしょ!」

ポッチャマが興奮しながら言った。

「そうだ。そのアスカはな、この世界を救う救世主として人間からポケモンになったと言われているんだ。」

「じゃあ、俺も救世主として人間からポケモンになったのか？」

首を傾げながらレオンはペラップに聞く。

「だが、今この世界は平和そのもの。

世界が滅亡する危機に直面している訳では無い。よって、その説はないな。」

「何だよ (汗) 結局何にも解らないんじゃないか (汗)」

再びがっくりと肩を落とすレオン。

その時、眠っていたプクリンが急に目を覚ました。

「あっそうだ！チーム名を登録しなきゃ！」

「チーム名？」

いきなりなのでレオンは首を傾げる。

「そう。探検隊を結成するならチーム名がないとね！君達のチームの名前を教えて？」

「急にそんな事言われてもなあ……」

「ねえ、チームレオンじゃあダメかな？」

レオンの隣にいたポツチャマがレオンに聞いた。

「俺の名前をチーム名にすんのか？」

「ってか、俺探検隊になる事前提な訳？」

「お願いだよレオン。」

僕の夢なんだよ。

それに、探検隊になればいろんな所に行くからレオンの事、何か解るかもしれないでしょ？

だから、お願い！」

両手を合わせてレオンに懇願するポツチャマ。

レオンは右手で頭を掻きながら考える。

「うーん……まあ確かに今現在何にも手がかりは無いし、探検隊やってれば何か解るかもしれないな……解ったよ。探検隊、一緒にやろう。」

「ありがとうレオン！」

ポツチャマは凄く嬉しそうにレオンに抱きついた。

「じゃあ、チームレオンで登録するんだね？」

プクリンがポツチャマに確認する。

「はい！」

「解った。じゃあチームレオンで登録するよ。
登録登録、皆登録……」

急にプクリンが大きく息を吸い込んだ。

それを見てレオン達の周りにいるポケモン達が慌て始めた。

そして次の瞬間、プクリンは大きな声を出して叫んだ！

それは凄まじい衝撃波となってその場にいたポケモン達に襲いかかる。

「お、親方様のハイパーボイスだあ！？」

「凄まじい威力でゲスー！？」

皆なんとかプクリンの技、ハイパーボイスに耐えた。

「はい。登録完了だよ♪」

笑顔で言うプクリン。

「な、なんちゅう登録の仕方だよ（汗）」

プクリンの登録の仕方に驚くレオンであった。

「さあ、新人探検隊の君達にプレゼントだよ。」

キマワリ、彼らにこれを渡して。」

「はいですわ♪」

キマワリはプクリンからある物を受け取り、それをレオン達に手渡した。

「これは？」

「それは探検隊には必須のアイテムだよ。
いろんな道具を入られるバックに地図。

それから探検隊バッジ。そのバッジは探検隊の証だから無くさないように。解ったね？」

「はい！」

「あ、ああ。」

こうしてレオンはポツチャマと探検隊、チームレオンを結成した。

第二話 ギルドへ。(後書き)

第二話完成です。

第三話 ギルドでの生活初日。 (前書き)

成り行きで探検隊になっちゃったけど、本当にこれで良かったのか
なあ？

第三話　ギルドでの生活初日。

「それじゃあまずここから説明しようか。
えーここは主に……」

今俺はポツチャマと一緒にペラップにギルドの中を案内してもらっているんだ。

最初来た時は色々騒ぎがあったから良く中を見てなかったが、結構広いんだなあ。

それに、このフロアにある窓。そこから見える景色は綺麗な青い海。まあ、この建物が崖に建っていて尚且つ地下にこのフロアがあるから海が見えるのは当然か？

「おい？聞いているのか？」

ペラップがいつの間にか俺の前まで来て顔を覗き込むように俺を見ている。周りばかり見てたからペラップの説明全然聞いてなかった(汗)

「悪い(汗)聞いてなかった(汗)」

右手で頭を掻きながら俺はそう言った。

「まったく！良いか？
良く聞けよ！

まずそこがさっきお前達がいた親方様の部屋だ。そして東側にあるあの廊下の先にはこのギルドで探検隊が寝泊まり出来る部屋がある。ちなみにお前達の部屋は一番奥だからな。
そして反対側の廊下の先にあるのが食堂だ。」

「ねえペラップ質問！」

ポツチャマが元気良く右手を上げてペラップに聞いた。

「ペラップさんだ！」

さんを付けろさんを！

全く………それで、なんだねポツチャマ君？」

うわあ（汗）完全上から目線だよ（汗）

「えっと、彼処にいるグレッグルは何をしているの？」

えっグレッグル？

そんな奴いたっけか？

俺はポツチャマが指差す先を見てみた………いた（汗）
確かにいた（汗）

しかも何に使うか解らないツボをスゲー大事そうに拭いている。

良く見るとツボの中に紫の液体が（汗）

「あゝあれは気にするな。」

気にするなって言われると余計に気になるだろ！

「探検隊見習いのお前達にはまだあれを利用する事は出来ないから
な。

経験をしっかりと積んだ時に説明してやるよ。

さあ次だ。上に行くぞ。」

ペラップが上の階へ行ってしまった。

俺とポツチャマも急いで追いかける。

にしてもあのグレッグルは一体何をやってるんだ？

少し階段を登ると、さっきとは違うフロアに出た。

「ペラップ、ここは何を………」

「ペラップさん！」

俺がこのフロアは何なのか聞こうとしたらいきなり怒鳴られた（汗）
やたらとさんを強調して言っている（汗）

めんどくせえ奴だなあこいつ（汗）

「ペラップ………さん。ここはなんなんだ？」

「うむ。まずこのフロアの西側を見てみる。」

西側？

お、何か紙がいっぱい貼られている所がある。

「彼処は依頼掲示板だ。」

「依頼掲示板？」

「このギルドにはたくさんのポケモン達が依頼をしに来るんだ。
助けてほしい事があるとか、探してほしい物があるとか、はたまた
未開の地への冒険に協力してほしいなど依頼内容は様々だ。彼処に

はそんな依頼内容が書かれた紙を貼り付けている。
受けたい依頼があれば彼処から紙を取ってその依頼を実行するんだ。
」

ペラップが長々と説明してくれた。
でもちよつと気になる事が・・・

「未開の地への冒険は探検隊ぼくて良いけど、その他の助けてほしいとか探してほしい物がとか、それ探検隊じゃなくて救助隊の仕事じゃないのか？」

俺は首を傾げながらペラップに聞く。

「どんな依頼でも受ける！それがこのギルドの親方様のお考えだ。
・・・本当はそういう仕事を救助隊に任せたいんだけど、そんな事すると親方様のお仕置きが・・・あゝ想像するだけで恐ろしい(汗)」

ん？今何かスゲー小さな声で言ってたけど良く聞こえなかったなあ？
ってか、何でペラップの奴震えてるんだよ(汗)

「どうした？」

「な、何でもない！

とにかく、親方様の決めた事なんだからな！
解ったか？」

また偉そうにしたペラップに戻った(汗)

「解りました！」

ポツチャマは元氣良く答えた。

「レオンも解ったな？」

「ああ。」

「よろしい！それでは次だ！今度は反対側を見てみる。」

反対側？

あ、あっちにもさっきの依頼掲示板みたいに紙が貼られている。
でもちよつと違うぞ？

さっきの依頼掲示板に貼られていた紙には文字ばかりだったけど、
こっちには文字以外に写真も貼られている。

「あれはお尋ね者ポスターだ。名前の通り、悪い事をしたお尋ね者が
彼処に写真付きで貼られるのさ。」

お尋ね者……何か物騒だなあ（汗）

一体どんな奴らがお尋ね者になってんだ？

俺はお尋ね者ポスターを見してみる。

……うわあ（汗）ギャラドスとか怖そうな奴の写真がある
よ（汗）

「このお尋ね者達を捕まえるのも仕事だ。
良く覚えておけよ。」

チリリンチリリン！

ん？何か良い鈴の音色が聞こえたぞ？

「おゝもうこんな時間か！お前達、食堂に行くぞ。晩御飯だ。」

飯か！そういえば俺、何にも食べてなかったよな。腹空いたぜ（汗）俺とポツチャマはペラップと一緒に食堂に向かった。

食堂に着くと、もうすでに他のポケモン達がやって来ていた。

「お前達は一番奥の方だ。さあ早く席に座れ。」

ペラップに言われ、俺とポツチャマは奥の方のイスに座る。

テーブルの上にはいろんな物が置かれていた。

その中でスゲー気になる物が。リングはすぐに解ったんだけど、なんだろこのぶによぶによした物は？

皆の表情を見てみるともう待ちきれないって感じにしている。

ドゴームなんかはヨダレ垂らしてるし（汗）

ポケモン達にとってはごちそうらしい。

「なあポツチャマ、このぶによぶによしたやつ、何？」

俺は囁くようにポツチャマに聞いた。

「これはグミだよ。」

すっごく美味しいんだから♪」

笑顔でそう言うポッチャマ。グミって言うのかこれ？

俺は黄色いグミを手にとってちよっと握ってみる。……………う

わぁ（汗）マジでぶによぶによしてる（汗）

本当に食えんのかよこれ（汗）

「どうやら全員揃ったな？それじゃあ待たせたな！それでは……………」

ペラップがちよっと間を開ける。

そして次に言葉を発しようとした時、他のポケモン達も一緒になつて……………」

『いっただっきまゝす♪』

って言ったんだ。

何？これ皆で言う決まりなの？

なんて事を俺が思ってたら皆が物凄いスピードでリングや例のグミに噛り付いた（汗）

うわぁ（汗）まさにバカ喰いだなこれ（汗）

「レオン食べないの？

食べないなら僕がもらっちゃうよ♪」

もらっちゃうよ♪っじゃないよ！俺だって腹減ってんだよ！

俺はポッチャマには渡すまいと手に持っていた黄色いグミに噛り付く。

「……………美味しい♪」

口に入れた瞬間甘味が口の中で広がった。

やばいこれは、美味すぎる！

「く、食い過ぎた（汗）」

晩御飯を食べ終えて、俺とポツチャマは自分達の部屋にやってきていた。あの後俺はあまりの黄色いグミの美味さに大量にそのグミを食べたんだ。他のポケモン達と同じようにバカ喰いして（汗）もうお腹パンパンで動けません（汗）

「・・・・・・・・すー・・・・・・・・すー・・・・・・・・」

ポツチャマはもう寝ちゃってるし（汗）

俺もそろそろ寝ようかなあ。

ペラップの話だと毎朝朝礼があるみたいだし。

俺は寝ようと横になった。

「・・・・・・・・むにゃむにゃ・・・・・・・・つつく・・・・・・・・」

「うわっ!？」

ポツチャマが寝ぼけて俺の上に覆い被さってきた（汗）ポツチャマ、くちばしが痛いぞ（汗）

「よいしょっと・・・・・・・・」

俺はポツチャマを起こさないようにベッドに戻した。ポツチャマつて寝相が悪いのな(汗)

「さてと、今度こそ寝よ・・・・・・・・うつ!？」

なんだ、急にめまいが!？

『あのガバイトがいる所へ!？』

『ガバイトの鱗が必要だからね。』

『それは大変だ!さあ、ここで必要な道具を揃えていって下さい!』

『そうねえくじゃあ、幸せリボンに防御スカーフ、それにパワーバ
ンダナをもらおうかしら♪』

「・・・・・・・・うう！」

やつとめまいが治まったみたいだ・・・・・・・・
だけどなんだよ今の？

いきなり変なビジョンが見えたぞ・・・・・・・・
確か、何処か店みたいな所に俺とポツチャマ、それとキマワリがいて・・・・・・・・あの店の店員は確かカクレオンだったな？カクレオンが二匹いてその二匹からキマワリが道具を買っていた・・・・・・・・なんでそんなもんが見えたんだろう・・・・・・・・疲れてるのかな俺？うん、多分そうだな。

「寝よ。」

俺は自分が疲れていると納得させて、明日に備えて寝る事にした。

第三話 ギルドでの生活初日。(後書き)

第三話完成です。

第四話 迷宮の洞窟へ！チームレオン、初の依頼！（前書き）

一体あのめまいの後に見えたビジョンはなんだったんだろう？

第四話 迷宮の洞窟へ！チームレオン、初の依頼！

「ふぁゝ・・・・・・・・眠いゝ・・・・・・・・」

今俺はポツチャマや他のポケモン達と一緒にギルドの外にいる。
ペラップが言ってた朝の朝礼があるからだ。

他の皆は慣れてるみたいだから眠そうにはしてないけど俺は眠い（汗）

昨日の夜変なビジョン見たあと寝ようとしたんだけど、気になって結局眠れなかったんだよなあ（汗）

「皆集まったな？」

それでは、朝の誓いの言葉、始めっ！ひとゝつ！」

『仕事は絶対サボらない！』

皆揃って朝の誓いの言葉ってやつを言い始めた。

「仕事は絶対サボらない！」

うお、ポツチャマまで（汗）とりあえず俺も一緒に言った。けど眠い（汗）

「ふたゝつ！」

『脱走したらお仕置きだ！』

脱走したらお仕置きって（汗）怖いんですけど（汗）

「みゝつつ！」

『皆笑顔で明るいギルド！』

皆笑顔で明るいギルドっか……でも脱走したらお仕置きなんだよな(汗)

……そういえばさっきから気になってたんだけど、ペラッ
プの後ろに立っているプクリン。ずーっと真っ直ぐ何処を見つめ
たまま動かないんだよな？

まさか、立ったままで尚且つ目を開けたまま寝てるんじゃない？

「さあ皆！仕事にかかるよお！！」
『おー！！』

皆が掛け声をあげた。

その時、プクリンがいきなりピクッて動いた。

そして瞬きを始める。

まさかとは思ってたけど、やっぱり寝てたのな(汗)

朝礼が終わった後、俺達はギルドの中へ戻っていた。

今は依頼掲示板の前にいる。ペラップが俺とポツチャマの為にそんなに難しくない依頼を探してくれているんだ。

「さて、探検隊見習いのお前達に丁度良い依頼は……」

ペラップが依頼掲示板に貼られている紙とにらめっこしている。

「あのゝ・・・・・・・・」

ん？俺の後ろから凄く小さな声が？

俺が振り向くとそこには閃光ポケモンのコリンクがいた。

「君は？」

「僕はコリンクっています。お願いします！
ガバイトの鱗を取ってきてください！」

いきなりコリンクが俺とポツチャマの前で土下座しながら頼んできました！

「お、おいおい顔を上げなよ（汗）」

「お願いします！ガバイトの鱗を！」

「どうしたの？」

あっプクリンがやって来た。

「このコリンクがガバイトの鱗を取ってきてほしいって頼むんだ。」

「って事は依頼だね？」

でもなんでガバイトの鱗が必要なんだい？」

プクリンがコリンクに聞いた。

「実は・・・・・・・・僕の妹が重い病気になってしまって・・・・・・・・
このままだと妹は死んでしまいます！

だから、病気を治す為にガバイトの鱗が必要なんです！」

涙を流しながらコリンクが言った。

このコリンクの妹が病気に……………

「なるほど。確かにガバイトの鱗には強い解毒作用があるからね。病気も治る筈だ。

その依頼、もちろん受けるよ。ねえ、レオン？」

そこで俺に振るか！

でも……………ガバイトの鱗さえあればこの子の妹は助かるんだよな……………

「行こうよレオン！」

ポツチャマが真剣な眼差しで俺を見ながら言った。

「解った。俺達チームレオンがその依頼を受けよう！だけどさ、そのガバイトの鱗はどうやって手に入れるんだ？」

俺は腕組みしながらプクリンに聞いた。

「迷宮の洞窟にいるガバイトから貰えば良いよ。」

「迷宮の洞窟！？お、親方様、探検隊見習いのこの二人にあそこは厳しいのでは？」

なんだ？急にペラップが慌てだしたぞ？

「どうしたんだ？」

「迷宮の洞窟は荒野の先にある洞窟で、そこには気性が荒いガバイトが住み着いているんだ。」

新人のお前達には超難関の依頼って事になるんだ。」

ペラップが説明してくれた。超難関、か……大丈夫かな（汗）

「心配ならキマワリと一緒に行かせるよ。彼女は優秀な探検隊員だからね。」

キマワリが？あのやたらとキャー！って言っているキマワリが？

「それでしたら私も安心です。お前達、先輩のキマワリの指示をしっかりと聞いてこの依頼を成功させるように。解ったな？」

ペラップが俺達に聞いた。

「はい！」

「ああ。待ってなよコリンク、ちゃんとガバイトの鱗を取ってきてやるからな。」

「お願いします！」

場所が変わりここはギルドの近くにある町、トレジャータウンにキマワリと一緒に来ていた俺とポツチャマ。

キマワリが言うにはこのトレジャータウンには様々なポケモン達
自分の店を開いていて探検隊をサポートしてくれるらしいんだ。

「なあキマワリ。ここにいるポケモン達はどんな店を開いている
んだ？」

歩きながら俺はキマワリに質問した。

「トレジャータウンには全部で七店のお店があるんですわ♪
まず彼処にヨマワルから説明しますわね♪」

キマワリは楽しそうに俺に説明してくれた。
ペラップと違ってキマワリは凄く良い奴だな。

キマワリが言うには、トレジャータウンに入ってすぐの所にあるヨ
マワルが経営しているのは銀行だそうだ。
そしてすぐ近くにも三軒の建物がある。

ラッキーというポケモンがいる所は、ポケモンの卵を預かり育て
くれる場所なんだそうだ。

次に何やら入り口の所に大きなガイコツが飾られている建物はガラ
ガラと呼ばれるポケモンが道場を開いているらしい。
なんでも探検隊を鍛えてくれるみたいなんだ。

あと、エレキブルというポケモンがいる所ではコンビネーション攻
撃ってやつを教えてくれるんだと。良く解らないが（汗）

「さあ、トレジャータウンはまだ先があるからそこも教えてあげま
すわん♪連いてきて♪」

四軒の店の説明を受けたあと、キマワリが楽しそうにしながら更に
西の方角へ歩いていった。

俺とポツチャマもあとに続く。

「おっ！また違う店があるな！」

トレジャータウンの西側には三軒の店があった。

「私がしっかりと説明いたしますわん♪」

キマワリにまた説明を受ける俺とポツチャマ。

やっぱペラップなんかよりもスゲー優しいよこのキマワリ。
仲良く出来そうだ。

キマワリの説明によると、まずガルーラというポケモンがいる所では探検隊が持ちきれなくなった道具を預かってくれる所なんだそう
だ。

次にネイティオと呼ばれるポケモンがいる所では探検先で見つけた
正体不明のお宝を鑑定してくれるらしい。

最後にカクレオンが二匹いる所では……ん？カクレオンが
二匹？この二匹、何処かで見た事あるような……

「あっキマワリ姉さんじゃないですか！」

俺が考えている時に身体の色が紫色のカクレオンがキマワリに声をかけた。

「どうも♪最近の調子はどう？」

「ええ、お陰様でうちも商売繁盛してますよ！」

「今日も探検ですか？」

「ええ、迷宮の洞窟に行くんですわん♪」

キマワリが迷宮の洞窟と言った瞬間二匹のカクレオンが驚きの表情を浮かべた。

「あのガバイトがいる所へ!？」

「ガバイトの鱗が必要だからね。」

あれ?この展開・・・・・・・・あっそうか!
昨日俺が見たあのビジョンと同じなんだ!
って事はこのあとは・・・・・・・・

「それは大変だ!さあ、ここで必要な道具を揃えていって下さい!」
「そうねえくじゃあ、幸せリボンに防御スカーフ、それにパワーバンダナを貰おうかしら♪」

やっぱり!

俺が昨日見たビジョンと全く同じ事が目の前で起きている・・・・・・・・
・・・・・・・・どういう事だ?

俺って何か予知能力みたいなものでも持っているのか?・・・・・・・・
いや、まさかな(汗)

「ねえキマワリ、その道具って一体どんな効果があるんですか?」

ポツチャマがキマワリに今買った道具について聞いている。

「まずはこの幸せリボンから説明しますわね♪
幸せリボンは付けているポケモンがダメージを受けるとそれが良い経験となるんですわん♪」

ん？ どういう事？

「それってつまり、このリボンを付けた状態でダメージを受けると、強くなるって事ですか？」

ポツチャマが首を傾げながら聞いた。

「簡単に言えばそういう事ですわ。

それからこの防御スカーフ。これは身につけると防御力をあげてくれるんですわん♪

つまり、身体が丈夫になるって事ですわね♪

そしてこのパワーバンダナ！これを身につけると攻撃力が上がるんですわん♪」

「つまり強い攻撃が出来るって事か？」

「その通りですわレオン♪」

頷きながらキマワリが答えてくれた。

なんか聞いているとこの三つの道具は凄そうなんだけど……
本当にそんな効果があるのか？

「はいレオン♪これはあなたにあげますわん♪
それとポツチャマにはこれを♪」

俺が考え事をしている時にキマワリが幸せリボンを俺に手渡してく

れた。次にポツチャマにも防御スカーフを手渡した。

「あ、ありがとうキマワリ。」

俺は貰った幸せリボンを首に巻き付けた。

・・・何か・・・ダサいな(汗)

ポツチャマも首に防御スカーフを巻き付けてるんだけど・・・
あっスカーフ何かかったいいなおい(汗)

キマワリもパワーバンダナを首に巻き付けた。

そっちも何かかったいい(汗)

今思ったけど何故おれだけリボンなんだよ(汗)
リボンって女の子が付けるもんじゃないのか？

「レオン、良く似合ってますわよ♪」

キマワリが笑顔で言ってくれた。

俺はとりあえずありがとうって言っておいたけど、やっぱりリボンは
ちよっとなあ(汗)

「さあ、これで準備完了ですわね！

二人共、気合いを入れて迷宮の洞窟に行きますわよ！」

「おー！」

「お、おう(汗)」

俺達はガバイトの鱗を手に入れる為に迷宮の洞窟を目指してトレジャ
ヤータウンから出発した。

「なんだあいつら？新入りか？」

「チームレオンって言うらしいっすよ？」

「新入りのくせに迷宮の洞窟に挑もうってか？

百万年早いだよ。

お前ら、あいつらよりも先に迷宮の洞窟に行って奴らの依頼を俺達
がやっちまおうぜ！」

「「おう！」」

この時、新入りの俺達を良く思わない奴らがいた事をまだ俺達は知
らなかったんだ。

トレジャータウンを出発してから数時間。

俺とポツチャマ、そしてキマワリは迷宮の洞窟に到着した。

「ここが迷宮の洞窟かぁ……………」

「ちよつと怖そうな所だね（汗）」

ポツチャマはちよつと怖がっているみたいだ。

足が震えている。

「大丈夫ですわ。

さぁ、行きますわよ♪」

キマワリが一番最初に洞窟の中へと入っていった。俺とポツチャマ

は慌ててキマワリのあとを追いかける。

迷宮の洞窟に入ってから数十分。

中はとても薄暗く、迷路のように道が入り組んでいる。

迷宮の洞窟って呼ばれる理由が解る気がするよ。

「怖いよお（汗）」

ポツチャマが俺にくつつきながら歩く。

ポツチャマ、そんなにくつつかれると歩きにくいぞ（汗）

バサバサバサ！！

ん？今何か聞こえたような・・・

「な、何今の！？ねえ何！？」

「お、落ち着けよポツチャマ（汗）」

ポツチャマが今にも泣きそうな顔をしている（汗）探検隊になるのが夢だったって言ってたのにこいつかなり臆病なんだな（汗）とにかくポツチャマを落ち着かせないと。

「うわあ！？な、何か来たよレオン！？」

ポツチャマが俺の後ろの方を見ながら叫んだ。

何か来たって何が来たんだよ？

俺は後ろへ振り向く。

そこには数匹のコウモリポケモンのゴルバットがいた！こっちに向かって来てる！？

「戦いますわよ二人共！構えて！」

そう言っている時にはすでにキマワリは戦闘体勢に入っていた。

俺も戦う構えに入る。

だけど……どうやって戦えば良いんだ？ピカチュウの技の出し方とか俺解らないぞ（汗）

「こっから出ていけ！」

考えてる間に一匹のゴルバットが俺に向かって来た！？

あゝもう！こうなったらヤケだ！！

俺はゴルバットに思いっきり突っ込んで行った。すると、自分が想像していた以上に速いスピードで俺はゴルバットに体当たりを決める事が出来た！

「こ、このっ！！」

またゴルバットが俺に向かって来やがった！

俺はもう一度ゴルバットに向かって思いっきり突っ込んだ！

すると、また凄いスピードが出てゴルバットの攻撃を受ける前に体当たりを決めてゴルバットを吹き飛ばす事が出来た！

これって、もしかして電光石火か？

「レオン後ろですわ！？」

キマワリの声が聞こえて俺は後ろに振り向く。

ゴルバットが目の前まで来ていて俺に翼をぶつけようとしていた！

「くっ!？」

避けられない!？

俺はそう思って身体に力を入れて攻撃を耐えようとした。

だけどその時、俺の頬から急に電気がバチバチと音をたてながら放出されたんだ！

これはもしかして！

俺はもっと身体に力を入れた。すると、電気が俺の身体全体から放出されてゴルバットに直撃した！ゴルバットは身体が痺れたみたいでその場で倒れて身体をピクピク震えさせている。

「な、何か出たよ(汗)」

「電気ショックですわね！中々やりますわねレオン！」

電気ショック、今のがそうなのか……

「うわあああ!？」

ポツチャマが三匹のゴルバットに襲われている!？

「ポツチャマ!？」

「私に任せて！葉っぱカッター!!」

キマワリがゴルバット達に向けて無数の葉っぱを放った！

葉っぱカッターを受けたゴルバット達は一斉に逃げていった。

スゲー威力の葉っぱカッターだな……

って感心してる場合じゃなかった!？

「ポツチャマ！大丈夫か？」

俺は急いでポツチャマに駆け寄り無事かどうか聞いた。

「こ、怖かったよ（泣）」

「うわっ!？」

ポツチャマが泣きながら俺に抱きついてきた。

いきなり抱きつかれたから俺はバランスを崩して地面に倒れた（汗）
離れてくれポツチャマ、重いぞ（汗）

「怪我がなくてよかったですわね♪」

キマワリが笑顔でそう言った。ん？怪我がなくて？そういえばポツチャマはゴルバットに囲まれた時に何回か攻撃を受けてたよな？
だけど、ポツチャマの身体には怪我一つない。

どういうこった？

もしかしてあれのおかげか？ってかそれよりも。

「ポツチャマ、いい加減離れてくれないか（汗）」

「あっごめん（汗）」

ポツチャマがようやく俺から離れてくれた。

「キマワリ、ポツチャマが怪我しなかったのはもしかして防御スカーフのおかげなのか？」

俺はキマワリに聞いてみた。

「ええ。防御スカーフは防御力を上げてくれる道具。ですから、ゴルバットの攻撃を受けても怪我しなかったんですわ♪
それに、私の葉っぱカッターもパワーバンダナのおかげでいつもよりもパワフルでしたわん♪」

そういえばキマワリが付けてたのはパワーバンダナだったな？

確かに凄い威力の葉っぱカッターだった。

本当に道具にはそんな効果があったんだな。

って事は、俺が付けている幸せリボンも・・・・・・・・でもダメージを受けた時に効果があるんだよね？

・・・・・・・・痛いのは嫌だなあ（汗）

それから更に数十分。

今は底が見えない崖の近くの細い道を進んでいる。あれから何回かここに住んでいるポケモン達に襲われたんだけど、俺達はなんとか撃退する事が出来た。

俺も大分戦闘に慣れてきた。技の出し方の感覚も掴めてきたし。

でもなんでここに住んでいるポケモン達は俺達を襲ってくるんだろ？俺はキマワリにここに住んでいるポケモン達は何故襲ってくるのかその理由を聞いてみたら、ただ単に縄張りを侵されたと思ったポケモン達が追い出そうとしてくるだけなんですわん♪って答えてくれた。

そんなポケモン達を俺達は撃退してきたのか（汗）なんかちょっと罪悪感があるなあ（汗）
でもやらないとこっちがやられるし……………

「うわっ!？」

俺が考え事している時に突然足場が崩れて俺は崖から落ちそうになった!

「レオン!」

間一髪ポツチャマが俺の手を掴んでくれて助けてくれた。
た、助かった（汗）

「助かったよポツチャマ、ありが……………」

俺はポツチャマにお礼を言おうとしたんだけど、突然めまいが俺を襲った!このめまい、昨日と同じ……………

何か……………石の橋が見えるな……………あっ!？石の橋が突然崩れた!？

「うう……………」

ようやくめまいが治まった。今のはなんだよ？
いきなり石の橋が崩れたぞ？

「どうしたのレオン？
大丈夫？」

ポツチャマが俺の顔を覗き込むようにして聞いてきた。

「あ、ああ。」

俺はポツチャマに心配かけないようにそう答えた。

「二人共！ ちょっとこっちに来てみて！」

突然キマワリが俺達を呼んだ。どうしたんだ？
俺とポツチャマはキマワリの所へ行ってみる。

「どうしたキマワリ？」

「これ・・・・・・・・」

「あっ！」

キマワリが見ている先には底が見えない崖に一つの石の橋があった。
隣には何故か洞窟の中にある筈がない斬り倒された大きな木があった。

でもそんな事より、この石の橋・・・・・・・・さっき見えたあの橋と
同じじゃないか！？

「ここを渡らないと先には進めませんわね・・・・・・・・行きますわ
よ！」

キマワリが石の橋を渡ろうとした。
まずい！？

「待ってくれキマワリ！」

俺は慌ててキマワリを止めた。

「な、なんですのレオン？」

「この橋は危険なんだ！もうすぐ崩れるぞ！」

「えっ崩れる？」

「何言ってるのさレオン？この石の橋が崩れる訳が……」

二人共信じられないという表情をしている。

だけど次の瞬間、石の橋が大きな音をたてながら崩れていった！

「く、崩れた！？」

「ほ、本当でしたのね……良く解りましたわねレオン？」

「ま、まあな（汗）」

俺は右手で頭を押さえながらそう言った。

さすがに石の橋が崩れるビジョンを見たから解った！

なんて言えないよ（汗）

それからまた更に数十分。斬り倒された木を橋の代わりにして渡る

事が出来た俺達は迷宮の洞窟の最深部と思われる付近までやってきた。

にしても、なんで洞窟の中にあんな木があったんだ？

「・・・・・・・・うう・・・・・・・・」

ん？今なんかうめき声が聞こえたぞ？

「あっちから聞こえましたわね。行ってみましょう！」

俺達は声が聞こえた方へ行ってみた。

しばらく進んで行くと、そこには怪我をして倒れている三匹のポケモンがいたんだ！

「あなた達はチームかまいたち！？」

キマワリがそう叫びながらチームかまいたちと呼ばれる三匹のポケモン達の所へ駆け寄った。

このポケモンは・・・・・・・・確か、ザングースにストライク、それにサンドパンだったかな？

でもなんでこんな所で・・・・・・・・

「一体何があったの？」

俺が聞こうとした事をポツチャマが代わりに聞いた。

「ガ、ガバイトにやられたんだ・・・・・・・・」

ストライクが答えてくれた。ってガバイトだって!?

「鱗をくれて頼んだら、バトルに勝たらしくてやるって言っていきなり襲ってきたんだ……」

痛めた右手を押さえながらサンドパンが言った。ん? 鱗を? なんてこいつらが鱗を貰おうとしたんだ?

「あなた達、まさかレオン達の依頼を自分達がやって手柄を立てようとしたんじゃない?」

キマワリが聞くと、ストライクとサンドパンが頷いた。

「新入りのお前達じゃあガバイトから鱗を貰うなんて出来る訳がねえ……諦めな。」

ザングースが言った。

「悪いけど、諦める事は出来ないな。コリンクが待ってるんだ。」

そう。妹の病気を治せる事が出来るガバイトの鱗がくるのをコリンクが待ってるんだ。

諦めるなんて出来るかってんだ!

「キマワリ、ポツチャマ。行くぞ!」

俺は二人と共に先に進んだ。

しばらく進んで行くと広い場所に出た。
もう奥には道は無い。
ここが迷宮の洞窟の一番奥なんだろう。

「また来たのか？」

何処からか声が聞こえてきた！
声がする方を見たらそこにはガバイトがいた！

「ん？さっきの連中とは違うみたいだな？」

「頼みがあるんだ！」

あんたの鱗を分けてほしいんだ！」

俺は短刀直入に言った。

「またその話か……………」

もう聞き飽きたという表情をするガバイト。

「コリンクの妹の命が掛ってるんだ！頼む！」
「そんな事俺が知った事か！どいつもこいつも鱗をくれ鱗をくれっ
てよ……………ったくたまったもんじゃない！！」

「そ、そこをなんとか出来ませんか？」

今度はポツチャマが鱗をくれるようガバイトを説得しようとした。

「何度言われようが答えはNOだ！」

だが、俺にバトルで勝ったら話は別だがな！」

バトルか………

やるしかないな！

「キマワリ、ポツチャマ、やるぞ！」

「解った！」

「やってやりますわ！」

俺達は戦闘体勢に入った。

「ふっ！そうこなくっちゃなあ！くらえ！」

砂地獄！！」

いきなりガバイトは大量の砂を俺達に向かって放った！その砂は竜巻のように俺達を取り囲んだ！

「こんなもの！」

俺は電気ショックで攻撃した。だけど、電気ショックは砂に弾かれてしまった！

「ダメですわレオン！」

砂地獄は地面タイプの技、電気タイプの技では効果がありませんわ！」

そうか！？じゃあどうしたら・・・

「ここは僕が！泡攻撃！」

ポツチャマが口から大量の泡を放出した！

ポツチャマの泡攻撃はガバイトの砂地獄を弾き飛ばした！

「やるじゃんかポツチャマ！」

「ナイスですわ！」

地面は水に弱いんですわ！」

「ならばこれだ！ドラゴンクロー！！」

いつの間にかガバイトは俺の前まで来ていた！

ガバイトのドラゴンクローを避ける事が出来なかった俺はまともに受けてしまい吹き飛ばされてしまった！

「レオン！？」

「貴様もだ！」

ポツチャマまでガバイトのドラゴンクローを受けてしまった！

このガバイト、強いぞ！

「私がいる事を忘れてもらっては困りますわよ！葉っぱカッター！」

キマワリの葉っぱカッターがガバイトに直撃した！パワーバンダナで攻撃力が上がっているから葉っぱカッターがガバイトに効いている！

「くっなんて威力だ！？」

「まだいきますわよ！
花びらの舞い！！」

キマワリが花びらの舞いでガバイトを攻撃しようとした。

「まずい！？メロメロ！」

「あっ！？」

キマワリの花びらの舞いが発動するよりも先にガバイトがハートの形をしたエネルギー弾をキマワリに直撃させた。

キマワリは攻撃するのを止めてガバイトを見つめ続けている。
どうしたんだ？

「キャー♪良く見るとなんて素敵な方なんですの〜♪ガバイト様〜
」

な、なんだ？

目がハートになってるぞキマワリの奴？

「キマワリはどうしたんだ？」

「メロメロの効果でキマワリはガバイトにメロメロになっちゃったんだよ！しばらくキマワリは戦闘出来なくなっちゃった！」

マジかよ（汗）

「さあ、メロメロの効力が切れる前に貴様らを倒してやる！」

ガバイトがこっちに向かって来た。

負けるか！コリンクの為にも負けてたまるか！

「電光石火！」

俺は電光石火でガバイトに体当たりした。

「へっ！その程度の攻撃、痛くもなんともないぜ！ドラゴンクロー
！」

「ぐっ！？」

ドラゴンクローをまたまともに受けた俺は吹き飛ばされて壁に身体をぶつけてしまった！

「よくもレオンを！
泡攻撃！！」

ポツチャマが大量の泡を放出した！
だけど、ガバイトは軽くこれを回避してポツチャマにドラゴンクローで攻撃しようとしている！
やらせるかよ！

「電光石火！！」

俺はもう一度電光石火でガバイトに体当たりした！それでドラゴンクローの狙いがずれてポツチャマに当たらずにすんだ。

「邪魔だ貴様！」

俺にドラゴンクローで攻撃しようとしてきたガバイト。
何回もあんなの受けたら本当に負けちまう！
もっと速く動くんのだ！

攻撃が当てられない程速く！

俺は電光石火を使うような感覚で素早く動いてドラゴンクローを避けた！そしてガバイトの周りを走り続けた。

「くっ影分身か！」

えっ影分身？

俺そんな技使って……俺はちらつと後ろを見てみた。そこにはたくさんの俺と一緒に走り続けている光景があった！

「凄いよレオン！きつと幸せりボンの効果が出てきたんだ！」

幸せりボン……そうか！これはダメージを受けると強くなる道具だったな！

だから影分身を使えるようになったのか！

「ポツチャマ！今のうちに泡で攻撃するんだ！」

「解った！」

俺が影分身でガバイトを翻弄している間にポツチャマが泡を放ってガバイトを攻撃した！

「このっ！砂……」

「電光石火！」

ガバイトの砂地獄が発動する前に俺が電光石火で体当たりしてそれを阻止した！

「くっちょこまかと！」

ドラゴンクロー！」

「影分身！」

ガバイトのドラゴンクローを俺は影分身を使って回避した。
そしてまたガバイトを翻弄する。

俺が影分身でガバイトを翻弄しつつポツチャマが泡で攻撃、そしてポツチャマに攻撃しようとしたところに俺が電光石火で阻止する。
これをガバイトが弱るまで俺達は繰り返した。

「ハア、ハア、ハア、く、くそ！」

ようやく息があがってきたな！次で決める！

「ポツチャマ！同時攻撃で行くぞ！」

「うん！」

「電光石火！」

「つつく攻撃！」

俺は電光石火、ポツチャマはつつくで同時にガバイトを攻撃した！
俺達の攻撃はガバイトに直撃！吹き飛ばす事が出来た！
ガバイトは目を回しながら仰向けになって倒れた。

「ふゝ・・・・・・・・・・なんとかあったみたいだなあ（汗）」

「僕もう疲れたよ（汗）」

俺とポツチャマはその場に座り込んだ。

ポツチャマの言うようにさすがに疲れたよ（汗）

「キヤー！ガバイトが倒れてるわ！」

お、キマワリが元に戻ったみたいだ。

「キマワリようやく元に戻ったんだな？」

「えっ？ 一体何の事ですか？」

えっ？ もしかしてメロメロにされた事覚えてないのか？

これは言っておくべきか・・・いや、好きでもない奴にメロメロになってたよ！

なんて言ったらキマワリも女の子だから傷ついちゃうかも・・・

「あ、いや、何でもないよ！ なぁポツチャマ？」

「えっ？ でもキマワリは今までガバイトにメ・・・」

それ以上言うな！！

俺はとっさにポツチャマの足を踏みつける。

「痛い！？ 何するの・・・」

更に俺はポツチャマの口を両手で塞いで喋れないようにした。

「何やってるんですの？」

「あ、いや、バトルで疲れたなあってポツチャマが言ってるだけだから！ ア、アハハ・・・（汗）ポツチャマ、お前空気読めよ！ ガバイトにメロメロになっていたなんてキマワリが知ったらどうなると思ってるんだ！」

俺は小声でポツチャマに言った。

でもポツチャマは理解してないらしく首を傾げた。はぁ（汗）あとでちゃんと説明してやるか（汗）

「変なレオンですわね？まあ良いですわ。
それより、早くガバイトの鱗を……………」

あ、そうだった！

鱗を早くコリンクに届けないと！

俺達はガバイトの方に向かおうとした。
だけど、いつの間にかさっきまでそこに倒れていた筈のガバイトがいなくなっていた！

「いない！？一体何処へ！？」

「こっちだ。」

背後から声が（汗）

俺達は恐る恐る後ろに振り向く……………
やっぱりガバイトだった！俺達はすぐに戦闘体勢に入る！

「お前達、もう構えなくても良いぞ？」

えっ？

「最初に言っただろ？」

俺にバトルで勝ったら鱗をやるってさ。

俺は約束は守る。ほら、受け取りな。」

ガバイトが俺に鱗を一枚手渡してくれた。
ガバイトの奴……………実は結構良い奴なのかも？

「ありがとうガバイト！」

ちゃんとお礼は言わないとな！

「久しぶりに良いバトルだったぞ。こっちこそ礼を言わせてくれ。ありがとうな。」

ガバイトも俺達にお礼を言った。

このガバイトの鱗でコリンクの妹の病気が治るんだな。よし、早く戻ってコリンクに届けなきゃ！

迷宮の洞窟から帰ってきた俺達はすぐにコリンクにガバイトの鱗を渡してあげた。

「これがガバイトの鱗だ。君の妹、元気になれば良いな。」

「はい！ありがとうございます！レオンさん！本当にありがとうございます！」

コリンクが涙を流しながらお礼を言っている。

「あの、これはお礼の気持ちです。レントラーの牙と呼ばれるお宝です。受け取って下さい。」

コリンクがレントラーの牙を俺に手渡ししてくれた。

「良いのか？」

俺が聞くとコリンクは頷いて答えた。

「じゃあ、ありがたく受け取っておくよ。
コリンク、妹が元気になったら今度遊びに来なよ。君の妹にも会いたいからさ。」

「解りました！必ず来ます！それじゃ！」

コリンクはガバイトの鱗を持って走り去っていった。

「お前達、初の依頼を見事に達成したな！
やるじゃないか！」

ペラップがそう言った。誉めてくれるのは嬉しいけど、やっぱ上から目線なんだよなこいつ（汗）

「それでは、そのレントラーの牙は私が預かるからな！」

あっ！？レントラーの牙をペラップに取られた！？

「ちょ！？それ俺達にくれたお宝だぞ！？」

「お宝は親方様が預かるのがギルドのルールなんだ。我慢しな。」

ペラップがレントラーの牙を持ってプクリンの部屋に行ってしまった（汗）

「これがギルドのルールって……（汗）」

「頑張ったのは僕達なのに」（汗）」

「まあまあ。コリンクが喜んでくれたから良いじゃない♪」

キマワリが笑顔でそう言ってくれた。

確かに、コリンクは凄く嬉しそうな顔をしていたな。

お宝取られたのはちょっとむかつくけど……まあ良いか！

第四話 迷宮の洞窟へ！チームレオン、初の依頼！（後書き）

第四話完成です。

第五話 ポツチャマの宝物（前書き）

コリンクの妹、元気になったら良いなあ。

第五話 ポツチャマの宝物

「今日は疲れたねえレオン？」

「だなあ。」

俺達は今ギルドにある自分達の部屋で横になっている。

今日は本当に疲れたよ（汗）

「そういえばさあポツチャマ、お前がいつも首にぶら下げているそれ、一体なんだ？」

前から気になってた事をポツチャマに聞いてみた。いつもポツチャマは首に何か石みたいな物をネックレスのように大事そうにぶら下げていたんだ。

「ああこれ？これは僕の宝物さ。」

「宝物？」

「うん。」

ポツチャマは宝物を首から外して俺の前に置いた。なんだろこれ？
なんだか解らない模様が描かれているな？

「これは僕が探検隊になろうって思ったきっかけになった物なんだ。
僕はずっと前から探検隊に憧れてたんだけど、でも探検隊になろうって勇気がなかったんだ。

そんなある日に僕は海岸でこれを拾ったんだ。

これには見た事のない模様が描かれてるでしょ？」

「ああ。」

「僕はね、これは何処かまだ誰も行った事がない所から流れ着いた

んじゃないかって思うんだ。

そんな場所があるのなら、僕はそこに行きたい。そしてこれは何なのかを知りたい。」

「それで探検隊になろうって決心した訳か？」

「うん。それでこの前ギルドに来たんだけど………やっぱり勇気が出なくて思わず逃げちゃったんだよね（汗）」

おいおい（汗）

「けどその日にレオン、君と出会ったんだ。」

「俺？」

「うん。初めてレオンと会った時、不思議な感じがしたんだ。

何て言うか………一緒にいたら安心して言うか………一緒にいたら何でも出来るような気がしてきたんだ。」

だからあん時いきなり俺に探検隊になろうって言ってきたのか。

「ごめんねレオン。

強引に探検隊にしちゃって………」

「謝んなよポッチャマ。お前が探検隊の話をしてくれなかったら、多分俺は今も何処か知らない場所でさまよってたかもしれないんだ。それにさ、俺探検隊になって良かったって思ってるんだぜ？」

「本当？」

「ああ、本当さ。

だからポッチャマ、お前には感謝してるんだ。ありがとうな。」

「レオン………」

「さあ、もう遅いから早く寝ようぜ。」

「そうだね。じゃあお休みレオン。」

俺達は明日に備えて寝る事にした。

「みっつ！」

『皆笑顔で明るいギルド！』

翌朝、皆で集まって朝礼を始めていた。

早く寝たんだけどさあ……やっぱ眠いぜ（汗）

「それじゃ皆！仕事に掛かるよ！」

『おー！』

朝礼が終わると皆が今日の依頼を受ける為に依頼掲示板がある部屋に向かった。

俺達も行くか。

「あゝお前達！ちょっとこっちに来い。」

ペラップが俺達を呼んでる。なんだ？

「なんだよ？」

「トレジャータウンのカクレオンからお前達に依頼だ。」

カクレオンから？
なんだろう？

「どんな依頼なんですか？」

ポツチャマが聞いた。

「泥棒を捕まえてほしいんだそうだ。」

「泥棒？」

「そうだ。詳しい話はカクレオン本人に聞いてくれ。じゃあしつかりな！」

そう言ってペラップはギルドの中に戻っていった。

「ぼ、僕達だけで大丈夫かなあ（汗）」

「まあなんとかなるだろ。とにかくカクレオンの店に行こうぜ！」

俺達はトレジャータウンのカクレオンの店に向かおうとした。

ドン！

その時俺は誰かにぶつかってしまった！

「あつすみません！？」

「ああ大丈夫よ。ねえ、プクリンのギルドはここで良いのかしら？」

うわあ大きいなあ（汗）

このポケモンは確かメガニウムだったかなあ。

「はいそうですよ。」

「ありがとう。ねえ！
ここがプクリンのギルドなんだって！」

メガニウムが後ろを向きながら誰かを呼んでる。他にも誰かいんのか？

「やっと着いたんだね？はあゝ疲れたゝ（汗）」

何かいっぱい荷物を持ってるぞ（汗）
あれは確かりザードンじゃなかったかな？

「教えてくれてありがとうね君♪ほら行くわよ！」

「えゝちよつと休もうよゝ（汗）」

「ダゝメ！予定より遅くなっちゃったんだから。ほら頑張って！
あとで良い事してあげるから♪」

メガニウムがリザードンにウインクしながらそう言うとき……

「よし行こう！」

急に張り切りだしたりザードン（汗）
なんだよ良い事って？

俺がそんな事を考えているうちにメガニウムとリザードンはギルドの中へ入っていった。
プクリンに一体何の用事なんだ？

「なんだろねレオン？」

「さあ？まあとにかく、俺達はトレジャータウンに急ごう！」

今度こそ俺達はトレジャータウンに向かった。

場所が変わってトレジャータウンのカクレオンの店にやって来た俺とポツチャマ。

カクレオンに話を聞いてみたら、なんでもアーボとチャーレムを連れたゲンガーっていうポケモンが店の商品を白昼堂々と盗んでいったらしい。

捕まえようとしたらしいが逃げ足が速くて捕まえられなかったみたいだ。

「それでカクレオン、そいつらはどっちに逃げていったんだ？」

「海岸の方へ逃げて行ったんですけど、そこで見失ってしまっ……」

海岸か……俺とポツチャマが初めて出会った場所だな。

「解った。俺達がそいつらを捕まえて盗まれた商品を取り返してやるよ！」

「よろしく願います！」

俺とポツチャマは泥棒が逃げに行ったという海岸に向かった。

「ここで見失ったんだよな．．．．．」

俺達は海岸にやって来た。カクレオンの話だそこでその泥棒を見失ったらしいんだが．．．．．特に怪しい所は無いよな？

「レオン、もしかしたら海岸の洞窟に逃げたのかもしれないよ？」

「海岸の洞窟？」

「この先にそういう名前の洞窟があるんだ。」

海岸には隠れられる場所は無いら．．．．．」

「逃げるとしたらそこしかないって訳か．．．．．よし、行ってみよう！」

俺とポツチャマは海岸の洞窟に向かおうとした。

「あら？君達はさっきの．．．．．」

俺達の後ろから声が聞こえた。

振り向くとそこにはさっきのメガニウムとリザードンがいた。

「あれ？うちの親方に用事があったんじゃない？」

「もう済ませたのよ。」

その後プクリンにここの海岸が綺麗なんだよ！

って聞いたから彼と一緒に来たの。
それより、君達はどうしてここに？」

メガニウムが首を傾げながら俺達に聞いてきた。

「この先の海岸の洞窟に泥棒が逃げたかもしれないから僕達はこれからそこに行って調べてみようとしてたんです。」

ポツチャマが答えてくれた。

「泥棒ねえ……こっちの方でもそういう奴らがいるのねえ。」

ん？こっちの方でも？

「あなた達は近くから来たんじゃないんですか？」

「私達は海を越えて来たのよ。」

海を越えてかぁ……って事はここ以外にもポケモン達が暮らしている所があるんだ。

ん？でもどうやって海を越えて来たんだ？

「海を越えてって言ってましたけど、どうやって海を？」

「彼に運んでもらったのよ。」

そう言ってメガニウムはリザードンを見た。

「大変だったんだよ（汗）荷物はあるは彼女がちよっと重……」

「私は重くないわよね♪」

リザードンがメガニウムの事を多分重いつて言おうとしたんだと思うんだけど、メガニウムが自分は重くないって言いながらつるのムチでリザードンの首を絞めている(汗)メガニウムは顔が笑ってるけど目が笑ってない(汗)怖いんですけど(汗)

「わ、解ったから・・・・・・・・離して・・・・・・・・く、苦しいよ(汗)」

「解れば良いのよ。」

メガニウムはリザードンの首からつるのムチを離した。

余程苦しかったんだな？リザードンはたっぷりと深呼吸している(汗)

「あっ話が十分脱線しちゃったわね(汗)」

君達は泥棒を捕まえに行くのよね？

私達も泥棒を捕まえるのに協力させてくれない？」

「えっ？」

「私達こう見えても救助隊なのよ。」

大丈夫、足を引っ張らないから♪」

そう言いながらメガニウムは再びウインクをした。

「ねえレオン、協力してもらおうよ。」

僕達だけじゃ何か不安だし(汗)」

「そうだなあ・・・・・・・・それじゃあ協力してもらっても良いですか？」

「もちろん♪よろしくね♪」

俺とポツチャマはメガニウムとリザードンに協力をお願いして泥棒

が
い
る
と
思
わ
れ
る
海
岸
の
洞
窟
に
向
か
っ
た
。

第五話 ポツチャマの宝物（後書き）

第五話完成です。

第六話 伝説の救助隊！（前書き）

あのメガニウムとりザードン。タイプは全然違うけど凄く仲が良
いよなあ。いや、仲が良いって言うか……もっと深い関係って感じ？

第六話 伝説の救助隊！

俺とポッチャマは途中で知り合ったメガニウムトリザードンと一緒に泥棒がいると思われる海岸の洞窟の中を調べてるんだが……

「レオン！そっち行っちゃよ！」

「解ってるポッチャマ！電気ショック！」

この洞窟に住んでいると思われるポケモン達が次から次ぎへと俺達に襲いかかってきたんだ。

カブトにカラナクシにサニーゴ、そしてシェルダー。水タイプのポケモンばかりだから俺の電気ショックでなんとか倒す事が出来るんだが……やたらといっぱいやって来るから中々先に進めないんだよ（汗）

「あゝもう！！しつこいぞお前ら！？」

「ちょっと下がってて。私がやるわ。」

メガニウムが俺の前にやってきた。

「さてと、サクツと終わらせちゃうわよ♪」

サクツと終わらせるって……一体どうやって？
相手は十匹近くいるんだぞ？

そんな事を考えていたら、突然メガニウムの身体が光り輝きだした！

「ソーラービーム！！！」

「うおっ！？」

メガニウムが凄まじい極太のビームを放った！
ビームは十匹以上のポケモン達を一気に吹き飛ばしてしまった！
皆目を回して倒れている。

「はい終わり♪」

ス、スゲー（汗）

彼女が味方でマジ良かったぜ（汗）

「さあ、先に行きましょう♪」

メガニウムが先に進んで行った。

「あつ待って下さい!？」

俺達も慌ててメガニウムのあとを追いかけた。

海岸の洞窟に入ってから数十分。
まだ泥棒らしき連中は見当たらない。

「ねえ、その泥棒ってどんな奴らなの？」

急に隣にいたメガニウムが俺に質問してきた。

「確かカクレオンの話だと、ゲンガーにチャーレム、それにアーボらしいんですけど……」

「「ゲンガー？」」

なんだ？ゲンガーの名前を聞いた瞬間メガニウムとリザードンが二人で顔を見合わせた。

「何か知ってるんですか？」

「……もしかしたらね（汗）」

もしかしたらねって……まさかそのゲンガーって知り合いだったりするのか？

「あっレオン！彼処に何か落ちてるよ！」

ポツチャマが俺の肩を叩きながら言った。

確かに何か落ちてるな。

あれは……なんだ？

俺は確認する為にそれに近づいてそれを拾った。これはなんだろう？綺麗な宝玉みたいだけど……

「それは穴抜けの玉ね。それを使うとこういった洞窟だったり山の中でそれを使うと安全な場所にテレポート出来るのよ。」

メガニウムが説明してくれた。

へえ、そんな道具があるんだ。

「これはもしかして泥棒が落として……」

そこまで言いかけた時、突然俺は目眩に襲われた！またか……

『ケケケ！こんだけあれば良い金になるだろ♪』 『しかしあいつら
とろかったよなあ？』

『楽勝だったわね♪』

「ふ………」

ようやく目眩が治まった。今のビジョン……今まで見たのと何か違
う感じだったなあ？

今までののはこれから先に起きる事が見えた……今のはこれからって
言うより過去に起きた感じだったよなあ……

「どうしたの？」

メガニウム達が俺の事を見ている。

「い、いやなんでも（汗）それより、この先に泥棒がいるみたいですよ。」

「本当？何故解るの？」

メガニウムが首を傾げながら聞いた。

見えたからなんて言えないよなあ（汗）

「えっと……それは……（汗）」

マズい（汗）なんて言えば……

「……ケケケ……」

その時洞窟の奥から誰かの笑い声が聞こえてきた。変な笑い声だなおい（汗）

「あの声は（汗）本当にいるみたいね。皆、気を引き締めてね？行くわよ！」

メガニウムが先頭に立って先に進んだ。俺達もあとに続いた。

海岸の洞窟最深部。

「ケケケ♪さあ、盗んだ物はまとめた！
あとは売りさばくだけだぜ♪」

バカ騒ぎしている奴らがいるよ（汗）
あいつらがゲンガーにアーボ、そしてチャーレムか……奴らの後ろ
にはカクレオンの店の商品が大きな袋に詰められている。

「はぁ（汗）やっぱりあいつらだったのね（汗）」

ため息を吐くメガニウム。やっぱり知ってる奴らみたいだな？

「とにかく行くわよ。
ちよっと懲らしめてやらないと！」

俺達はゲンガー達の所に向かった。

「誰だ！？」

「最近会わないと思ってたらこっちの方に来てたのねゲンガー！」

「泥棒はダメだよゲンガー！」

「ウゲゲ！？お、お前達は！？」

メガニウムとリザードンを見た瞬間ゲンガー達は凄く驚いた表情をした。

「あんたら盗んだ物を返すんだ！」

俺は強い口調でゲンガー達に言った。

「ケッ！そいつはお断りだな！これ全部売りさばいて俺達の世界征服の為の軍資金にするんだからな！」

世界征服って……（汗）

「あんたまだそんな事言ってるの？」

七年経っても変わらないわねあんたは（汗）」

メガニウムが呆れた感じで言ってる。

つか、七年も前から世界征服とか言ってるのかこいつらは（汗）

「うるさい！とにかく、俺達はこれを返すつもりは無い！」

言い切ったよこいつ（汗）

「だったら、力づくで取り返してやる！」

行くぞポッチャマ！」

「う、うん！」

俺とポッチャマはゲンガー達に向かって行った。

「ケッ！お前らみたいな弱そうな奴らに負ける俺達じゃないぞ！」

シャドーボール！」

ゲンガーが何か黒いエネルギー弾を俺達に放ってきた！

「電気ショック！」

「泡攻撃！」

俺とポツチャマは同時攻撃でシャドーボールに対抗した。けど、あっちの方がパワーが上だったみたいで俺達の技は弾かれてしまった！

俺達はシャドーボールを受けて吹き飛ばされた！

「くっ！？」

「あなた達は下がってた方が良いわ。ここは私達に任せて。

行くわよりザードン！」

「解ってるよアスカ！」

メガニウムとリザードンが俺達の前に立った。

……ってちょっと待て！今、アスカって言わなかったか？

「あの……今アスカって言いました？」

俺の代わりにポツチャマが恐る恐る聞いた。

「あゝそういえば自己紹介がまだだったわね？」

そう、私の名前はアスカ。そしてこっちがパートナーのリザードンよ。」

「ほ、本物！？」

ポツチャマが驚きの声をあげた。

俺も正直驚いている。

まさか、こんな所で伝説の救助隊に会えるなんて……

「あ、あのサイン下さい！僕ファンなんです！」

何処に隠し持っていたのか、ポツチャマが目をキラキラさせながらサイン色紙とペンを取り出してアスカ達にサインを求めた（汗）

「あら！そうだったのね！もちろん書いちゃうわよ♪」

アスカが慣れた感じでつるのムチでペンを握ってサインを書いた。

「うわぁ♪ありがとうございます！
大切にします！」

本当に嬉しそうだなポツチャマの奴（汗）

「……お前ら俺達を無視して何サイン書いてんだこら！？」

あっ（汗）ゲンガーが怒った（汗）

「もう頭に来た！行くぞアーボ、チャーレム！」

ゲンガー達がアスカ達に向かって来た！

「リザードン！日本晴れよろしく！」

「解った！日本晴れ！」

リザードンが何か光の玉を作り出して空中に放った。

光の玉はまるで小さな太陽みたいに洞窟の中を明るく照らしている。

「一気に決めるわよ！

ソーラービーム！！」

「オーバーヒート！！」

アスカはソーラービーム、リザードンはオーバーヒートを放った！
二つの技はゲンガー達に直撃して大きな爆発が発生した！

「アスカ、ちょっとやり過ぎたんじゃない？」

「これ位で良いのよ。」

アスカ達の前には目を回して倒れているゲンガー達が。
にしても凄いソーラービームとオーバーヒートだったなあ（汗）

「さてと、あとは盗まれた商品をカクレオンに返すだけね！」

アスカは店の商品が大量に入った袋の前に向かった。
俺達も袋がある所へ。

しかしこりゃまた大量だなあ（汗）あいつらどうやってこれ運んで
来たんだよ？

「さぁリザードン！

よろしくね♪」

「えゝ僕なのゝ（汗）」

リザードンは嫌そうな表情をしている。

「あなたしかいないでしょ？私はゲンガー達を運ぶから。」

そう言ってアスカはゲンガー達の所に向かおうとした。

「……捕まってたまるかってんだ！」

さっきまで気絶していたゲンガーが意識を取り戻していた！
そして何やら一つの宝玉を取り出した。

あの宝玉ってもしかして……

「ケケッ！あばよ！」

ゲンガーがそう言った刹那、宝玉が眩しい光を発した！
あまりの眩しさに俺は目を開けてられなかった。

しばらくしてようやく光が消えた。

あゝ目がチカチカする（汗）

「やられたわね……」

アスカが残念がっていた。どうしたんだ？
あっ！？ゲンガー達がいなくなってやがる！？

「何処行っただ？」

「穴抜けの玉で逃げたのよ。」

穴抜けの玉？

あゝさっき俺が拾った玉と同じやつか！

「相変わらず逃げ足が速いわねえ（汗）」

「逃げ足だけは天下一品だからね彼らは（汗）」

逃げられたって事は……今回の依頼は失敗ってこたか（汗）

泥棒を捕まえるってのが依頼だったもんなあ……はあ……ペラップ
の奴に何か言われそうだよ（汗）

まあとにかく、盗まれた商品をカクレオン達に返しにいくか。

「アスカさん達、これ運ぶの手伝ってもらえませんか？俺達だけじゃ運びきれそうにありませんから（汗）」

「解ったわ。それじゃ私はこれね♪」

あっアスカが一番軽そうなやつを持った（汗）

「リザードン、あとはお願いねえ♪」

「はあ……解ったよ（汗）」

リザードンは渋々一番重たそうなやつを持った。

「何か……大変そうですね（汗）」

「もう慣れちゃったよ（汗）あ、君達の方も持とうか？」

「いえ、大丈夫ですよ。」

このリザードン、随分優しい性格をしてるんだな。見た目凄くカッコイイのにな。

とにかく、俺達は盗まれた商品を持ってカクレオン達の所に向かった。

第六話 伝説の救助隊！（後書き）

第六話完成です。

アスカ…久しぶりね作者さん！

作者…本当だねえ！

レオン…まさかこんな早くに先輩と共演出来るとは思ってたよ。

アスカ…私も。

作者…いやあ早くアスカを登場させたかったからねえ。これからも活躍させるからよろしく頼むよアスカ！

アスカ…頑張っちゃうわよ♪

作者…もちろんレオンもね！

レオン…おう！

第七話 頼もしき協力者（前書き）

まさかあのメガニウムがアスカだったなんて！
マジでビックリしたよ！

第七話 頼もしき協力者

ゲンガー達に盗まれた商品を取り返した俺達は、カクレオン達に商品を返したあとギルドに戻ってきた。

何故か用事を済ませた筈のアスカ達も一緒に来ている。

「泥棒を逃がすとは一体どういう事だお前達!？」

そして今俺とポッチャマはペラップに怒鳴られている(汗)
やっぱこういう事になったよ(汗)

「まあまあ。そんなに怒らないでよペラップ。

彼らは頑張ったわよ？」

それに逃げられたのは私達にも責任があるし……」

「いえそうはいきませんよアスカさん！

ここで甘やかすといつらの為になりません！

ビシッと言ってやらなくては！」

まだ説教続くのかよ(汗)

結局ペラップに一時間以上説教された俺達（汗）

説教し終えたペラップはプクリンがいる部屋に戻っていった。

しかし、説教って言ってもほとんどが自分の探検家としての自慢話（汗）

俺達とペラップにはこれほど差があるんだぞ！ってアピールするみたいになさ（汗）

「あのペラップあまり好きじゃないわねえ。」

アスカもあまりペラップの事は好きじゃないらしい。
俺も好きじゃないし。

「そういえばアスカさん……」

「あっ敬語じゃなくて良いわよ？」

「えっ？」

「私達とあなた達はもう友達でしょ？
友達に敬語を使うなんて変でしょ？」

笑顔でそう言ってくれたアスカ。

……やばい。凄く可愛いんですけど……

「ん？私の顔に何か付いてるレオン？」

あっいかんいかん（汗）

つい見つめちゃったよ（汗）

「い、いや別に！」

それじゃ改めて……アスカ、プクリンへの用事は済ませたんだろ？
なのに何でまたこのギルドへ？」

「あゝそれはね……しばらく私達ここに泊めてもらおうかなって考
えてるのよ。」

えっ？ここに？

「アスカは救助隊のリーダーなんだろう？

良いのか戻らなくても？」

「それなら大丈夫よ。」

あっちにはリーダー代理のアブソルがいるから。それに、ゲンガー
達がこっちにいるからね……また悪さする前に捕まえないといけな
いから。」

そういう事か……だけど、このギルドにまだ空き部屋あったかな？

「アスカ！」

あれ？リザードンがプクリンの部屋から出てきた。いつの間にプク
リンの部屋に行ってたんだ？

「あっとうだった？」

「泊めてくれるって！」

「本当！やった♪」

アスカが笑顔で喜んでいる。……マジで笑顔が可愛いんすけど……

「レオン、さっきからアスカの事をずっと見てるけどどうしたの？」

隣にいたポツチャマが俺の顔を覗き込むようにして聞いてきた。

「あっいや、な、何でもないさ（汗）」

「うゝん？変なレオン。」

アスカが可愛くて見とれてた、なんて言えるかよ（汗）

チリリンチリリン！

あつ晩御飯を知らせる鈴が鳴った！
もうそんな時間になってたんだな？

場所が変わって食堂。

もう他の皆が揃っていた。皆早いなあ（汗）

「アスカさん達はこちらの席にどうぞ。」

ペラップがアスカ達に用意した特別な席に座るよう手招きしている。

「おい、まさかあの人達伝説の救助隊のチームアスカじゃないか？」

「ほ、本物でゲスカ!？」

「キャー♪伝説の救助隊チームアスカに会えるなんて夢のようですわっ♪」

なんだ？皆アスカ達を見た途端騒ぎ始めたぞ？

「こら静かに！」

ペラップが皆を静めようとしている。

しばらくしてようやく皆が静かになった。

「えーもう皆気づいているとは思うが、こちらにいるお二人は伝説の救助隊、チームアスカのリーダーであるアスカさん。そしてその夫のリザードンさんだ。」

ペラップがアスカ達の事を皆に紹介している。

ってちよつと待て！？

今リザードンの事を夫って呼ばなかったか！？

「アスカってリザードンと結婚してたのか！？」

俺は思わず席を立ち、大きな声で叫んでしまった。

「そうよ。タイプは違うけど、私達はお互いの事を愛しあってるのよ♪

ねっリザードン♪」

ア、アスカがリザードンに寄りかかった（汗）

「ア、アスカ（汗）

皆が見てる前で恥ずかしいよ（汗）」

赤面して恥ずかしがっているリザードン。

アスカがリザードンと……なんてうらやましい！
って何考えてるんだよ俺は（汗）

「彼女達はしばらくこのギルドに泊まる事となった。皆、くれぐれも彼女達に失礼のないように！解ったな？」

ペラップがそう言うと言口を揃えて

「はい！」って答えた。

「それじゃあ待たせたな皆！そろそろ食べるとしよう！」

待ってましたと言わんばかりに皆食べ物に囃り付いた。
俺も食うぞ！

「へえ〜！結構良い部屋ね！あっ窓から見える景色が綺麗♪」

晩御飯を食べ終えたあと部屋に戻ってきた俺とポツチャマ。
アスカ達も一緒にいる。俺達と同じ部屋で寝るらしい。
今アスカは窓から見える夜の海の景色に感動している。

「ごめんね二人共。

君達の部屋にお邪魔しちゃって。」

申し訳なさそうに俺達に言うリザードン。

本当に優しい奴なんだな。

「俺達は気にしてないよ。 なっポツチャマ？」

「うん！」

ポツチャマは笑顔で頷きながら答えてくれた。

「……なあアスカ。

ちよつと聞いても良いか？」

「うん？ なあに？」

「……アスカは本当は人間だって話を前にペラップから聞いたんだけど、それって本当なのか？」

「うん本当よ。」

意外にすぐ答えたな（汗）

「七年前、この世界が崩壊してしまう危機が迫っていたの。

私はその危機から世界を救う為にポケモンになってこの世界やって来た……みたいなのよね。」

ん？ なんだよ最後のみたいって？

「実は私人間だった頃の記憶がほとんど無いのよね。唯一覚えていたのが自分が人間だって事と名前がアスカって事だけだったの。」

それって俺と同じじゃないか！

「でも何で急にそんな事聞いたの？」

アスカが首を傾げながら俺に聞いてきた。

「それは……」

「それはレオンもアスカと同じ人間だったからだよ。でしょレオン？」

俺が言おうとしたのにポツチャマが先に言ってしまった。

「「えっ!？」」

今のを聞いてアスカとリザードンが驚きの声をあげた。

「あなたも人間なの!？」 「ああ……だけど、俺も人間だった頃の記憶がほとんど無いんだ……」

覚えているのは自分が人間で名前がレオンって事だけ……何で俺がポケモンになったのが全く解らないんだ……」

「驚いたね……まさかアスカ以外にも人間からポケモンになった人がいたなんて……」

「本当ね……」

「何で俺はポケモンになったのか……それを調べる為にこうして探検隊になったんだけど、今のところ進展無しなんだよな(汗)」

まあ探検隊になってまだ間もないから当たり前なんだけどさ(汗)

「ねえレオン、私達もあなたがポケモンになってしまった原因を調べるの手伝ってあげようか？」

「えっ?」

「どうせ私達ゲンガー達を捕まえるまではここに滞在するつもりだし、それに友達が困ってるのを放っておけないしね♪」

ウィンクしながらアスカがそう言ってくれた。

「じゃあ……お願いしても良いかな？」

「もちろんよ♪良いわよねリザードン？」

「うん。」

アスカとリザードンは俺に協力してくれる事を約束してくれた。

「ふぁー……もう夜も遅いからそろそろ寝よう？」

ポツチャマが眠そうにしながら言った。

確かにもう遅いもんな。

「じゃあ寝ますか。」

アスカ、リザードン。

これからよろしくな。」

「ええ。」

「よろしくねレオン。」

俺達は明日に備えて眠る事にした。

第七話 頼もしき協力者（後書き）

第七話完成です。

第八話 バネブーの真珠（前書き）

アスカ達としばらく同居する事になった。

第八話 バネブーの真珠

「み〜っつ！」

『皆笑顔で明るいギルド！』

アスカ達がこのギルドに泊まる事が決まったその次の日の朝。いつもの朝の朝礼がちょうど今終わったところ。

「それじゃあ皆、仕事に掛かるよ〜！」

『お〜！』

皆いつものように仕事を始めた。

「良いわねえこの感じ♪今度私達のところでもやってみよ♪」

朝の朝礼に一緒に出ていたアスカが笑顔でそんな事を言っている。

「アスカ達は今日どうするんだ？」

「そうねえ……とりあえずトレジャータウンに行って何処かでゲンガー達を見かけなかったかを聞いて回ろうと思うわ。」

「そっか……俺達も仕事中に何かゲンガーに関する情報が入ったら知らせるよ。」

「解ったわ。私達もレオンがポケモンになった原因が解ったら知らせるわ。じゃ、お互い頑張らしましょ♪行くわよりザードン！」

「解った！」

アスカ達はトレジャータウンに向かって行った。

「さて、俺達も行こうぜポツチャマ！」
「うん！」

俺達は何か仕事がないか依頼掲示板の所に向かった。

「今日はどんな依頼があんのかなあ？」

「お、お前達ちょうど良いところに♪」

俺達が仕事を探している時にペラップが声を掛けてきた。
いやな予感（汗）

「なんだよペラップ？」

「ペラップさんだ！」

うっ（汗）　　そういえばさんを付けないと怒るんだった（汗）

「お前達にこの依頼を受けてもらいたい。」

そう言ってペラップが一枚の依頼書を俺に手渡した。

「レオン、どんな依頼内容？」

「えーっと……初めまして、私はバネブーと申します。ある日、悪

者に私の大事な真珠が盗まれたんです！

真珠は私にとって命！

頭の上に真珠が無いと、私落ち着かなくてももう何も出来ません！

そんな時！

悪者が岩場に私の真珠を隠しているらしいという情報があったんです！

ですが……岩場はとても危険な所らしく……そんな所に私行けませーん！

だからお願いします。

誰か岩場に行って真珠を取り返してきて下さい！

探検隊の皆さん、お願いします……」

絶対これ救助隊の仕事だと思うんですけど（汗）

「他の皆はそれぞれ別の依頼を受けていて手が離せない。お前達、しっかりとやるんだぞ♪」

そう言ってペラップは何処かに行ってしまった。

「じゃあないか。

行こうぜポッチャマ、まずはトレジャータウンで準備だ。」

「うん。」

俺達はそのバネブーの真珠がある岩場に行く前に、準備をする為にトレジャータウンに向かう事にした。

「あら、レオン達じゃない！」

ギルドからトレジャータウンに向かう途中にある十字路で俺達はアスカ達と出会った。

「アスカ達か、何かゲンガーに関しての情報はあったのか？」

「それが全然（汗）」

誰もあれ以来ゲンガー達を見てないみたいなのよ。仕方ないから今日は救助活動に専念する事にしたの。」

「何処に行くの？」

ポツチャマが聞いた。

「ゼロの島って所よ。」

ゼロの島？

「トレジャータウンにいるカクレオンが店の商品にゼロの島で見つかる珍しい道具が欲しいって言ってたから私達が行く事になったの。」

「そうなのか。俺達は今からバネブーの盗まれた真珠を取り返す為に準備してから岩場に向かう予定なんだ。」

「そうなの。」

「アスカ、そろそろ行こう。カクレオンに今日中に持ってきてくれて頼まれてるんだから。」

アスカの隣にいたりザードンがアスカに言った。

「そうね。それじゃまた後でねレオン♪」

笑顔でそう言ってくれたアスカはリザードンと一緒に行ってしまった。

「……やっぱりアスカって可愛いよなあ……」

「レオン、今何か言った？」

はっ！？ つい思った事を口にしてしまった（汗）

「な、なんでもない（汗）

それより、俺達も早く準備して真珠を取り返しにいかないと！」

俺は足早にトレジャータウンに向かった。

「あっ待ってよー！」

「はい、毎度あり〜♪」

トレジャータウンのカクレオンの店で体力を回復してくれるオレンの実とお腹が空いた時の為の食料であるリングゴ。

後はバトルに役立つらしい爆裂の種。

ポツチャマが言うにはこれを相手に投げて当てると種が爆発するらしい。何ちゅう恐ろしい種だよ（汗）

とりあえずこの三種類をカクレオンの店から買った。

これで準備OKだな。

「よし、じゃあ行くかポツチャマ！」

「うん……って痛っ!？」

突然誰かがポツチャマに体当たりしてきた!

そのせいでポツチャマは顔から地面に叩きつけられた!

「大丈夫かポツチャマ!？」

「イタタタ……な、なんとかね……ってあれ？」

あれれ? 無い……無い!？」

突然ポツチャマが慌てだした。

無いって何が……あっ! ポツチャマがいつも首にぶら下げていた宝物が無くなってる!

「探し物はこれかな？」

誰かが俺達に話しかけてきた。

声が聞こえた方を見るとそこにはコウモリポケモンのズバットと毒

ガスポケモンのドガースがいた。あつ！ズバットがポツチャマの宝物を持っていやがる！

「おい！それはこいつの宝物だぞ！返せよ！」

俺は強い口調で二人に言った。

「へえ！やっぱりこれって宝物なんだ？
なら、余計に返す訳にはいかないな！
なあドガース？」

「ああズバット。こいつは俺達が貰っていくぜ！あばよ！」

ズバットとドガースがポツチャマの宝物を持って逃げ出した！

「逃がすかよ！追うぞポツチャマ！」
「うん！」

俺達は急いでズバットとドガースを追いかけた。

俺とポツチャマは宝物を取り返す為にズバットとドガースを追いかけたんだけど……途中で見失っちゃった！

「くそ！あいつら何処に行きやがった！？」

「レオン、もしかして彼処に逃げたんじゃない？」

ポツチャマが見ている先には岩場があった。

「あの岩場って……もしかして依頼にもあった岩場か？」

「多分ね……もしかしてバネブーの真珠を盗んだのもあいつらなんじゃ……あつレオン！」

彼処に何か落ちてるよ！」

ポツチャマが示した先には確かに何か落ちていた。俺達はその落ちていた物に近づき、俺はそれを拾った。

これ……種か？

「それは猛撃の種だね！結構珍しい種だよ！それを食べると凄い力を出せるんだよ。」

ポツチャマが説明してくれた。

猛撃の種か……何か凄そうだな。奴らが落としていったのかな？

「うっ！？」

これは……またあの目眩か……

『前のバネブーと良いさっきのポツチャマと良い……楽勝だったな
ドガース!』

『そうだな。これ売りさばいて金にして兄貴にプレゼントしたら
喜ぶだろうぜ!』

「ふう……」

やっと目眩が治まった。

今見たのはズバットとドガースだったな。

あの会話からしてバネブーの真珠を盗んだのも奴らだな……
この岩場の先にいるのか……

「どうしたのレオン？」

「ポツチャマ、どうやらこの先に奴らがいるみたいだ。

それと、バネブーの真珠を盗んだのも奴らだ。」 「えっ! どうして
解るの?」

「あとで説明してやるよ!とにかく、行くぞ!」

俺はズバットとドガースがいる岩場目指して走り出した。

「あつ待つてよレオン！」

岩場に来てから数十分。まだズバットとドガースの姿は確認出来ない。

その代わりに……

「泡攻撃！」

「電気ショック！」

ここに住んでいるポケモン達が現れてはいきなり襲いかかってきた。幸いにもこのポケモン達はレベルが低く、俺達でも簡単に撃退する事が出来た。

「そろそろ最深部だな……多分この先に奴らがいるんだろ。ポツチャマ、準備するぞ。」

「解った。」

最深部に行く前に俺達はオレンの実を食べて体力を回復させた。それと、前にキマワリから貰った道具。

幸せリボンと防御スカーフを俺達はそれぞれ付けた。

「よし、行くぞ！」

「うん！」

俺達は岩場の最深部へ。

「こんだけあればかなりの金になんたる。」

「だな。そろそろ売りさばくとするかドガス。」

いた！ズバットとドガスだ！

「見つけたぞお前ら！」

俺が怒鳴るとズバットとドガスは驚いたのか身体をビクツとさせた。
そして振り返ってこっちを見る。

「貴様ら、まだ追いかけて来てたのか！」

「当たり前だ！さあ、盗んだ物を返してもらおうか！」

「嫌なこった！返してほしければ力づくでやってみな！」

ズバットとドガスが戦闘体勢に入った。

「やってやろうじゃんか！くらえ、電気ショック！」

俺はズバットに向かって電気ショックを放った！

「おっと！」

電気ショックが当たる寸前でズバットは回避しやがった！

「なら接近戦だ！

電光石火！」

俺は全速力でズバットに突っ込んで行った！

「体当たり！」

「ぐっ！？」

ズバットに向かって電光石火で突っ込んで行ったんだが、横からド
ガスが俺に体当たりを仕掛けてきた。

ドガスの体当たりは俺の脇腹に直撃して俺は吹き飛ばされた！

「よくもレオンを！

泡攻撃！」

ポッチャマが大量の泡をズバットとドガスに放った！

「吹き飛ばし！」

だけど、ズバットが自分の翼を思いっきり羽ばたかせて突風を作り
出してポッチャマの泡攻撃を吹き飛ばしてしまった！

吹き飛ばされた泡はポッチャマに向かっていく！

「わわわわ!?!」

「電光石火!」

俺は電光石火でポツチャマの所に行き、ポツチャマの腕を掴んで引っ張り、泡攻撃から助けた。

「なんとか間に合ったな。」

「あ、ありがとうレオン、助かったよ(汗)」

「とっとと終わらせてやる! ドガス、あれやろうぜ!」

「あれだな? 良し、毒ガス!」

「吹き飛ばし!」

ドガスが口から大量のガスを吐き出して、それをズバットが吹き飛ばして俺達をガスで覆った!

「ゲホッゲホッ!?!」

ポツチャマが苦しそうに咳をしている。

なんとかしなきゃ……

まずはドガスからだ!

「電光石火!」

俺は電光石火でドガスに体当たりした!

「げはっ!?!」

良し! ドガスを吹き飛ばす事が出来た!

吹き飛んだドガスは近くにあった岩に身体をぶつけて、目を回し

て倒れた。

「ドガス！？」

「次はお前だ！！」

ドガースを倒されて動揺しているズバットに俺は握り締めていた爆裂の種を投げつけた！

爆裂の種はズバットに直撃して、種が爆発した！本当に爆発したよあの種（汗）

とにかく、爆発でズバットは吹き飛ばされた。

「この野郎！！」

ってあいつあの爆発を耐えてこっちに突っ込んで来た！？

「噛みつく攻撃！！」

ズバットが俺の腕に噛みついてきた！

「痛っ！？こいつ、電気ショック！！」

俺は電気ショックをズバットに直撃させた！

ズバットは俺の腕に噛みつくのを止めてその場に倒れた。

俺の電気ショックが効いたみたいで身体をビクビクと痙攣させている。

麻痺したみたいだな。

「よし終わり！ポッチャマ、大丈夫か？」

俺はポッチャマの所に駆け寄った。

「ゲホッ……ちょっと喉が痛いけど、大丈夫だよ。」

咳をしながらポツチャマは笑顔を作って俺にそう言った。

「なら良いけど、あんま無理すんなよ？」

「うん。あっ！僕の宝物！」

ポツチャマはズバットが落とした自分の宝物に向かってダッシュした。

あんな速く動けたんかい（汗）

「良かったあー！」

あっ！レオン、あれバネブーの真珠じゃない？」

ポツチャマが示す場所には綺麗な真珠が転がっていた。

確かにあれがバネブーの真珠だな。

俺は真珠に駆け寄りそれを拾った。

「よし、後はバネブーに届けるだけだな。

……っとその前に、お前達を捕まえないとな。」

「捕まってたまるかよ！煙幕！」

いつの間にか意識を回復させていたドガースが煙幕を使った！
うわっ前が全然見えない！？

しばらくしてようやく煙幕が晴れた。

晴れた時にはズバットとドガスはいなくなっていた。

「何処ぞのゲンガーみたいに逃げ足が速いね（汗）」

「はぁ……しゃあないか。とにかく、バネブーの真珠は取り返したから依頼は成功だな。」

ギルドに戻ろうぜポツチャマ。」

「そうだね。」

俺達はバネブーの真珠を持ってギルドに戻る事にした。

第八話 バネブーの真珠（後書き）

第八話完成です。

第九話 ゼロの島！チームアスカVSチームMAD！（前書き）

ゼロの島で珍しい道具を探す事になったの。
今回は私の視点よ！

第九話　ゼロの島！チームアスカVSチームMAD！

トレジャータウンでゲンガー達の情報がないか聞いて回っている私とリザードン。

だけど進展無し（汗）

誰もあれ以来ゲンガー達を目撃してないって言うの。

「はあ……何も解らないねアスカ（汗）」

隣で一緒に歩いているリザードンがため息を吐きながら私に言った。

「そうねえ……仕方ない。今日はいつものように救助活動をしましょ？」 「そうだね。でも、今のところ誰からも救助の依頼は無いよ？」

「そういうのは自分達から探すのよ！
まずは彼処のカクレオンの店に行くわよ！」

私はカクレオンが二人いる店に向かった。

「……本当は依頼を探すんじゃないかって買い物がしたいだけなんじゃない……」

カクレオンの店の前に立った私。
へえ〜！結構品揃えが良いわね！

ポケモン広場にいるカクレオン達に負けてないわね。

「いらっしゃーい♪
何をお探して？」

カクレオンが私に聞いてきた。
あれ？そういうえば、このカクレオン達ポケモン広場のカクレオン達に似てるかも……

「ねえ、もしかしてあっちのポケモン広場の方で同じ商売してるカクレオン達ってあなた達の親戚？」

試しに私は聞いてみた。

「あの二人は私達の弟なんですよ！」

弟！？あの二人に兄さんがいたなんて初耳よ！？

「そうなの！？」

「ええ、私が長男で隣にいるのが次男、あっちの方で働いているのがその下の弟達なんです。」

ビックリだわ（汗）

まさかの四人兄弟だったなんて（汗）

「アスカ、僕達が聞きたいのはそういう事じゃないでしょ？」

両手を腰に当てながらリザードンが私に言った。

「解ってるわよ。ねえあなた達、何か困ってる事はない？」

「困ってる事ですか？」

「何か取ってきてほしい物があるとか、なんでも良いわよ。」

「それでしたら、ゼロの島にある珍しい道具を取ってきてもらえないでしょうか？」

ゼロの島？聞いた事がないわね？

「ゼロの島って何処にあるの？」

「トレジャータウンから丁度南の方にある島なんですよ。」

そこにはレアな道具があるって噂でして……

だけど、そこに住んでいるポケモン達が非常に強くて簡単には取れないんですよ（汗）」

「なるほどね……良いわ、私達が取ってきてあげる！」

「本当ですか!？」

「ええ、珍しそうな物があったら色々取ってきてあげるわよ♪」

「それじゃあ、よろしくお願いします！」

……それと、出来れば今日中にお願ひしてもよろしいですか？
ちよつと商品の在庫が無くなつてきています（汗）」

「解ったわ。行くわよりザードン。」

「うん。」

私達はカクレオンの店から離れた。

トレジャータウンから少し離れた所にある十字路に來た私達。

「ねえアスカ、どうやってゼロの島に行くの？」

何解りきった事を聞いているのかしらリザードンは？そんなの決まってるじゃない♪

「よろしくね♪」

私は笑顔でリザードンを見ながら言った。

「ハハハ……やっぱりね（汗）」

「ポッチャマ！早く来いよ！」

「待ってよレオン（汗）」

ギルドに繋がっている階段を駆け足で下ってくるポケモンが二人。

「あら、レオン達じゃない！」

その二人って言うのは私達の新しい友達のピカチュウのレオンとポッチャマだったの。

私は二人に声を掛けた。

「アスカ達か、何かゲンガーに関しての情報はあったのか？」

「それが全然（汗）」

誰もあれ以来ゲンガー達を見てないみたいなのよ。仕方ないから今日は救助活動に専念する事にしたの。」

「何処に行くの？」

レオンの隣にいたポツチャマが私に質問した。

「ゼロの島って所よ。」

トレジャータウンにいるカクレオンが店の商品にゼロの島で見つかる珍しい道具が欲しいって言ってたから私達が行く事になったの。」

「そうなのか。」

俺達はこれからバネブーの盗まれた真珠を取り返す為に準備してから岩場に向かう予定なんだ。」

バネブーの真珠……結構高価な代物ね。

「そうなの。」

「アスカ、そろそろ行こう。カクレオンに今日中に持ってきてくれて頼まれてるんだから。」

私の隣にいたりザードンが言った。

「そうね。それじゃまた後でねレオン♪」

私達はレオン達と別れて海岸に向かった。

「それじゃ、頼むわよりザードン♪」

「了解。」

海岸に着いた私はリザードンの腕につるのムチを巻きつけて、リザ

ードンはつるのムチをしっかりと掴んだまま空に上昇。私の身体はリザードンに引っ張られて空中に浮いた。

「ゼロの島まで全速力でお願いねリザードン！」
「解った！」

リザードンは私をぶら下げたままゼロの島目指した全速力で飛んでくれた。私達が遠い所に行く時はこんな風にリザードンに頼んで移動してるの。空を飛ぶのって気持ち良いのよね♪

海岸を出発してから数十分。眼下には青い海が広がっていた。

「アスカ〜！もしかしてあれがそうかな〜？」

私の真上でリザードンがそう叫んだ。

私はリザードンが見てる先を確認してみる。

するとそこには一つの島があった。

その島は全体的に丸くて島の中心には湖が広がっていた。空中から見ると数字のゼロに見える。

なるほどね、だからゼロの島って呼ばれてるのね。

「リザードン！」

彼処に降りて〜!」

私はリザードンに島の北側にある海岸に降りるように頼んだ。

「解った〜!」

リザードンはゼロの島の北側の海岸目指して降下を始めた。

「リザードン、もう放して良いわよ!」

「解った、放すよ!」

海岸の近くまできた私達。もうすぐ下は砂浜だったから私はリザードンに巻きつけていたつるのムチを放すように頼んだ。リザードンはつるのムチを放してくれた。

私は砂浜に着地した。

「やっと着いたわね。

ふ〜ん……結構綺麗な所ね!」

青い海に白い砂浜……

あ〜ここでゆっくり日光浴したいわ〜♪

「アスカ、今ここで日光浴したいって考えたでしょ？」

私の隣に着地したりザードンが言った。

「あら？良く解ったわね？」

「何年一緒にいると思ってるのさ？それ位解るよ。アスカってすぐに顔に出るからね。」

今日はここに仕事しに来たんだから、日光浴はダメだよ。」

「えゝ良いじゃないのよゝちよっとくらいゝ！」

「ダメ。ほら、行くよ。」

リザードンは先に島の中に行ってしまった。

「あつ待ちなさいよりザードン！」

私も急いでリザードンのあとを追いかけた。

ゼロの島の北部に入ってから数十分。

「アスカ！そっちに行ったよ！」

「解ってるわよ！」

「くらいなさい、エナジーボール！」

私達は今この島に住むポケモン達と戦闘中。
相手はバンギラスとメタグロス。

カクレオンが言っていたようにここに住むポケモン達はやたらに強い！
私達も本気を出さないとすぐにやられてしまう程にね。

今私が放ったエナジーボールはバンギラスに直撃した。

だけど、このバンギラスはかなりタフみたいでこの一撃では倒れて
くれなかったの！

バンギラスが自分の牙に炎を纏わせて私に突っ込んで来た！
あれは炎の牙ね！

「アスカ！」

「つるのムチ！」

私は空中にいたリザードンの腕につるのムチを巻きつけた。
リザードンはつるのムチをしっかりと掴んで私を空中に引っ張り上
げてくれた。

おかげでバンギラスの攻撃を回避出来たわ。
今度はこっちの番！

「リザードン！」

私をバンギラスに向けて思いっきり投げて！」

「解った！行くよアスカ！」

リザードンは私を掴んだままぐるぐると回し始めた。
遠心力で勢いがついてきた！

「それっ！！」

リザードンは私をバンギラスに向けて投げた！

「くらいなさい！
のしかかり攻撃！！」

私はバンギラスにのしかかり攻撃を決めた！

ノーマルタイプの技は岩タイプのバンギラスには効果があまりないけど、リザードンの投げる力と落下スピード、さらに私の全体重を掛けた攻撃を受けて無事ではすまないわ。私の攻撃を受けたバンギラスは目を回して倒れている。

よし、あとはメタグロスだけよ！

「アスカ危ない！？」

リザードンが私にそう叫んだから慌てて後ろに振り向くと、メタグロスがもの凄いスピードで私に向かって来ていた！
高速移動からの突進？

とにかく、あんなの受けたら一溜まりもないわ！

「守る！」

私は守るを使って自分をバリアのような防御壁で包んだ。
その防御壁にメタグロスが突っ込んできた！

でも、守るは鉄壁の防御方法！

私にダメージは無いわ。だけど、凄い威力の攻撃だわ。
直接受けた訳でもないのに身体中に衝撃が伝わってくる！

「今よりザードン！」

「オーバーヒート！！！」

リザードンはメタグロスの真上からオーバーヒートを直撃させた！

鋼タイプのメタグロスに炎技は効果抜群！

草タイプの私にも効果抜群だけど、守るで防御してるから被害はないわ。メタグロスが目を回してその場で倒れた。

「ふう……終わったわねえ（汗）」

「想像してたよりもこのポケモン達強いね（汗）」

「ええ（汗）ちよつとでも油断したらあつという間にやられちゃうわね……あっ！」

さっき倒したバンギラスの近くになにか落ちてる！私はすぐにその落ちてる何かに駆け寄った。

「どうしたのaska？」

「ほらこれ！幸せの種よ！」

私はつるのムチで拾った種をリザードンに見せる。幸せの種という名前で、これを食べると強くなれるの。

結構珍しい物よ！

しかも六個もある！

「やったねaska！」

これを届ければカクレオンも喜ぶね！」

「ええ、ただどこれだけじゃまだ物足りないわ！もっと奥の方にも行きましょ！」

「えっ？もうこの辺で引き上げた方が良くないんじゃない？」

「何言ってるのよ！」

まだこの先にもレアな物があるかもしれないのよ？ほら、行くわよ♪」

なんだか楽しくなってきた私はさらに先に進んだ。

「……これじゃ救助隊じゃなくて探検隊だね（汗）」

それから更に数十分。

今までに色々と珍しい道具を拾ってきたわ。

例えば友達リボンとかね。これは身に付けるとそのポケモンの魅力が上がる……らしいんだけど、実際に使った事無いから解らないわ

（汗）

でも珍しい物には変わらない。

とにかく、色々珍しい物を拾い集めてたらいつの間にかゼロの島の北部の最深部まで来てたの。

さすがにここまで来るとポケモン達の気配を感じないわね。

「アスカ、彼処見てみてよ。」

リザードンが何処かを指差しながら私に言った。リザードンが指差す先には何やら凄い物が入ってそうな雰囲気を出している宝箱があった。

「行ってみましょ！」

私達は宝箱に駆け寄った。近づいてみたら宝箱には鍵が掛かっていて開ける事が出来なくなっていた。

「中に何が入ってるのかな？」

「解らないけど……とりあえずこれも持っていきましょう。

今までに拾い集めてきた物と一緒にカクレオンに渡したらきつと喜ぶわよ！」

私達は宝箱を持ち帰ろうとした。

だけどその時、背後から誰かの気配を感じっ取ったの！

「ミサイル針！」

「毒針！」

突然私達の背後から誰かが攻撃してきた！

「火炎放射！」

「エナジーボール！」

私達は火炎放射とエナジーボールで応戦した！

それでなんとかミサイル針と毒針を防ぐ事が出来たわ。

「へー、俺達の攻撃を防ぐなんて意外にやるじゃんか？」

どうやら私達を攻撃したのはあの二人みたいね。アーボックにドラピオン……毒タイプのポケモンね。さっきのミサイル針と毒針の威力からして、かなり強いわね……

「あんた達、いきなり攻撃するなんて随分な挨拶ね？ 一体何者よ？」
「それはアタイが答えてやるよ。」

アーボックとドラピオンの後ろからもう一人ポケモンがやって来た。

「アタイはマニューラ。こいつらは子分のアーボックとドラピオン。アタイ達はチームMAD。盗賊さ。」

チームMAD……盗賊ねえ……

「その宝は俺達のも物だ！怪我したくなかったら大人しくそれをこっちに渡しな！」

ドラピオンが脅すように私達に言ってきた。

「この宝があんた達のも物？名前でも書いてあるの？」

私は挑発的にドラピオンに言い返した。

「この世にある宝は全て俺達のも物だ！だからその宝も俺達のも物なんだよ！」

どういう理屈よ（汗）

「これは私達が先に見つけたの。だからこれは私達のも物よ。」

「あんた、大した度胸だねえ？アタイ達を相手にして臆さないなんてね。このまま消すのは惜しいわ……あんた、アタイ達の仲間にならないかい？」

マニューラが私を誘ってきた。

「私達は救助隊よ。」

盗賊の仲間になんかならないわよ。」

「そうかい……ならしょうがない。」

お前達、やっちゃまいな！」

マニニューラがそう言うのとアーボックとドラピオンが私達に向かってきた！

「くらえ！クロスポイズン！」

「泥爆弾！」

ドラピオンがリザードンに向かってクロスポイズン、アーボックが私に向かって泥爆弾で攻撃してきた！

「メタルクロー！」

「エナジーボール！」

リザードンはメタルクローでドラピオンのクロスポイズンに対抗、私はエナジーボールをアーボックの泥爆弾にぶつけて相殺させた。

「力比べなら負けねえぞ！」

「くっ！？」

リザードンがドラピオンに力負けしてる！

「リザードンから離れなさいよ！

つるのムチ！」

私はつるのムチを伸ばしてドラピオンの身体に巻きつけようとした。

「炎の牙！」

アーボックがいつの間にかドラピオンの近くまできていて、私のつるのムチに炎の牙で噛みついてきた！

「痛っ!?!」

噛まれた事による痛みと炎の焼けるような熱さの両方が私に襲ってきた！

「アスカ、このおおお!!」

「うおっ!?!」

リザードンが気合いを入れてドラピオンを吹き飛ばした！

「アスカから離れろ！

ドラゴンクロー!!」

リザードンがドラゴンクローでアーボックを攻撃した！
アーボックはドラゴンクローを受けて吹き飛ばされた！
おかげで私は炎の牙から解放されたわ。

「大丈夫アスカ？」

「なんとかね。あいつ、もう怒ったんだから！

リザードン、日本晴れよろしく!」

「解った! 日本晴れ!」

リザードンは日本晴れを使ってくれた。
陽射しが強くなってきた！

「さっきはよくもやってくれたわね！

お返しよ！

ソーラービーム！！」

私は最大パワーでアーボックにソーラービームを放った！

ソーラービームは発射までに時間が掛かる技だけど、日本晴れで陽射しが強い状態だとすぐに放つ事が出来るの！

「冷凍ビーム！！」

マニユーラがアーボックの前に立って冷凍ビームを私のソーラービームにぶつけた！

ソーラービームと冷凍ビームがぶつかった瞬間大きな爆発が発生した！

「やるじゃないの！

私のソーラービームを相殺させるなんて！」

「それはアタイのセリフだよ。だけど、アタイの武器は冷凍ビームだけじゃないんだよ！

電光石火から辻斬り！」

マニユーラが凄いスピードで私に向かってきた！避けられない！？

「させない！メタルクロー！」

リザードンがメタルクローでマニユーラの辻斬りを防いでくれた！

「アタイの動きを見切った！？」

「僕にはハッキリと見えたよ！

アスカに攻撃はさせない！火炎放射！」

「電光石火！」

リザードンは火炎放射を放ったけど、マニユーラは電光石火で素早く動いて火炎放射を回避した。

「あんた達！同時攻撃で終わらせるよ！」

「了解だ姉御！」

「了解。」

マニユーラ達、何か仕掛けてくるみたいね。

「リザードン！」

「解ってるよアスカ！」

私達も攻撃する体勢に入った。

「くらいな！冷凍ビーム！！」

「破壊光線！！」

「ダストシュート！！」

マニユーラが冷凍ビーム、ドラピオンが破壊光線、アーボックがダストシュートを放ってきた！

「ソーラービーム！！」

「オーバーヒート！！」

私はソーラービーム、リザードンはオーバーヒートを最大パワーで放って対抗した。

私達の技とマニユーラ達の技がぶつかり合って凄まじい爆発が発生した！

「うわっ!？」

「きゃあ!？」

私達は爆発の衝撃で吹き飛ばされてしまった!

「いててて……だ、大丈夫アスカ？」

「な、なんとかね……」

吹き飛ばされたけれど、なんてか立ち上がった私達。

「ハア、ハア、ハア……アタイ達をここまで苦戦させたのはあんた達が初めてだよ……だけど!」

そう言いながらマニユーラが何か道具を取り出した。
あの宝玉は……まさか!？」

「これであんた達は終わりだよ!」

くっ!？お願い、間に合って!

マニユーラが宝玉を私達に向かって投げてきたと同時に、私もバツグから三つの宝玉を取り出してマニユーラ達に投げた!
四つの宝玉から凄まじい閃光が発せられた!

しばらくして閃光が消えた。

「か、身体が……動かない……」

私達は身体を動かす事が出来なくなっていた。

マニユーラが投げたのは縛り玉と呼ばれる道具。この道具は相手の動きを封じる力があるの。

簡単に言えば、今私達は麻痺している状態。

「縛り玉を投げてくるなんてね……でも、私が投げた道具も効果が出て良かったわ……」

私が投げた宝玉の効果でマニユーラ達はこの場からいなくなっていた。

私が投げたのは穴抜けの玉。

穴抜けの玉を使うとトレジャータウンのような安全な場所にテレポートが出来るの。

本来は自分が使う道具なんだけど、これをマニユーラ達に使ってゼロの島から何処かにテレポートさせてやったの。

「助かったけど、僕達いつになったら動けるようになるの？」

「縛り玉の持続時間は五分程……それまではこのままだったり……」

「五分……長いね（汗）」

「まあ、五分も待ってるつもりはないけどね。

ちよつと待っててね……アロマセラピー。」

動けないから技が出しにくかったけど、なんとか私はアロマセラピーを発動させた。

辺りに花の良い香りが漂い始めた。

アロマセラピーは麻痺のような身体に悪い状態を回復させる技なの。

「アスカのアロマセラピー……良い香りだなあ。あっ身体が動く！」

リザードンが身体を動かしている。

私も動けるようになったわ。

「ふう……もう縛り玉は受けたくないわ（汗）」

「同じく（汗）」

「さあ、穴抜けの玉で飛ばしたからすぐにここにマニョーラ達が戻ってくるとは思えないけど、早くここから出ましょ。」

「そうだね。アスカ、穴抜けの玉でトレジャータウンに戻るんでしょ？」

「あっ……ごめん、さっきマニョーラ達に使ったので最後の（汗）」

「えっ（汗）」

「だから……よろしく！」

私はつるのムチを一本リザードンの右手に巻き付けた。

もう一本のつるのムチで宝箱に巻き付ける。

「ハア……結局こうなるのね（汗）」

まあ良いけど、それじゃ行くよ！」

リザードンは私を引っ張り上げて空へ。

色々あったけど、私達はトレジャータウンに戻る為にもう一度空の旅に出た。

第九話 ゼロの島！チームアスカVSチームMAD！（後書き）

第九話完成です。

第十話 ギルドのルールは厳しい？（前書き）

バネブーの真珠とポツチャマの宝物を取り返す事が出来て良かったよ。

また俺の視点に戻るぞ。

第十話 ギルドのルールは厳しい？

ドガースとズバットからポツチャマの宝物とバネブーの真珠を取り返す事が出来た俺達。

今バネブーに真珠を返す為にギルドに戻って来たところ。

「レオンさん！

ポツチャマさん！

真珠を取り返していただきありがとうございました！

私、この真珠が無いとどうも落ち着かなくて……夜も眠れない日々が続きましたが、これでもう安心してぐっすり眠れます！これはお礼です。

受け取って下さい！」

バネブーに真珠を返すと、お礼としてなんと2000ポケも貰ってしまった！

あつポケってのはこの世界の通貨なんだってさ。しかし……2000ポケって……一体このバネブー何者？

「それでは失礼いたします。

本当にありがとうございました！」

バネブーは俺達に深々とお辞儀すると自分の家に帰って行った。

「凄いよレオン！

2000ポケだよ2000ポケ!」

ポツチャマが子供みたいに喜んでいる。

まあ、気持ちは解らないでも無いけど……

「お前達、良くやったな!」

あっ（汗）ペラップがやって来たよ（汗）

「さてと、その2000ポケは私が預かろう♪」

あっ!?

いきなり2000ポケをペラップに盗られた!?

「ちよっ!?!おいペラップ!いくらなんでもそりや……」

「ペラップさんだ!」

お礼は親方様に預けるのがギルドのルールなんだよ。まあ、さすがに全額お前達から盗る事はしないよ。ほれ。」

ペラップから2000ポケを受け取った……

って!?!2000ポケかよ!?!

「九割は親方様の取り分だ。これからも頑張って依頼を成功させろよ♪」

ペラップの野郎が笑顔で俺達にそう言った後、プクリンの部屋に戻って行った。

「……はあゝ（汗）」

いくらなんでも200ポケって（汗）」

「頑張ったのは僕達なのに……」

落ち込む俺達。

「どうしたのあなた達？」

後ろから声が聞こえた。振り向くとそこにはアスカとリザードンがいた。

「いやさ、今ペラップの奴にバネブーから貰ったお礼をほとんど持っていていかれ……って、どうしたんだよお前達その怪我！？」

良く見たら、アスカ達は身体中に怪我をしていたんだ！

「ん？あゝこれ？」

ちよっとゼロの島にいたポケモン達が思ってた以上に強かったのよね。

でもこれ位なんでもないわよ。」

そうは言うけどアスカ、なんでもないようには見えないんすけど（汗）」

「それよりも見てよこれ♪カクレオン達にゼロの島で見つけたレアな道具を渡したらお札にこんないっぱい貰っちゃったの♪」

アスカが笑顔で俺達の前に何やら袋を置いた。
なんだろ？めっちゃくちや詰め込まれてるみたいけど……俺は中身を確認してみた。

「……はい！？何このお金！？」

俺は思わず叫んでしまった。何故なら袋の中には大量のお金が入っていたからだ！

「カクレオン達からのお礼だよ。
約50000ポケが入ってるんだ。」

リザードンが答えてくれた……って、50000ポケ！？

「つい張り切っていっぱい集めたらこんなになっちゃったのよね」
♪

いやアスカ、いくらなんでもこれは張り切り過ぎだろ（汗）

「なんか……アスカ達って僕らよりも探検隊っぽくない？」

ポツチャマの言う通りだな（汗）

確かに救助隊って言うより探検隊だな。

チリリンチリリン！

おっ！晩御飯を知らせるチリーンの鈴の音だ！

「もう晩御飯の時間になってたんだな！
行こうぜ皆！」

俺はアスカ達と一緒に食堂に向かった。

「いやゝ食った食った♪」

食事を終えた俺達は自分達の部屋に戻ってきていた。

「レオンって意外と大食いなのね？」

部屋に用意されてある草のベッドに横になりながらアスカが俺に言った。

「そうだ！ねえレオン、今日の事話してよ。
なんでドガスとズバットが岩場の奥にいる事と、あの二人がバネ
ブーの真珠を盗んだ事が解ったのかを。」

ポツチャマが寝転がりながら俺に聞いた。

「あゝあれか。」

「……信じられないかもしれないけど、俺見えたんだよ。」

「見えたって何が？」

首を傾げるポツチャマ。

「あの二人がポツチャマの宝物を持って岩場に逃げ込むビジョンが見えたんだ。」

「……」

あっ（汗）

ポツチャマが疑いの視線で俺を見ている（汗）
やっぱ信じてないな（汗）

「嘘みたいな話だけど本当なんだよ！

俺が何か物や他のポケモンに触れた時に目眩がして、その時にビジョンが見えるんだよ！」

「つまり、未来予知みたいなものかしら？」

アスカが少し真剣な表情で俺に聞いてきた。

「多分な。だけど、前にアスカ達と一緒にゲンガー達を追って海岸の洞窟に入った時……あの時にもビジョンが見えたんだけど、その時に見たのは未来じゃなくて過去のビジョンだったんだ。」

「未来だけじゃなく過去の出来事も……」

そういう能力は聞いた事無いなあ……」

腕組みしながらリザードンが言った。

「何にしても、そんな能力を持ってるなんて凄いじゃないのレオン！」

笑顔でアスカが言った。

「俺の話、信じてくれるのか？」

「当たり前でしょ？」

レオンは嘘を言うような人じゃないもの。」

アスカ……なんか感動！

「そうだよね……レオンは嘘なんかつかないもんね。ごめんねレオン、疑ったりして……」

いきなりポツチャマが俺に謝った。

「謝んなくて良いよ。」

疑いたくなるのも当然だからさ。」

俺だっていきなりそんな事言われても……やっぱり疑っちゃうからな。

「レオン……」

「ふふ♪二人共、良いコンビね♪」

優しい笑顔でアスカが俺達に言った。

「ふぁー……アスカ、レオン、ポツチャマ。そろそろ寝ようよ……」

あくびしながらリザードンが言った……
おいリザードン、今結構良い雰囲気だったのに……

「相変わらず空気読めないのねリザードンは（汗）」

若干呆れた感じでアスカがリザードンに言った。

「……ぐ……ぐ……ぐ……」

リザードンからいびきが……っってもう寝たんか!?

「あらあら（汗）」

やっぱり疲れちゃったのね……もう、そのまま寝たら風邪ひいちゃうわよ?」

そう言ってアスカがリザードンの上半身に暖かそうな毛布を掛けてあげた。

「なんかお母さんみたいだなアスカ?」

「いつもリザードンには苦労ばかり掛けちゃってるからね……
さあ、もう夜も遅いし私達も寝ましょ?」

「そうだな……じゃあ、お休みアスカ、ポツチャマ。」

俺達は明日に備えて今日はもう寝る事にした。

第十話 ギルドのルールは厳しい？（後書き）

第十話完成です。

アスカ…作者さん。

何か小説の更新が遅かったわね？

作者…ごめん。

風邪ひいて寝込んでました（汗）

レオン…おいおい（汗）

作者…でももう治ったから大丈夫！

これからいつものペースで更新出来るよ！

……多分ね。

アスカ&レオン…多分かい！？

第十一話 訪問者。旅人のパッチール。(前書き)

ギルドのルールって厳しすぎだよなあ (汗)

第十一話 訪問者。旅人のパッチール。

翌朝。

俺達はいつものようにギルドの朝礼を済ませて、何か依頼がないか依頼掲示板の前にいた。

「さて、今日はどんな依頼があんのかなあ？」

掲示板と睨めっこする俺。何かないか探してんだけど……ほとんど他のギルドのメンバーが依頼を受けてるなあ？
余ってる依頼が一個も無いんですけど（汗）

「何も無いね（汗）」

ポツチャマが困ったような表情をして俺に言ってきた。

「だな（汗）」

「どうするレオン？」

どうするって聞かれてもなあ（汗）

「あの………」

ん？外に繋がる階段の方から声が聞こえてきたぞ？誰だろ？
俺とポツチャマは声が聞こえてきた階段の方に向かった。

「ど、どうも。」

こ、ここがプクリン親方がいらっしゃるギルドでしようか？」

階段の所には一匹のポケモンがいた。

なんだあのポケモン？

身体に斑模様（ふく）がいっぱいあってちよっとパンダに似たようなポケモンがこっちにゆっくりと向かってきた。

ってか、大丈夫かこいつ？なんかフラフラとした足取りだし、目が回ってるような感じだし（汗）

「確かにここはプクリンのギルドだ。

ところであんたは……」

「わっ!？」

ドテッ!

あっ転（こ）けた（汗）

「だ、大丈夫君!？」

ポツチャマが慌ててパンダみたいなポケモンに駆け寄って行った。
俺も一緒に転けたポケモンに駆け寄る。

「だ、大丈夫です。」

心配かけてしまつてすみませ〜ん（汗）

申し訳なさそうに言っているこのポケモン。

「あんた、名前は？」

とりあえず名前は聞かないとな。

「手前はパッチールと申します。」

パッチールって言うのかこのポケモンは。

「それでパッチールさん。ここにはどんなご用件で来たんですか？」

ポッチャマがパッチールを起こしながら聞いた。

「手前はプクリン親方には是非とも頼みたい事があるんです。有名な探検家であるプクリン親方ならきっとなんとかしてくれるのではないかと思います。」

プクリンに頼みたい事か……こんなフラフラになりながら来るって事は何か大事な事なんだな？

「プクリンならこの下の階の部屋にいる筈だ。」

俺は下に行く階段を指差しながらパッチールに言ってあげた。

「ありがとうございます！早速行ってみます……」

そう言ってパッチールは下に向かおうとしたんだけど、まだフラフラしてんな（汗）

「パッチール、ちょっと休んだ方が良いんじゃないか？フラフラしてるじゃないか。」

俺はパッチールに休むように言った。

「あゝご心配なく。これは手前の癖なんです。」

癖だったんかい!?

心配して損した気分だよ(汗)

「わっ!?!」

あっ(汗) パッチールが足を滑らせて階段から落ちた(汗)
なんなんだよあいつ(汗)

「ポツチャマ、何だかあいつ一人じゃ心配だから一緒について行ってやろうぜ。」

「そうだね。」

俺とポツチャマはパッチールと一緒にプクリンがいる部屋に向かう事にした。

「ここがプクリンの部屋だ。」

パッチールを連れて、プクリンの部屋の前まで来た俺達。

「ここまで親切にどうもすみませ〜ん(汗)」

頭に右手を当てながらパッチールが申し訳なさそうに俺達に言った。

「おや？レオン、ポッチャマ、お客様か？」

あっ（汗）プクリンの部屋からペラップが出てきた（汗）

「ああ。パッチールって言って、プクリンに頼みたい事があるんだってさ。」

俺はペラップに事情を説明してやった。

「ふむふむ……つまり依頼人という訳だな。」

パッチール殿でしたな？申し遅れました、私はペラップ。

このギルドの情報通で親方様の一番弟子です。

以後御見知り置きを。」

そう言って御辞儀するペラップ。

「親方様にご用件とは一体どのような内容で？」

「これです。」

そう言ってパッチールが何かを取り出した。

何だあれ？

鳥ポケモンの羽かな？

だけど、あんなに綺麗で透明な羽は見た事ないなあ……一体どんなポケモンの羽なんだろ？

「パッチール殿、一体何処でこれを？」

「手前は旅するのが好きであちこちを旅していたんです。」

そんなある時、歩いていたら空からこの羽が降ってきたんです。」

ふ〜ん。空から降ってきたんだ。

「それで、手前はこの羽の主に一度会ってみたいと思って色々調べたんです。」

そしたら、この羽は幻のポケモンの羽である事が解ったんです。だけど、そこから先は何も解らずで……

手前一人で捜すのは限界だと感じて、それで有名な探検家のプクリン親方に力を貸してもらおうと思ったんです。」

なるほどな。

腕組みしながら頷く俺。

「あら？綺麗な羽ね！」

背後から声が聞こえてきた。

俺は後ろに振り向く。

そこにはアスカがいた。

「おはようアスカ。

リザードンはどうした？

姿が見えないけど……」

いつも一緒にいる筈のリザードンが見当たらなかったからアスカに聞いてみた。

「まだ寝てるわ。

いつもは早起きなんだけど、珍しくまだ爆睡。

起こすのは可哀想だからそのまま来たの。」

リザードン、余程疲れてたんだな？

「それで、その綺麗な羽はどうしたの？」

「この羽はな……」

俺はアスカに事情を説明した。

「……なるほど。大体解ったわ。」

アスカは状況を理解してくれたみたいだ。

「パッチール殿、ご用件は解りました。

ささ、こちらへ。」

ペラップはパッチールを連れてプクリンの部屋に入っていった。
俺とポツチャマとアスカも一緒に中へ。

「失礼します親方様。」

中に入るとプクリンは自分の椅子にどっしりと座っていた。
何か親方って感じがするなあ。

「やあペラッポ。それに皆も。そこにいるのは見ない顔だね？」

パッチールを見ながらプクリンが言った。

「初めましてです。」

手前はパッチールと申します。」

今日はプクリン親方に頼みたい事があって来ました。」

「頼みたい事？」

パッチールはプクリンにあの綺麗な透明な羽の主を捜してほしいと頼んだ。

「この綺麗な透明な羽の主を……」

プクリンはじーっと透明な羽を見つめている。
依頼を受けるか考えてるみたいだな。

「うん。解ったよパッチール。
この依頼、引き受けるよ。」

考える時間短かつ!?

「本当ですか！
ありがとうございます！」

パッチールは喜んでるみたいだ。
でも、どうやって透明な羽の主を捜すんだろ？

「レオン、ポツチャマ。この依頼は君達に任せるよ。」

プクリンがパッチールの依頼を俺達に任せると言って……ってえっ
！？

俺達なの！？

「ちょっと待ってくれよ！その透明な羽の主が誰で何処にいるのか
も解らないのにどうやって捜せば良いんだよ！？」

「方法は君達に任せるよ。」

んな無茶な（汗）

「あの親方様、まだ探検隊見習いのこいつらには荷が重いのでは？」

おうペラップ！

たまには良い事言うな！……ちよつとムカつくけど（汗）

「そう？じゃあ……」

アスカ、レオン達に協力してくれない？」

「えっ？私？」

いきなり言われたのでアスカはちよつと驚いたみたいだ。

「別に構わないけど……まだ私達ゲンガー達を見つけてないし……」
「ゲンガー達なら僕が捜しておくよ。」

だから、レオン達に力を貸してあげて？」

プクリンの頼みにしばらく沈黙して考えているアスカ。

「……解ったわ。」

レオン達は友達だし、協力してあげるわ。」

アスカは俺達に協力してくれるみたいだ。

「決まりだね。」

パッチール、彼らに透明な羽を預けても良いかな？」

「良いですよ。」

レオンさん、ポツチャマさん、アスカさん。

よろしく願いますっ！」

俺はプクリンからパッチールの透明な羽を受け取った。

透明な羽を受け取った後、プクリンの部屋から出てこれからどうするかアスカと相談する事にした俺とポツチャマ。
その時、ようやくリザードンが目を覚ましたみたいで俺達の所にやって来たんだ。

それで、今まであった事を俺はリザードンに説明した。

「僕が寝てる間にそんな事になってたんだ。
この透明な羽の主を捜すのか……」

リザードンは透明な羽を手に取り、何かを考えているみたいでじーっと透明な羽を見つめている。

「アスカ、やっぱこういうのはネイティオに聞くのが良いんじゃない？」

しばらくしてからリザードンがアスカにそう言った。
ネイティオって誰だ？

「ええ。私もネイティオに聞くのが良いと思ってたの。」

アスカも同じ考えだったみたいだ。
だからネイティオって誰？

「ネイティオって誰なんですか？」

ポツチャマがアスカ達に聞いた。

「私達の知り合いでとっても物知りのポケモンなの。
彼なら多分この透明な羽の主が誰で何処にいるのか知ってると思うわ。」

アスカが説明してくれた。へー物知りなポケモンなのか……

ん？でもそのポケモンに会うには……

「アスカ、その物知りなポケモンってアスカ達の地元にいるのか？」
「そうよ。」

やっぱりね（汗）
って事は海を渡らないといけないって事だよな（汗）

「なあ、どうやって海を渡るんだ？
俺遠くまで泳げる自信無いんだけど（汗）」

「誰が泳いで行くなって言ったの？
ねえリザードン？」

そう言いながらアスカがリザードンを見ている。

「アスカ……もしかして、また僕が運ぶの？」

恐る恐るリザードンはアスカに聞いた。

「他に海を渡する方法が無いからしょうがないでしょ？」
「ですよねゝ（汗）」
アハハ……はぁゝ（汗）」

深くため息を吐くりザードン。

場所が変わってトレジャータウンの西側。
海が見える崖の近くに来ていた俺達。

「それじゃあお願いねリザードン♪」

アスカはつるのムチをリザードンの両手に巻き付けた。
それをしっかりと握るリザードン。

「なあ、本当に大丈夫かりザードン？」

俺はちょっと心配になったからリザードンに聞いてみる。
ちなみに俺とポッチャマはリザードンの背中に乗っている。

「大丈夫。僕を信じて。それじゃ、行くよ！」

リザードンは俺達を乗せたまま力強く翼を羽ばたかせて空に上昇した！

すげー！

本当に俺達を乗せたまま飛んだよ！

アスカも運んでるのに、リザードンって力持ちなんだな！

「しっかり掴まっててよ！全速力で行くからね！それっ！！」

リザードンは凄いスピードで前進した！
目指すはアスカとリザードンの地元だ！

第十一話 訪問者。旅人のパッチール。（後書き）

第十一話完成です。

レオン…作者、今回の話って探検隊のゲームの中にあっただか？

作者…無いよ。

今回の話は救助隊のゲームクリア後に出てくるイベントの一つを参考にしてるんだ。

コラボだから出来る事です。

アスカ…やるわね作者さん。ところで、救助隊に出てきてたポケモン達って登場するのかしら？

今現在は私とリザードン、それにゲンガー達だけでしょ？

作者…良い質問だねアスカ。

もちろんアスカ達やゲンガー達以外にも登場させるよ。

アスカ…じゃあ、久しぶりに彼らに会えるのね！

楽しみだわ♪

第十二話 精霊の丘へ。(前書き)

幻のポケモンかあ……
一体どんな奴なのかな？

第十二話 精霊の丘へ。

パッチールの依頼で幻のポケモンを捜す為に俺とポッチャマはアスカとリザードンの知り合いのネイティオに会いに行く事になったんだ。

んで、今俺とポッチャマはリザードンの背中に乗ってネイティオがいる精霊の丘って言う場所に向かって海の上を飛行中。

「リザードン、あとどれくらいで着く？」

トレジャータウンから飛び立ってから約一時間が経過していたから、俺はあとどれくらいで到着するのかりザードンに聞いてみた。

「ハア……ハア……あ、あと十分くらいかな？」

リザードンが息を切らせながら答えてくれた。

大丈夫かりザードン？

何か大分疲れてるみたいだけど……

「リザードン！」

ペースが落ちてるみたいだけど大丈夫なの？

下の方からアスカが叫んでいる。

リザードンのペースが落ちてるのは……

多分アスカのせいだと思うぞ（汗）

メガニウムって見た目結構体重ありそうだし（汗）

「だ、大丈夫だよアスカ！」

あんま大丈夫そうには見えないぞリザードン（汗）

それからしばらくして、俺達の前に大きな島が見えてきた！

「あれがそうなのか？」

俺はリザードンに聞いた。

「そうだよ。あれが、僕とアスカの地元さ。」

あれが……思ってた以上にデカいなあ！

「えっと……精霊の丘は……あっあつた！

レオン、ポッチャマ。

そろそろ着陸するから、落ちないようにしてよ？」

「了解。」

それからリザードンはゆっくりと精霊の丘に降下していった。

「リザードン！もう放しても大丈夫よ！」

アスカが叫んだ。

「解った！」

リザードンは握っていたアスカのつるのムチを放した。
そしてアスカが地上に降りた。

続いてリザードンも地上に着陸。

それから俺とポツチャマはリザードンから降りた。ここが精霊の丘か……意外になにも無い場所だな？

岩ばっかりだ……

「えっと……ネイティオは……あついたいた！」

ネイティオく久しぶりく！」

アスカが叫んでいる先にはぼーっと突っ立っている鳥みたいなポケモンがいた。

あいつがネイティオか。

「ん？あくお主達か……久しぶりだな。」

あれ？意外と簡単な挨拶だな（汗）

「そこにいるのは？

初めて見る顔だな？」

ネイティオが俺とポツチャマを見つめながらアスカに聞いた。

「彼はレオン、隣にいるのはポツチャマ。

友達よ。そして探検隊でもあるの。」

アスカがネイティオに俺達の事を紹介してくれた。

「初めまして、ポッチャマです。」

ポッチャマが挨拶した。俺もしなきゃ！

「俺はレオンだ。」

よろしく……」

「……」

な、何故ネイティオはじーっと俺の事をみてるんだ（汗）

「な、なんか俺の顔に付いてる？」

「……ふむ、お主達は私に質問しに来たのだな。」

透明な羽の持ち主が誰で何処にいるのかを……」

えっ！？当たってる！？

こいつエスパーか！？

「……残念だが、そのポケモンが何処にいるのかは私にも解らない……」

がくっ！？ここまで来てそんなオチかよ！？

「しかし、その幻のポケモンがいる場所を知っているポケモンなら……知っている。」

ネイティオは空を見上げながらそう言った。

「本当か！？そのポケモンには何処に行けば会える？」

「……ある者は火山の噴火と共に怒り……
……ある者は雷と共に雄叫びをあげ……
……ある者は北風と共に走り抜ける……」

……謎掛けかよ（汗）

「あのく……どういう意味ですか？」

ポツチャマが首を傾げながら聞いた。

「お主達は探検隊なのであろう？
ならば、自分達でこの謎を解くのだ。」

マジですか（汗）

「じゃあ、その幻のポケモンが誰なのかも教えてくれないのか？」
「無論だ。」

えく（汗）

「何だか面白くなってきたじゃないの♪
レオン、ポツチャマ！」

絶対この謎を解くわよ！」

あれれ？

アスカがもの凄い張り切ってるんだけど（汗）

「アスカく、謎を解くのは良いけど……ちょっと休もうよ」（汗）
「
リザードンがアスカに言っている。」

リザードンはここまで俺達を運んできたんだもんな。

「解ったわよ。」

じゃあとりあえず私の家に行きましょう！

そこで休憩しつつ、この謎を解くって事で。」

何だか……楽しそうだなアスカ？

やっぱアスカって俺達よりも探検隊っぽいな（汗）

「ほらあなた達早く来なさいよ！」

あっアスカがいつの間にか先に進んでる（汗）

「ま、待てよアスカ！」

俺とポッチャマとリザードンは慌ててアスカのあとを追いかけた。

場所は変わって、今俺達はアスカの家の中にいる。アスカの家って結構広いんだなあ！

まあ、メガニウムの体格を考えたら当たり前か？でも、この家ってアスカの家だったのが凄く解りやすいんだな。

家の外見がアスカそっくりに作ってあるんだからさ。

「……すゝ……すゝ……」

今俺の隣ではリザードンがぐっすりと眠っている（汗）
まだ午前11時なんだが……まあ、疲れちまったんだからしょうがないか。

「さてと、さっきネイティオが言ってた謎掛けなんだけど……」

アスカが地図を広げながら言っている。
なんか解ったのかな？

「まるで全然解らないのよね（汗）」

がくっ!?

俺とポツチャマはずっこけた（汗）

「おいおい（汗）」

「だけど、ネイティオが言っていた幻のポケモンがいる場所を知っているポケモンってのは多分炎タイプと電気タイプ、あとは水か水タイプのポケモンだと思うの。」

ある者は火山の噴火と共に怒り、雷と共に雄叫びをあげ、北風と共に走り抜ける……だったな。
確かにアスカの言う通り、そのタイプのポケモンであるのは間違いないだろうな。

「あとは、そのポケモンがいそうな場所を特定出来れば良いんだけど……」

そう言って地図と睨めっこするアスカ。

「アスカ、ここなんか居そうじゃないか？」

俺は地図に書かれている雷鳴の山と樹氷の森と炎の山を指差した。

「そこねえ……そこには伝説のポケモンのサンダー、ファイヤー、フリーザーがいるんだけど、彼らは知らないと思うわ。」

「なんでだ？」

「彼らとも私友達なんだけど、一度もそういう事言っていなかったから……」

伝説のポケモンと友達って……凄いなアスカ（汗）

「……あゝもう全然解んない！」

そう言ってアスカは立ち上がって外に行こうとした。

「アスカ？何処行くんだよ？」

「ポケモン広場。」

気晴らしに買い物してくるわ。」

気晴らしねえ……

「じゃあ俺も行くよ。」

ポケモン広場を見学してみたいしさ。

ポツチャマ、お前も行く……」

一緒に行くかって聞こうとしたら、ポツチャマもリザードンと一緒に寝ちゃっていた（汗）

なんでお前まで寝てんだよ（汗）

「ぐっすりと寝ちゃってるわね……

私達だけで行きましょ？」

「そうだな。」

俺とアスカはポツチャマとリザードンを起こさないように静かに外に出てポケモン広場に向かった。

第十二話 精霊の丘へ。(後書き)

第十二話完成です。

第十三話 ポケモン広場（前書き）

アスカももう少しリザードンに頼らずにやればリザードンも苦労しないで済むと思うんだけどな〜？

第十三話 ポケモン広場

「ここがポケモン広場よ。」

今俺はアスカと一緒にポケモン広場に來ているんだ。

アスカが氣晴らしにここで買物をするって言い出したから、俺も一緒にいてきたんだけど……あっちのトレジャータウンと同じで、こっちのポケモン広場も活氣があるなあ。

「ようアスカ！」

いつ帰ってきたんだ？」

ん？誰かがアスカに親しい感じで喋ってきた……なんだ？

この頭に水草みたいなものがあるポケモンは？

「今日の朝に帰ってきたのよ。」

それより、あんたルンパッパに進化するんじゃないの？ハスブレロ？」

首を傾げながらアスカが言っている。

こいつハスブレロって言うのか。

「いやさ、ルンパッパって能天気ポケモンだろ？今の俺の性格が能天気になるのはちょっとな〜って思ってたさ……」

右手を後頭部に当てながらハスブレロが言っている。

そういえばポケモンはレベルが上がったり特定の条件を満たすと進化出来るんだったな？

「それで結局進化するのは止めたと……
何よ、折角私とリザードンがあなたが進化したいって言うから水の石を見つけてあなたに渡したのに。」

ちよつと怒り口調でアスカが言っている。

「マジで悪いアスカ（汗）これ返すから勘弁な！」

申し訳なさそうにハスブレロはアスカに謝りながら水のように透き通った綺麗な石をアスカに手渡した。

へえ……あれが水の石なのか……

「はあ……まあ良いわ。今度また進化したくなったら言っ
て。それまでこの水の石は取っておくから。」

ため息を吐きつつアスカはそう言った。

「すまないな（汗）
んじゃまた今度なアスカ！」

ハスブレロは何処かに走り去っていった。

「相変わらずねハスブレロは（汗）
あつレオンを紹介するの忘れてた（汗）」

そういえばそうだよアスカ（汗）

「まっ良いか！
ハスブレロだし。」

良いのかい（汗）

「あっそうだ！

ねえレオン、広場を案内する前に先に買い物しても良いかな？」

「急いでる訳じゃないから良いよ。」

「ありがと♪カクレオンの店はこっちよ。」

そう言ってアスカが先に行ってしまった。

俺も急いであとを追いかける。

「あっいらっしやいアスカさん！
帰ってらしたんですね！」

カクレオンがアスカに言っている。
てか、トレジャータウンと同じでこっちもカクレオンがこういう
商売してんだな？

「今朝帰ってきたのよ。今日はどんな商品が入ってるの？」

アスカは店の商品を眺め始めた。

「今日は珍しい物が入りましたよ！
これなんかいかがでしょう？リザードンさんにプレゼントしたら喜
ぶと思いますよ！」

カクレオンが店の奥から一つの商品を持ってきた……あれって腕輪か？

「あっ可愛い♪」

カクレオン、これは？」

「これはフレイムバングルって物です。

中々手に入らない物なんですよ。どうです？」

明らかにアスカにそれを買わせようとしてるだろカクレオン（汗）

「フレイムバングル……これっていくらなの？」

値段聞くって事はまさか買うつもりかアスカ？

「2500ポケになります。」

2500ポケ！？

俺からしたら大金だ（汗）

「よし買ったわ♪」

買ったよこの人！？

「あと、オボンの実があればそれも欲しいんだけどある？」

「いますよ。」

一つで良いんですか？」

首を傾げながらカクレオンがアスカに聞いてきた。

「三つあれば三つ欲しいんだけど……」

「三つですね？」

それじゃあ、フレームバングルが一点にオボンの実が三点で1000ポケになります。」

10000ポケ!?

高っ!?

「はい10000ね。」

アスカが10000ポケをポンとカクレオンに渡した………すげー
(汗)

「毎度あり♪」

カクレオンが笑顔でアスカに商品を渡した。

「レオン、ちょっと持ってきてくれる?」

アスカが俺に買った商品を手渡した。

「さて、次はっと♪」

「まだ何か買うのか!?!」

10000ポケ分も買ったのに(汗)

「それはリザードンのだもの。」

あと買うのは自分の分よ♪」

笑顔で言うアスカ………どんだけお金持ってたんだよ(汗)

「……………うっ!？」

その時、突然俺は目眩めまいに襲われた！
これは……………また何か見えるのか……………

何かビジョンが見えてきた……………これはポケモン広場のカクレオンの店だな？

店の前にはアスカと俺がいる……………
ん？ 何かが物凄いスピードでカクレオンの店に向かってくるぞ？
あれはポケモンか？

「……………ふう……………」

ようやく目眩が治まった。今の見えたビジョンの感じだと、これから起こる感じだったな……

「アスカ、ちょっと話が……」

「あゝこれ良いわね♪」

アスカに今見たビジョンについて話そうと思ったんだけど、アスカは買い物に夢中（汗）

俺の声は聞こえてないみたいだ（汗）

まいったなあ……さっき見たポケモンがいつ来るか解らないのに……ってあれ？

俺はカクレオンの店から見て東側の方に何かがこっちに向かって来るのを確認した。

あれは……ビジョンで見た奴だ！

「アスカ、買い物はあとにしろ！」

俺はアスカにそう叫んだあと向かって来るポケモンに備えて戦闘体勢に入る。

「何、どうしたの？」

アスカはまだこっちに向かって来るポケモンに気づいていない。

「あれを見ろ！」

俺は向かってくるポケモンを指差してアスカに見るよう言う。

アスカは俺が指差した方を見てようやくそのポケモンに気づいた。

「何よあのポケモン？」

それは俺が知りたいよアスカ（汗）
なんて事を心の中で呟いていたら謎のポケモンがもうすぐ近くまで来ていた！

停まるつもりは無いみたいだ、真っ直ぐこっちに向かってくる！

「何だか解らないけど、とりあえず停めるわよ！エナジーボール！」

アスカがエネルギー弾を作り出して向かってくるポケモンに放った！

だけど、そのポケモンはアスカのエナジーボールを軽く回避してしまった！

そしてそのポケモンは真っ直ぐこっちに突っ込んできてアスカを突き飛ばしてしまう！

俺は何とか止めようとそのポケモンに体当たりしたんだけど、ピカチュウの力では全く歯が立たず、俺も吹き飛ばされてしまう。

「アタタタ……レ、レオン大丈夫？」

アスカはかすり傷で済んだみたいですぐに立ち上がった。

「な、なんとか……」

俺は吹き飛ばされて頭を地面にぶつけたけど、とりあえず無事だ。しかし、何だったんだよ今のは？

「あゝ！？」

突然カクレオンが大きな声で叫んだ！

「どうした？」

「み、店の商品が盗まりました〜!？」

何だって!？

「レオン！」

「解ってるさアスカ！」

カクレオン、俺達があいつを捕まえに行ってくるからこれ預かってくれ！」

俺はさっきアスカが買った商品をカクレオンに預け、アスカと一緒に泥棒ポケモンを追う為に走り出した。

第十三話 ポケモン広場（後書き）

第十三話完成です。

リザードン…どうも作者さん。

作者…あらリザードンじゃないか、どうしたの？

リザードン…ちょっと軽く雑談でもしようかなあって思っ

作者…雑談ねえ……良いけど、僕そんなに面白い事とか喋れないよ？

リザードン…なんとかありますって！

それで作者さん、最近ハマってる物ってある？

作者…ハマってる物ねえ……やっぱり小説作る事かな？

リザードン…ふん……

作者……えっと、じゃありザードンが最近ハマってる事は？

リザードン…僕はそうだな……空を飛ぶ事かな？

リザードンになったから飛べるようになったし。

作者…なるほど……

リザードン……

作者………会話続かないなあ（汗）

リザードン…ですね（汗）

第十四話 盗まれた商品を取り返せ！（前書き）

あのジェット機並みに速かったポケモン……一体何者なんだ？

第十四話 盗まれた商品を取り返せ！

「うゝ……寒っ!？」

アスカと一緒にカクレオンの店の商品を盗んだポケモンを追ってきたんだけど……気がついたらめっちゃくちゃ寒い所まで来てたんだよな（汗）

あゝ……鼻水が凍りそうだよ（汗）

「北の山脈だから寒いのは当然よ。」

こんな寒くて鼻水が凍りそうな場所なのになんでアスカは平気な顔してんだ？

「ア、アスカは平気なのかこの寒さ？」

「私は草タイプだからそんなに平気じゃないけど、もう何度もこういう場所に来たりしてるから慣れちゃったのよね。」

……慣れって怖いな（汗）

「さあ、早く泥棒を追いかけるわよ。」

リザードンやポッチャマをあまり待たせるのは悪いし。」

アスカが先に北の山脈に向かって行った。

俺もアスカを追って北の山脈へ。

北の山脈、中腹。

「なあアスカ、リザードンとはどうやって知り合ったんだ？」

「何よ急に？」

「いや、ちょっと気になってさ。」

「変なレオン。」

まあ良いけど……彼と出会ったのはとある小さな森の中よ。

あの時私はその森の中で倒れていたの。

その時、ヒトカゲが私を起こしてくれたんだ。

あっそのヒトカゲってのは今のリザードンだからね。

ヒトカゲ凄く可愛かったんだから♪」

笑顔になるアスカ。

あのリザードンがヒトカゲだった時があったのか……まあ無いと変
だけどさ……でもちょっと想像しにくいなあ（汗）

あのカッコいいリザードンが可愛いヒトカゲだったなんて（汗）

「それで、何でアスカとリザードンは今のような関係になったんだ
？」

「私達はいろんな所に救助活動をしに行ったわ。電磁波の影響でく
っ付いてしまったコイル達を助けたり、バカ騒ぎしている豚猿を3
匹大人しくさせたり……」

「豚猿？」

何だよ豚猿って（汗）

「あゝ豚猿ってマンキーの事よ。

マンキーの事を豚猿ポケモンって呼ぶから。」

なるほど解りやすい。

「私とヒトカゲはそうやって救助活動をしていく内にどんどん親密な関係になっていったんだけど……でも、一番私達の関係がより親密になったのはキュウコンを捜す旅に出た時ね。」

キュウコンを捜す旅？

「何でキュウコンを捜す事になったんだ？」

「ゲンガーのせいよ（汗）あいつが嘘の情報をポケモン広場の皆に教えたの。キュウコン伝説っていう昔話があってね、その話は昔キュウコンの尻尾を握った人間がいて、キュウコンは怒ってその人間にタタリを掛けたっていう話なの。」

ゲンガーの奴か（汗）

「そのキュウコン伝説に出てくる人間が私だってゲンガーが言ってるね……それを皆信じて私を倒そうと襲いかかってきたのよ（汗）」

「ちょ、ちょっと待て！？何でポケモン達がアスカを倒そうとするんだよ！？」

「タタリを掛けられた人間がポケモンになった事で、世界は崩壊するっていう嘘をゲンガーが皆に言ったからよ（汗）」

ゲンガーの奴……そんな事まで言ってたのか（汗）　　つか、そ

のゲンガーの話をも簡単に信じたのかよポケモン達は（汗）

「だけど、ヒトカゲだけは私を助けてくれたの。私は絶対キュウコン伝説に出てくる人間なんかじゃないって言ってね。

それで、私がキュウコン伝説に出てくる人間では無いって証明する為に私とヒトカゲはキュウコンを捜す旅に出たのよ。

その旅は過酷な旅だったわ……途中私を倒そうと救助隊が襲いかかってきたり、伝説のポケモンのファイヤーやフリーザーに遭遇していきなり襲われたり……」

うわぁ（汗） 本当に変な旅だなそりゃ（汗）

「でも最後にはキュウコンに会えて、私がキュウコン伝説に出てくる人間じゃないって証明出来たの。

その時ヒトカゲはまるで自分の事のように喜んでくれてね。

私嬉しかったなあ……」

アスカが懐かしむような表情をしてる。

「じゃあ……その旅でアスカ達はすっぱーラブラブになったんだ？」

「うんそうよ♪」

何の躊躇ためらいもなく言ったよアスカ（汗）

「ん？レオン、ちょっと待って……」

何だ？ 急に小声になってアスカが立ち止まったぞ？

「どうしたアスカ？」

「彼処見て……」

アスカが見つめている先を俺も見てみた。
そこには1匹のポケモンがいた。
見た感じドラゴンみたいなポケモンだな？

「珍しいポケモンね……夢幻^{むげん}ポケモンのラティオスだわ。」

夢幻ポケモンのラティオス？

「アスカ、あいつの事知ってるのか？」

「そういうポケモンって事を知ってるだけ。
知り合いつて訳じゃないわ……それより、あのラティオスの足下見
てレオン。」

足下？ ……あっ!?

カクレオンの店の商品がある！

「どうやらあのラティオスが犯人みたいね……行くわよレオン。」
「解った。」

俺とアスカはラティオスに近づいて行く。

「ちよつとそこのラティオス！」

っていきなりアスカが大声でラティオスに向かって叫んだ!？
んな事したら……

「くっ！やっぱり追って来たか！」

ラティオスが盗んだ商品を持って逃げ出そうとした！ やっぱり
こうなったよ（汗）

「つるのムチ！」

「ぐっ！？」

アスカがつるのムチをラティオスの身体に巻き付けて動きを封じた！

すっげー早技だ（汗）

「捕まえたわよ！」

さあ、大人しく一緒に来てもらおうわよ！」

強い口調でアスカがラティオスに言った。

「まだ捕まる訳にはいかないんだ！」

サイコキネシス！」

「きゃあ！？」

ラティオスがサイコキネシスを使ってアスカを岩壁に向けて吹き飛ばした！ 岩壁にぶつかった衝撃でアスカのつるのムチが緩んでラティオスが脱出した！

「こいつよくもアスカを！くらえ電磁波！」

俺はラティオスに向かって電磁波を放った！

こいつを受ければ身体は麻痺して自由に動けなくなるんだぜ！

「くっ!？」

良し! 電磁波がラティオスにヒットした!
これで奴は麻痺して動けなくなった!

「サイコソフト!」

「えっ……」

な、何だ……いきなり……身体が痺れて……

「僕に掛けた麻痺を君に移させてもらいました。……すみません……
……どうしてもまだ捕まる訳にはいかないんです。」

何故か申し訳なさそうにしているラティオス。そしてラティオスは盗んだ商品を持って北の山脈の奥地へと向かって行ってしまった。

「イタタタ……油断しちゃったわね」(汗)「

あっアスカが起きた。

「レオン、大丈夫?」

「あんま大丈夫じゃない(汗)」

麻痺しちゃってるから身体動かせないし(汗)」

「サイコシフト……自分に掛かった麻痺、火傷、毒などの状態異常を相手に移す技ね。」

あのラティオスサイコシフトが使えたなんて……結構やるわね。」

アスカが感心している……ってそれよりも(汗)

「俺の麻痺をなんとかしてくれないかなアスカ(汗)」

「あゝごめんごめんレオン(汗)」

ちよっと待っててね……アロマセラピー。」

うわぁ……アスカからすっげー花の良い香りがする……癒される
……

「はい、もう大丈夫よ。痺れ、取れたでしょ?」

あっそういえば身体の痺れが無くなってる。

アスカのアロマセラピー……良いなあ……

「何うっとりしてんのよレオン?」

はっ(汗) アスカのアロマセラピーが気持ち良かったからつい
うっとりしてしまった(汗)」

「あ、いや、その……アロマセラピーがあまりに気持ち良くてつい
(汗)」

右手を後頭部にあてながら俺は素直に言った。

「しっかりしなさいよ。ほら、早くラティオスを追いかけるわよ！」

そう言ってアスカが走り出した。

「あつ待てよアスカ!？」

俺も急いでアスカのあとを追いかけた。

北の山脈、最深部。

「あついたわよ！」

アスカの見つめる先にはさっきのラティオスがいた。

何か……北の山脈の向こう側にある深い谷を眺めてるな？

「また君達か……」

ラティオスがこっちに気づいた。

「今度はさっきのようにはいかないわよ！

さあ、大人しく捕まりなさい！」

アスカが強い口調でラティオスに言った。

「さっきも言った筈です、僕はまだ捕まる訳にはいかない！」

ラティオスも強い口調で言い返す。

そして戦闘体勢に！

「レオン！」

「解ってる！」

俺とアスカも戦闘体勢に入る！

あいつはサイコシフトで状態異常を移してくるから電撃はマズい……なら、物理攻撃でやるしかないな。

「シャドーボール！」

ラティオスがシャドーボールを2つ作って俺達に向かって放ってきた！

「守る！」

「電光石火！」

アスカは守るを使ってシャドーボールを防御した。俺は電光石火で素早く動いてシャドーボールを回避。

そしてそのままラティオスに向かって突っ込んで体当たりを決めてやった！

「くっ素早い！」

電光石火を決めたけど、あまりダメージは無いなこりや（汗）

「うっ!？」

なっ……こんな時に……目眩めまいが……

『兄さん早くおいでよー!』

『ちよつと待ってくれよ（汗）』

これは……ラティオス……だよな？

こっちのポケモンは……ラティオスに似てるけど一回り小さいな
……それに赤いし……

ってかここ空の上じゃん（汗）

『あっ危ない!？』

『えっ?』

突然上空の方から隕石みたいな石が降ってきて、ラティオスと一緒に
にいたもう1匹のポケモンに直撃してしまった!

そのポケモンは翼を痛めてしまい、地上へと落ちていってしまっ

た！

「ハア……ハア……」

ようやく目眩が治まった……そうか……このラティオスはあのポケモンを助ける為に……

「……あの谷に助けたいポケモンがいるんだな？」
「何故……それを？」

ラティオスは驚いた表情をしている。

「レオン、何か見えたのね？」

アスカが俺の顔を覗き込むようにして聞いてきた。俺はアスカに今見えたビジョンを教えた。

「……なるほどね。」

ラティオスが捕まる訳にはいけない理由は解ったわ……だけど、いくら助けたいポケモンがいるからって泥棒をして良いという訳じゃないのよ?」

正論だなアスカ。

「……それは僕も解っています……だけど僕は何が何でも妹を……ラティオスを助けたいんだ!」

強い口調で言うラティオス。 あの谷に落ちたポケモンはラティオスって言うのか……

「助けるってどうやってよ? あの谷は別名奈落の谷、入ったら二度と出てこれないって言われる場所なのよ。」

えっ!? そうなのか!?

「……たとえ出られなくても、妹を1人には出来ません……妹1人より……僕と一緒に妹は寂しい思いをしませんし……」

「バカね、妹がそれを望んでると思うの!」

また強い口調でアスカが言った。

ラティオスは俯いて黙り込んでしまった。

「……とにかく、一度私達と一緒に来なさい。」

あなたの妹を助けるのに色々と準備しないといけないから。」

アスカのその言葉を聞いて、俯いていたラティオスが顔を上げた。

「助けて……くれるんですか？」

「私は救助隊なのよ？」

目の前で困っているポケモンがいるのに放っておける筈がないでしよ。」

アスカが優しく微笑みながらラティオスに言った。

「あ、ありがとうございます！」

ラティオスは深々と頭を下げてそう言った。

「お礼なら、妹さんを助けたあとにして。

さあ、一度ポケモン広場に戻るわよ！」

俺とアスカはラティオスを助ける準備をする為にラティオスと一緒に一度、ポケモン広場に戻る事にした。

第十四話 盗まれた商品を取り返せ！（後書き）

第十四話完成です。

レオン

作者！アスカにアロマセラピーを使ってくれて頼んでくれ！

作者

よっぽどアロマセラピーが気に入ったんだね（汗）

レオン

めっちゃくちゃ癒されたからさ！

リザードン

ちよっと待った！

アスカのアロマセラピーで癒されるのは僕だ！

作者

リザードンが乱入してきたよ（汗）

レオン

いや、アスカのアロマセラピーで癒されるのは俺だ！

リザードン

いや、僕だよ！

アスカ

リザードンにレオン！

ちよっと買い物して来てくれない？

そしたらアロマセラピーしてあげても 良いわよ♪

レオン& m p;リザードン
行ってまいります♪

作者

ダメだあの2人(汗)

第十五話 レオンとアスカがバトル!? (前書き)

奈落の谷……名前からして怖そうな場所だな (汗)

第十五話 レオンとアスカがバトル!?

北の山脈でカクレオンの店から商品を盗んだ犯人、ラティオスを見つけた俺とアスカ。

早速捕まえようとしたんだけど、どうやらこのラティオスは訳ありのようで……奈落の谷という場所に妹のラティアスが落ちてしまっただけらしい。

それで助け出す為に、店から商品を盗んだと言っただけ……でも泥棒は良くないよなあ。

とにかく、ラティオスの妹を助けるとアスカが約束した。

それで、まずはポケモン広場に戻って準備しようという事で戻って来たんだけど……その前にカクレオンにちゃんと謝らないとな。

ポケモン広場、カクレオンの店の前。

「本当に……すみませんでした!!」

ラティオスが両手を地面につけて、土下座して謝っている。
ちなみに周りにはポケモン広場に来ていたポケモン達が集まって

いた。……こういうの野次馬やじうまって言うんだよね？

「ほら、ラティオスも凄く反省してるんだから……許してあげたら？」

アスカがカクレオンにそう言った。

すると、周りにいたポケモン達がカクレオンをじーっと見つめ始めた。

皆カクレオンがどうするのかに注目してるみたいだ(汗)

「しょ、しょうがないですね(汗)
解りましたよ……」

カクレオンはラティオスを許してあげた。

だけど、若干声のトーンが低いような気がしたんだけど……まあ
気のせいかな？

「はいこれで問題が一つ解決ね！　あとはどうやってラティオスの
妹さんの助け出すかね……」

つるのムチを一本、顎あごに当てながらアスカが何か良い方法は無い
か考え始めた。

でも、奈落の谷ってのは一度入れば二度と出られないんだろ？
そんな所から一体どうやって助け出すんだ？

「どうした？　何かあったのか？」

ん？　野次馬の向こうから誰かの声が聞こえてきたぞ？

「今の声は！」

急にアスカが今声が聞こえてきた方向へ歩き出した。
俺もアスカと一緒に声が聞こえてきた方へ向かう。

向かった先には両手にスプーンを持ってヒゲを生やしたポケモンがいた。

「やっぱりフリーデインだったわね。
久しぶりフリーデイン♪」

アスカが笑顔でそう言った。
フリーデインって言うのかこのポケモンは……

「アスカだったか。
遠い別の島に向かったと聞いていたが、帰ってきていたんだな？」

腕組みしながらフリーデインが言った。

「今朝戻ったのよ。

あっそうだ！　ねえフリーデイン、ちょっと知恵を借^かしてくれない？」

そう言ってアスカはフリーデインに今までの事を説明した。

「……奈落の谷か……また厄介な場所に落ちたものだな。」

「妹さんの所まで行くのは問題ないんだけど……帰りがねえ（汗）」

困った表情をするアスカ。

「アスカ、まだテレポートの結晶は持っているか？」

テレポートの結晶？

何ですかそれ？

「私の家にあるけど……でもあれ、七年前の星の衝突を防いだ時に起きた爆発の影響で割れちゃったのよ。」

フリーディンにそう説明するアスカ。

だから、テレポートの結晶って何なのさ？

「割れてもその力はまだ残っている筈だ。

さすがに天空まで飛ぶのは無理だろうが、奈落の谷から脱出する事位なら出来る筈だ。」

「なあ、テレポートの結晶って何なんだ？」

俺はアスカとフリーディンに聞いてみた。

「そういえばレオンは知らなかったわね。

テレポートの結晶っていうのは、七年前にフリーディンとネイティオ達がエスパーの力を集めて作り上げた物でね、まあ簡単に言えば穴抜けの玉の強化版って感じかな？」

アスカが説明してくれた。

「なるほど、解りやすい。」

頷きながら俺はそう言った。

「……ところでそなたは一体誰なんだ？」

あっそういえばフリーディンに自己紹介してなかったな（汗）

「俺はレオンって言うんだ。」

あっちの方でアスカと知り合ってね。

こっちには探検隊として依頼を受けたから来たんだ。」

「アスカの知り合いか。ワシはフリーディン。
よろしくな。」

笑顔でフリーディンが挨拶してきた。

「さて、家に戻ってリザードンを起こしてすぐに出発しますか。」

アスカが家に向かって歩き出した。

俺もアスカと一緒に家に戻ろうとした……

「あっそうだ。」

急にアスカが立ち止まって俺の方に振り向いた。どうしたんだ？

「レオン、あなたはポツチャマとラティオスと一緒に留守番してて
くない？」

……はい？

「何でだよ！ 俺も一緒に行くって！」

「はつきり言っておくけど、今のあなたやポツチャマのレベルじゃあ奈落の谷は危険すぎるわ。」

「ここは私トリザードンに任せておきなさい。」

「……確かに今の俺やポツチャマはまだまだレベルが低い……だけ
ど！」

「俺だって何かの役に立てる筈だ！」

それに、目の前で困ってる奴がいるのに何もしないなんて……」

「……だったら、私とバトルして勝てたら一緒に来て良いわよ。」

えっ……アスカと俺が……バトル！？

「さすがにまともにやったんじゃ実力の差があるから、私に一発でも攻撃を当てられたらレオンの勝ちで良いわよ。」

一発でもって……ちよつとそれは舐めすぎじゃないか？

「……解った。一発でも当てれば良いんだな。」

ちよつと怒り口調で言ってから俺は戦闘体勢に入る。

「皆、ちよつと離れてた方が良いわよ。」

アスカが周りにいるポケモン達にそう言うと、皆俺達から少し離れた。

「さあ、何処からでも来なさい！」

アスカも戦闘体勢に入る。

「行くぞアスカ！」

俺とアスカのバトルが始まった！

第十五話 レオンとアスカがバトル！？（後書き）

第十五話完成です。

作者

アスカのアロマセラピーは良いねえ♪

アスカ

そう言ってもらえると嬉しいわね♪

レオン&リザードン

アスカく頼まれていた物を買って……ってあああ！？

作者

あっお帰り。

レオン

お帰りじゃねえよ！

リザードン

そうだよ！ 何で作者さんがアスカにアロマセラピーをやってもらってるんですか！

作者

いや、ちょっと体調が悪くて今まで寝込んでいたからアスカのアロマセラピーで治してもらおうと……

アスカ

文句言わないのあんた達！ ちゃんとあんた達にもやってあげる

わよ。

レオン&p;リザードン
よろしくお願いしまゝす♪

作者

切り替え早いなお前達（汗）

第十六話 力の差

「電光石火！」

俺は電光石火でアスカに突っ込んだ！

「守る！」

だけど、アスカはバリアのような物を目の前に作り出し、俺の攻撃を防いだ。

「葉っぱカッター！」

「うわっ!？」

アスカの反撃で葉っぱカッターを受けてしまった俺は吹き飛ばされた。

「くっ電気ショック！」

吹き飛ばされながらも俺は頬ほおの電気袋から電気を放出してアスカに向けて飛ばした！

「守る！」

くっまたアスカの守るで俺の攻撃が阻まれた！

「タネマシンガン！」

アスカが口からエネルギー弾を俺に向けて連射してきた！

俺はまだ空中にいたから避ける事が出来ずにタネマシンガンを受けてしまった。

「つるのムチ！」

さらにアスカはつるのムチで俺を叩きつけた！
俺は地面に思いっきり身体をぶつける。

「いって～……」

「……………」

アスカは無言のまま俺を見ている。
なんだよ……俺とアスカにはこれほどの実力差があるとでも言いたそうなのその表情は……

「くそ、電光石火！！」

俺は立ち上がり、もう一度電光石火で突っ込んだ！

「守る！」

また守るかよ！？

再び俺の攻撃は守るで防がれてしまった！

「攻撃が単調過ぎるわ、エナジーボール！」

さっきのタネマシンガンよりも大きなエネルギー弾をアスカが放ってきた！ 俺は間髪その攻撃を避ける事が出来た。
今度はこっちの……

「つるのムチ！」

「ぐっ!？」

アスカのつるのムチが俺の腹に一発たたき込まれた!

……重い……一撃だ……俺は両手で腹を押さえながら地面に蹲うずくまった。

「……もう解ったでしょ? 私に一発も攻撃が当てられないうえに

私にやられっぱなしなのよ。

今のレオンと一緒に来ても足手まといなの。」

足手……まとい……

「くっ……誰が……足手まといだよ……まだ俺はやれるぞ!」

痛みを堪えて俺は立ち上がった。

「……もう勝負はついてるわ。

あなたのお腹を見てみなさい。」

俺の……腹?

アスカに言われ、自分の腹を見てみる。

「な、何だよこれ……」

いつの間にか俺の腹に何か植物の種たねみたいな物が付いていた。

「種爆弾。」

アスカがそう言った次の瞬間、俺の腹に付いていた種が爆発した!

「かはっ……」

この一撃を耐える事が出来ずに俺はその場に倒れ込み、意識を失った……

「……レオン……」

……誰かの声が……この声……ポツチャマ？

「ううっ……」

俺はゆっくりと目を開ける。

「あっ目が覚めた！
良かったー！」

目を開けるとまず最初に見えた光景はポツチャマがほっとした表情をしているところだった。

そして辺りを見てみる……どうやらここはアスカの家の中のようなのだ。

「ポツチャマ……痛っ!？」

上体を起こそうとしたら腹に激痛が走った!

そういえば……アスカにつるのムチを一発もらったうえに種爆弾ももらったんだっとな……

「あゝ無理しちゃいけないよレオン!

さあ、これ食べて回復して。」

ポツチャマが俺に何かの実を手渡した。

「こ、これ何だ?」

「オボンの実だよ。」

それを食べれば体力を回復出来るんだよ。

アスカがレオンに食べさせてって言って渡してくれたんだ。」

アスカが? あれ、そういえばアスカとリザードンがいない……

「アスカとリザードンなら奈落の谷に向かったぞ。」

「えっ?」

ポツチャマとは違う声が聞こえてきた。

声が聞こえてきた方を見ると、そこにはフリーディンがいた。

「アスカの事を悪く思うなよ?」

アスカなりにお前の事を思ってた事なのだからな。」

壁に寄りかかり、腕組みしながらフリーデインがそう言った。

「フリーデイン……」

「……にしても、アスカも少しは手加減すれば良いものを……本気でバトルするとはな（汗）」

まあ、アスカらしいと言えばアスカらしいが……」

少々呆れたように言うフリーデイン。

俺はとりあえず手に持っていたオボンの実を食べる。

「……何となく解ってたんだよな……アスカが俺やポツチャマと一緒に来させたくない理由……俺達、確かにまだそこまで強いって訳じゃない。」

前にアスカと一緒にラティオスを追っていた途中でも、ポケモンに襲われたりしてさ……俺はアスカに助けってもらってばかりだった……」

本心でアスカが言っていたんじゃないにしても……足手まといってのは正解だな……

「……レオン、それにポツチャマ……お前達、強くなりたいか？」

壁に寄りかかっていたフリーデインが俺達に近づいてきて、そう言った。

「……俺は強くなりたい……アスカ達の足を引っ張らないくらい……」

素直に俺はそう言った。

「僕も強くなりたいな。

強くなれば探検隊としての活動もやりやすくなるだろうし。」

ポツチャマも強くなりたいらしい。

「解った、それなら良い所がある。

ワシについてきなさい。

レオンはもう動けるだろ？」

「^{ああ}嗚呼。」

オボンの実の効果が早速出たみたいだ。

もう身体に痛みは無い。俺とポツチャマはフーデインと一緒に外へ。

ポケモン広場から南側にある建物の前。
何だろこの建物？

雰囲気的には道場って感じだけど……

「ここはハリテヤマ訓練所だ。」

ここは強くなる為の訓練が出来る場所なんだ。」

ハリテヤマ訓練所……そんなものがあんのか……

「おっフリーディンさんじゃないですか！」

ん、訓練所から一匹のお相撲さんみたいに大きいポケモンが出て来たぞ？

「久しぶりだなハリテヤマ。」

フリーディンが親しげな感じでそう言った。

このポケモンはハリテヤマって言うのか……

「ハリテヤマ、ちょっと頼みたい事があるんだが良いか？」

「フリーディンさんの頼みでしたら喜んで受けますよ！」

笑顔でハリテヤマはそう言っている。

「この二人を鍛えてやってくれないか？」

アスカの友達のレオンとポツチャマだ。」

フリーディンが俺達の事を紹介してくれた。

「よろしくお願いします！」

ポツチャマは元気良くハリテヤマに挨拶した。

俺は軽く挨拶して済ませた。

「アスカの友達なんだな？　俺はハリテヤマだ！
よろしくな！」

このハリテヤマも元氣良く俺達に挨拶してくれた。

「このハリテヤマの言う事をちゃんと聞くんだぞ二人共。
それじゃ、ワシは仕事に戻る。
ハリテヤマ、あとは頼んだぞ。」

フリーディンは何処かへ行ってしまった。

「よし、じゃあ早速訓練を始めるか二人共！」

随分とやる気だなこのハリテヤマ（汗）

「なあハリテヤマ、ここではどんな訓練をするんだ？」

さっきから気になっていた事を俺は聞いてみた。

「なあにそんな難しい事はやらないさ。

この道場の地下には様々な場所を想定したダンジョンがあつてな。
その中にはボランティアで協力してくれているポケモン達がいる、
彼らは君達に襲いかかる。

君達は襲いかかって来る彼らを倒しながらダンジョンを進んでいく
のさ。

ダンジョンの最深部には救助隊チームが待ち受けていて、彼らを倒
す事が出来ればそれで訓練終了。」

長々と説明してくれたハリテヤマ。

何か聞いていると普通のダンジョンと変わらないな？

「そのダンジョンっていくつあるんですか？」

今度はポツチャマがハリテヤマに質問した。

「ポケモンのタイプの数と同じだけある。」

ポケモンのタイプの数と同じ？

って事は……十七！？

結構あるなあ（汗）

「全部を制覇出来たら君達も結構強くなっているだろう。
さて、まず最初は水の間から挑戦しようか。」

水の間って事は水タイプのポケモンが中心って事か……

「解った、行くぞポツチャマ！」

「うん！」

俺達はハリテヤマ訓練所の中に入っていった。

第十六話 力の差（後書き）

アスカ

ちよつと作者さん、随分と更新が遅れたわね？

レオン

どういふこった作者？

作者

ごめん、体調不良でした（汗）

アスカ

ちゃんと体調管理はしなきゃダメよ？

作者

以後気をつけます（汗）

第十七話 アスカの気持ち（前書き）

……やっぱりやりすぎたかしら？

第十七話 アスカの気持ち

「種爆弾。」

私がレオンにつるのムチで攻撃した時に付けた種爆弾が、爆発した。

この一撃でレオンはその場に倒れた。

「……アスカ、少しやりすぎではないか？」

今まで静観していたフリーディンが私の側まで来て、腕組みしながらそう言った。

「……こうでもしないと……この子、絶対私達と一緒に行くところのもの……まだレベルが低いレオンやポツチャマと一緒に来てもやられるだけ。」

私やリザードンがレオン達を守りきれるとは限らないし……」

私の素直な気持ちをフリーディンに伝えた。

でも……確かにやりすぎたわね……

「ごめんね、レオン……」

私はそう言いながら気を失っているレオンにつるのムチを巻き付けて、私の背中に乗せた。

「フリーディン、ちょっと私の頼みを聞いてくれない？」

「頼み？ 何だ頼みとは？」

首を傾げながらフリーディンが言った。

「とりあえず、私と一緒に家に来て。
頼みたい事は、歩きながら話すから。」

「……解った。」

頷いて答えてくれたフリーディン。

この後私はレオンを背負ったまま、フリーディンと一緒に私の家に向かった。

私の家の前。

「……レオン達のレベルアップを手助けしてやってほしいだって？」

ここまで来るまでに、私はフリーディンに頼みたい事を伝えた。

「うん。多分レオンの事だから、強くなろうと思うの。
だから、フリーディンはレオン達の手助けをしてほしいの。
方法はあなたに任せるわ。」

「うむ、良いだろう。
アスカの頼みだしな。」

フリーデインは私の頼みを聞いてくれた。

「ありがとうフリーデイン。」

私が一言お礼を言った後、私とフリーデインは家の中へ。

「すゝ……すゝ……」

家の中ではリザードンとポツチャマが幸せそうな顔をして寝ている。

……こいつら……まだ寝てるんかい（汗）

「ちょっとリザードン、起きてよ。」

私はつるのムチでリザードンの身体を揺すった。

「……ほえ？」

リザードンが起きてくれた。

でもまだ寝ぼけた感じね……それにずいぶんと間の抜けた返事（汗）

「ほらシャキツとしてよシャキツと！」

これから仕事よ！」

「……はーい……」

眠そうに目を擦りながらリザードンは立ち上がった。

「……うーん……あれ、寝ちゃってたんだ僕……」

あら、ポツチャマが目を覚ましたみたい。

「起きたポツチャマ？」

悪いんだけど、これから私とリザードンは仕事しに行くからレオンと一緒に待っていてくれない？」

そう言いながら私は背負っていたレオンをつるのムチで持ち上げて、私の草のベッドに寝かせてあげた。

「レオン！？ えっ何で傷だらけなの！？」

慌てだしたポツチャマ。まあ、当然よね（汗）

「さっきちょっと私とバトルをね（汗）

レオンが起きたらこれを食べさせてあげて。」

私はポツチャマにオボンの実を手渡した。

「それと……確か彼処に仕舞っておいた筈……」

私は家の中にある道具を入れる為の宝箱の中からテレポートの結晶を探す。

「あっ！ あったあった！」

テレポートの結晶を発見つと……

「それじゃあフリーディン、あとはお願いね。」

「ああ嗚呼、任せておけ。」

頷きながらフリーディンはそう言った。

「行くわよりザードン。」

「了解……ふあ……」

大きな欠伸あくびをするリザードン。

あれだけ寝たのにまだ眠いの（汗）

リザードンと一緒に私は家の外へ。

「……それで、何処に行くのaska？」

首を傾げながらリザードンが聞いてきた。

そういえばまだ説明してなかったわね（汗）

「これからラティオスの妹さん、ラティアスを助ける奈落の谷に向かうわよ。」

「……ええええええ!?!」

すっごく驚いた表情をするリザードン（汗）

「ちよっ!?! 奈落の谷ってあの奈落の谷!?!」

「そうよ。大丈夫、ラティアスを見つけた後はこのテレポートの結晶の力を使って奈落の谷を脱出出来るから。」

私はテレポートの結晶をリザードンに見せながら言った。

「あっそうなの？」

「じゃあ頑張りますか!」

切り替え早いわね（汗）

「それじゃあ出発しましょ。」

「うん!」

私とリザードンは奈落の谷目指して出発した。

第十七話 アスカの気持ち（後書き）

アスカ

作者さん、更新遅いわよ！ それに、今回の話短すぎよ！

ごめんねアスカ（汗）

最近何かと忙しくてさ（汗）次は長くやるから今回は許して（汗）

アスカ

まったく……しょうがない作者さんね（汗）

レオン

ちよつと待て〜！

俺主人公なのに今回名前しか出て来なかったんすけど！？

あゝしばらくアスカが中心だから君は休憩って事で。

レオン

マジかよ（汗）しゃあない、んじゃヒトカゲの旅の小説でも読ん
でくるか。

あつレオンの最近のお気に入りの小説だね。

第十八話 奈落の谷！ ラティアスを助け出せ！（前書き）

ラティアス、無事でいてほしいわ……

第十八話 奈落の谷！ ラティアスを助け出せ！

奈落の谷入り口付近。

ラティオスの妹さんのラティアスを助ける為に、ここまで来た私とリザードン。

「うわぁ……凄く嫌な雰囲気なんですけど（汗）」

リザードンがこの奈落の谷の雰囲気に吞^のまれてるわね（汗）

「ほらしっかりしなさいよりリザードン！
あなた男でしょう？」

「男でも怖いものは怖いんだもん（汗）」

あゝもう（汗）

バトルの時は凄く頼もしいのに（汗）

仕方ない……リザードンのやる気を起こさせるあの方法を使うしかないわね。

「リザードン。」

「な、何？」

私はリザードンにすぐに近寄り、リザードンの頬^{ほお}にキスをした。

「ア、アスカ……」

あ、リザードンの顔が赤くなったわ。

「今回の救助を成功させたら、次は口にやってあげるわよ。
アロマセラピーのオマケ付きで。」

「……良し、頑張るぞ僕!!」

やる気が出たみたいで、尻尾の炎がいつもより激しく燃え上がり
始めたリザードン。

良し、これでもう大丈夫だわ。

「それじゃあまず奈落の谷に入る前に最後の準備を……」

「待っててよラティアス! 今助けに行くからね!」

ってリザードンがもう奈落の谷に入ろうとしている!?

「ちょっと待ちなさいよりリザードン!
つるのムチ!」

私はつるのムチをリザードンの首に巻き付けた。そしてこっちに
連れ戻す為に引っ張る。

「ア、アスカ……苦しいよ…… (汗)」

「全く、気合いが入ったのは良いけど、逆に気合い入りすぎよ!
ダンジョンに突入する前に荷物のチェックをするのは救助隊の基本
中の基本じゃないの!」

リザードンを叱る私。

自然とつるのムチに力が入る。

「解った……から……アス……カ…… (汗)
放し……て…… (汗)」

あつりザードンの顔が青ざめてきた（汗）
慌てて私はつるのムチを放した。

そしてリザードンはたつぷりと深呼吸を始めた。結構苦しかったみたいね（汗）

「はあ……はあ……死ぬかと思った（汗）」

「ご、ごめんリザードン（汗）」

さすがに今のはやりすぎたわね（汗）

それから数分後。

リザードンが大分落ち着いてきたから早速奈落の谷に入る為の最後のチェックを始めた私達。

「アスカ、なんか今回リングとかの食料が結構多いみたいだけど？」

首を傾げながらリザードンが言った。

「奈落の谷の何処にラティアスがいるか解らないでしょ？」

それに、奈落の谷は結構深いから……もしかしたら今日中にラティアスを見つける事が出来ないかもしれない。

だから、食料を今回多めに持ってきたのよ。」

「でもこれは多すぎじゃない？ 何日分あるのこれ？」

「一週間分。」

「一週間!？」

驚くりザードン。

でも、ちょっとオーバーね（汗）

「いくらなんでも一週間分は多すぎだよアスカ（汗）」

「ちょっとくらい多くても良いの。」

あとは状態異常を治してくれる癒やしの種と体力を回復してくれるオボンの実が数個……それと脱出の時に使うテレポートの結晶……
よし、準備オッケー!

じゃあ行きますか!」

取り出したリングや癒やしの種、そしてテレポートの結晶をバッグの中にしまい、奈落の谷に向かった私。

「あっちよつと待ってよアスカ!？」

慌てた感じでリザードンもついてきた。

奈落の谷に入って約一時間が経過。

奈落の谷っていうだけあって……凄く寂しい感じっていうか……不気味っていうか……とにかく、嫌な気持ちにさせる場所ね。

「わあああああ!?!」

「な、何!?!」

いきなりリザードンが叫び声をあげたから驚いた私。すぐに振り向く。

「どうしたのよりザードン?」

「あわわわ……ほ、ほほほ……骨、骨があ……(汗)」

腰を抜かして倒れているリザードンが怯えた様子で何かを指差している。私はリザードンが指差した方を見える。

「……ってあれただの太い骨じゃないのよ(汗)」

そこにあっただのは確かに骨だった。

ただ、骨は骨でも太い骨だけだね(汗)

太い骨っていうのはカラカラやガラガラが持っているあの骨よ。

「な、なんだそうか(汗)」

はあ……びっくりした(汗)」

ほんと胸を撫なで下ろしているリザードン。

「はあ……身体は立派なりザードンなのに、心はあの時のヒトカゲ

のままねあなたは（汗）」

昔っから怖がりなのよね彼（汗）」

「だってポケモンの骨だと思ったんだもん（汗）」

「しっかりしなさいよ。」

ほら、先に進むわよりザードン。」

私は先に進もうとした。

「アスカくちよつと良いかな」（汗）」

リザードンが私を呼び止めた。

「何よ？」

「立たせてくれないかな？　腰が抜けちゃって立てないんだ（汗）」

苦笑いしながら私に言うリザードン……はあ……（汗）」

それから数時間が経過。多分もう時間は夜になってるんだと思う。
奈落の谷の中は太陽の光も月の光も入ってこないから今何時なのか
が解らないのよね（汗）」

「さすがに疲れたわね。」

今日はここで野宿しましょ。」

「えゝこんな不気味な所で寝るのゝ（汗）」

凄く嫌そうな表情をするリザードン。

「仕方ないじゃない。

こんな所に家なんてあるわけ無いんだから。」

「うゝ……そりゃそうだけどさあ……（汗）」

「あゝもう文句言わない！ もう寝なさい！」

私はそう言って横になる。

「そんな事言われても……寝れないよゝ（汗）」

あゝ煩いわねえ（汗）仕方ない、あれをやるしかないわね。

「草笛。」

私は葉っぱカッターで飛ばす葉っぱを使って草笛を吹いた。

「あゝ……良い音色……くゝ……くゝ……」

良し、寝たわね。

草笛の音色を聞いたら、特性の不眠や技の神秘の守りでも使わない限り眠っちゃうのよね。

さて、私もそろそろ寝ようかなあ。

翌日。

「ふぁ〜……良く寝たわ……」

目覚めた私。

多分朝なんだと思うんだけど……なにぶん太陽の光が入ってこ
いから暗いのよねここ（汗）

「く〜……く〜……」

……あんだだけ寝れない寝れないって文句言ってたのに、幸せそう
な顔して眠ってるわねリザードン（汗）

って、私が草笛で眠らせたんだっけ？

「ちょっと、起きなさいよりザードン。」

私はつるのムチを使ってリザードンの身体を揺す^ゆった。

「……う〜ん……あと五分だけ〜……」

……起きろっての！

「つるのムチ！」

私はつるのムチでリザードンを……

「……くく……ハハハハ……アハハハ……や、止めてー！？」

笑い出したりザードン。さすがに殴る訳にはいかないから、つるのムチでリザードンの身体をくすぐったの。

「起きる？」

「お、起きる！ 起きるから……くすぐるのは止めてー！」

「よろしい。」

私はリザードンをくすぐるのを止めた。

「はぁ……はぁ……もう、くすぐるなんてひどいよアスカ（汗）」

笑いすぎて目から涙を流してるリザードン。

「だって起きないんだもん。そんな事より、はい朝ご飯。」

私はリンゴを一つ、リザードンに手渡した。

「あ、ありがと……」

リザードンはリンゴを食べ始めた。

私はもう一個あるリンゴを取り出して、リザードンと一緒に食べる。

「これ食べたら、ラティアスの搜索を再開するわよ。」

「えゝこれ一個じゃ足りないよゝ（汗）」

まゝたこの子は文句を言う（汗）

「……くすぐるわよ？」

つるのムチを見せながら私は言った。

「……食べたら行きます（汗）」

「解ればよろしい。」

それから数分後。

朝食を済ませた私達はラティアスの搜索を再開した。

……のは良いんだけど（汗）

「アスカ、そっち行ったよ！」

「解ってる！ エナジーボール！」

今現在私達は、突然襲いかかってきたプテラ、オオスバメ、ストライクと抗戦中。

この奈落の谷に迷い込んで出られなくなってしまったポケモン達ね……皆、正気を失っている。

「アスカ後ろ！？？」

「えっ？」

リザードンに言われ後ろを振り向くと、ストライクがその鋭い鎌^{かま}で私に斬りかかろうとしていた！

「伏せてアスカ！

火炎放射！！」

私がある場に伏せるとリザードンがストライクに向かって火炎放射を放った！ 私の頭上をリザードンの火炎放射が通っていき、ストライクに火炎放射が直撃した！

火炎放射を受けたストライクは吹き飛ばされて岩に身体をぶつけた。

「よし！」

さすがだわりザードン……あっ！？

「グルアアアアア！！」

プテラとオオスバメがリザードンを攻撃しようとしてる！

「させないわよ！

エナジーボール！」

私はエナジーボールを二つ作り出し、プテラとオオスバメに放った！

エナジーボールはプテラとオオスバメに直撃した！ だけど、まだあの二匹は倒れない！

「火炎放射！」

そこにリザードンが二匹に火炎放射をぶつけて吹き飛ばした！
二匹は身体を岩にぶつけ、目を回して倒れた。

「ふう……なんとか倒したね。」

「ええ……やっぱりレオン達を連れて来なくて正解だったわ。」

いくら正気を失っているとはいえ、結構強かったわ……レオンがいくら相性の良い電気タイプでも、レベルの差があるからおそらく倒されてしまっているでしょうね……

それから再びラティアスの搜索を再開してから数時間が経過。

かなり奥までやってきたわね……もうさっきみたいなポケモンの
気配が感じられない。

おまけに辺りは完全に真っ暗闇。

リザードンの尻尾の炎の光が無ければまともに歩けないくらいに。

「アスカ、ちゃんとして来てる？」

「いるわよ。」

いつの間にかリザードンが私をリードしてるわね（汗）
いつもこうだったら良いんだけど……

「うわっ!？」

あっ……リザードンが躓^{つまず}いて転^こけた（汗）

「ちょっと大丈夫？」

「イタタタタ……へ、平気平気（汗）」

はぁ……やっぱりリザードンはリザードンだったわね（汗）

でも、一体何に躓いたのかしら？

私は前足でリザードンが転んだ辺りを探る。

「……あら？ 何かしらこの感触？」

私の前足に何か当たった。……岩……じゃないわね？ 硬くない
し……何かしら？

「リザードン、ちょっと尻尾借りるわよ。」

私はつるのムチでリザードンの尻尾を掴み、尻尾の炎でその何かを照らしてみた。

「えっ！？　ラ、ラティアス！？」

その何かはなんとラティアスだった！

リザードンが躓いた原因はラティアスだったのね……ってそんな事考えてる場合じゃないわ！

「しっかりしてラティアス！」

私はラティアスに呼びかける。

「……うう……」

良かった、まだ息があるわ！　だけど、かなり弱ってるわね……

「リザードン、バッグの中からオボンの実を取って！」

「う、うん！」

リザードンはバッグの中からオボンの実を一個取り出して、私に手渡してくれた。

「待っててねラティアス……まずは葉っぱカッターでオボンの実を食べやすいように……」

私は葉っぱカッターでオボンの実を弱ったラティアスでも食べやすいように一口サイズに切った。

「これで良し。さあ、これ食べて体力の回復よ。」

一口サイズに切ったオボンの実をつるのムチで掴み、ラティアスの口の中に入れてあげた。

ラティアスは弱々しくも、しっかりとオボンの実を食べてくれた。

「……あ、ありがとうございます……少し元気になりました……」

少し回復したみたいね。笑顔でラティアスは言ってくれた。

「良かったわ……私はアスカ、こっちはリザードン。私達は救助隊よ。」

あなたのお兄さんに頼まれて、あなたを助けにきたの。」

「兄さんが……？」

首を傾げながら言うラティアス。

「凄く心配してたわよあなたのお兄さん。」

早く帰って、安心させてあげなくちゃ。

動ける？」

「え、ええ……なんとか……」

ゆっくりと上体を起こすラティアス。

「私に掴まってね。」

リザードン、あれよろしく。」

「解った。」

ラティアスに私の身体を掴ませてから、リザードンはバッグから

テレポートの結晶を取り出した。

「……っで、どうやって使うんだっけ（汗）」

使い方忘れたんかい（汗）

「もう……私がやるからそれ貸して。」

私はリザードンからテレポートの結晶を受け取る。

「じゃあ、いくわよ。」

お願い……私の家まで皆を連れて行って……
私はそう念じた。

すると、テレポートの結晶が光り輝き始めた。
その光は徐々に強くなって……最後にはその光は大きくなり私達を包み込んだ。

第十八話 奈落の谷！ ラティアスを助け出せ！（後書き）

アスカ

「更新が遅いじゃないの作者さん！」

……はぁ……ごめん……

アスカ

「あ、あれ？ ちょっと作者さん、ずいぶん元気ないわね？
どうしたの？」

うん……この前バクフーン達の冒険に一つの評価が来たんだけど……
…つまんないって書かれててさ……しかも文章評価と作品評価が★
一つだったんだ……

アスカ

「もしかして……評価荒らし？」

いつかはこういうのが来るとは思ってたけどさ……実際に来ると相
当へこむよ（汗） しかもさ、つまんないって理由がチコリータが
出てないからだぜ？

アスカ

「あらゝ（汗）」

まださ、ストーリーにひねりが無いとか、描写が足りないってのな
ら納得いくけど、チコリータが出てないからって理由だけであの評
価は無いよなゝ（汗）

しかも、名前が明らかに適当なボタンを連打しました的な名前だっ

たし……

アスカ

「うわ……悪意を感じるわね（汗）」

まあでも、こういうのをいちいち気にしてたら駄目だよな！
って事で、吹っ切れた僕です♪

アスカ

「あっそうなの（汗）」

仕事があっという間忙しいけど、これからはいつも通りのペース
でやっていくよ。

アスカ

「頑張ってよ作者さん。」

おう♪

レオン

「ところで俺達の出番まだ？」

あっ……（汗）

第十九話 リベンジ！ アスカVSレオン！（前書き）

ラティアスが無事で良かったわ。

第十九話 リベンジ！ アスカVSレオン！

私の家。

テレポートの結晶を使って奈落の谷を脱出。

ちゃんと私の家の前にテレポートする事が出来た。

私の家の前にはラティオスが待っていてくれた。

その時にラティオスから聞いたんだけど……私達が奈落の谷からこっちに帰ってくるまでに一週間が経っていたみたいなの。

それを聞いた時はさすがに驚いたわ（汗）

私達は二日か三日くらいだと思ってたから……あの谷にいと、時間の感覚が狂うみたいね……

まあとにかく、無事にラティアスを助け出す事が出来た私とリザードンは今、私の家で弱っていたラティアスを看護かんごしていた。

「ラティアス……本当に……本当に無事で良かった……」

私の草のベッドで横になっているラティアスの手を握り締め、涙を流しながらラティオスが言っている。

「兄さん……ごめんね、心配かけて……」

この子……優しい子なのね……

「ラティアス……」

「ラティオス、まだ彼女は回復してないんだから休ませてあげましょ？」

私はつるのムチをラティオスの肩に当てながら言った。

「そうですね。ラティアス、ゆっくり休めよ。」

「うん……」

そう答えた後、ラティアスはすぐに眠ってしまった。

「アスカさん、リザードンさん。妹を助けてくれて、本当にありがとうございます。」

深々と頭を下げて、ラティオスは私達に言った。

「良いのよ別に、これが私達救助隊の仕事なんだから。ラティアス、早く元気になれば良いわね？」

「はい……」

「邪魔するぞ。」

その時、誰かが私の家に入ってきた。

私が振り向くと、そこにはアブソルがいた。

「アブソル！」

「本当だったんだな、お前達が帰ってきてたってのは？ 全く……顔くらい見せろよな？」

ちよっと呆れた感じでアブソルが言った。

「ごめんアブソル（汗）」

「まあ良いさ。それより、お前達にある奴からの伝言があるぞ。」

ある奴からの伝言？

「小さな森で待つ。」

救助が終わったら来い……以上だ。」

小さな森？ 私とリザードンが最初に出会った思い出の場所じゃないのよ。

「ねえアブソル、そのある奴って誰？」

首を傾げながらリザードンがアブソルに聞いた。

「自分の目で確かめてきな。とにかく伝えたからな。じゃな、俺は仕事があるからよ。」

そう言ってアブソルは家から出て行った。

「ある奴って本当に誰よ（汗）」

「さあ？ とにかく行ってみようよ。」

ラティオス、留守番をお願いしても良いかな？」

「構いませんよ。」

ラティオスを見てないといけませんし……」

ラティオスは了承してくれた。

「ありがとうラティオス。アスカ、行こ。」

「え、ええ……」

私達は家から出て、小さな森を目指して出発した。

小さな森。

「懐かしいねアスカ。」

一緒に歩いていたリザードンが懐かしむような表情をしながら言
った。

「そうね……あれから七年かぁ……時間が経つのは早いわね。」

「そうだね。……あっ！

アスカ、彼処見てみてよ！」

リザードンが何かを指差しながら言った。

私はリザードンが指差した場所を見してみる。

そこには三匹のポケモンがいた。

「来たな。」

そのポケモンとは、フーディン、リザードン、バンギラス……救
助隊、チームFLBだった。

「兄さん！」

そう言いながら、リザードンがフーディンの隣にいるリザードン
の所に向かって走り出した。

チームFLBのリザードンは、彼のお兄さんなの。

「よう、久しぶりだな。」

お前、ちょっと太ったんじゃないか？」

からかうような感じで言うリザードンのお兄さん。

「そ、そんな事ないよ！」

ちゃんと毎日運動してるし、ご飯だってそんなにたくさん食べてな
いし……」

真顔で答えるリザードン。

「ハハハハ……冗談さ冗談（笑） お前は本当に変わらないなあ。」

笑いながら言うリザードンのお兄さん。

「姿は兄貴そっくりなのに、中身はあん時のヒトカゲのまんまだな
（笑）」

リザードンのお兄さんの隣にいたバンギラスも笑いながら言う。

「もう！ 兄さんもバンギラスさんもそんなに笑わなくても良いでしょ！」

ちょっと怒ったりリザードン。

「ねえ、アブソルが言ってたある奴って……あなた達の事なの？」

一番気になっていた事を私は聞いてみた。

「いや、ワシ達はそいつの付き添いだ。
奴なら……彼処にいるぞ。」

フリーディンは何処かを見ながらそう言った。
私とリザードンはフリーディンが見ている先を見してみる。

「……来たな……アスカ……」

そこには二匹のポケモンがいた。
レオンとポッチャマだ。

「レオン……」

「待ってたぜアスカ、早速悪いんだが……俺とバトルしろ。」

腕組みしながらレオンが私にバトルを申し込んできた。
何か……以前よりも凄く自信に満ち溢れてる表情だわ……

「アスカ、レオンのバトル受けてやれよ。」

リザードンのお兄さんが私に言った。

「きっと驚くぞ。あいつの成長ぶりに。」

フリーデンまで……

「解ったわよ。」

私はそう言った後、レオンがいる所まで歩いた。

「ポツチャマ、危ないから下がってな。」

「解った。」

レオンに言われ、ポツチャマがその場から離れた。

「ルールはどうするのレオン？」

私はバトルのルールをどうするのかレオンに聞いた。

「前と同じで良い。」

でないと、どれだけ俺が強くなったのか解らないだろう？」

前と同じ……つまり、私に一発でも攻撃を当てる事が出来たらレオンの勝ちって事ね。

「解ったわ。」

そう答えた後、私はバトルする体勢に入った。
レオンもバトルする体勢に入る。

「いくぜアスカ！

電光石火！」

レオンが電光石火で私に向かってきた。
前よりもスピードが上がってる！ だけど！

「守る！」

私は守るを使ってバリアのような壁を目の前に作り、レオンの電光石火を防御した。

「エネルギーボール！」

そして私はすかさずエネルギー弾を放って反撃した！

「影分身！」

レオンは影分身で無数の幻影を作り出しながら、私のエネルギーボールを回避した。

影分身……それで私を攪乱かくらんしようって訳……そうはいかないわよ！

「つるのムチ！」

私はつるのムチを二本、左右に伸ばしてから身体を回転させ、私の周りにいる幻影達をつるのムチで薙なぎ払った！

だけど、本体に私のつるのムチが当たる事は無かった。

おかしいわ……幻影は全て消したのにレオン本体がいない。

「ここだアスカ！」

レオンの声……上から！？ 私は慌てて見上げた。そこにはレオンの姿が！

「くらえ10万ボルト！」

レオンが10万ボルトを！？

「守る！」

10万ボルトが当たる寸前で私は守るを使い、なんとか防御した。

「まだだ！ アイアンテール！」

レオンの尻尾が光輝き出した！

今度はアイアンテール……守るは連続で使えば失敗しやすくなる技……なら！

「つるのムチ！」

私はつるのムチを伸ばしてレオンの尻尾を掴み、思いっきり投げ飛ばした！

「まだまだ！」

だけど、すぐに体勢を立て直したレオンは再び私に向かってきた！

「電光石火、そして影分身！」

レオンは電光石火のスピードを活かして影分身を使い、さつきよりもたくさんの幻影を作り出した！ そのままこっちに向かってくる！

これじゃあつるのムチでも対処出来ない……ここは防御に集中ね！

「守る！」

私は守るでこの攻撃を防御しようとした。

「もらったぜアスカ！
フェイント！！」

しまっ！？ 次の瞬間には私の守るで作ったバリアの壁が破壊されてしまった！

「アイアンテール！！」

レオンのアイアンテールが私に向かって……ダメ、当たる！？
私は思わず目を瞑^{つむ}ってしまう。

……あれ？ いつまで経っても攻撃が来ない？
不思議に思った私はゆっくりと目を開けた。
見えてきた光景は、レオンのアイアンテールが私に当たるか当たらないかギリギリのところまで止まっている光景だった。

「レオン？」

「この勝負、俺の勝ちだな、アスカ。」

そう言ってレオンはアイアンテールを解き、軽く尻尾で私を叩いた。

「ふふ……してやられたなアスカ。」

今まで黙って見ていたフリーディン達がやって来た。

「フリーディン……」

「レオンの奴、強くなっただろ？」

腕組みしながらフリーディンが言った。

「確かにね……この短期間であそこまで強くなるなんて……フリーディン、一体どんな方法でレオンをあそこまで？」

「ワシは何もしておらん。ただ修行するのに最適な場所を教えただけだ。」

レオンが強くなったのは、あいつの努力の結果だ。」

レオンの努力……か……

「やったねレオン！」

ああ
「嗚呼！」

レオンとポツチャマが嬉しそうにしてる。

……私、レオンに謝らなきゃね。

「レオン。」

「ん？ 何だアスカ？」

首を傾げながらレオンが言った。

「その……ごめんなさいね……私、あなたの事……足手まといって言っただけでしょ？ だがら……」

「あゝあれか。別に謝らなくて良いさ。

事実、足手まといだったからな。」

えっ？

「だけど、今の俺は……もちろんポツチャマもだけど、もうアスカ達の足手まといにはならないからな！」

レオン……

「もしかしたら、俺達アスカ達より強くなったかもしれないねえよ（笑）」

……ちよつと見直したと思ったのに……調子に乗りすぎ（怒）

「それは聞き捨てならないわねえ？

今回は一発でもくらったら負けてってルールだったけど、普通にバトルしたら私の方がまだ強いんだからね！」

「へっ？ だったら今ここで試してみるかアスカ？」

腕組みしながら言うレオン。

「やってやろうじゃないの！ さあ、バトルよレオン！」

「良いぜ、やってやるよ！」

私達はまたバトルする体勢に入った。

ぐうゝ……

「「へっ？」」

いきなり森中に何かの音が響いた。

「ごめん、僕のお腹が鳴っちゃった（汗）」

リザードンのお腹の音だったのね（汗）

「ハハハハ……お前は本当に変わらないなあ（笑）」

リザードンのお兄さんが笑いながら言った。

お兄さんだけじゃなく、フーディンやバンギラス、その場にいた全員で笑い出した。

リザードンは顔を赤くして、ちょっと恥ずかしそうにしている。

「なんか、バトルする気が失せたな（汗）」

「私も（汗）しょうがない、皆で食事にしましょうか。確か近くにリンゴがたくさんある場所があった筈だからそこに行きましょう。」

私達は食事をする為にリンゴがある場所に向かった。

第十九話 リベンジ！ アスカVSレオン！（後書き）

レオン

「戻ってきたぞ〜！」

約2話から3話ぶりの登場だね。

ポツチャマ

「……僕ちよい役（泣）」

あつポツチャマがいきなり落ち込んでいる（汗）
大丈夫だって、ちゃんとポツチャマも活躍するから。

ポツチャマ

「本当に！？ 良し、頑張るぞ〜！」

復活早いな（汗）

第二十話 チームアスカに新たな仲間、ラティオスとラティアス！（前書き）

アスカにリベンジ成功っ♪ 久しぶりに俺の視点だぜ。

第二十話 チームアスカに新たな仲間、ラティオスとラティアス！

アスカがラティアスを救助してから翌日の朝。
アスカの家。

「もうすっかり元気になったみたいねラティアス。」

アスカが笑顔でラティアスに言った。

「はい、御蔭様で。
おかげさま

アスカさん、そしてリザードンさん。
助けてくれて、本当にありがとうございます。」

ラティアスは礼儀正しく言った。

「僕からもお礼を言わせて下さい。

妹を助けてくれて、本当に……本当にありがとうございます！」

深々と頭を下げて言うラティオス。

「どういたしました。

ラティオス達はこれからどうするの？」

アスカが首を傾げながら聞いた。

「……僕達、昨日の間に話し合ったんですけど……アスカさん。
僕達を……アスカさんの救助隊チームに入れてもらえないでしょうか？」

真剣な表情でラティオスが言った。

「私達のチームに？」

「はい。助けてもらったお礼をしたいんです。

もちろん、アスカさん達が迷惑でなければですけど……」

ラティアスが言った。

「迷惑だなんてそんな……ねっアスカ？」

リザードンがアスカに聞いた。

「そうよ。ラティオス、ラティアス、これからよろしくね♪」

笑顔でアスカが言った。ラティオス達をチームに迎え入れたみたいだな。

「そういえばアスカ、リザードンにはあれ、渡したのか？」

腕組みしながら俺はアスカに聞いた。

「あっ（汗）」

……まだなんだな（汗）

「あれって何？」

首を傾げながらリザードンがアスカに聞いた。

「ちょっと待っててね！

すぐ戻るから！」

アスカが慌てた感じで家を飛び出した。

「あっちよつとアスカ……行っちゃった(汗)
レオン、あれって何？」

「そいつは言えないな。」

まあ、アスカが戻るまでのお楽しみって事で。」

今言ったら喜びが半減しちゃうだろうしな。

「えゝすっごい気になるよゝ！」

……姿はリザードンなのに……子供っぽいよな……本当に(汗)

「あっそうだ！　なあラティオス、ラティアス。
ちよつと聞きたい事があるんだけど良いかな？」

俺は二人に聞いた。

「何ですか？」

「ある者は火山の噴火と共に怒り、雷と共に雄叫びをあげ、北風と
共に走り抜ける……今この謎掛けを解こうとしてるんだけどさ、全
然解らないんだよ(汗)」

ラティオス達は何か知らないか？」

「……それってもしかして……」

おっ！　もしかして知ってたりするのか！

「知ってるのか！」

「多分ですけど……それは、エンテイ、ライコウ、スイクンの事だと思います。」

ラティオスが答えてくれた。

「エンテイ、ライコウ、スイクン……って誰だ？」

「伝説のポケモンで、ホウオウと呼ばれるポケモンを守護する者と
言われています。」

今度はラティアスが答えてくれた。

ホウオウ……じゃあ、もしかしたらパッチールが捜していた透明
な羽の持ち主ってそいつの事なのかもしれない……

「なあラティオス、そのホウオウを守護してるっていうスイクン達
は何処にいるか解るか？」

「さすがに全員の居場所までは解りません……ですが、ポケモン広
場から北西の方角の海を越えた先に大きな島があり、その島の炎の
大地と呼ばれる場所にエンテイがいるという噂があります。」

炎の大地……か……ってか、また海を越えなきゃならないのかよ
(汗)

「ただいまー！」

あっアスカが戻ってきた。

「カクレオンは気が利くわ。ちゃんと預かっててくれてたんだから。
はい、リザードンにプレゼント♪」

笑顔でアスカはリザードンに以前カクレオンの店で買った物を手

渡した。

「これって……オボンの実と……腕輪？」

「ええ。その腕輪はフレイムバングルっていう腕輪よ。リザードンに似合いそうだったから買ってきたの。」

「アスカ……ありがとう！」

嬉しそうな表情をしながらリザードンは言った。そして早速腕にフレイムバングルを付けるリザードン。

「ど、どうかな？」

「うん、良く似合ってるわよりリザードン♪」

笑顔でアスカがそう言うのと、リザードンは本当に嬉しそうな表情をした。

「ありがとう、あっそうだ！ アスカ、あの謎掛けの答えが解ったよ！」

「えっ本当!？」

リザードンはアスカにさっきラティオス達から聞いた事を伝えた。

「ポケモン広場から北西の方角の海を越えた先にある島……まだ私もリザードンも行った事がない場所ね。」

アスカ達もまだ行った事がない場所……そこにパッチールが捜しているポケモン……ホウオウが……

「OK、そうと解れば早速出発よ！」

やる気満々だなアスカの奴(汗)

「あの……僕達も一緒に行って良いですか？
僕達なら、その島まで案内出来ますし……」

ラティオスがアスカに言った。

「じゃあ、お願いしても良いかしら？」

「はい！」

ラティオス達も一緒に来る事が決まった。

アスカの家の外。

「じゃあ、よろしくねリザードン！」

アスカがいつものように、リザードンの両手につるのムチを巻きつけた。

「OK、アスカから貰ったオボンの実の御蔭^{おかげ}で元気いっぱいだよ！」
いつもより元気なりザードン。

「レオンさんとポツチャマさんは僕の背中へ。」

俺とポツチャマはラティオスの背中に乗った。

「じゃあ、出発しますよ！」

ラティオスは俺達を乗せたまま空に上昇した。

あとに続いてラティアスとリザードン達も空へ。そして、北西の方角にある大きな島を目指して出発した！

第二十話 チームアスカに新たな仲間、ラティオスとラティアス！（後書き）

レオン

「作者！ 久しぶりの俺視点だったのにちよい短くないか！？」

まあまあ（汗）

次話はちゃんと長くやるから（汗）

それに、今ちよっと忙しくて……

レオン

「あっ！ そういえば、タクミの方のストーリーを今最初の予定からちよっと変更してんだっけ？」

うん。とあるポケモン小説を書いている先生からの希望で、その先生をタクミストーリーに出す事になったんだけど、細かいところを色々と変更してるんだ。

レオン

「……その先生の名前は誰だ？」

言えません（汗）

言ったら面白みが無くなるもん（汗）

レオン

「ちえっ……しゃあないな……」

アスカ

「気になるけど……作者さんがそう言うならしょうがないわね。じゃあ、私はメガニウムストーリーでも読もうっと♪」

……行っちゃった……

レオン

「最近アスカはメガニウムストーリーのブラキオがお気に入りらしい。」

まあ同じメガニウムだしね（汗）

レオン

「改のほうにもハマってるみたいだ。」

チコリータのブラキオが可愛いって騒いでたからな（汗）」

リザードン

「アスカはやっぱり僕よりブラキオが……」

って何か悪い方に考えてないかりザードン（汗）

第二十一話 炎の大地を目指して

空の上。

まだ俺達は目的地を目指して空を飛んでいた。

「なあラティオス、まだ着かないのか？」

「もうすぐですよ。」

ペースを上げればすぐに着くんですが……」

ラティオスが後ろの方でアスカを運んでいるリザードンをチラッと見た。

「あゝ……ラティオスが言いたい事、なんとなく解ったよ（汗）」

アスカを運んでるからリザードンはあのペースが限界なんだよな

（汗）

メガニウムって見た感じ結構体重ありそうだし……って、体重の話をするとなスカが怒るんだよな（汗）

『リザードンさんは大変そうですね（汗）』

ん？ 今頭の中に直接声が聞こえてきたような……今のラティオスか？

『はい。僕とラティアスはテレパシーを使う事が出来るんです。』

なるほどな……って、いきなり何でテレパシーで話を？

『さつきレオンさんが心の中で言ってたでしょ？
アスカさんに体重の話をすると怒るって……』

あゝ……確かにな。

それで口に出して喋らないようにテレパシーを使った訳か。

『はい。それでアスカさんの体重ですが……確かメガニウムの平均
体重が百キロだった筈です。』

百!? 思ってた以上にあるなおい(汗)

それをリザードンは運んでるのか……リザードン、ご苦労様だ(汗)

『ハハハ……(汗)』

『もう兄さん達！』

女の子にとって体重の話をされるのは凄く嫌な事だからね！』

この声は……ラティアスか？

俺は隣を飛んでいたラティアスをチラッと見る。……ちよつと怒
ってるような表情をしている(汗)

『わ、悪かったよラティアス(汗)』

俺も悪かった(汗)

あのさ……アスカには内緒にしといてくれな？

俺は両手を合わせて、ラティアスにお願いする。

『どうしようかな？』

私も女の子として、今の話は聞き捨てならないし……アスカさんに

言っちゃおうかな?』

ラティアスが意地悪そうな表情をする。

頼む、言わないでくれラティアス!!

まだ死にたくないんだよ(汗)

『兄ちゃんからも頼む!!』

俺達は必死にラティアスに頼む。

『うーん……しょうがないわね。

内緒にしろといてあげる。

だけど、また兄さん達が変な事言ってるのを聞いたら、アスカさんに言うからね!』

『わ、解りました(汗)』

ラティアスに弱みを握られてしまった俺とラティオス。

それから数十分後。

おっ何かデカイ島が見えてきたぞ！

「ラティオス、あれがそうなのか？」

「はい、そうです。」

頷いて答えてくれたラティオス。

あの島がそうなのか……あの島の炎の大地って場所にエンティがいるんだな……って！？

「なあ……あの所々に炎が吹き出してる場所が……炎の大地……なのか？」

恐る恐る俺はラティオスに聞いた。

島の一部、大地から炎が吹き出していてめっちゃ熱そうな場所があったんだよ（汗）

まさか……あの真下には溶岩が流れてたりすんのかな（汗）

「レオンさん……あなたが思った通り、彼処が炎の大地です。」

ですよねーアハハハ……帰りてえー（汗）

「では、そろそろ着陸しますよ！

しっかりと掴まっついて下さいね！」

そう言ってラティオスが降下を始めた。

行くしかないよな（汗）

炎の大地。

来ちゃったよ（汗）

「暑く……ここは砂漠かよ（汗）」

めっちゃくちゃ暑い（汗）

さすが炎の大地ってだけはあるな（汗）

「暑いって言わないでよレオン（汗）」

余計に暑く思えちゃうじゃないのよ（汗）」

つるのムチで額から流れる汗を拭きながらアスカが言った。
怒られちゃったよ（汗）

「そうかな？　僕は普通だと思うけど？」

首を傾げながらリザードンが言った。

リザードン、それはお前が炎タイプだからだろ（汗）

「だぁゝ我慢出来ん！」

ポツチャマ、水鉄砲出してくれ！」

「う、うん。」

俺はポツチャマに水鉄砲を使うよう頼んだ。

ちよつとでも暑さを紛らわせるには水を被るに限るぜ……俺はポツチャマの水鉄砲を浴びる。

「あゝ気持ち良い〜♪」

暑さを忘れるぜ〜♪

「あゝズルい！？ 私も水浴びたい！」

アスカも入ってきた。

「は〜……生き返るわ〜……♪」

「……年寄りかよ（汗）」

思わず小声で言ってしまった俺。

「あんですって（怒）」

げっ！？ 今の聞こえたのかよ！？

すっげー地獄耳（汗）

「いや、な、何も言ってますん……（汗）」

「アスカさんが年寄りって言ってましたよ。」

ちよっラティアス!?

「ふん……私が年寄り……ちよっとレオン。
こっちにいらっしやい♪」

アスカ……顔が笑ってるけど目が笑ってないぞ（汗）明らかに殺
気を放った目だぞその目は（汗）

「は、は……い……（汗）」

逆らう訳にはいかなので俺はアスカの所へ……

「誰が年寄りなのよ！」

この電気ネズミが!!」

「ぎゃあああああ!？」

アスカに思いっきりつるのムチで殴られたり踏みつけられたり……
しまいにはエナジーボールやソーラービームをくらった俺。

炎の大地に入る前に、俺はアスカに倒されて気を失ってしまった
……

第二十一話 炎の大地を目指して（後書き）

ラティオス

「作者さん、レオンさんがエラい事に（汗）」

アスカを怒らせるからあくなるんだよ。
自業自得だよ。

ラティアス

「当然ね！」

ラティオス

「いや……でも、あれはやりすぎなんじゃ（汗）」

たまには良いんです（笑）

第二十二話 VS エンテイ！（前書き）

えーこの場を借りて、読者の皆さんにお願いがあります。

最近、一度★をつけてその作品を評価したあとも、また同じようにその作品に★をつけて評価する人がいるみたいなんですけど……その行為はあまり良くありません。

ですので、過去にその作品に★をつけて評価した事がある人は、感想などを書く時には評価しないを選択して、コメントだけを書いて下さい。

協力をお願いします。

第二十二話 VS エンテイ!

炎の大地。

炎の大地に入ってから約十分が経過。

「うゝ……」

「だ、大丈夫レオン？」

ラティオスの背中に乗せられているレオンを心配しているポツチ
ヤマ。

……ちよつとやりすぎたかしらやっぱり(汗)

「アスカ、あとでちゃんとレオンに謝った方が良いよ？」

レオンを心配そうに見つめながらリザードンが私に言ってきた。

「うん(汗)」

頷きながら私はそう言った。

それからさらに十分が経過。

まだまだ先は長そうねえ（汗）

「……あれ？　ここ何処だ？」

あつやつとレオンが目を覚ましたみたい。

「起きた？」

私はレオンに近づいて聞いた。

「ア、アスカ！？　ってわわわ！？」

何故か私を見て驚いたレオン。

慌てすぎてラティオスの背中から落ちちゃった（汗）

「すみませんすみません！？　もう二度あんな事は言いませんから
命だけはお助けを」（汗）」

全力で土下座しながら謝っているレオン。

そんなに私の事が怖かったのかしら（汗）

「もう怒ってないわよ。

……さっきはごめんなさい（汗）」

私は頭を下げてレオンに謝る。

「……へっ？」

ポカーンとした表情をするレオン。

「私がやりすぎたわ……本当にごめんなさい。」

「アスカ……」

しばらく沈黙が続いた……

「……元はと言えば俺がアスカを怒らせるような事を言ったのが悪いんだ……俺の方こそ……ごめん……」

レオンが頭を下げて謝ってきた。

「じゃあ……仲直りの握手をしましょ？」

私は手の代わりに、つるのムチを一本レオンの前に伸ばした。

「^{ああ}嗚呼、仲直りだな！」

レオンはつるのムチを右手で握って握手をしてくれた。

「改めて、これからもよろしくねレオン！」

笑顔で私は言った。

「こっちこそ、よろしくなアスカ！」

レオンも笑顔で言ってくれた。

私とレオンが仲直りしてから三十分後。

かなり奥の方まで進んできたけど……まだエンテイには会えない。
その代わり……嫌な気配を感じるけどね。

「アスカ……気づいてるか？」

周りを警戒しながらレオンが聞いてきた。
レオンも気づいてたみたいね。

「ええ……どうやら私達、囲まれてるみたいね……皆、いつでも戦えるようにした方が良いわ。」

私がそう言うと、皆戦闘体勢に入る。

さて……一体どんなポケモンが出てくるのかしら……

しばらくして、気配の正体が解った。

「……なんだ、あのぷにぷにした生命体は（汗）」

気味の悪い生き物でも見てるような表情で言うレオン。

「あれはメタモンよレオン。」

「メタモン？」

首を傾げるレオン。

「変身ポケモンって言われるポケモンなの。」

どんなポケモンにも変身出来る、厄介なポケモンよ。」

私はレオンに説明した。メタモンの数は……六匹ね……私がメタモンの数を確認した時、突然メタモン達の身体が光り輝きだした！

「な、なんだ！？」

驚いているレオン。

「変身を使ったのよ。」

一体どんなポケモンに変身するつもり……

しばらくして、メタモン達の身体から放たれた光は消えた。

メタモン達に変身したポケモンは……

「あれ俺達じゃんか!？」

驚きの声をあげるレオン。メタモン達に変身したのは私達だったの。

「……僕あんなに太ってるかなあ？」

リザードンに変身してるメタモンを見て、首を傾げながら言う本物のリザードン。

「……まだリザードンは良いわよ……何よあの私に変身してるメタモンは（怒）」

他のメタモンはそっくりに変身してるのに……私に変身している

メタモンだけがちゃんと変身出来てないの。

姿はそっくりなんだけど……顔だけがメタモンの時の顔なのよ（汗）

何よあれ……ワザとやってるのあれは……

「変身するなら……ちゃんと変身しなさいよ！
つるのムチ！！」

私は私に変身しているメタモンにつるのムチを伸ばした！

そして顔を思いつきつるのムチで殴る！

そしたら、そのメタモンの変身が解けてその場に倒れちゃったの。
目を回してるわね……

「……弱っ！？」

思わず口に出して言ってしまった私。

それから僅か十秒後。

「なんだ、見た目だけで滅茶苦茶弱いんだなこいつら（汗）」

ちょっと呆れた表情で言うレオン。

私達の攻撃を一発受けただけでメタモン達は全員倒れちゃったの

（汗）
弱いにも程があるわよ（汗）

炎の大地、最深部。

メタモン達を倒してから約三十分。

私達はようやく炎の大地の一番奥までやって来た。

「ここが一番奥みたいだな？ エンテイって奴は何処にいるんだ？」

辺りをキョロキョロとしてエンテイを捜すレオン。

「……何者だ！？」

突然何処からか声が聞こえた！

そして次の瞬間、私達の前に一匹のポケモンが現れた。

「あんたがエンテイか？」

首を傾げながらレオンが聞いた。

「そうだ。我が名はエンテイ、灼熱の火山と共に生きる者。お前達、我が領域を侵すとは……覚悟は出来ているんだろうな!!」

いきなり喧嘩腰!?

「ちょ、ちょっと待ってエンテイ!?

私達はただあなたに聞きたい事が……」

「問答無用!」

……聞く耳持たずって訳ね(汗)

「仕方がないわね……やるわよ皆!」

私達は戦闘体勢に入る。

「燃え尽きろ! 大文字!」

エンテイが大文字を放ってきた!

「僕達に任せて下さい!

やるぞラティアス!」

「うん!」

ラティアスとラティアスが私達の前へ。

「「水の波動!」」

二人は水の波動を大文字にぶつけた! だけど、大文字のパワーが強みたいで、ラティアス達の水の波

動が少しずつ押され始めた！

「くっ……凄いパワーだ！？」

「僕も協力するよ！

ハイドロポンプ！！」

そこにポツチャマがハイドロポンプで加勢した！ ハイドロポンプの加勢で、大文字を押し始めた！

「やるなポツチャマ！

俺も負けてらんねえな！

電光石火！」

レオンが電光石火でエンテイの背後に回り込んだ！

「くらえ、10万ボルト！」

レオンがエンテイに向けて10万ボルトを放った！

「甘い！」

エンテイは大文字を中断、空高くジャンプして10万ボルトを回避した！

「げっ！？」

大文字を中断した事により、レオンにラティオス達の水の波動とハイドロポンプが！

間に合って！

「つるのムチ！」

私はつるのムチをレオンの身体に巻きつけて、私の方へ引き寄せた。

なんとかレオンを助ける事が出来たわ（汗）

「サ、サンキュアスカ（汗）」

「良いのよ。」

私は笑顔で言った。

「「火炎放射！」」

空中でリザードンとエンテイの火炎放射がぶつかり合った！
そして大きな爆発が発生した！

「うわぁ！？」

その爆発で発生した爆風でリザードンが地上に吹き飛ばされた！

「リザードン！？」

私はリザードンの所へ駆け寄る。

「大丈夫リザードン？」

「な、なんとか……あのエンテイ……強いよ……」

確かに……一対一でやったら絶対勝てないわ……皆で協力しないと。

「ラティオス、ラティアス！ 二人は私達の援護を！ ポツチャマも協力して！」

私がそう言うのと三人は頷いて答えてくれた。

「レオン、あなたは隙を見てエンテイに電磁波を使って動きを封じて！」

「任せな！」

レオンは親指を立てて答えてくれた。

「さあ、行くわよりザードン！」

「OKアスカ！」

私達はエンテイに向かって行った！

「どんな策を練ろうが叩き潰してくれる！」

火炎放射！！」

エンテイが私達に向けて火炎放射を放ってきた！

「ハイドロポンプ！！」

ポツチャマがハイドロポンプを放ってエンテイの火炎放射を打ち消してくれた！

「いくよ、オーバーヒート！！」

リザードンが強力なオーバーヒートを放った！
だけど、エンテイは高くジャンプしてこれを回避した！

「大文字！」

またエンティが大文字を放ってきた！

「サイコキネシス！」

ラティオスとラティアスがサイコキネシスを使って大文字の軌道をズラしてくれた！

おかげで私達に大文字が当たる事はなかった。

「タネマシンガン、そして種爆弾！」

私は空中にいるエンティにタネマシンガンと種爆弾のコンビネーション攻撃を放った！

このコンビネーション攻撃はエンティに直撃して大きな爆発が発生した！そしてエンティは地上に吹き飛ばされ、身体を地面にぶつけた！

「くっ！？　こしゃくな！」

確かに直撃したんだけど……あまり効いてないみたいね。

「もらったぜ、電磁波！」

いつの間にかエンティの背後に回り込んでいたレオンがエンティに電磁波を決めた！

「なっ！？」

「ナイスよレオン！」

皆、一斉攻撃よ!!」

私の合図と共に皆がエンティを攻撃した!

私はソーラービーム。

リザードンはオーバーヒート。

ポツチャマはハイドロポンプ。

ラティオスとラティアスは水の波動。

レオンは雷を放ち、エンティに直撃させた!

「くっ……まだ、我は倒れぬぞ!」

あれだけの攻撃を受けてまだ倒れないなんて……だけど、身体が震えているからもう限界の筈……今なら話を聞いてくれるかも……

「エンティ! 私達はあなたの領域を侵しに来た訳じゃないのよ! ただ、この羽の持ち主が何処にいるのか聞きたいだけなの!」

そう言って私は透明な羽をエンティに見せた。

「その羽……本当に我が領域を侵しに来た訳ではないのか?」

私達は頷いて答えた。

「……その羽を貸せ。」

「えっ？」

「良いから早く貸せ！」

な、何よ急に……まあ良いわ。

私はエンテイの前に透明な羽を置いた。

「むう……はっ！」

突然エンテイは透明な羽に向けて炎を放った！
ってちよつと！？

「何で羽を燃やすのよ！？」

「燃やした訳ではない。

見てみる。」

エンテイに言われ、私は羽を見える。

本当だ……燃えてない！ それに、透明だった羽に色が……

「この深紅の羽を持ってここから西にある稲妻の大地という場所に向かえ。そこにライコウがいる。」

稲妻の大地……

「なあ、何でハウオウの居場所を教えてくださいないんだよ？

俺達はハウオウに用があるんだ。

何でわざわざ他の奴の居場所なんかを……」

首を傾げながらレオンが言った。

「……その羽に力を宿さなければホウオウ様には会えん。
だから、まずライコウとスイクンに会わねばならないのだ。」

説明してくれたエンテイ。

「……さっきは攻撃してすまなかったな。
さらばだ。」

それだけ言ってエンテイは何処かへ走り去ってしまった。

第二十三話 VSライコウ！（前書き）

稲妻の大地か……何か凄そうだな（汗）

第二十三話 VSライコウ!

稲妻の大地、入り口付近。

エンテイに言われた通り、炎の大地から西の方角に向かって歩いていたら本当に稲妻の大地に辿り着いた俺達。

空には雷雲が立ち込めていて、次々と雷を発生させ、その雷が大地に直撃している。

……俺達、あの雷に当たったりしないかな (汗)

「うゝ……雷怖い (汗)」

あつポツチャマが怖がっている (汗)

まあ、ポツチャマは水タイプで電気は苦手だからしょうがないけど……

「雷怖い……雷怖い (汗)」

ポツチャマ以上に怖がっているポケモンがここに一人 (汗)
リザードン……頭抱えて蹲うずくまってるし (汗)

「しっかりしなさいよりザードン!
あんた男でしょ?」

少し呆れた感じで言っているアスカ。

「男でも、怖いものは怖いんだもん (汗)」
「そうだよ (汗)」

……似た者同士だな、ポツチャマとリザードンって(汗)

「……はあ……(汗)」

溜め息を吐くアスカ。

「アスカさん、こうなったらリザードンさん達が喜びそうな事をして勇気づけてあげるしかありません！」

ラティアスがアスカにそう言った。

二人が喜びそうな事？

「……私もそれしかないと思ってたわ。

だけど、リザードンなら解るけどポツチャマは……レオン、ポツチャマが喜びそうな事って何？」

首を傾げながらアスカが俺に聞いてきた。

ポツチャマが喜びそうな事ねえ……あつそういえば……

「確かポツチャマは、アスカ達と同じくらいに救助隊チームFLBの事が好きだった筈。」

「なるほど……なら、あんたはポツチャマに……ごによごによ……」

アスカが俺にポツチャマ達に聞こえないように耳打ちしてきた。

「……解った。」

ポツチャマには俺から言っとく。」

「頼むわね。リザードンは私に任せて。」

そのあと、俺はポツチャマに、アスカはリザードンに近寄った。

「なあポツチャマ、お前、チームFLBのファンだって言ってたよな？」

「えっ？ うんそうだけど……」

頷きながら言うポツチャマ。

「……もし今回頑張って活躍出来れば……アスカがチームFLBのメンバー全員のサインが書かれた色紙をプレゼントしてくれるみたいだぞ？」

俺はポツチャマにそう耳打ちする。

「チームFLBのサイン色紙……僕頑張る!!」

いきなりやる気になったなおい（汗）

とりあえず、こっちは成功だな。

アスカ達の方は……ってええええ!?

「アスカさん……さすがです!」

ラティアスが尊敬の眼差しでアスカを見ている。アスカは今……リザードンの口に……キ、キ、キスをしているんだ（汗）

「……今回頑張ってくれたら、次はアロマセラピー付きでやってあげるから……頑張ってるね、リザードン？」

甘ったるい口調で言うアスカ。

「……うおおおお!!」

僕はやるぞおお!!」

リザードンが雄叫びをあげて滅茶苦茶やる気になってる(汗)
効果抜群だなありゃ(汗)

「……アスカさんって大胆ですね(汗)」

ラティオスがアスカに聞こえないように小声で俺に耳打ちしてきた。

「嗚呼……大胆不敵ああっていうのはまさにあれだな(汗)」
「……ですね(汗)」

俺達は苦笑いするしかなかった。

稲妻の大地。

ポツチャマ達をやる気にさせてから約三十分が経過。

「ハイドロポンプ!!」

「オーバーヒート!!」

稲妻の大地を進む俺達の前に次々とポケモン達が襲いかかってくるんだけど……ほとんどポツチャマとリザードンが倒しているんだよな。

俺やアスカ、それにラティオスとラティアスは見ているだけ。

「よし、終わり!」

「さあ、先に進もう!」

ポツチャマとリザードンは先に進み始めた。

「まさか、サイン色紙とキスだけであんなにやる気を出すなんて（汗）」

「単純なのよ、あの二人。」

単純言ったよアスカ（汗）

「アスカ達、何してるの?」

「早く行こうよ!」

かなり先に進んでいたポツチャマとリザードンが手を振りながら叫んでいる。

「今行くから待ってろよ!」

俺達は急いでポツチャマ達の所へ向かった。

稲妻の大地、中間。

だいぶ進んできたけど……まだ先は長そうだな（汗）

「火炎放射!!」

「渦潮!!」

リザードンの火炎放射とポツチャマの渦潮は襲いかかってきたポケモン達に直撃。

攻撃を受けたポケモン達は慌てて逃げていった。

「ハア……ハア……ちょ、ちょっと疲れてきたかも……（汗）」

リザードンが息切れを起こしている。

ポツチャマも同じだ。

まあ、最初っからすげー頑張ってたもんな。

「はい二人共、オボンの実よ。」

アスカは二人にオボンの実を渡した。

体力を回復してくれる木の实だったな。

「ありがとうアスカ。」

リザードン達はオボンの実を食べた。

「よし、復活！」

って復活早いなおい（汗）

稲妻の大地、最深部。

これ以上行けないみたいだ……どうやら、ここが一番奥みたいだな。

「……うん？」

何だお前ら？ 何か用か？」

何処からか声が聞こえてきた……けど、なんだよこのかったるそうな声は（汗）

「声はすれど姿は見えず……何処にいるの？」

辺りをキョロキョロとしながらアスカが言った。

「俺ならここだ。」

後ろから声がした！？

俺達は慌てて振り向く。するとそこには一人の大きなポケモンがいた。

「あんたがライコウか？」

「そうだ。」

人は俺を、稲妻と共に駆ける者と言う。

……んで、ここに何しに来たんだ？」

またかったるそうな感じで言うライコウ。

エンテイとは全然違うな（汗）

「私達はこの羽の持ち主に会いたいだよ。」

そう言ってアスカは、深紅の羽をライコウに見せた。

「……あゝなるほど。」

あの方に会いたいわって訳か……エンテイに言われてここに来たのか？」

首を傾げながらライコウが聞いてきた。

俺達は頷いて答えた。

「OK、とりあえずお前達がここに来た理由は解った。だけど、タダでその羽に力を与えるって訳にはいかないな。」

そう言くと、ライコウは戦闘体勢に入った。

……つまりそれはそういう事か（汗）

「最近バトルしてなくて凄く暇してたんだ。

俺とバトルして勝てたら、羽に力を与えてやるよ。」

やっぱりね（汗）

「じゃあない……やってやるよ！」

俺達も戦闘体勢に入る。

「そんじゃ……始めようぜ！ 雷！！」

ライコウが雷を放ってきた！ 俺達は落ち着いて雷を回避する。

雷は地面に直撃！

強力な雷だったみたいで、雷を受けた地面は砕けた！

「電光石火から影分身！」

俺は電光石火のスピードを利用して大量の幻影を作り出した！
これで攪乱かくらんしてやる！

「なかなかのスピードだ。だが、こうすりや問題無い！ 放電！！」

ライコウは周辺に電撃を放ってきた！

「うわああああ！？」

俺は放電を受けて吹き飛ばされた！

「つるのムチ！」

アスカがつるのムチで俺を受け止めてくれた。

「サ、サンキューアスカ（汗）」

「全く……あんた一人で突っ込まないの！」

相手は伝説のポケモンよ、皆で力を合わせないと勝てないわ。」

怒られちった（汗）

でも、確かにアスカの言う通りだな。

皆で力を合わせないと……

「次行くぞ！ 雷！！」

またライコウが雷を放ってきた！

「レオン、私の後ろへ！」

「解った！」

俺はアスカの後ろに下がった。

「守る！」

アスカはバリアのようなエネルギーの壁を作り出して、雷を防御した。

「リザードン、ポツチャマ！」

「解ってるよアスカ！」

アスカが雷を防御している間に、ポツチャマとリザードン、ラティオスとラティアスがライコウに向かっていった！

「火炎放射！」

「ハイドロポンプ！」

リザードンとポツチャマがそれぞれ得意技を放つ。

「サイコキネシス！」

その火炎放射とハイドロポンプをラティオス、ラティアスがサイコキネシスを使ってコントロール！ 不規則な動きをしながらライコウに向かっていく！

それはまるで水の竜と炎の竜みたいだ！

「へーやるじゃんか！

面白くなってきたぜ！

電光石火！」

ライコウは電光石火でラティオス達がコントロールしている火炎放射とハイドロポンプを難無く回避していく。

ってか、あいつ何か楽しんでないか（汗）

「バトル好きって訳ね。」

なら、下手な小細工はなしの全力投球しかないわね！ レオン、ちよっと失礼。」

アスカがそう言うのと、つるのムチを俺の身体に巻きつけてきた。

……何か……すっげー嫌な予感がするんっすけど（汗）

「アスカ、何するつもりだ（汗）」

「歯を食いしばった方が良いわよレオン！」

そうやって俺を持ち上げるアスカ。

……やっぱりこれは（汗）

「行くわよ……一球入魂!!！」

アスカはライコウに向けて力いっぱい俺を投げた！

「やっぱりこういう事かよゝ!?!？」

投げ飛ばされた俺は真っ直ぐライコウに向かっていく。

「いっ!?!？」

ライコウは俺に気がついたけど、そんな時にはもう俺は目の前まで来ていた。そして……

ゴツン!!

「「がはっ!?!」」

俺とライコウは思いつきぶつかり合った。

衝撃が強くて、俺はぶつかり合ったその瞬間に気を失ってしまっ
た……

それから五分後。

「……う……」

あ……頭痛い(汗)

「あっ気がついたレオン?」

俺が目を開けると、目の前には心配そうな表情をしているポツチャマがいた。

「ポツチャマ……バトルはどうなったんだ？」

「一応、僕達が勝ったよ。……かなりの荒技だったけどね（汗）」

苦笑いしながら言うポツチャマ。

「まさか……味方を俺に投げてるなんてな……予想出来なかったぜ（汗）」

あっライコウだ。

ってそうだよ、俺アスカに思いっきり投げられたんだよ！

「アスカ、よくも俺を投げたな！」

「あれも力を合わせた攻撃よ（笑）」

名付けるなら、弾丸レオンってどこかしら（笑）」

笑いながら言うアスカ……ってか！

「笑いながら言うなよ！？」

マジでシャレにならないから！

「……面白い奴らだな。

久しぶりに楽しかったぜ！ さて、約束だったな。ちょっと羽を貸してくれ。」

「あっはいこれ。」

アスカはライコウの前に深紅の羽を置いた。

「……はっ！」

ライコウは深紅の羽に電撃を放った！

すると、電撃を帯びた深紅の羽に変化が起きた。赤い色に黄色が入って、まるで夕日のような色に変化したんだ。

「よし完了！ この夕日の羽を持って、今度は北東に行け。

北風の大地という場所だ。そこにスイクンがいるから、スイクンにこの羽を渡せ。

したら、俺やエンテイみたいに羽に力を与えてくれるからさ。」

ライコウはそう説明してくれた。

次は北東の北風の大地か……

「お前達とは、また会いたいもんだな。

それじゃあな！」

そう言ってライコウは何処かへと走り去って行った。

第二十三話 VSライコウ！（後書き）

レオン

「痛かったです（泣）」

あゝ弾丸レオンね（笑）

レオン

「笑うなこら！？」

ポツチャマ

「まあまあ（汗）」

何はともあれ、あの攻撃で勝てたんだから良かったじゃん。」

そうそう（笑）

細かい事を気にしたら負けさ（笑）

レオン

「……はあ（汗）」

第二十四話 VS スイクン！（前書き）

レオン

「更新遅いぞ作者！」

いやゝすんません（汗）

これからの君達のストーリーとかその他の作品のストーリーを色々考えてたら遅くなってしまいました（汗）

アスカ

「今度また遅くなったら首絞めるわよ？」

……頑張ります（汗）

第二十四話 VS スイクン！

北風の大地、入り口付近。

ライコウに言われた通り、稲妻の大地から北東の方角に向かって歩いてきた俺達はようやく北風の大地に到着した。

……到着したのは良いんだが……

「ヘックシュン！？

あゝ寒っ！？」

北風の大地っていうだけあって、ここは滅茶苦茶寒かった。

おまけに辺りは真っ白な雪が積もっている。

「そんなに寒いかなあ？

僕は普通だと思うけど……」

首を傾げながらポッチャマが言った。

ポッチャマ、それはお前が水タイプで寒さに強いからだろ（汗）

「だらしないわねレオン。これくらいどうって事ないじゃないのよ」

草タイプで寒いのが苦手な筈のアスカが平気そうな感じにしている。

何で平気なんだ……って！？

「ズルいだろアスカ！

リザードンの尻尾の炎で暖かそうにしゃがって！」

アスカはリザードンの尻尾の炎で暖^{だん}を取ってやがったんだ！

「レオンも暖まる？」

首を傾げながらリザードンが言った。

「喜んで♪」

俺はすぐにリザードンの尻尾の炎に近寄る。

あゝ……暖かいなあ……

「あ、あの……僕達も良いですか？」

「私達、寒いのが苦手で……」

ラティオスとラティアスが寒そうにしながらそう言った。

二人共、寒いのが苦手みたいだな？

「良いよ」

笑顔でリザードンはそう言った。

そしてラティオス達は嬉しそうにリザードンの尻尾の炎に手を翳^{かざ}して暖を取る。

「……ねえ、まだ行かないの？」

腕組みをしながらポツチャマが聞いてきた。

『もうちょっと〜♪』

俺達は声を揃えてそう言った。

北風の大地。

しばらくリザードンの尻尾の炎でしっかり暖まった俺達。
本当はもう少し暖まっていたかったんだが、ポツチャマに急^せかさ
れて仕方なく北風の大地の中に入った。

「火炎放射！」

「10万ボルト！」

北風の大地に入って早々、いきなりポケモン達に襲われた！
相手はサンタミたいなポケモン、デリバードが二匹、カエルミた
いなポケモン、ニョロトノが一匹、あとはヘドロミたいなポケモン、
ベトベトンが一匹だ。

今リザードンが放った火炎放射はベトベトンに命中、そして俺が
放った10万ボルトはニョロトノに命中、一発で倒す事が出来た。

「あゝらら。一発でやられちゃったよあいつら」

「だらしがないねえ」

呆れたような表情で言う二匹のデリバード。

「……あんた達、どこかで見た顔ね？」

首を傾げながらアスカが言った。

アスカはこいつを知ってるのか？

「あら、彼の有名なチームアスカのリーダー^かが私達を知ってるとは
光栄だねえ」

「そうだね姉さん」

こいつら姉弟なのか？

「私はデリー、こっちは弟のバード。

私達はチームDBよ。」

姉のデリーが腕組みしながらそう言った。

「……あゝ！？　そうよ、あんた達はプクリンのギルドにあるお尋ね者ポスターに載ってたわ！」

アスカがつるのムチでデリバード達を指しながら言った。

あいつらお尋ね者なのか……でも何でそのお尋ね者がこんな所に

……

「お前ら、一体何の目的があつてここにいるんだ？」

腕組みしながら俺はデリバード達に聞いた。

「ここにはスイクンがいるって聞いてね。

身内からの依頼で、スイクンを捕まえる為に来たのよ」

「そして、君達はスイクンに会おうとしている。

僕達の邪魔になるから、ここで始末しようと思った訳」

両手を腰に当てながら、二人はそう言った。

こいつらスイクンを狙ってんのか……

「だけど、予定が狂っちゃったよ……ベトベトンとはともかく、ニョロトノがやられたのはね……」

倒れたニョロトノを見ながら、残念そうな表情で言うバード。

「どうするの？」

あなた達は二人、こっちは六人。

数ではこっちが圧倒的に有利よ？」

戦闘大勢に入りながらアスカが言った。

俺達も戦闘大勢に入る。

「ここは大人しく引き下がるわよ。

私達、不利な状況でバトルはしない主義なの」

「そういう事。

でも、スイクンを諦めた訳じゃないよ。

大勢を立て直したら、またスイクンを狙いに来るからね」

そう言い終えると、バードが手に持っている袋から一つの宝玉を取り出した。

あれは……穴抜けの玉か？

「それじゃ、またね」

バードが穴抜けの玉を掲げると、穴抜けの玉が光始めた。

その光は眩しくてとても目を開けていられず、俺は目を瞑ってしまふ。

しばらくして光はようやく消えた。

目を開けると、デリバード達はいなくなっていた。

どうやら逃げたみたいだな……だけど、あいつら結局何だったんだよ？

北風の大地、最深部。

かなり奥まで来たな。

「これ以上先には進めないみたいだ……って事は、ここにスイクンが……」

「……あなた達、ここに何をしに来たのですか？」

誰かの声が聞こえてきた。そして、急に寒い風が吹き始めた。さらには、辺りに霧まで発生しやがった。

「……ここはあなた達が来て良い所ではありません。早々に立ち去りなさい……」

その声が聞こえてきた時、俺達の前に一匹のポケモンが現れた。こいつが……スイクンなのか？

「あんたがスイクンか？」

俺は目の前にいるポケモンに聞いた。

「……そうです。」

私はスイクン、北風と共に駆ける者。

もう一度言います、早々にここから立ち去りなさい」

「それがそうもいかないのよ。あなたにはこの羽に力を与えてもら

わないと」

そう言ってアスカは、夕日の羽をスイクンに見せた。

「その羽は……なるほど、あの方に会う為にここへ……ですが、簡単にその羽に力を与え、あの方の所へ行かせる訳にはいきません。あなたがあの方に会うのに相応しいかどうか……試させてもらいますよ」

そう言ってスイクンが戦闘体勢に入る。
やっぱりそうなるのな……

「じゃあねえな……」

俺達も戦闘体勢に入った。

「ちょっと待った。

その戦い、僕達も参加させてもらおうよ」

俺達がバトルしようとした時突然何処からか声が聞こえてきた。
俺達は声が聞こえてきた方に振り向く。

するとそこには、さっきのデリバード達がいた。ついでに、さっきのニョロトノやベトベトンの代わりなのか、オニゴーリとニューラがいた。

「またお前達か！」

「さっきも言ったでしょ？ スイクンを諦めた訳じゃないってね。
さて、スイクンには大人しく僕達に捕まってもらうよ」

バードがスイクンを指しながら言う。

「さあ、オニゴーリにニューラ！ 仕事しな！」

デリーがそう言うと、オニゴーリとニューラが向かってきた。

「させるかよ、電光石火からアイアンテール！」

俺は電光石火で素早くニューラに接近して、アイアンテールを腹部に直撃させた。

俺のアイアンテールを受けたニューラは吹き飛んだ。

「オニゴーリは任せて！
ハイドロポンプ！」

ポツチャマが大量の水をオニゴーリに向けて放った。
ハイドロポンプはオニゴーリに直撃、オニゴーリは吹き飛んだ。

「ナイスポツチャマ！
スイクン、あんたとのバトルは後回しだ。
先にあいつらを片付けないといけないようだからな」

俺はデリバード達を睨みつけながら言った。

「レオン、あなたはリザードンと一緒にデリバード達をよろしく。
オニゴーリとニューラは私達で相手するから」

「解った！ 任せたぜアスカ！」

オニゴーリとニューラはアスカ達に任せ、俺とリザードンはデリバード達に向かって行った。

「行くぜ、10万ボルト！」

俺はバードに向かって10万ボルトを放った。

「火炎放射！」

リザードンはもう一方のデリーに向かって火炎放射を放った。

『吹雪！』

デリバード達は一緒に吹雪を放ち、俺とリザードンの攻撃を撥ね
除けやがった！

吹雪がこっちに向かってくる！

「レオン、僕の背中に乗って！」

「わ、解った！」

俺は急いでリザードンの背中に飛び乗る。

そして、俺を乗せたりザードンはそのまま空に上昇、吹雪を回避
した。

「逃がさないわよ」

「僕達も空を飛べるんだよ」

デリバード達も飛んできた。

「いくよ、姉さん」

「解ってるわよバード」

デリバード達の両手が冷気を帯^おび始めた。
何か仕掛けてくるみたいだな……

『冷凍パンチ!』

次の瞬間、デリバード達が勢い良く俺達に向かってきた。

「火炎放射!」

リザードンが向かってくるデリバード達に火炎放射を放つ。
だけど、デリバード達は火炎放射を回避しながら俺達に向かってくる。

「くらいなさい!」

デリバード達は冷凍パンチで攻撃してきた。
だけどそれをリザードンは両手を使って受け止めた!

「へ……僕達の攻撃を受け止めるなんてやるじゃないか」

少し驚いた表情をするバード。

「だけど、ずっと私達の手を握ってると……あなた凍りつくわよ?」

少し笑みを見せながら、デリーがそう言った。

俺がリザードンの両手を見てみると、少しずつではあるがリザードンの両手が凍り始めていた！

「リザードン、手を放せ！ でないと凍り漬けになっちまうぞ！？」

俺はリザードンに手を放すよう言った。

「だ、大丈夫だよ……レオン、ちょっと熱いかもしれないけど、我慢してね……」

リザードンがそう言った直後、急にリザードンの身体が赤く光り出した！ そして本当に熱くなってきやがった（汗）

リザードンの身体の温度が上がってるのか？

凍りついていたリザードンの両手も元に戻っている。

「これで終わらせるよ……オーバーヒート！！」

リザードンが至近距離でデリバード達にオーバーヒートを直撃させた！

デリバード達は地上へ吹き飛んだ。

「やるじゃんかりザードン！」

「あゝ……冷たかったよ！」

両手をぶるぶると振るリザードン。

……せっかくカッコ良いと思ったのに（汗）

「レオン、リザードン！

こっちは片付いたわよ！」

地上からアスカの声が聞こえてきた。

俺達が地上を見ると、オニゴーリとニューラが目を回して倒れていた。

「さすがアスカ！」

「レオン、地上に降りるから掴まってよ」

そう言ってリザードンはゆっくりと地上へと降りていった。

「……アイスボール！」

地上に降りようとしたその時、いきなり俺達にでっかい氷の塊が襲いかかってきた！

「アイアンテール！」

俺は咄嗟とっしとにアイアンテールを使い、氷の塊を破壊した。

「……やってくれちゃったねえ君達」

「もう……さっきの炎で私の袋がちょっと焦げたじゃないのよ」

嘘だろ……至近距離でオーバーヒートを受けた筈なのに、デリバード達は元気そうにピンピンしていやがる……

「お前ら……何であのオーバーヒートを受けて平気でいられるんだ

「？」

「簡単な事……直撃してなかったんだよ。
咄嗟に守るを使ったからね」

守るを？ あのわずかな間に守るを使ったっていうのか……

「さてと……どうする姉さん？」

ニューラもオニゴーリも倒されちゃったみたいだよ？」

腰に両手を当てながら、バードがデリーに聞いた。

「うーん……しょうがないわ、引き上げましょ。

このままバトルしても、疲れるだけだし……あの人には悪いけど、
スイクンは諦めてもらおうわ」

「解ったよ」

デリーの言葉に頷いて答えると、バードは袋から一つの宝玉を取り出した。また穴抜けの玉か？

「それじゃあねえ」

バードが宝玉を掲げると眩しい光が宝玉から発せられた。

それからしばらくして光は消え、デリバード達もいなくなっていた。

……あいつら、ちゃんと戦ったら強いと思うのは俺の気のせいかなあ？

まっ良いか。

「さあ、待たせたな！

早速やろうぜスイクン！」

俺達はまた戦闘体勢に入る。

「……いえ、バトルをする必要はありません」

……はい？

「バトルする必要ないってどういう事だ？」

首を傾げながら俺はスイクンに聞いた。

「最初に言いましたよね？ あなた達があの方に会うに相応しいかどうか試すと……あなた達は、私を捕まえに来たあの者達を追い払いました。」

あなた達なら、あの方に会う資格があると……私は判断しました」

スイクン……

「……夕日の羽を貸して下さい」

「解ったわ」

アスカは夕日の羽をスイクンに貸した。

「……はっ！」

スイクンは夕日の羽を風起こしで発生させた北風で包んだ。
すると、夕日の羽にみるみるうちに変化していった。

「……この七色の羽を持って、頂上が雲で見えないと言われる程の
高い山……遥かなる霊峰へ行きなさい。
彼処に見える山がそうです」

スイクンが見つめる先、そこには頂上が雲で覆われている山があった。

あれが遥かなる霊峰か……

「見ての通り、高くとても険しい山ですが……あなた達なら大丈夫
です」

優しい笑顔でスイクンはそう俺達に言ってくれた。

第二十四話 VS スイクン! (後書き)

レオン

「あのデリバード達は結局何だよ？」

敵キャラ。

まあ、そんなに登場する事はないけど。

レオン

「マジか(汗)」

第二十五話 ラティオスが倒れた!?(前書き)

レオン

「何あのタイトル!?!」

見ての通りだよ。

ポツチャマ

「ラティオスどうなっちゃうの!?!」

それはここでは言えないよ。

第二十五話 ラティオスが倒れた!?

「うわぁ……頂上が雲で隠れててマジで見えねぇよ……」

今俺達はホウオウがいる遥かなる霊峰の前に来てるんだが……この山マジで高すぎだよ……

「ここにホウオウがいるんだね……でも高いね……」

隣にいたポツチャマが苦笑いしながらそう言った。

「何か……登る気が失せるわね……」

あっアスカがすでにやる気を失ってやがる……でも登らなきゃホウオウには会えない訳だし……

「アスカ、頑張……」

「頑張ろうよアスカ。」

あとちょっとでホウオウに会えるんだからさ」

俺が励まそうと思ったら先にリザードンに言われてしまった。

「……そうね、ここまで来たんだもの。」

良し、張り切って行くわよ!」

リザードンの励ましでアスカはやる気になったみたいだ。

「……はぁ……はぁ……はぁ……」

「兄さん、大丈夫?」

あれ……なんかラティオスが辛そうにしてる。

ラティオスが心配そうな表情でラティオスに寄り添っている。

「おい大丈夫か?」

俺はラティオスに聞いた。

「……ちょ、ちょっと頭がボーっとして……」

頭がボーっと……良く見たら、ちょっと顔が赤くなってるなラティオスの奴……

「ちょっと見せてみて」

アスカがラティオスに近寄り、つるのムチを伸ばし、ラティオスの額ひたいにつるのムチを当てる。

「やだ、凄い熱じゃないの!?!」

驚いた表情をするアスカ。

「だ、大丈夫ですよ……これくらい……何ともないですから……」

そうは言うけど、かなりふらふらしてるじゃねえか。

「ちょっと横になりなさいラティオス。

休まなきゃダメよ」

アスカはラティオスに横になる言う。

「……は、はい……」

ふらふらとしながらも、ラティオスは頷き、横になった。

「リザードン、尻尾の炎の火力をあげて。」

ここは寒いから、ラティオスの身体を温めてあげないと」

「解ったよアスカ」

リザードンは尻尾の炎の火力をあげ、尻尾をラティオスに近づけた。

「ラティアス、そのバッグから癒やしの種を取ってくれる？」
たね

「あっはい！」

ラティアスはアスカのバッグの中から癒やしの種を取り出し、アスカに手渡した。

「あとはこれを食べやすいように……葉っぱカッター！」

アスカは葉っぱカッターで癒やしの種を細かく切った。
それをラティオスに食べさせる。

「最後に……アロマセラピー」

アスカはラティオスにアロマセラピーを使った。うわぁ………すっ

げー良い花の香りがするぞ……

「少し眠りなさいラティオス」

アロマセラピーを使い続けながらアスカはそう言った。

ラティオスは頷いて答え、気持ちよさそうにして眠りについた。

「……OK、これで少しは良くなるでしょ」

アロマセラピーを継続させたまま、アスカはそう言った。

「アスカさん、ありがとうございます！」

頭を下げてお礼を言うラティアス。

「私達は仲間でしょ？」

これくらいは当然よ」

優しい笑顔をしながらアスカはそう言った。

「あっそうだレオン、ポツチャマ。」

あなた達は先に遙かなる霊峰に向かってて」

「って俺達だけでかよ!？」

いきなりそんな事を言われたんで驚いた俺達。

「ラティオスがこんな状態じゃあ連れていけないでしょ。」

それにリザードンにはラティオスを温めてもらわないといけないし、私もアロマセラピーで少しでもラティオスの回復を手伝わないとな

らない。

ラティアスは……言わなくても解るでしょ？」

アスカに言われ、俺はラティアスを見る。

凄く心配そうにラティオスを見つめている。

「……解ったよ」

「悪いわね、ラティオスが回復したらすぐに追いかけるから」

遥かなる霊峰。

先に遥かなる霊峰に入った俺とポツチャマ。

「……ねえレオン、本当に僕達だけで大丈夫かなあ？」

俺の隣でポツチャマがすげー不安そうにしている。

「しょうがねえだろ。」

ラティオスがあんな状態なんだからよ」

今ラティオスに無理させたら余計に具合が悪くなるしな……

「それは……そうな……んだけど……」

ん？ 何で言葉が途切れ途切れなんだ？

「どうしたポツチャマ？」

「……すー……すー……」

って寝てる！？

「おいポツチャマ！

起きろって！」

俺はポツチャマの身体を揺すって起こそうとした。
だけど、一向に起きる気配がない。

どうなってんだよ？

「ん？ 何だこれ？」

ポツチャマの身体に何か粉みみたいな物が付いてる……

「おんやゝ？ 眠ってない奴がいるなゝ？」

誰がいる！

「誰だ!？」

俺は大きな声で叫ぶ。

「眠らせた後でゆっくりと始末しようって思ったけど……しょうがない」

岩陰からポケモンが姿を現した。

数は三匹……しかし、なんだよこのポケモン達？　まるでキノコみたいな奴らだな？

「何者だお前達？」

俺はいつでも戦えるように構えて、キノコみたいな奴らを睨みつけながら質問した。

「俺達はパラセクト三兄弟。ここいらは俺達の縄張りだ。縄張りに勝手に侵入したお前達を許す訳にはいかないなあ……」

パラセクトっていうのか……さっき眠らせてって言ってたな？　って事は、ポッチャマはこいつらの技かなんかを受けたから眠っちゃまったのか……

「……俺達をどうするつもりだ？」

「決まってるんだろ？」

お前達には……ここで消えてもらう!」

三対一か……ちょっとキツイけど、やるしかねえよな。

「いくぞ兄弟！」

『エナジーボール！』

三匹のパラセクトが緑色をしたエネルギー弾を三発、俺に向けて放ってきた。

「高速移動！」

俺は高速移動で素早く動き、エナジーボールの回避した。
次はこっちの番だ！

「10万ボルト！」

俺は一匹のパラセクトに10万ボルトを直撃させた。

「どうだ！」

「うゝん？ 何かやったか？」

なっ！？ 平気な顔してやがる！？

「草タイプを持ってる俺達に電撃は効かねえよ」

パラセクトが自慢気に言ってるやがる……草タイプか……確かに、
草タイプに電気タイプの技は効果が今ひとつ……

「ならこれでどうだ！
電光石火からアイアンテール！」

俺は電光石火で一匹のパラセクトに素早く接近、そして尻尾を鋼のように硬くし、パラセクトの身体に叩きつけた！

パラセクトは吹き飛んで岩に身体を打ち付け、その場に倒れた。

「まずは一匹！」

「……よくも弟を……くらえ、破壊光線！」

怒った残りのパラセクトのうちの一匹が、俺に向けて破壊光線を放ってきた！

さすがにそれを受ける訳にはいかねえって！

「高速移動！」

俺はまた高速移動で素早く動き、破壊光線を回避した。
そしてパラセクトの背後に回り込む。

「もう一発、アイアンテール！」

俺は背後からアイアンテールをパラセクトに叩きつけた。

パラセクトは吹き飛び、もう一匹のパラセクトに激突した。

二匹のパラセクトは吹き飛んだ。

「これで決めるぜ、雷！」

俺は二匹のパラセクトに向けて、さっきの10万ボルトよりも強力な雷を放った！

いくら草タイプでもこの雷なら！

雷はパラセクト達に直撃、小規模の爆発が発生した。

「……ま、負けた……がくっ……」

ふう……終わったな。

「う……ん……あれ……」

僕寝ちゃった？」

眠そうに目を擦るポツチャマ……ってか、今起きたのかよ……

「ん？ このパラセクト達どうしたの？」

倒れているパラセクト達を不思議そうな表情で見つめるポツチャマ。

「あ……こいつらはほっというて先に行くぞポツチャマ」

右手で頭を掻きながら俺は先に進んだ。

「あ……ちよつと待ってよレオン！」

何があったのか教えてよ……！」

俺のあとをポツチャマが慌てて追ってきた。

第二十五話　ラティオスが倒れた！？（後書き）

レオン

「ホウオウ出てこなかったし（汗）」

あんまりとんとん拍子にいくのもあれかなあ？
って思ったのでこんな感じに。

ポツチャマ

「僕活躍してない（汗）」

レオン

「作者、まさかまたポツチャマを空気にするつもりか？」

そんな事はないさ……多分ね（笑）

レオン

「多分言うたこの人！？」

第二十六話 VS ホウオウ!

さっきのパラセクト三兄弟を倒してからしばらくして、ようやく俺とポツチャマは遥かなる霊峰の頂上に到着した。

「つ、疲れた〜……」

大の字になってポツチャマが倒れた。

まあ、確かに疲れたよな……おまけにここ空気が薄いし……

「ほらポツチャマ、オレンの実だ」

俺は体力を回復してくれるオレンの実をポツチャマに手渡した。

「ありがとうレオン」

ポツチャマはオレンの実を食べる、また美味そうに食うなあ。

「さて、ここにホウオウがいる筈だけど……」

ホウオウを捜す為に辺りを見回す俺。

だけど、辺りは雲のせいで全然見えない。

「全然見えないなあ……」

視界がもう最悪だよ……これじゃあホウオウを捜そうにも……

「あれ? レオン、トレジャーバッグの中が光ってるよ?」

「えっ？」

ポツチャマに言われ、俺はトレジャーバッグを確認してみる。
光の正体はアスカから預かった虹色の羽だった。何で虹色の羽が
いきなり光って……

「……な……き……」

ん？ 今何か聞こえたような……ポツチャマか？

「ポツチャマ、今何か言ったか？」

「えっ？ 僕は何も言ってないよ？」

ポツチャマじゃない……じゃあ今のは何よ？

「……何をしに来た……お前達……」

また聞こえた……もしかして……

「ホウオウか？」

俺はホウオウの名前を呼んだ。

すると、急に風が吹き始めて、辺りを浮遊していた雲が流されて
いった。おかげで視界が良くなった。

「あつレオン彼処！？」

ポツチャマが空を指しながら俺に言った。
俺はポツチャマが指している方を見してみる。

そこには身体が七色に輝いている大きな鳥ポケモンがいた……す
っげー……こいつがハウオウなのか……

「我が名はハウオウ……虹を空に掛ける者……もう一度問う、お前
達はここに何をしにきた？」

ハウオウが俺達の前に舞い降りた。

「俺達はあるに会いに来たんだ。
ちよっと頼みたい事があってさ」

「……なるほど……良いだろう、その頼み聞いてやる」

マジ!? バトルとかそういうの無しで!?

「本当か！」

「ただし……」

ん? 何で構える?

「我と戦い、勝つ事が出来たらな」

結局バトルかよ……

「はあ……しゃあない、やるぞポツチャマ！」

「うん！」

俺とポツチャマも戦闘体勢に入る。

「ちょっと待ったー！」

今度は何？

俺とポツチャマは声が聞こえた方に振り向く。

そこには、こっちに向かって走ってくるアスカ達がいた。

「ラティオス！ 身体はもう大丈夫なのか？」

「はい、アスカさん達のおかげで。

ご心配お掛けました」

もう大丈夫そうだな。

元気になって良かったよ。

「お前達は？」

「私達はこのピカチュウ達の仲間よ。

このバトル、私達も参加させてもらうわ。

文句ないわよね？」

「う、うむ……まあ良からう」

ホウオウがアスカの勢いに負けたよ……アスカ、ある意味すげー

……

「それでは……何処からでも来るが良い！」

戦闘体勢に入るホウオウ。

「遠慮なく行くわよ！
エナジーボール！」

アスカが緑色をしたエネルギー弾をホウオウに向けて放った。

「火炎放射！」

ホウオウは口から灼熱の炎を吐き出し、アスカのエナジーボールにぶつけた。

二つの技はぶつかり合った瞬間爆発した。

火炎放射を使うって事は……ホウオウは飛行タイプ以外に炎タイプを持ってんのか……なら！

「ポッチャマ、合わせ技やるぞ！」

「解った、ハイドロポンプ！」

「10万ボルト！」

ポッチャマの口から吐き出された大量の水に俺は10万ボルトの電撃をプラスした。

水と電気の合わせ技、飛行タイプと炎タイプのホウオウに当たれば大ダメージを与えられる筈！

「当たらなければ問題は無い！」

あっ空に飛んで回避しやがった！

「リザードン、ラティアス、ラティオス！
そっちに行ったわよ！」

アスカが叫ぶ。

空を見てみると、いつの間にかリザードン達が空に待機していた。

「炎の渦！」

「10万ボルト！」

「水の波動！」

ラティアスが放った水色のエネルギー弾にリザードンの炎の渦がまわりつき、さらにラティオスの10万ボルトが合わさって強力な合体攻撃が完成。ホウオウに向かっていく。

「ならば、オーバーヒートだ！」

ホウオウはさっきの火炎放射よりも強力な炎を吐き出し、リザードン達の合体攻撃にぶつけた。

二つの技がぶつかり合った瞬間凄まじい爆発が発生した。

「うわぁ！？」

爆発の衝撃でリザードン達が吹き飛ばされた。

「ゴッドバード！」

ホウオウの身体が眩い光に包まれた。

そして凄い勢いでリザードン達に向かっていく。まずい、あんなの受けたらリザードン達がやられる！

「アスカ、ライコウの時みたいに俺とポツチャマを投げろ！」

「解ったわ！」

アスカは俺とポツチャマの身体につるのムチを巻きつける。

「いっけえええ！！」

アスカは思いっきり俺達を投げた。

投げられた俺達はホウオウの前に来た。

「何！？」

「くらえ、10万ボルト！」

「ハイドロポンプ！」

俺とポツチャマはまた10万ボルトとハイドロポンプの合わせ技で攻撃した。さすがにこの奇襲は回避出来ないだろ！

「ぐっ！？」

良し、俺とポツチャマの合わせ技がホウオウに決まったぜ！

この攻撃を受けたホウオウは地上に吹き飛んでいき、地面に身体を激しく打ちつけた。

「……ところでレオン、この後はどうするの？」

首を傾げながらポツチャマが質問してきた。

「ふっ……何も考えてないぜ」

腕組みしながら俺は答えた。

「そんな自信たつぷりに言わないでよ!？
つてあああ!？」

空を飛べない俺とポツチャマはそのまま地上に落下していった。

「レオン! ポツチャマ!」

そこにリザードンがやって来て俺達をキャッチしてくれた。

「あ、ありがとうリザードン!」

お礼を言うポツチャマ。

「……計算通りだな」

「嘘だ!？」

ポツチャマにツツコミを入れられてしまった。

それを見てリザードンは苦笑いする。

「と、とりあえず降りるよ」

リザードンはゆっくりと地上に降りた。
ラティオスやラティアスも一緒だ。

「アスカ、ホウオウは?」

リザードンから降ろしてもらった俺はアスカにハウオウの事を聞いた。

「ハウオウなら目を回してるわよ」

アスカがつるのムチでハウオウを指しながらそう言った。
確認してみると、本当にハウオウは目を回していた。

「たった一発で？」

「あなたとポツチャマの合体攻撃はハウオウにとって効果抜群の攻撃。」

それにゴッドバードで加速したスピードも加わってハウオウには凄まじいダメージがあった筈よ。

あんなの受けて倒れない方がおかしいわよ」

まあ確かに……とにかく、俺達勝ったんだな！

「……うつ……」

あっハウオウが気がついた。

「大丈夫かハウオウ？」

「……嗚呼……^{ああ}だが、今は効いたぞ」

少しフラフラしながらハウオウが答えた。

「……約束だ。お前達の頼み事を聞こう」

「実は、あんたに会いたがってるポケモンがいるんだよ。そいつに会ってくれないか？」

俺は単刀直入に言った。

「良いだろう。だが、今日は疲れた……明日の朝、その者に会おう。すまないが、明日になったらまたここに来てくれぬか？」

俺達は頷いて答えた。

「じゃあ、今日は疲れたし私達も家に帰って休みましょ？」

「そうだな」

アスカの提案で、俺達はアスカの家に帰る事にした。

いよいよ明日で依頼完了だな……パッチール、きつと喜ぶだろうなあ。

第二十七話 ギルドへの帰還

何とかホウオウを倒して無事頼み事を聞いてもらえた俺達。
今はアスカとリザードンの家に戻って休んでるところだ。

そろそろホウオウがいる遥かなる霊峰に向かった方が良い時間な
んだけど……

「……すー……すー……」

「……うーん……アスカ……むにゃむにゃ……」

俺以外の皆は幸せそうな顔をして寝てるんだよね……

「……うーん……つつく」

「痛っ!？」

夢の中でバトルでもしてるのか、俺はポツチャマのつつく攻撃を
お尻に受けた。

ってかマジで痛いよ!？

「つたくもう……」

俺はポツチャマから少し離れる。

俺が何故一番最初に起きたのか……それはポツチャマの寝相の悪
さにある。気持ち良く寝てる時に今みたいにポツチャマがつつくを
してきやがる……おかげで朝早くに起きちまったよ……

「……ちよつと外の空気でも吸うかな」

俺はゆっくりと立ち上がり、アスカ達を起こさないようにしながら外へ向かった。

「うーん……滅茶苦茶良い天気だなあ」

空気を吸いながら俺は大きく伸びをする。

いやーしかし本当に良い天気だなあ。

雲一つ無いし、空気は美味しいし、虹が出てるし……えっ虹？

「何で虹が？ 昨日は雨とか降ってなかったよなあ……」

腕組みをして首を傾げる俺。何で虹が出てるんだろ……ってあれ？
もしかしてあの虹……こっちに向かって来てないか？ いやいや、
虹が動くとかそんな訳が……待てよ？ もしかして……俺は目を凝
らして見る。

「……あっやっぱりそうだ！ おーいホウオウ！」

俺は右手を上げ、左右に振りながらそう叫ぶ。

虹の正体はホウオウだったんだ。

ホウオウは俺の前にゆっくりと降下して来た。

「どうしたんだよホウオウ？」

「お前達がなかなか来ないから迎えに来た」

マジっすか……ってか良くアスカの家の場所が解ったな？

「ちょ、ちよつと待っててな。今アスカ達起こしてくるから」

俺はホウオウを待たせ、アスカ達を起こす為にまた家の中へ戻る。

「おい、起きろよポツチャマ」

俺はポツチャマの身体を揺^ゆする。

「うゝん……もう……何レオン？」

眠そうに目を擦^{こす}りながらようやくポツチャマが起きた。

「出発すつから支度しろ。ホウオウが迎えに来たんだよ」

「……うゝん……えっ!？」

ホウオウが!？」

良し、目が覚めたな。

「ポツチャマはラティオスとラティアスを起こしてくれ。俺はアスカとリザードンを起こすから」

「解った」

ポツチャマは眠っているラティオス達の方へ向かった。
さあ、俺はアスカ達を起こさないと。

「リザードン、起きろ」

俺はリザードンの身体を揺すって起こそうとした。

「……ぐぐ……ぐぐ……」

……ダメだこりゃ、全然起きる気配無いぞ……なら、これならどうかな？ 俺はリザードンの肩によじ登って……

「おい、アスカが他の格好良いポケモンといちゃついてるぞ」

リザードンの耳元で俺はそう囁いた。

「何だって!？」

「うわっ!？」

リザードンが飛び上がって起きるもんだから俺はバランスを崩してリザードンの肩から地面へ落ちた。

痛い……思いっきり背中打ちつけた……

「誰だ、アスカといちゃついてるってポケモンは!？」

「イタタタタ……嘘に決まってるんだろリザードン……」

俺は背中を右手で押さえながらリザードンにそう言った。

「へっ？ そうなの？」

マジで信じたのな……

「全く……あとはアスカだけだな。

リザードン、アスカ起こすの手伝えよ」

「えっ？ あ、うん」

俺とリザードンは寝てるアスカの所へ。

「アスカ、起きて」

リザードンが優しくアスカの身体を揺すって起こそうとしたけど、アスカはちょっと動いただけでまたすぐに寝てしまった。

「おいアスカ、起きろって！」

「……うるさいわね……あと五分寝かせなさいよ……」

……何で俺の時は怒るんすか……

「そ、そう言うなよアスカ、もう外でホウオウが……」

「……ホーホーが何よ？」

うわゝ……不機嫌そうな顔してるよアスカ……しかもホウオウとホーホーを聞き間違えてるし……

「違うよアスカ、ホーホーじゃなくてホウオウ。

外でホウオウが待ってるんだって」

おっラティオスとラティアスを起こしてくれたポツチャマが俺の代わりに言ってくれた。

「えっホウオウが？」

首を傾げるアスカ。

「俺達が来るのが遅いからってホウオウが自分から来たんだよ」

俺はアスカにそう説明した。

「……大変、急いで支度しなくちゃ!？」

アスカが慌ててバッグをつるのムチで持ちながら、必要な物をバッグに詰め込み始めた。

支度を始めてから五分が経過……

「よし、準備OK!」

やっと準備出来たみたいだなアスカ。

「じゃあ早く行こうぜ。」

ホウオウが待ってるからさ」

俺達はホウオウが待ってる外へ向かった。

「悪いホウオウ！」

やっと準備出来たよ」

俺は両手を合わせ、謝りながらそうホウオウに言った。

「……まあ、別に良いが……それで、我に会いたいと申す者は何処にいるのだ？」

あゝまだ言っていなかったっけ？

「海を越えた先にある大陸にいるんだ」

俺はそう説明した。

「なるほど、向こう側の大陸か」

ん？ その口振りだと行った事があるみたいだな？

「行った事あるのか？」

「昔な。それより、そろそろ出発しよう」

ホウオウは飛び立つ体勢に入った。

俺とポツチャマはラティオスの背中に乗る。

そしてアスカは毎度お馴染み、リザードンに運んでもらうみたいだ。

「そんじゃ、プクリンのギルド目指して出発！」

俺達はハウオウと一緒にパッチールが待つ、プクリンのギルド目指して出発した。

アスカの家から出発してから約一時間が経過。
ようやくプクリンのギルドがある大陸の上空にやって来た俺達。

「えっとプクリンのギルドは……あ、あったあった！」

俺は地上に見えたプクリンのギルドを指差す。
何か久しぶりに見た感じだなあ。

「ラティオス、あのギルドの前に降りてくれ」

「解りました」

ラティオスはゆっくりとギルドに向かって降下を始めた。
それに続いてラティアス、アスカを運んでるリザードン、ホウオ
ウも降下を始めた。

「はい到着、二人共、もう降りて平気ですよ」

ギルド前に着陸した俺達。俺とポツチャマはラティオスの背中か
ら飛び降りる。

「ふう〜……やっと着いたね」

リザードンが額ひたいから流れる汗を右手で拭いながらそう言った。
リザードン、お疲れさん。

「ここに我に会いたいと申す者がいるのだな？」

首を傾げながらホウオウが聞いてきた。

「嗚呼ああ、今呼んでくるからちょっと待っててくれ。行くぞポツチャ
マ」

俺とポツチャマはパツチールを呼んでくる為にギルドの中へと入
ろうとした。

「あああ!？」

入ろうとしたらいきなりギルドの出入り口付近から悲鳴にも近い声が聞こえてきた。

一体何だよ？ 気になった俺はギルドの出入り口に振り向く。

「あっパッチールじゃん！」

そこにいたのはハウオウに会いたいと言った依頼人のパッチールだったんだ。

何かハウオウを指差しながら口をパクパク動かしてんだけど……

「ま、まままままさか……あ、あの羽のも、持ち主って……」

すっげー動揺してんなパッチール。

「そうだよ。君が会いたがっていた羽の持ち主はハウオウだったんだ」

ポッチャマがハウオウを指しながら笑顔でそうパッチールに伝えた。

「そなたが我に会いたいと申していた者か。
我はハウオウ、虹を空に掛ける者……」

「あ、あ、あゝ……」

ってパッチールが倒れた!？

「お、おいパッチール!？」

慌てて俺達はパッチールに駆け寄る。

「あゝらら、感動し過ぎて気絶しちゃってるわねこれ」

苦笑いしながらアスカが言った。

「わ、我が何かしたか？」

ちよつとホウオウが困った表情をしている。

「あんたは別に何もしてないさ。ちよつとパッチールが嬉しさのあまり気絶しただけだし。」

多分、パッチールはあんたに聞きたい事がいっぱいあると思うから、目が覚めるまで一緒にいてあげてくれないか？」

俺がそう頼むとホウオウは頷いて答えてくれた。まあ、何はともあれこれで依頼完了だな。

……明日からまたペラッとかに嫌み言われんのかなあ……あゝ
そう考えたら何か萎^なえるなあ……

第二十七話 ギルドへの帰還（後書き）

レオン

「はあ……」

ど、どうしたため息何か吐いて？

レオン

「またペラップに嫌み言われると思うとさ……はあ（汗）」

萎えてるよ（汗）

ポッチャマ

「でも、今回の依頼は楽しかったよね。
海を渡ったり様々な所に行って探検したり。
何か一人前の探検隊になった気分だよ！」

レオン

「……確か……もしかしたら、この依頼成功を期にギルドを卒業出来たりして！」

あゝそれは無い無い。

レオン&ポッチャマ

「夢見させてよ（汗）」

第二十八話　ルリリを救え！　VSスリープ！

ホウオウをプクリンのギルドまで連れてきて、パッチールに会わせる事が出来た俺達。

……なのは良いんだけど、パッチールが感激のあまり気絶しちゃったのよ。まあ、パッチールが目を覚ますまでホウオウと一緒にいてくれたんだけどさ。

ホウオウって優しいんだぜ？　自分の翼にパッチールを寝かせてあげたりとかさ。

しばらくしてようやく起きたんだけど、ホウオウに寄り添って寝てた事に気づいたパッチールはまた感激しちゃってさ……んでまた気絶しちゃったのよ。

起きたと思ったらまた気絶……忙しい奴だよパッチールって。

まあすぐに目を覚ましたんだけどさ。

そのあとはパッチールの奴ホウオウに色々頼み事してたよ。

まずはサイン下さいって言ってサイン色紙とペンをホウオウに渡してさ。だけど、ホウオウって鳥じゃん？

どうやってサイン書くんだよって思ったんだけど……ホウオウは嘴でペンを銜くわえて、サイン色紙はパッチールに持ってもらって器用くちばしに書いたんだ。

あとはホウオウの背中に乗って空を飛びたいとか……パッチールの頼み事をホウオウは嫌な顔せずに全部聞いてたよ。

本当に優しい奴だよホウオウ。

それからパッチールの頼み事を全部叶えてあげたホウオウはまた遥かなる霊峰に帰っていったんだ。そしてパッチールは満足そうな表情をしながら、また新しい場所を探して探検しに行っちゃったんだ。

それから次の日の朝。

『みーっつ！ 皆笑顔で明るいギルド！』

久しぶりの朝の朝礼……やばい、超眠いんだけど……

「それじゃ皆、仕事に掛かるよー！」

『おー！』

やっと朝礼が終わった……

「ふぁゝ……眠いね、レオン……」

俺の隣でポツチャマが眠そうに目を擦こすっている。

「こらお前達！ 眠そうにしてないで仕事しな仕事！」

ペラップが怒鳴ってきた。

「解ってるよ……行こうぜポツチャマ」

「うん……」

俺とポツチャマは依頼掲示板があるギルドの地下一階に向かった。

早速ギルドの地下一階にやって来た俺達。

そして何か依頼が無いか掲示板を眺めるんだけど……

「依頼無いし!？」

先に他の皆が依頼を受けちゃったみたいで掲示板には何も依頼が書かれた紙が貼られてなかったんだ。

「あゝ今は他の皆が依頼を受けたから何も無いでゲスよ?」

俺達の背後から急に声が聞こえてきた。

振り向いたらそこにはビツパがいた。

「えゝじゃあ僕らどうすれば良いの?」

困った表情をしながらポツチャマはビツパに聞いた。

「多分、しばらくしたらまた新しい依頼がくると思うでゲス。

それまでトレジャータウンで買いい物でもしてたらどうでゲスか?」

うゝん……まあ何もしないよりはマシかな?

「んじゃそうするか。

行こうぜポツチャマ」

「うん」

新しい依頼がくるまでトレジャータウンで買い物する事にした俺達はギルドを出ようとした。

「あら？　まだ仕事に行ってなかったのあなた達？」

ちょうどその時に地下二階からアスカとリザードンがやって来た。

「依頼が無かったんだよ。仕方ないから新しい依頼がくるまでトレジャータウンで時間を潰そうと思ってさ……そういえばラティオスとラティオスはどうした？」

朝から姿を見ないんだけど？」

昨日の夜までは俺達と一緒に寝てた筈なんだけど……

「あの二人なら一度私達の地元に戻ってもらったのよ。レオン達がまだ寝てた朝の時間にペリッパーが手紙を運んできてくれたの。

手紙見たらアブソルからでね、ちょっと手伝ってほしい仕事があるから来てもらいたいって書いてあって……」

「それでラティオス達を行かせた訳か……ってかさ、それアスカとリザードンに来てほしいって事じゃないのか？
良いのか、ラティオス達に行かせて？」

首を傾げながら俺は聞いた。

「あの二人なら任せられるわよ。それに、私達はこれから行かなきゃならない場所があるからね」

行かなきゃならない場所？

「何処に行くの？」

ポツチャマがアスカ達に質問した。

「キザキの森って場所だよ。そこでゲンガー達の姿を見たって情報があったってプクリンから聞いたんだ」

ポツチャマの質問にリザードンが答えてくれた。キザキの森……そこにゲンガー達が……

「俺達も一緒に行こうか？」

「いえ、私達だけで良いわ。あまり大勢で行くとゲンガー達に感づかれるかもしれないし……それに、この情報が嘘って可能性もあるしね」

あっさり断られた。

それはそれで何か悲しいんすけど……

「じゃあ行ってくるわね。あなた達、しっかり働きなさいよ」

そう言ってアスカ達はギルドから出て行ってしまった。

「……行っちゃったよ……まあしゃあないか。

俺達もトレジャータウンに行こうポツチャマ」

「そだね」

アスカ達と別れた後、俺達はトレジャータウンに向かった。

トレジャータウンに着いた俺達はとりあえず何か良い商品が無いか探す為にカクレオンの店に来ていた。

「いらっしゃーい♪

レオンさんにポツチャマさん、何をお探しで？」

「うーん……特に探してる物は無いんだけど、何か新しい商品とか入ってたりしますか？」

ポツチャマがカクレオンに聞いた。

「今日は新しい商品は入ってないですねーすみません」

申し訳なさそうにしながらカクレオンが答えた。新しい商品はない……ってか、俺達あまりお金持っていないから商品があったとしても買えるかどうか解らないけどな。

「カクレオンさーん！」

ん？ 何処からか声が……俺は声がした方に振り向く。

そこには二匹の青いポケモンがいた。

二匹共尻尾の先がボールみたいな形をしてる。

「おや、マリルちゃんにルリリちゃんじゃないか！」

カクレオンが笑顔で二匹を迎えた。

マリルにルリリって言うのか……結構可愛いじゃん。

「リングを下さい」

「はいよ、いつも偉いねえ」

お金を受け取るとカクレオンはリングが入った袋をマリル達に手渡した。

「ありがとうございます！ 行こう、ルリリ」

「うん！」

リングを受け取ったマリル達は嬉しそうにしながら歩いていった。

「ふふ、可愛いねあの二人♪」

「だな。カクレオン、あの子達は良くここに買い物しにくるのか？」

俺はカクレオンに聞いた。

「ええ、あの子達の母親が体調を悪くしたらしくて、いつもここで母親の為にリングを買いに来るんですよ。いや、親孝行な良い子達ですよ」

なるほど。

「カクレオンさーん！」

ん？ さっきのマリル達が慌てた様子で戻って来たぞ？

「どうしたんだい？」

首を傾げながらカクレオンがマリル達に聞いた。

「リングが一つ多いです！」

「僕達、こんなに買ってません！」

どうやらリングが一つ多く入ってたみたいだな。

「それはうちのサービスだよ。二人で仲良く食べな」

「えっ良いんですか？」

マリルが首を傾げながらカクレオンに聞いた。
カクレオンは頷いて答える。

「ありがとうございます！」

マリル達は深々とお辞儀するとまた歩き出した。カクレオン、結構良い事するじゃん。

「わっ!？」

あっルリリが転こけた。転けた拍子に尻尾で掴んでいたリンゴが俺の所に転がってきた。

俺はリンゴを拾ってルリリの所へ。

「大丈夫か?　ほいリンゴ」

俺はルリリにリンゴを渡そうとした。

「あ、ありがとうございます」

ルリリは俺にお礼を言うのと尻尾でリンゴを掴んだ。その時、ルリリの尻尾が俺の手に触れた。

ルリリの尻尾に触れた刹那せつな、突然俺は目眩めまいに襲われた……これって……もしかして何か見えるのか?

『……た、助けて!？』

目眩が治まった……今のは声だけだったけど……助けを求めてた……あの声は……ルリリ?

「おい!　何してるんだルリリ?　帰るぞ?」

「あっうん今行く！」

マリルに呼ばれたルリリはマリルの所に走っていった。

「……今のは……」

「どうしたのレオン？
ボーっとしちゃってさ」

隣にいたポツチャマが俺の顔を覗き込むようにしながら聞いてきた。

俺はさっき聞こえた声についてポツチャマに説明した。

「本当に!？」

「ああ嗚呼。だけど、その声が本当にルリリなのかどうかまでは解らないんだ」

俺は正直にポツチャマに言った。

「でも、その声はルリリかもしれないんでしょ？
だったら、ルリリ達を追いかけようよ！」

……だよな。

「解った、行こう！」

俺達はさっきのルリリ達を追いかける為に走った。

トレジャータウンから出てギルドや海岸などに繋がっている十字路まで来た俺達。

「あっレオンあれ!？」

「なっ!？ マリル!？」

十字路にはマリルが倒れていたんだ。
慌てて俺達はマリルに駆け寄る。

「おいマリル! しっかりしろ！」

俺はマリルの身体を揺すって起こそうとした。だけど、マリルはなかなか起きてくれない。

「もしかしたら何か技を受けて眠らされてるのかも……レオン、確かカゴの実がトレジャーバッグに入ってた筈だからそれを食べさせ

てみて」

「解った！」

俺はバッグからカゴの実を取り出し、食べやすいように千切^{ちぎ}ってマリルの口の中に入れる。カゴの実ってのは眠り状態を回復してくれる木の实なんだ。

「……うーん……」

おっ早速木の実の効果が出たみたいだな。

「大丈夫か？」

「あなた達はさっきの……あっそうだルリリ!？」

慌てた様子でマリルはキョロキョロと辺りを見回す。

「ルリリはここにはいないみたいだが……一体何があったんだ？」

「僕とルリリが家に帰ろうとしたら、急に目の前に変なポケモンがやってきてルリリを連れて行こうとしたんです。」

僕はルリリを助けようとしたんですけど、催眠術を受けてしまって……」

催眠術……相手を眠らせる技か。

「なあマリル、ルリリを連れ去ったポケモンは何処に行ったか解るか？」

「……あつ！　　そういえば僕が眠りかけた時にそのポケモン、ルリ
リにトゲトゲ山に来てもらうって言ってたような……」

トゲトゲ山……

「その山が何処にあるか解るか？」

俺の質問にマリルは頷いて答えてくれた。

「案内してくれるかマリル？」

「解りました、こっちです！」

俺達はマリルと一緒にトゲトゲ山に向かった。

「ここがそうなんだな？」

「はい」

俺達はマリルの案内でトゲトゲ山の前に来ていた。ここにルリリが……

「よし、俺達がルリリを助け出してくる」

「ぼ、僕も行きます！」

マリルも俺達と一緒にいきたいらしい。
気持ちは解るけど……

「マリル、君はここで待ってて。必ず僕達がルリリを助けてくるから」

「でも……」

「大丈夫、僕達を信じて。ね？」

優しい笑顔で言うポツチャマ。何か格好良いぞポツチャマ。

「……解りました、ルリリをお願いします！」

「うん！ 行こうレオン！」

「おう！」

俺達はトゲトゲ山を登り始めた。

トゲトゲ山を登り始めてから約十分。

ここまでノンストップで走り続けた俺達はもうすぐでこの山の頂上に到着する所まで来ていた。

アスカ達と一緒に遥かなる霊峰やいろんな場所を探検したおかげで体力がかなりついたみたいだ。まだまだ余裕だぜ！

「あっレオン、彼処に誰がいるよ！」

ポッチャマが指してる先には二匹のポケモンがいた。一匹はルリリだ！

じゃあ……あの隣にいんのがルリリを攫さらった野郎か！

「おいお前！」

俺は大きな声でそのポケモンを呼び止める。

「ん？ 誰だお前ら？」

「俺達は探検隊だ、ルリリを返してもらおうぞ！」

俺とポツチャマは戦闘大勢に入る。

「お前達が探検隊？」

今までいろんな探検隊を見てきたが……また随分と弱そうな探検隊だな」

……ムカつくんだけどこいつ。

「こいつは返す訳にはいかないな。この先にある財宝をこのスリープ様が手に入れるまではな！」

自分の事を様をつけて言ってるよこいつ……

「こいつを返してほしいんだたら……力づくでやってみな！」

「電光石火！」

俺は電光石火で素早く動き、一気に接近。

だけど向かった先はスリープじゃなくルリリだけだな。俺はルリリを抱えてスリープから離れた。

「あっお前!？」

「ハイドロポンプ！」

スリープが俺に気を取られている時にポツチャマがハイドロポンプで攻撃、スリープは近くにあった岩まで吹き飛んだ。

「お、お前らいきなり手を出すとか卑怯だぞ!？」

逆ギレかよ……

「お前が力づくでって言ったんだろ？
大丈夫かルリリ？」

ルリリは頷いて答えてくれた。よほど怖かったのか目が潤んでいる。

「ちよつとここで待っててくれな？
すぐに終わらせるから」

俺はルリリを岩陰で待たせ、電光石火でスリープに突っ込んでいった。

「下でマリルが待ってんだ。速攻で終わらせてもらう、アイアンテール!」

俺は尻尾を鋼のように硬くして、スリープの頭に叩きつけた。
アイアンテールを受けたスリープはフラフラしだした。

「ポッチャマ!」

「OK、ハイドロポンプ!」

「10万ボルト!」

ポッチャマのハイドロポンプと俺の10万ボルトの合わせ技をス

リープに直撃させた。
スリープは倒れた。

「よし、終わり！」

「レオン、ちょっとやりすぎたんじゃない？」

「悪い奴にはこんくらいが丁度良いんだよ。
ルリリ、もう大丈夫だぞ」

俺が呼ぶとルリリは岩陰から出てきて俺達の所にやって来た。

「た、助けてくれてありがとうございます！」

「良いつて。当然の事をしただけだからさ。」

さあ、君の兄ちゃんが待ってるから早く帰ろうぜ」

俺がそう言うのとルリリは嬉しそうに頷いた。

「レオン、帰るのは良いけどあいつどうする？」

倒れているスリープを見ながらポツチャマが言った。

「結構強めに攻撃したからすぐには起きないだろ。まずはルリリを
マリルの所に連れて行こう。」

あいつはその後にジバコイル保安官に連絡して連行してもらえば良
いさ」

ジバコイル保安官ってのは警察みたいな仕事をしていて、お尋ね
者を連行してくれるんだ。

「そだね。じゃあ、行こうかルリリ」

「うん！」

俺達はルリリを連れてマリルの所へ向かった。

第二十八話 ルリリを救え！ VSスリープ！（後書き）

レオン

「スリープ弱っ!？」

君達が強くなったからだよ。

レオン

「ってか作者、また更新遅れたな？」

だって色々あって大変だったんですもの。

……話が変わるけどポケモン小説、最近増えたよね？

レオン

「本当に話変わったよ（汗） まあ確かに増えたよな」

僕が初めて投稿したバクフーン達の冒険の時、まだポケモン小説は全部で約20作品しかなかったのに……今では90以上。

レオン

「滅茶苦茶増えたな（汗）」

うん。1年の間に凄い増えたよ。

レオン

「ってか作者、何で急にそんな事を？」

うん？ いや、何となく……

レオン

「何となくかい（汗）」

さて、次はバクフーン達の方だな！
行ってきます！

ε || ε || ㄗ (・・) L

レオン

「……最近良く走るなあ of 作者（汗）」

第二十九話 キザキの森へ（前書き）

アスカ

「久しぶりに私視点ね」

キザキの森で何が起きるやら……

第二十九話 キザキの森へ

パッチールにホウオウを会わせる事が出来たその次の日の翌日の早朝。

まだレオンとポツチャマは寝てるわね。

「……結構可愛いわね、レオンの寝顔……」

レオンの寝顔を見て思わずそう呟いた私。

本当に可愛いのよ……やっぱりピカチュウだからなのかしら……

「……ふあ……あっおはようアスカ……」

リザードンが起きたみたいね。ってまだ眠そうね……目がとろんとしてるわ。

「おはようリザードン」

「ふあ……あれ……ラティース達は？」

欠伸しながら辺りをキョロキョロとするリザードン。

「ラティース達ならさつき散歩に出掛けたわよ。早朝に散歩するのが好きなんだって。

それより、今からプクリンの所に行くわよ。

ゲンガー達の情報が何か入ったか聞かないと」

「ふあ……あとにしない？ 僕まだ眠いんだけど……」

今にも眠りそうなりザードン。

「良いから行くわよ」

私はつるのムチを一本出してリザードンの首に巻き付けた。
そしてリザードンを引きずってプクリンのいる部屋に向かう。

「ア、アスカ……苦しいよ……」

何か誰かさんが苦しいって言ってるみたいだけど気のせいよね♪

「ゼエ……ゼエ……もう……少しは加減してよねアスカ……」

プクリンの部屋の前に来た私達。息を切らしながら言うリザードン。
ン。

「ごめんごめん。さあ、早く部屋に入るわよ」

私はプクリンの部屋に入ろうと扉を開けようとした。

「失礼します！ アスカさんはいらっしゃいますか？」

その時、階段付近から私の名前を呼ぶ声が。

誰かしら？ 私は声が聞こえた方へ振り向く。そこにいたのは大きな嘴くちばしを持ったペリカンのようなポケモン、ペリッパーだった。

「私がアスカよ」

「アスカさん宛あてに手紙です」

ペリッパーはそう言って一通の手紙を私に手渡してくれた。

「ありがとうペリッパー」

「では、失礼します」

ペリッパーは階段を上っていった。

「アスカ、誰から？」

「えっと……あっアブソルからだわ」

その手紙は私達の仲間のアブソルからだった。手紙の内容は自分達だけでは手こずりそうな仕事を手伝ってほしいという内容だった。

その仕事は遥かなる霊峰で救助されるのを待っているソーナンスの所へ行くというものだった。

「あっアスカさん、リザードンさんおはようございます」

手紙の内容を見ていた時、散歩に行ってたラティアス達が帰ってきた。

「あつ二人共丁度良い時に帰ってきたわね。ちよっと頼まれてほしいんだけど……」

「何ですか？」

私はラティアス達にアブソルからの手紙の内容を話した。

「またあの山ですか」

「そうなの。あなた達は前に一度行った事があるし、リザードンよりも速く飛べるでしょ？それに実力も充分ある。だから私達の代わりに行ってくれないかしら？」

私はラティアス達に頼んでみた。

「良いですよ」

ラティオスがすぐに返事をしてくれた。

「助かるわ。じゃあ、お願いね」

「任せて下さい。行くよ、ラティアス」

「うん」

ラティオスとラティアスは階段を上っていった。

「アスカ、僕達が行かなくて本当に良いの？」

首を傾げながらリザードンが聞いてきた。

「ラティオス達なら私達と同じ位アブソルの助けになる筈だもの。大丈夫よ。それより、行くわよりザードン」

「あっ待ってよアスカ！」

私達はプクリンの部屋に入った。

「お邪魔するわよ」

「やあアスカにリザードン。パッチールの依頼はご苦労様」

笑顔でプクリンがそう言ってくれた。

「では親方様、朝の朝礼に行つてまいります」

「うん、頼んだよ」

ペラップが部屋から出ていった。

「……それでプクリン、何かゲンガー達の情報はあった？」

単刀直入に私は聞いた。

「はっきりとした情報はまだ何だけど……キザキの森って場所でゲンガーらしきポケモンを目撃したって情報があったよ」

キザキの森？

「その森は何処にあるのプクリン？」

リザードンが質問してくれた。

「地図はある？」

「あるわよ」

私はバッグから地図を取り出し、地面に置いて広げた。

「まずここが僕達がいる場所でしょ。キザキの森は……ここだよ」

プクリンが指した場所、そこはプクリンのギルドから北東の方角にある森だった。

地図で見た限り……結構離れてるわね。

「ここにゲンガー達がいるかもしれないのね？」

「うん……だけど、これは確かな情報じゃないからいらないかもしれないよ？」

でも行かなくちゃ何も解らないもの。

「それでも行ってみるわよ。情報ありがとうねプクリン」

私はプクリンにお礼を言ってから、リザードンと一緒に部屋から出た。

「キザキの森……アスカ、早速行くの？」

首を傾げながらリザードンが聞いてきた。

「もちろんよ。リザードン、今回もよろしくね♪」

ウインクする私。

「あっやっぱり僕がアスカを持って飛ぶのね……」

苦笑いするリザードン。さすが、良く解ってるわね。

出発する為に上の階に来たら、依頼掲示板の前にレオンとポッチ
ヤマがいた。

「あら？ まだ仕事に行ってなかったのあなた達？」

てっきりもう仕事に行ってもんだと思ってたけど。

「依頼が無かったんだよ。仕方ないから新しい依頼がくるまでトレジャータウンで時間を潰そうと思ってさ……そういえばラティオスとラティオスはどうした？」

朝から姿を見ないんだけど？」

首を傾げながらレオンが聞いてきた。

私はラティオス達がアブソルの仕事を手伝いに行った事をレオン達に説明した。

「それでラティオス達を行かせた訳か……ってかさ、それアスカとリザードンに来てほしいって事じゃないのか？
良いのか、ラティオス達に行かせて？」

また首を傾げながらレオンは聞いてきた。

「あの二人なら任せられるわよ。それに、私達はこれから行かなきゃならない場所があるからね」

「何処に行くの？」

今度はポツチャマが質問してきた。

「キザキの森って場所だよ。そこでゲンガー達の姿を見たって情報があったってプクリンから聞いたんだ」

ポツチャマの質問にリザードンが答えてくれた。

「俺達も一緒に行こうか？」

「いえ、私達だけで良いわ。あまり大勢で行くとゲンガー達に感づ

かれるかもしれないし……それに、この情報が嘘って可能性もあるしね」

私は思った事を正直に言った。

「じゃあ行ってくるわね。あなた達、しっかり働きなさいよ」

レオン達にそう言ってから私はリザードンと一緒にギルドの外へ向かった。

「それじゃリザードン、よろしく」

私はつるのムチを二本出してリザードンの両手に巻き付けた。

「解ったよ。ここから北東の方角だったね。
行くよアスカ！」

リザードンは私のつるのムチをしっかりと握り締め、私を抱えたまま空に上昇。キザキの森目指して出発した。

ギルドを出発してから結構時間が経ったわね……朝は良い天気だったのに、今はたくさん雲が空を覆っていて、今にも雨が降りそうな嫌な天気になっていた。

「あっアスカ！ あの森がそうかな？」

急にリザードンが叫んだ。リザードンが見ている先を見ると、そこには少し大きな森が広がっていた。

「多分そうだわ。リザードン、あの森の近くに着陸して」

「解った」

リザードンはゆっくりと森の近くに降下した。

「ここがキザキの森……何か……ちょっと不気味な所かも……」

リザードン、もしかしてまた怖がってる？
まあ、曇ってるせいもあって確かに不気味な感じだけど。

「ほらリザードン、怖がってないで入るわよ」

私は先にキザキの森の中に入った。

「ちょっと待ってよ!？」

リザードンが慌てた様子で私を追いかけてきた。

キザキの森の中に入ってからというもの、ゲンガーどころか他の
ポケモンにも遭遇しない……どうなってるのかしら？

「アスカゝそろそろ帰らない？ 多分ここにはゲンガー達はいない
んだよ」

……リザードン、絶対怖いから早く帰ろうとしてるわね。

「ダメよ。まだ奥まで調べてないんだから」

「えゝ」

凄く不満そうな感じのリザードン。もう子供じゃないんだから……ってあれ？ 何かしら……森の奥で何かが光ってる？

「どうしたのaska？」

「リザードンあれ、何だと思う？」

私はつるのムチで光ってる物を指しながら聞いた。

「何だろ？ 行ってみるaska？」

「ええ」

私達は森の奥へと進んでいった。

「……何だろうこれ……何か不思議な感じ……」

確かに不思議な感じ……私達の前には淡い青色の光を発している何かの歯車みたいな物が浮遊していた。

「……ケケケ……」

その時、突然誰かの声が……この嫌な感じの声……あいつね！

「何処にいるのゲンガー！ 姿を見せなさい！」

私は大きな声で叫んだ。

「ケッ！ こんな所にまで来るとはな……しつこい野郎は嫌われるんだぜアスカ？」

森の茂みからゲンガー、チャーレム、アーボ……チームイジワルズが現れた。

「あんたに言われたくないわよ！」

「ゲンガー、大人しく僕達と一緒に来てもらうよ！」

私達は戦闘体勢に入る。

「ケケッ！ 悪いがまだお前達に捕まる訳にはいかねえんだよ！ 奴との契約があるからな」

契約？

「契約ってどういう事よ？ 誰と契約したの？」

「そいつは言えねえな。やるぞアーボ、チャーレム！」

ゲンガー達も戦闘体勢に入った。

「しょうがないわね……力づくで教えてもらおうわ！
行くわよりザ
ードン！」

「了解アスカ！」

第二十九話 キザキの森へ（後書き）

アスカ

「久しぶりにゲンガー達が出たわね？ それより、誰よゲンガーと契約したって奴は？」

ネタバレになるから言えないよ。でも、言わなくても解ると思うよ？

アスカ

「まあ、大体予想はしてるけど」

第三十話 キザキの森での戦い！ 謎のポケモン現る！

「いくわよゲンガー、エナジーボール！」

私はゲンガーに向けて緑のエネルギー弾を放った。

「ケッ！ シャドーボール！」

私のエナジーボールにゲンガーは黒いエネルギー弾をぶつけてきた。ぶつかった刹那、爆発して辺りが爆煙に包まれた。

「リザードン！」

「任せてアスカ！」

リザードンは翼を思いっきり羽ばたかせて風を起こして爆煙を吹き飛ばしてくれた。

「雷パンチ！」

吹き飛ばした爆煙の中からチャーレムが飛び出してきた。右手に電気を纏わせてリザードンに近づいてきた……けどそうはいかないわよ！

「つるのムチ！」

私はつるのムチを一本伸ばし、チャーレムの身体に巻きつけようとした。

「噛みつく！」

っていきなり地面からアーボが！？

「痛っ！？」

私のつるのムチにアーボが噛みついてきた！？　そのせいでチャーレムにはつるのムチが届かなかった。その間にチャーレムはリザードンに雷パンチで攻撃しようとした。

「僕に電気技は効かないよ、アイアンテール！」

リザードンは尻尾を鋼のように硬くして地面に突き刺した。そしてチャーレムの雷パンチを受け止めた。やるわね、あれなら電気を地面に逃がせるからダメージは無いわ……さてと。

「ちょっとこっちに来なさいその蛇野郎！」

私はつるのムチをもう一本伸ばしてアーボの身体に巻きつけ、こちに引っ張り寄せた。そして……ちょっとお仕置きをしてやったわ。全体重を掛けたのしかかりを決めたり、つるのムチで巻きつけて振り回したり……気がついたらアーボは目を回して倒れちゃったわ。

「火炎放射！」

リザードンの方も至近距離でチャーレムに火炎放射を直撃させて、チャーレムを倒した。あとはゲンガーだけね。

「ケッ……相変わらず容赦ねえなアスカはよ」

余裕といった感じの表情を浮かべながらゲンガーはそう言った。

「何でそんな余裕そうな顔してるのかしら？ 追い詰められてるのよあんた？」

「ケケッ追い詰められてる？ そいつは……どうかな！」

いきなりゲンガーは何か道具を取り出して私達に向けて投げつけてきた……あの宝玉のような道具……まさか！？ 次の瞬間その宝玉から目映い光が発せられた。

しばらくすると光は消えた……けど……

「身体が……動かない……」

やっぱり、さっきの道具は縛り玉だったのね。

「ケケケ……形勢逆転だなアスカ」

憎たらしい程の笑顔で私達にゲンガーが近寄ってくる……身体が動けばつるのムチで殴ってるのに……

「ケッ……この道具は別の奴に使いたかったのによ……お前らのせいで予定が狂っちゃったぜ」

不機嫌そうにしながらゲンガーはそう言った。その後ゲンガーは倒れているアーボとチャーレムに近寄って何か種を食べさせた。そ

の種を食べると二人は元気になり、起き上がった。あれは復活の種だったみたいね……

「さっきはよくもやってくれたなアスカ！ 何倍にもして……やり返してやるぜ！」

アーボが私を睨みつけながら怒鳴った。

「ケツ止めとけアーボ。俺らの目的はアスカ達をぶっ倒す事じゃねえ」

「ちえっ解ったよ……」

アーボは私から離れていった……この状況何とかしなきゃ……だけど、身体が動かないんじゃないだろうも……私がそんな事を考えていた時、突然森の茂みから物音が聞こえてきた。誰かいるの？ 振り向きたいけど身体が動かないから振り向けない……

「ケツお出ましのようだな！ アーボ、チャーレム、行くぞ！」

ゲンガー達が物音が聞こえてきた方へと向かって行った。

「アスカ……誰か来たみたいだけど……味方かな？」

私の隣にいたりザードンが質問してきた。

「それは私が知りたいわよ……」

振り向けないから誰が来たのか解らない……だけど、音を聞く事は出来るわ。何か会話でもしてくれたら相手が誰なのか解るかも……

：そう思った私は耳を澄^すませる。とその時、私の顔に何か冷たい物が当たった……もしかして雨？ 何て事を思った刹那、土砂降りの大雨が！ 雨が地面に激しくぶつかる音のせいでゲンガー達の会話が聞けなくなってしまうた。もう……タイミング悪すぎよ……

「ぐああああ！？」

えっ！？ な、何よ今の悲鳴！？ まさか……ゲンガー達がやられたのかしら？ そんな事を考えていた時、ピチャ、ピチャと誰かが近づいてくる足音が聞こえてきたきた。マズいわ……動けないこの状況で攻撃でもされたら……足音がすぐ近くまで来てる……

「……お前達もさっきの黒い奴の仲間か？」

私の隣から声が聞こえてきた。私は声が聞こえてきた方へ目線に向ける。そこには恐竜のような姿をし、体色は緑で頭と腕に葉っぱが付いているポケモン、ジュプトルがいた……このジュプトル、何者なの？

「……聞こえなかったのか？ お前達はさっきの……」

「私達はゲンガー達の仲間じゃないわよ」

正直に私は言った。

「そうか……見たところ、身体が硬直状態にあるみたいだな」

「……だから何よ？」

「そう睨むな。これを食べろ、癒しの種だ。これで硬直状態が解け

る」

そう言ってジュプトルは私とリザードンの口の中に癒しの種を入れてきた。私達は種を食べる。

「あっ身体が動く！」

リザードンが嬉しそうに身体をうごかしている。私も身体が動くようになったわ……ってそうだゲンガー！ 私はゲンガー達がいる方へ振り向く。そして私が見た光景は完全に気を失って倒れているゲンガー達の姿だった。

「俺に襲いかかってきたから倒した……それだけだからな」

一言ジュプトルはそう言うと、あの不思議な歯車の所へと歩き出した。

「その歯車をどうする気？」

リザードンがジュプトルに質問した。

「取るのさ……これをやるからお前達はここから脱出しろ」

そう言ってジュプトルは私に宝玉のような道具を投げ渡した。これは……穴抜けの玉じゃないの。

「この歯車を取ればこの森の時間が停止する……その停止に巻き込まれたらお前達の時間も停止してしまうからな」

時間が……停止する？

「それってどういう……」

「悪いが……俺は急いでいるんでな。良いか、ちゃんと脱出するんだぞ」

私の質問には答えず、ジュプトルは宙に浮いていた歯車を取ってしまった。そしてジュプトルは物凄いスピードで走り去ってしまった。

「何なのよ一体？」

「アスカ、あれ見て!？」

歯車があった場所を指差しながらリザードンが大きな声を上げた。私は歯車があった場所を見してみる。

「な、何よあれ!？」

歯車があった場所には何か黒い雲のような物体が浮遊していた……しかもそれはどんどん大きくなっていく! 何だか解らないけど……凄く嫌な感じがするわ……早くここから逃げないと!

「逃げるわよりザードン! ゲンガー達と一緒に脱出するのよ!」

「う、うん!」

私は倒れているゲンガー達の所へ急いで向かった。私は走りながら後ろに振り向く。さっきまで浮遊していた黒い雲のような物体がさっきよりも大きくなっていた……そして、遂にその場に浮遊し

ていた物体は爆発するように弾け、私達に向かってきた！

「き、来た！？ リザードン急いで！？」

「わ、解ってるよ！」

全速力で走った私達はゲンガー達の所にたどり着いた。もう黒い雲が目の前まで迫って来てる！

「間に合って！」

私はジュプトルから貰った穴抜けの玉を使った。穴抜けの玉から目映い光が発せられ、その光に私達は包まれた。

「……………ここは……………？」

目を開けてみると、そこはキザキの森の中じゃなかった。ここは

……キザキの森の外にあった草原ね。

「……僕達、助かったの？」

リザードンが首を傾げながら言った。

「……みたいね。ゲンガー達もここにいるし……」

私の隣には気絶したままのゲンガー達がいた。皆一緒に脱出、出来たみたいね……

「アスカ……あれ、キザキの森だよね……？」

リザードンが見つめている先を私も見てみる。

「何よ……あれ……」

私が見た光景……それは、緑でいっぱいだったキザキの森が灰色一色に染まっていた光景だった……

「どうなってるんだろ……あれ……？」

不思議そうな表情をするリザードン。

「……行ってみましょう」

「えっ！？ い、行くの！？」

「行かなきゃどうなってるのか解らないでしょ？ ……さすがにあれは私も怖いけど……でも行って確認しなきゃ」

「だ、だけどゲンガー達はどうするの？」

ゲンガー達を指しながらリザードンが聞いてきた。

「この様子ならしばらく起きないと思うから大丈夫よ……行くわよ」

私はキザキの森目指して歩き始めた。

「ま、待ってよ!？」

キザキの森の目の前まで私達はやって来た……何よこれ……最初来た時は風が吹いていたのに今は風が吹いてない……それに、葉っぱに付いてる水滴が地面に落ちる瞬間で静止してる……空に浮いてる雲も動いてない……まるで時間が停止したみたい……

「アスカ……これがさっきジュプトルが言ってた時間の停止なのかな？」

「……間違いないと思うわ……これはただ事じゃないわ……ギルドに戻ってプクリンに話した方が良いわね……ゲンガー達を連れてギルドに戻りましょう」

「そ、そうだね」

私達はゲンガー達を連れてギルドに戻る事にした。

第三十話 キザキの森での戦い！ 謎のポケモン現る！（後書き）

アスカ

「作者さん、更新遅くなった罰として首絞めるわよ（怒）」

ちよっ待ってアスカ（汗）

アスカ

「問答無用！（怒）」

レオン

「あゝあ（汗）思いっきり首絞められてるよ（汗）」

リザードン

「あれはキツイよ（汗）」

ポッチャマ

「作者さん、あなたの事は忘れません……」

って勝手に殺すな（怒）

ポッチャマ

「で、出たー!？」

幽霊じゃねえし！

第三十一話 プクリンからの依頼（前書き）

タクミに続いて連続投稿！ ちよつと疲れた（汗）

レオン

「頑張れゝ負けんなゝ」

アスカ

「何かそのネタ懐かしいわねレオン（汗）」

第三十一話 プクリンからの依頼

お尋ね者のスリープを倒してルリリを助けた俺達。あの後ルリリをマリルの所に返し、ジバコイル保安官にスリープの身柄を引き渡したんだ。

それでジバコイル保安官からお尋ね者を捕まえてくれたお礼と言って大金を受け取ったんだ！ 滅茶苦茶嬉しかったんだけど……結局ペラップに九割持ってかれて俺達には残りの一割しか渡されなかった……マジで萎えるよな……おまけに外は嵐でも来たのかっていう位凄い雨が降るし……その後とくにやる事が無かったから俺とポツチャマはすぐに眠ったんだ。

次の日の朝、ギルド恒例の朝の朝礼が始まった。

「みーっつ！」

『皆笑顔で明るいギルド！』

よし、これで朝礼は終わり……

「あゝそうだ、皆に知らせておく事がある」

終わりって思ったらペラップが皆を呼び止めた。知らせておく事？
何だろ？

「実はアスカさん達から聞いたのだが……キザキの森の時間が停止したらしいのだ」

……はい？ 時間の……停止？ 何ですかそれ？ 訳が解らない

んすけど……

「時間が停まった原因は解ってんのか？　　へいへい」

ヘイガニがペラップに質問した。

「アスカさんが言うには不思議な青い光を放つ歯車……つまり、時の歯車をジュプトルというポケモンが取ってしまったらしい」

ペラップがそう答えると皆が騒ぎ始めた。

「時の歯車を……取っただと！？」

ドゴームが馬鹿でかい声を出した……つうか時の歯車って何？

「ポツチャマ、時の歯車って何だ？」

「僕も詳しくは知らないんだけど……何でも、時の歯車は正しい時間を守ってるらしいんだ。だから、どんな悪党でも時の歯車を盗もうとはしない……筈何だけど……」

それを盗む奴が現れた……それがジュプトルって奴なのか……

「今詳しい事はジバコイル保安官が調べているところだ。お前達はいつも通りに仕事をしてくれ。それじゃ皆、仕事に掛かるよー！」

『おーー！！』

皆仕事をする為にこの場からいなくなった。

「ペラップ、今アスカ達は何処にいるんだ？」

「ペラップさんだ！ 今アスカさん達はギルドの地下二階にいます。捕まえたゲンガー達から何か情報を聞き出そうとしているみたいですが？」

ゲンガー……捕まえたんだなアスカ達。

「解った。ポツチャマ、アスカ達の所に行くぞ」

「うん」

俺とポツチャマはギルドの地下二階に向かった。

「さあ、あんたが知ってる事全部言いなさい！」

地下二階にやってくると何やら怒鳴り声が……声がした方を見てみると、ロープで手足を縛られているゲンガーとチャーレム、リザードンにしっかりと押さえつけられているアーボに向かってアスカが怒鳴っていた。

「ケツ！ お前に教えるような事は何もねえ……」

「良いから教えなさいよこのゴースト野郎！」

あっアスカがつるのムチでゲンガーを締め付けてる……ってかアスカ怖い……

「ぐ、苦しい……」

ゲンガーが苦しがつてる。そりゃアスカの首絞めはキツいだろ……

「さあ、言わないともっと絞めるわよ！」

「わ、解った……言うから……は、離して……」

ゲンガーがそう言うのとアスカはつるのムチからゲンガーを解放した。

「さあ、まずはあんた達があのかざきの森にいた理由を聞きましょうか」

「ゼエ……ゼエ……あ、彼処にいたのは……ジュプトルを待ち伏せしてとっ捕まえる為だ……」

息切れしながらゲンガーはそう答えた。待ち伏せ……何でゲンガー達がジュプトルを待ち伏せしてたんだ？ いや、その前に何でゲンガー達がジュプトルがきざきの森に来る事を知ってるんだ？

「おい、何でお前達はきざきの森にジュプトルが来る事を知ってたんだ？」

俺はゲンガーに近寄り、質問した。

「ケツ……契約した奴から聞いたのさ」

契約した奴？

「キザキの森にいた時も言ってたわね？ 何者なのその契約した奴は？」

「……それは言えねえ……」

「また首絞められたいの？」

アスカがつるのムチを伸ばしてゲンガーの身体に近づける。

「これだけは絶対に言えねえ……」

凄い真剣な眼差しでゲンガーはそう言った。

「……まあ良いわ」

そう言ってアスカはつるのムチを身体に収めた。

「じゃあ別の質問をするわ。あんた達は……」

「あついたいた！」

アスカがゲンガーに質問しようとした時、不意に誰かの声が後ろから聞こえてきた。俺達が振り向くとそこにはプクリンがいた。

「レオンにポツチャマ、ちょっと良いかな？」

「えっ俺達？」

「そう。ちょっと君達に頼みたい事があってね」

俺達に頼みたい事？

「でもまだゲンガー達の事が……」

「ゲンガー達なら私達に任せなさい。レオンとポツチャマはプクリンの話を聞いてきなさい」

アスカがそう言うなら……まあ良いっか。

「それで……俺達に頼みたい事って？」

「ここで話のもあれだし、僕の部屋に来てくれる？」

「解った」

俺とポツチャマはプクリンと一緒にプクリンの部屋に向かった。

「さて、そういえば君達はまだちゃんとした探検はやった事なかったよね？」

いきなりだなおい……でも考えてみれば、ほとんどが依頼を受けて落とし物探したりポケモン捜したり……探検とかした事なかったなあ……とりあえず、俺はプクリンの問いに頷いて応えた。

「だよね？ 君達はだいぶ強くなったみたいだし……そろそろ探検隊らしい事をしてもらおうと僕は考えてるんだ」

「そ、それってつまり、僕達が未開の地や金銀財宝が眠る地へ探検するって事！？」

目をキラキラさせながらポツチャマがプクリンに聞いた。

「うんそうだよ」

頷いて応えるプクリン。それを聞いたポツチャマは物凄く嬉しそうにしている。

「じゃあ地図を出して」

「あいよ」

俺はトレジャーバッグから地図を取り出し、地面に置いて広げた。

「まずここがトレジャータウン、君達に向かってもらうのは……ここだよ」

プクリンが指した場所、それはトレジャータウンから北東の方角にある場所だった。地図で見た限り、ここには滝があるみたいだな？

「この場所には隠されたお宝があるって言われてるんだけど、未だにそのお宝は見つけられてないんだ」

未だ見つけられないお宝がある場所か……何かワクワクしてきたな！

「ここに俺達が行って、お宝を見つけりゃ良いんだな？」

「うん。頼めるかな？」

「もちろんだぜ！ なっポツチャマ？」

俺が聞くとポツチャマはもちろんって言って頷いて応えた。

「じゃあ頼んだよ！」

「任されたぜ！」

俺とポツチャマはプクリンの部屋を出た。

「まずはトレジャータウンで準備だな」

「そうだね。くく何だか僕凄くワクワクしてきたよ！」

こんなに楽しそうなポツチャマ、初めて見たかもな。でも、ポツチャマの気持ちは何となく解るな。初めての探検って事になるんだからな。

「あら？ 何だか嬉しそうねポツチャマ。何か良い事でもあったの？」

あっアスカだ。

「僕達、初めて探検しに行く事になったんだ！」

ポツチャマは嬉しそうにアスカに答えた。

「そうなんだ？ だったら頑張ってね！ 良い土産期待してるから！」

土産かよ……

「そっちはどうなんだ？ ゲンガーは何か喋ったか？」

「それが全然。これ以上は絶対に言えねえって……アスカに首絞められても同じ事言うし……」

リザードンが答えてくれた。ってか、またゲンガー首絞められたのか……

「仕方ないから私達はジュプトルを捜す事にしたのよ。彼にもちよつと聞きたい事があるからね」

アスカ達はジュプトル捜しか……ん？ ちよつと待てよ？

「ゲンガー達はどうすんだよ？」

「ゲンガー達をあっちに送ろうにも連れてく手段が無いし……とりあえずはジバコイル保安官に身柄を預かってもらおうわ」

ジバコイル保安官か……まあ確かにあの人なら任せられるだろうけど……

「じゃあ私達はそろそろ行くわ。レオン、ポッチャマ、探検頑張つてね！」

そう言ってアスカとリザードンはギルドの外へ向かって行った。

「行っちゃったね……」

「まあ、アスカ達だからその歯車を盗んだ奴と遭遇しても大丈夫だ

ろう。さあ、俺達は探検に備えて準備だ！行くぞポツチャマ！」

「うん！」

俺達は初の探検の準備をする為にトレジャータウンへ向かった。

第三十一話 プクリンからの依頼（後書き）

レオン

「今回あまりストーリーの進展無し？」

アスカ

「出たわね作者の次話に持ち越し！」

最近は1話完結から数話に分けてやるパターンが多いからね。

アスカ

「バクフーン先輩の時は良く1話に7000～8000、多い時は10000文字以上書いてたのに、最近は3000～5000止まりよね？」

レオン

「そういえば……何でだ作者？」

3000～5000が読者にとって読みやすい数字らしいんだよね。何かのサイトで見ました。

アスカ

「本当は面倒くさいとか？」

んな訳無い。そんなんじゃないじゃあ読んでくれる読者の皆さんに失礼でしょうが。

レオン

「確かに」

第三十二話 レオンとポツチャマ、初の探検！

プクリンの依頼を受けた俺とポツチャマはトレジャータウンで道具を買い揃えて準備を済ませ、目的地にやって来た……んだけど。

「滝、凄っ!？」

俺とポツチャマの前には一つの巨大な滝。

滅茶苦茶凄い勢いで水が流れてるんすけど……

「……レオン、ここで良いのかな？ 滝以外何も無いみたいだけど……」

周りを確認しながらポツチャマが聞いてきた。

「プクリンが言ってた場所は確かにここ……何だけど……本当に滝しか無いよな……」

俺は右手で頭を掻きながら周りを確認する。

……マジで滝しか無いし……もしかしてここに隠されたお宝があるっていうのは嘘の情報なんじゃ……ん？ ちよつと待てよ？ 滝しか無い……滝しか……滝の裏側ってどうなってるんだろ？

仮にお宝があるのが嘘じゃなく本当の事だとしたら、滝の裏側に実は隠された入り口があって、その先にお宝が……どうにかして裏側を見れないかなあ？ 俺は滝の裏側を見れる所が無いのか滝周辺を調べ始める。

……うーん……何処から見ても裏側が見れないなあ……滝に向かって突っ込んでみるか？ そう考えてみた俺は滝に近づいた。

「うわっ!？」

滝に触れた瞬間凄い水の力に押されて、俺は後方に吹き飛ばされた。

「ちょ、ちよっと大丈夫レオン!？」

「へ、平気平気……」

ポツチャマに心配かけないように俺はそう言って起き上がろうとした。その刹那、俺は目眩めまいに襲われた。この目眩……また、何か見えるのか……？

……何か見える……これは……暗くて良く解らないけど……この滝だな。ん？ 滝の前に誰がいるな……暗くてシルエットしか解らない……っていきなり滝に向かって突っ込んで行ったぞ!？

「……ふう……」

やっと目眩が治まった。

「レオン？　もしかして……何か見えたの?」

ポツチャマが俺の顔を覗き込むようにして聞いてきた。俺は頷いてその問いに応え、今見えたものをポツチャマに説明した。

「……えー!? 一人のポケモンがこの滝に向かって突っ込んでいった!?」

滅茶苦茶驚いてるなポツチャマ? ってそりやそうか。

「……まさか、ここって自殺の名所なの!?」

「んな訳あるか!」

右手の甲をポツチャマの胸当たりに軽くぶつけてツツコミを……
ってこれお笑い芸人じゃん……

「おそらく、この滝の向こう側に何かあるんだと俺は思う。その何かに辿り着くには……」

「ま、まさか僕達もあの滝に突っ込むの!?」

ポツチャマの問いに俺は頷いて応えた。

「や、止めようよ! もし滝の向こうに何もなかったら僕達滝壺に落ちちゃうよ!?」

かなりビビってるなポツチャマ……まあ、下手したら命に係わる事だから当然か。

「危険は承知さ。だけどさ、探検ってのはこういう危険を乗り越えていくもんだろ? それに、俺達の初めての探検をここで終わらせ

るなんて嫌だろ？ 勇気出そうぜ」

「勇気……」

あれ？ 何かポツチャマが俯^{うつむ}いちゃった……俺変な事言ったかな？

「……そうだね。僕達の初めての探検をこんな所で終わらせたくないもんね。よし、行こうレオン！」

そこなくっちゃ！

「よし、合図したら一気に飛び込むぞ！」

「うん！」

俺とポツチャマは少し滝から離れる。

「行くぞ。一、二の……三！」

俺の合図で一気に滝に向かって走り出した俺達。そして滝に向かって勢い良く飛び込んだ。

「うわっ!？」

「ぐへっ!？」

か、顔を思いっきり地面にぶつけた……痛いっす……

「痛たたた……大丈夫レオン？」

「な、なんとか……ここは……？」

上体を起こして周囲を確認する。見た感じ……洞窟っぽいな……
あっ後ろにはさっきの滝がある……って事は……

「僕達、滝を通り抜けられたんだね！」

「みたいだな。よし、じゃあ早速お宝探しを始めるか！」

「うん！」

俺達はお宝を探す為に洞窟の奥へと進み始めた。

洞窟の探索を開始してからどの位時間が経ったのかな？ 多分結構経ってると思うけど……途中この洞窟に住んでるポケモンにいきなり攻撃されたけど、今の俺達にとっては滅茶苦茶相手だった為簡単に撃退出来た。

「レオン、彼処何か光ってない？」

「ん？」

俺はポツチャマが指す物を見てみた。……確かに何か光ってるな。

「行ってみようぜ」

「うん」

俺達は光ってる物がある所へ向かって走った。そこで俺達が見た物は……

「うわ………凄い宝石だ〜♪」

光ってる物の正体は色とりどりの宝石だった。やばい、これ全部

売ったらいくらになんだよ！

「あっ見てみてレオン！ あっちに特大の宝石があるよ！」

ポツチャマが指した先を見てみたら、確かに凄く大きな宝石があった。

俺やポツチャマの身長よりも大きいなこりゃ！

「すっげーなこれ！」

「これ持ち帰る事が出来たら皆驚くよね！ よーし！」

ポツチャマは宝石を引き抜こうとした。確かにこれ持ち帰ったら皆、度肝を抜くだろうな。

あつでももしかしたらアスカにありがとう♪ って何か言われて宝石持ってたかたたり……ありえそうで怖いな……

「うーん！ うーん！」

ってまだやってたのかよポツチャマ。

「はあ……はあ……ダメだあ、全然びくともしないよ」

「マジ？」

「レオンもやってみてよ」

しょうがないなあ……俺はポツチャマとチェンジして宝石の前に立つ。

「せーのっ!」

俺は全身全霊で宝石を引っ張った……けど、嘘? マジでかこれ
……全然びくともしないんすけど……

「こなくそっ!」

もう一度力いっぱい宝石を引っ張る……が結果は同じだった。

「はあ……はあ……ダ、ダメだ、ギブアップ」

あゝ手が真っ赤になってるよ。

「もう一度僕がやってみるね」

再びポツチャマが宝石の引っこ抜きに再チャレンジ。いやしかし
参ったな……本当にびくともしないし。

「……うっ!」

ま、また目眩か……

……これは……今俺達がいる宝石がある場所だな……あっさつき
のシルエットしか解らないポケモンだ。こいつも宝石を引き抜こう
としてる……だけど、俺達の時みたいに全くびくともしないみたい
だ……ん? 今度は引っ張るのを止めて宝石を押したぞ? ……何

だ!?! いきなり大量の水が……

「……ふう……」

目眩が治まった……今のは……宝石を押したら大量の水が流れてくる光景だったな……って事はあれを押すと俺達も同じ目に!?!

「ダメだあ全然動かない……あつもしかして押したら動いたりして?」

ん!?! 今ポツチャマがとんでもない事を!?!

「待てポツチャマ!?! その宝石を押しちゃ……」

「えい!」

……押しやがったー!?!

「……な、何この音?」

ポツチャマが宝石を押した事で何処からか水が流れてくる音が……って逃げねえとやべー!?!

「逃げるぞポツチャマ!」

「に、逃げるって何で?」

「良いから早く！」

俺はポツチャマの手を掴んでここから逃げようとした……けど、時すでに遅しだったみたいで……

『み、水……!?』

俺達の前から大量の水が流れてきた。逃げる暇もなく、俺達は水に飲まれて流されてしまった。

『どっひゃー!?』

しばらく流されてた俺達は何処かの外に放り出された。そしてそのまま地面に落下……そしたら、地面に当たった時の衝撃は無く、代わりに何だか程良い温度のお湯の中に入ったような感覚が……ん？ お湯？

「レオン……ここって……」

「お、お主達一体何処から飛んできたんじゃない？」

俺達の背後から誰かの声が聞こえてきた。振り向くとそこには陸亀みたいなポケモンがいた。

「あ、あのすみません……ここって何処ですか？」

俺はそのポケモンに質問してみた。

「ここは温泉よ」

ん？ 別の所から声が？ その声がした方を見るとそこにはトレジャータウンで知り合った額に三日月みたいな模様があるちっちゃいクマみたいなポケモンのヒメグマがいたんだ。

ってかここ温泉！？

「その者が言った通りここは温泉じゃ。ワシの名はコータス。して、お主達は一体何処から？」

「俺はピカチュウのレオン、こっちはポツチャマ。俺達、洞窟の中を探検してて、そこでお宝を見つけたんだけど……何かの罠にハマってここまで流されたんだ」

コータスに俺は今までの経緯を説明した。

「洞窟……その洞窟は何処の洞窟じゃ？」

「ちょっと待っててくれよ……えっと地図はっ……あったあった！」

俺はコータスに地図を見せた。

「俺達はここにいたんだ」

俺は俺達がいた場所を指した。

「なんと！？ そんな遠くから流されたのか！？ ワシ達がいる温泉はここじゃぞ！？」

驚きながらもコータスは地図のある場所を指した……ってマジで！？

本当に俺達かなりの距離を流されたみたいだな……洞窟から温泉まで滅茶苦茶距離あるぞ……

「大変だったのうお主達。この温泉は疲労回復の効果があるでな、ゆっくりとしていくが良い」

コータスは笑顔でそう言ってくれた。

「あ、ありがとう」

「……ねえレオン、これって探検失敗って事……かな？」

「……って事だな……」

『はあ』

ため息を吐く俺達。初の探検はお宝をゲット出来ずに失敗か……
でもまあ、温泉に入れたから良いか。

第三十二話　レオンとポツチャマ、初の探検！（後書き）

アスカ

「レオンポジティブね」（汗）」

彼らしいと言えば彼らしいかな？

アスカ

「次話は私視点？」

まあその予定。

第三十三話 アスカ&am p;リザードンVS謎の集団! (前書き)

いやゝ焦った焦った(汗)

アスカ

「きゅ、急にどうしたのよ?(汗)」

いやね、アスカ達のストーリーを執筆しようと思ったたら全くストーリーが思いつかなくてね(汗)

アスカ

「何? またスランプ?(汗)」

ちょっとね(汗)

だけど、投稿2時間前に突然ストーリーが思いついて、一気に執筆しちゃった!(笑)

アスカ

「あっそう(汗)」

ちなみに、新キャラ登場しちゃうから(笑)

女の子キャラだよ。

アスカ

「……ライバルの予感!」

いやいや(汗)

アスカのライバルにはならないよ……多分。

アスカ

「多分って何よ多分って（汗）」

気にしたら負けさ（笑）

第三十三話 アスカ&am p;リザードンVS謎の集団！

ゲンガーから情報を聞き出せなかった私達は、とりあえずあの時出会ったジュプトルを捜す事にした……んだけど、彼に関しての情報は何も無いのよね……トレジャータウンで聞き込みしても、誰もジュプトルを見てないって言うし、ジュプトルって誰？ って逆に質問されちゃったし……仕方ないから、今私達はジュプトルに初めて出会ったキザキの森に来てるんだけど……

「やっぱり……時間は停まったままなんだね」

リザードンが時間が停止したキザキの森を見つめながらそう言った。

「そうみたいね……ジュプトルはいないみたいね」

辺りを見回してみても、ジュプトルどころか他のポケモン達の姿もない……どうしたものかしらね……

「ねえアスカ、そういえばペラップが言ってたよね？ 時の歯車は複数あると言われているって」

あゝそういえば、出発する前にペラップから聞いたわね。

「確かにそう言ってたけど……それがどうしたの？」

「ジュプトルは時の歯車を取っていった……て事は、ジュプトルは時の歯車を集めているって事なんじゃないのかな？」

あつ言われてみれば確かにそうかも……リザードンにしては鋭いわね……

「他の時の歯車がある場所に行けば、確かにジュプトルに会えるかもしれないわね……だけど、他の時の歯車は一体何処にあるの？」

「それは……解らないです……」

申し訳なさそうにしながら言うリザードン。

まあ、リザードンが在処を知ってたら驚くけどね……さて、どうしたものかしらね……時の歯車がある場所なんて皆目見当がつかないし……とりあえず、これからどうするか考えてみますか。

……でも、さすがにここじゃ落ち着いて考えられないわね……

「リザードン、ちょっと移動しない？　ここじゃ落ち着かないわ」

「そだね、良いよ」

私達はキザキの森を離れる事にした。

「ここで良いんじゃないアスカ？」

「そうね。じゃあ、ここにしますか」

キザキの森から離れた私達は、気持ち良い風が吹く草原にやってきた。

「さて、まず最初にどうやって時の歯車を探すかね……」

「やっぱり聞き込みじゃない？」

腕組みをしながら、リザードンがそう言った。

「確かにそうなんだけど、ペラップが言ってたでしょ？ 時の歯車の在処を知っているポケモンはほとんどいないし、ペラップでも歯車が数個存在しているのは知ってるけど、在処までは解らないって」

「あっそういえば……」

リザードン、覚えてなかったのね……

「じゃあ、どうするアスカ？」

「それを考えてるんでしょ！ リザードンも考えなさいよ」

「うーん……」

私とリザードンはどうやって時の歯車がある場所を探し出すかを考え始めた。

「……見つけた」

ん？ 今何か声が？

「リザードン、今何か言った？」

「えっ？ 僕は何も言っていないよ？」

そう言ってリザードンは左右に首を振る。
じゃあ、今の声は何？

「ターゲット発見、全員囲め！」

突然五体のポケモンが現れ、私達を囲んだ。
目がダイヤモンドのようになっていて、胸にはルビーのような物が付いている、小柄で体色が紫っぽいポケモン……確か、ヤミラミっていうポケモンだったわね。

「あんた達、一体何者？ 私達に何か用なの？」

「これから死ぬお前らに、答える必要は無い」

戦闘体勢に入るヤミラミ達。私達、命を狙われてる？ 恨みを買うような事したかしら私達？

「死ね！」

一体のヤミラミが私に接近、右手の鋭い爪で攻撃してきた。

「守る！」

私は自分の身体をバリアで包み、ヤミラミの攻撃を防御した。攻撃がバリアに弾かれた事で、ヤミラミが体勢を崩した。

「エナジーボール！」

そこに私はすかさず、口から緑色のエネルギー弾を放ち、ヤミラミの腹部に直撃させた。

私のエナジーボールが直撃した瞬間、爆発が発生してヤミラミは吹き飛んだ。

「後ろがから空きだぜ！ シャドークロー！」

振り向くと、別のヤミラミが私に向かってきていた。

「させないよ！ ドラゴンクロー！」

そこにリザードンが来てくれて、ドラゴンクローでヤミラミのシャドークローに対抗。

二つの技がぶつかり合った。

「アスカには……近づけさせない！」

リザードンはヤミラミのシャドークローを打ち破って、ヤミラミを吹き飛ばした。リザードンの方がパワーが上だったみたいね。

「このっ！ シャドーボール！」

「つるのムチ！」

また別のヤミラミが両手を使って黒いエネルギー弾を作り出し、私に放ってきた。私はさっきリザードンが吹き飛ばしたヤミラミに向かつてつるのムチを伸ばし、身体に巻きつけた。

そして、そのヤミラミを引っ張り寄せて私の前に持ってきて、シヤドーボールの盾に使った。

ヤミラミシールドってどこかしらね？ シヤドーボールをヤミラミシールドで防御した私。

「このヤミラミは返すわよ！ それ！」

防御に使ったヤミラミを、私はシヤドーボールを放ってきたヤミラミに向かつて投げた。

見事に私が投げたヤミラミは、シヤドーボールを放ったヤミラミに命中した。

『悪の波動！』

今まで様子を見ていた残りの二体が、同時に悪の波動を放ってきた。

二つの黒いエネルギー波は途中で合わさり、螺旋状に回転しながら私達に向かつてくる。

今の天気は晴れ……お日様があんなに出ていれば、あの技をすぐに出せるわね！

「ソーラービーム！」

「なら僕はオーバーヒート！」

私はソーラービームを、リザードンはオーバーヒートを放った。私達の技と、ヤミラミ達の技がぶつかり合った。だけど、今私達が放っているのは、私達が持っている一番強力な技。力負けする訳が無いわ。私達の技は、あつという間にヤミラミ達の技を打ち消し、ヤミラミ達に私達の攻撃が直撃、刹那^{せつな}大きな爆発が発生した。

「はい終わりっと！ 口程にもなかったわね」

ヤミラミ達は全員その場で倒れていた。
はつきり言って……レオンより弱かったわ。

「こいつら一体何だったんだろうね？」

「さあ？ それより、今の戦闘でちょっと疲れちゃったわ。時の歯車とジュプトルを捜すのは明日に……」

『自己再生！』

倒れていたヤミラミ達の身体がいきなり光り輝きだした。これは……自己再生の光！？

私達の攻撃で受けた傷がどんどん治っていく……

「まだまだ……まだ終わらないぞ！」

回復したヤミラミ達が立ち上がり、再び戦闘体勢に入った。

「はあ……はあ……こ、これでどうよ？」

その後、またヤミラミ達との戦闘を始め、何とか倒す事が出来た私達……正直、もうヘトヘトだわ……

「はあ……はあ……アスカ、大丈夫？」

「あまり大丈夫じゃないわ……はあ……だけど、これでヤミラミ達も動けないでしょ……」

『自己再生！』

嘘！？ また自己再生！？

「そろそろ疲れてきたんじゃないか？ 大人しく俺達に殺されれば、楽になれるぜ？」

回復したヤミラミ達が立ち上がり、不気味に笑いながらそう言った。

「しつこいわよ……あんた達……はあ……はあ……」

やばいわ……まさか、このヤミラミ達がこんなにタフだなんて……このままバトルを続けられ……間違いなく私達……

「くたばれえええ！」

ヤミラミ達が一斉に飛びかかってきた。

ダメ……これ以上は……

「雷！」

「えっ？」

私達に向かってきたヤミラミ達に、突然頭上から雷が落ちてきた。雷はヤミラミ達に直撃、ヤミラミ達はその場に倒れ、身体をビクビクと震わせている。

身体が麻痺したみたいね。だけど、今の雷は？

「あなた達、大丈夫ですか！」

私達の所に一匹のポケモンがやって来た。

体色がオレンジ色で長い尻尾があって、頬には黄色の電気袋があるネズミのようなポケモン……確かライチュウだったわね。

「あなたは？」

「私は探検家、ライチュウのリンです。話はあとで、まずはここから逃げましょう！」

彼女の言う通りね。

「解ったわ！」

私達はライチュウのリンと一緒にその場から逃げ出した。

第三十三話 アスカ&リザードンVS謎の集団！（後書き）

リン

「私、出番少ないですか？」

最初だけだよ。

あとからちゃんと出番が増えていくからね。

リン

「なら良いですけど……あっ初めまして、ライチュウのリンと言います」

うん、ちゃんと挨拶が出来たね。

レオン

「作者く俺達の出番まだ……ってあれ？ その子は？」

リン

「あっレオンさん！？」

ってリン？ 何故に僕の後ろに隠れるの？

リン

「えっいやっだって……」

顔が赤くなって……あゝさてはリン、レオンの事が……

リン

「10万ボルト！」

ぎゃあ〜！？

リン

「そういう恥ずかしい事言うんじゃないよ！」

レオン

「お、大人しいって思ったら性格変わったよ（汗）」

か、彼女は二重人格だったり……します……がくっ……

レオン

「って作者〜！？」

リン

「はっ！？ 私ったら大変な事を！？」

アスカ

「作者さん、私のアロマセラピーを受けたいからって、芝居しちゃうダメよ」

……バレたか。

リン

「……本当に昇天させてあげようか？（怒）」

レオン

「こ、怖っ！（汗）」

第三十四話 プクリンの思い

プクリンからの依頼で探検に出かけた俺とポツチャマ。宝石やらいっぱい見つけたんだけど……トラップに引っかけたさあ……大量の水が流れてきて、俺達は流されちゃったんだ。

流れついた先が、なんと温泉！　あまりに気持ち良くて、つい長風呂に……結局お宝を持ち帰る事が出来ず、ただ温泉入っただけになっちゃった。

「ねえレオン、プクリン親方になんて説明するの？」

ギルドに戻ってきた俺達は今、プクリンの部屋の前に来ていた。

「どうって……正直に言うしかないだろ」

「……怒るだろうなあプクリン親方……はあ」

ため息を吐いて俯くポツチャマ。

まあ、気持ちは解るけどさ……プクリン、皆が言うにはすげー怖いって事だし……けど、報告しないといけないからな。

腹を括らないとな！

「行くぞポツチャマ」

「う、うん」

俺達はプクリンの部屋に入っていた。

「お、親方様、今戻りました」

ポツチャマが恐る恐るプクリンに言った。

「あっお帰り。どうだった温泉？ 気持ち良かったでしょ」

「ええそれはもう……ってえっ!? 何で親方様が、僕達が温泉に入ってた事を知ってるの!?!」

物凄く驚いているポツチャマ。俺もマジでビックリだ……

「それや解るよ。あの場所、以前僕が探検した事がある場所だからね」

……マジっすか!?

プクリン、以前にあの洞窟を探検した事あったのか!? あっじやあ、あの時みたポケモンのシルエット……あれはプクリンだったのか!

「……あれ? ちょっと待てよ? 親方が探検した事あるんなら、なんで俺達を彼処に行かせたんだ?」

「君達にも、わくわくするような探検をしてほしいって思ったからだよ」

わくわくするような探検?

「君達は探検してて、わくわくしなかったかい？」

「……確かに、この先にお宝があるかもしれないって思ったら、わくわくしたな」

「僕も」

俺達は素直にわくわくした事をプクリンに言った。すると、プクリンは笑顔になった。

「良かった。やっぱり、探検ってわくわくするものだよね。……僕はね、金銀財宝が本当のお宝だとは思ってないんだ」

「えっ？」

金銀財宝が……本当のお宝じゃない？

「確かに探検隊やってるんなら、金銀財宝は見つきたいけど……それよりも一番大事なのは、仲間と一緒に力を合わせて、頑張って探検したっていう思い出だと僕は思う」

仲間と一緒に探検した……思い出……

「仲間と一緒に楽しく探検した思い出は、辛い冒険や困難な試練に出くわした時、思いがけないパワーを生み出してくれる事があるんだ。だから、もし君達が辛い事や困難な事に直面した時、二人で探検した事を思い出してみて？ きっと、力が溢れてくるから」

……深いっす……やばい、なんか心にグツときちゃった……

「ぼ、僕、親方様の言葉に感動しちゃいました〜!」

「っってお前泣きすぎ!?!」

俺の隣でポツチャマが号泣してた。

「ははは……さあ、二人共今日はもう遅い。また明日から修行だから、そろそろ寝た方がよいよ」

「そうさせてもらおうよ。ほらポツチャマ、泣いてないで行くぞ」

俺はまだ泣いてるポツチャマを連れ、プクリンの部屋から出た。

「うう〜……親方様良い事言うよね〜……」

余程感動したのかまだ泣いてるポツチャマ。

「まあ確かにプクリンは良い事を言ってくれたけど……泣きすぎだろポツチャマ」

「はあ……はあ……や、やっと帰ってこれたわ」

ん? 誰か来たのか? 俺は声が聞こえてきた方に振り向く。

「アスカ!? リザードン!? どうしたんだよその怪我!?!」

そこにいたのはアスカとリザードンだった……けど、どういう訳か身体中に怪我をしていたんだ。

「はあ……はあ……ちょっと、妙な連中にね……疲れたわ……」

「ぼ、僕も……」

アスカとリザードンがその場で倒れた……っておいおい!?

「おいアスカ、リザードン!？」

「落ち着いてください。とにかく、今は彼女達をゆっくり休める所へ運ばないと」

……誰だこの子? なんか姿はピカチュウの俺に似てるけど……

「き、君は？」

「私はライチュウのリン。さあ、私達だけじゃ彼女達を運べないわ。仲間を呼んできてくれますか？」

「わ、解った!」

俺とポツチャマはギルドにいる仲間を呼びに向かった。

ギルドの皆で、アスカとリザードンを部屋に運んだ。チリーンやさっきのリンって子が治療してくれて、アスカとリザードンは今ぐっすりと眠っている。しかし、アスカ達にここまでダメージを与えるなんて……一体誰が？

「なあ、えっと……リンって言ったよね？ 一体何があったんだ？」

俺はリンに質問してみた。

「彼女達はヤミラミと言われるポケモン達に襲われていたんです。私は偶然近くを通りかかって、彼女達を助けたんです」

ヤミラミ……そいつらがアスカ達を……

「アスカ達の具合はどう？」

その時、プクリンが部屋にやってきた。

「アスカ達ならチリーンと彼女が手当てをしてくれたよ。今はぐっすり眠ってる」

「そう、良かった……あれ？ もしかして、リン？」

「あっプクリンじゃないですか！ 久しぶりですね！」

えっ何？ 二人共知り合いなの？

「リン、親方を知ってるの？」

「もちろん。彼がまだ探検家なりたての新米の時から知ってるわよ」

「僕達は同期なんだよ」

へー、プクリンとリンは同期だったんだ。

「経験豊富な彼女に手当してもらったんなら、アスカ達は明日には元気になるよ」

「そうか……あっそうだ！ まだ挨拶出来てなかったよね。俺はピカチュウのレオン、こっちはポツチャマ。アスカ達を助けてくれてありがとうな」

俺は笑顔でリンにそう言った。

「い、いえ！ わ、私は、あ、当たり前前のを、しただけですから！」

な、なんだ？ 急にリンの顔が赤くなったぞ？

「どうしたのリン？ なんか顔が赤いけど」

「い、いえ、なんでもありませんから！」

いやなんでもなくはないと思うんだけど……

「また一目惚れかい？」

プクリンが笑みを浮かべながらリンに言った。一目惚れって……えっ俺に？

「……一目惚れとか言うなよプクリン」

頬の電気袋から電気をバチバチと放電しながらプクリンを睨むリン……ってなんかいきなりキャラ変わったぞ！？

「相変わらずの二重人格だね。昔から変わってないねリン」

「……黙れ風船！」

……うわ……プクリン相手に怒鳴ったよこの子……怖……

第三十四話 プクリンの思い（後書き）

レオン

「作者（リン）が怖いんですけど（汗）」

二重人格ですから（笑）

レオン

「それ説明になってないし（汗） ってか、またストーリーに進展ねえじゃん！」

慌てないの。慌ててストーリー展開を早くしようとする、見てくれている読者さんが混乱する恐れがあるからね。

第三十五話 療養

「……うーん……あれ、私いつの間に寝ちゃってたんだろ？」

私が目を覚ましたら、いつもレオン達と寝ている部屋にいた。えっと……確かヤミラミ達に襲われて、そこにライチュウのリンって子が助けに来てくれて……それでなんとかギルドまで帰ってきたのよね。

「あれ？ これ……」

身体を見てみたら治療を受けた後みたいで、包帯が巻かれていた。その後部屋を見回してみたら、私と同じように身体に包帯が巻かれているリザードンがいた。まだ眠ってるわ。

「あっ目が覚めましたか？」

私がリザードンを見つめていた時、不意に誰かに声を掛けられた。私は声がした方に顔を向ける。そこにいたのは私達を助けてくれたリンだった。

「あなたが治療してくれたの？」

「ええ、このギルドのチリーンさんと一緒にあなた達を治療しました」

「そうだったの……ありがとうね、私達を助けてくれて」

私はリンにお礼を言った。

「いえ、私は当然の事をしただけですから……」

「あっアスカ起きたのか！」

この声は……私は声が出た方を見ている。
やっぱり。レオンにポツチャマだわ。

「あ、お、おはようございます、レオンさんっ！」

あら？ どうしたのかしら？ レオンが来たら急に顔が赤くなっ
たわ。

「おはようリン。アスカ、身体はもう大丈夫なのか？」

「なんとかね」

そう言って私は立ち上がる。……ちょっと、怪我した所が痛むわ
ね……

「日常生活には問題ないと思いますけど、バトルとか激しい運動は
控えて下さいね。治りかけた怪我也治らなくなりますから」

「解ったわ」

……本当はすぐにでもあのヤミラミ達の事を調べて、とっ捕まえ
たいけど……しょうがないわね。

「……ふぁ……あれ、もう朝？」

あつりザードンが起きたみたい。また眠そうな顔してるわね、目がとろんとしてるわ。

「おはよう、リザードン」

「……あつおはようアスカ……ふあ……」

大きな欠伸あくびをするリザードン。

「眠そう……あつそうだ！ アスカにリザードン、僕達もしかしたら遠征に行く事になるかもしれないんだ」

遠征？

「どういう事ポツチャマ？」

「ペラップが朝礼で言ってたんだけど、ギルドは年に一回遠征に出掛けるんだって。その遠征先でお宝見つけたり、未開の地を開拓したりするんだ。それでギルドのメンバーの中で、仕事で優秀な成績を出したポケモンを選抜して、遠征のメンバーにするみたいなんだ」

ポツチャマが遠征について説明してくれた。

「なるほどね。けど大丈夫？ あなた達、ちゃんとメンバーに選ばれるの？」

「大丈夫だよ。僕達、アスカ達と一緒に行動してた御蔭でかなり強くなったんだから！ ねっレオン？」

「嗚呼ああ！」

……もしかして、この二人自分の力を過信してるんじゃないの？

「二人共、あまり自分の力を過信していると痛い目に遭^あうわよ？」

「大丈夫だって。そんなじゃ仕事に行ってくるから！ 行くぜポツチャマ」

「うん！」

行っちゃった……大丈夫って言ってたけど……あの調子じゃあ絶対ミスるわよ。

「……私の経験からしてレオンさんとポツチャマさん、あの調子だと仕事を失敗すると思います」

「あっやっぱりあなたもそう思う？」

どうやら、私とリンは考えてる事が同じみたい。

「探検隊に限らず、経験が浅い人達が良く陥りやすい状態ですからね」

「そうそう。それで仕事を失敗すると、酷く落ち込むのよね」

「そうなんですよね。……なんだか私達、気が合いそうですね」

「みたいね」

妙に気が合う私とリン。これは、良い友達になれそうだわ♪

それからしばらく、私とリンちゃんは仲良く会話していた。それはもう時間が経つのも忘れる程にね。彼女とは本当に話が合うのよ。

「……………く……………」

って気がついたらリザードンがまた寝てる!?

「あらあら、リザードンさんまた寝ちゃいましたね?」

「もう、暇さえあればすぐ寝ちゃうんだから……」

まあ、寝顔が可愛いから良いけどね。

「失礼しまーす!」

また誰か部屋に入って来たわ。今度は……あっちリーンだわ。

「アスカさん、ジバコイル保安官が呼んでますよ」

ジバコイル保安官が? なんだろう?

「解ったわチリーン。よいしょっと……」

また私はゆっくり立ち上がる。やっぱり、ちょっと痛むわね……

「私が付き添いましょうか？」

「うーん……じゃあ、お願いしても良いリンちゃん？」

「もちろんです」

私はリンちゃんと一緒に部屋から出て行った。

「あっアスカさん！」

ギルドの地下一階、依頼掲示板がある所にジバコイル保安官が待っていた。

「あれ、その怪我はどうしたんです？」

「ちょっと妙な連中に絡まれてね……それより、私に何か用なのジバコイル保安官？」

「あっそうでした!?! アスカさん、本当に申し訳ありませんでした!」

っていきなり謝罪!?

「ちょっとどうしたのジバコイル保安官?」

「それが……アスカさん達から身柄を預かっていたゲンガー達に……逃げられてしまいました!」

……なんですってー!?!?

「ど、どうして逃げられたのよ!?!」

「催眠術で眠らされてしまつて……その間に逃走したようで……本当に申し訳ありませんでしたアスカさん!」

深く頭を下げるジバコイル保安官。

「頭を上げて下さいジバコイル保安官。保安官は悪くないですよ。ねっアスカさん?」

「そうね……あのゴースト野郎、今度会ったらつるのムチで首を絞めるだけじゃ済まさないわよ!」

あゝなんだか怒りがどんどん込み上げてきたわ!

「あっ痛たたた……」

怒りで興奮しすぎたせいか、怪我した所が痛みだしちゃったわ……

「アスカさん、そろそろ部屋に戻って休んだ方が良いでしょう。そのゲンガー達を捜すのは、怪我を治してからです」

「そ、そうね……」

私はリンちゃんと一緒に部屋に戻ろうとした。

「……ただいま……」

背後から凄く元気の無い声が聞こえてきた。

振り向くと、そこには俯うつむいてしまっているレオンとポツチャマがいた。

「……もしかしてあなた達、仕事失敗したんじゃない？」

『……仰おっしゃる通りで……』

やっぱりね……しかも身体中に怪我してるじゃないのよ。

「あゝくそっ！ あいつら、次会ったら絶対ぶっ倒してやる！」

「一体誰とバトルしたのよ？」

私はレオン達に質問した。

「ゲンガー達と、あとは知らないポケモンだけどすっげえムカつく奴」

「……ゲンガー！？ レオン達、ゲンガー達とバトルしたの……っ

て痛たたた……」

さ、叫んだらまた怪我した所が……

「だ、大丈夫かアスカ？」

「な、なんとか……それで、ゲンガー達とバトルしたのね？」

「嗚呼……なんか、知らないポケモンとゲンガー達が話しててさ。ゲンガー達はアスカが捕まえた筈なのに、そこにいたって事は逃亡したってすぐに解ったから、捕まえようとバトルを挑んだら……」

それで負けちゃったと……人数的にレオン達が不利、いくら強くなったって言ってもやっぱり経験不足ね……負けて当然よ。それにしても、そのゲンガー達と話してたっていうポケモンが気になるわね……一体何者なのかしら？

第三十五話 療養（後書き）

アスカ

「ようやくこの小説でも遠征っていう言葉が出て来たわね」

いやー長かった（汗）

アスカ

「ねえ、レオン達とゲンガー達がバトルしたらしいけど、どんなバトルだったの？」

それは次話で明らかにします。

第三十六話 チームレオンVSチームイジワルズ

ギルドの遠征メンバーに選ばれる為、俺とポツチャマは張り切って仕事しに来ていた。

今回の依頼は、緑の草原で落とし物をしてしまったというアゲハントからだ。なんでも、守りのオーブっていう宝玉を落としてしまったらしい。

それは貴重なアイテムで、是非とも見つけ出してほしいって言われたんだ。まっ落とし物を拾って帰るだけだから、今回の依頼は楽勝だな♪

「ねえレオン。今度の遠征って何処に行くんだろうね？」

遠征先か……そういえば何処なんだろうな？

「解んねえけど……きつと今まで誰も探検した事が無い所なんじゃないか？」

「今まで誰も探検した事が無い所……か……く……！ もう今から待ち遠しいよ！ 早く遠征に行きたいな〜♪」

ポツチャマは遠征に行きたくてたまらないみたいだな。

「……あれ？ レオン、彼処に落ちてるのなんだろう？」

「ん？」

ポツチャマは何かを指しながら俺に聞いてきた。俺はポツチャマが指している物を見してみる。

そこには、ピンク色をした宝玉が地面に転がっていた。

「あっ！ あれだよ、守りのオーブってのは！」

俺とポツチャマは守りのオーブの所へ駆け寄る。そして、俺は守りのオーブを拾う。

「へー綺麗な宝玉だね」

「良し、これで依頼完了だな！ んじゃ、穴抜けの玉を使ってギルドに帰りますか」

守りのオーブをトレジャーバッグに入れた後、穴抜けの玉をバッグから取り出そうとした。

「……頼み……あんた……」

ん？ 何処からか話し声が聞こえてくるな？

「どうしたのレオン？」

「今誰かの話し声が聞こえてきたんだ」

俺は耳を澄^すましてみる……

「……良い……報酬……」

あっちか！

「行くぞポツチャマ！」

「あつ待ってよレオン!？」

俺とポツチャマは声が聞こえた方に向かって走った。

それからしばらくして、俺達は緑の草原の一番奥までやって来た。そして、さっきの話し声は誰だったのが解った。ゲンガー達だったんだ。

「なんでゲンガー達がここに？ 確か、アスカ達に捕まったんじゃない……」

「逃げ出したんだろ。それより、ゲンガー達と喋ってんのは誰だ？」

ゲンガー達は今、黒くてずんぐりとした体型のポケモンと喋ってるみたいなんだけど……上手く聞き取れない。

もう少し接近したら聞き取れるかもな……

「ポツチャマ、こっからは静かにな。あいつらに近づく」

「わ、解った」

俺達は茂みの中をゆつくりと進みながら、ゲンガー達に近づく。

「……最後に確認しておく。お前が言ったその連中を、消せば良いんだな？」

ずんぐりとしたポケモンがゲンガーに確認してる。

「ケッその通りだ。したら、あんたにはちゃんと報酬を払ってやる」

「ククク……良し、その依頼受けてやる」

おいおい……また良からぬ事をしようとしてるのかあいつら？

「……へ、へ、ヘックシュン!？」

ってこのタイミングでくしゃみかよポツチャマ!?

「おまつ!？」

「ご、ごめん!」

「誰だそこにいるのは!？」

あゝバレちゃったよ……仕方ない。

「お前ら。また悪さしようとしてるみたいだな？」

俺達は茂みから出て、ゲンガー達の前に来た。

「ケッなんだ? いつかの弱っちいピカチュウとポツチャマじゃね

えか」

俺達を見下した感じで言うゲンガー。相変わらずムカつく奴だな。

「以前の俺達と一緒にだと思わない方が良いぜ？」

俺は頬の電気袋から電気を軽く放出しながら、ゲンガー達を威嚇する。

「おいゲンガー、なんなんだこいつら？」

「ケツただの新米探検隊だ。大して強くねえよ。アーボ、チャールム、お前らだけで充分だろ」

ゲンガーがそう言うと、チャールムとアーボが前に出てきた。

「……甘く見んなよ。電光石火からアイアンテール！」

俺は電光石火で素早く動き、チャールムとアーボの背後に回り込む。

そして尻尾を鋼のように硬くして、チャールムとアーボの後頭部を攻撃した。この一撃で二人は吹き飛び、目を回して倒れた。

「あっもうレオン！ 僕の出番もとっておいてよ！」

「悪いポツチャマ」

まさかこの一撃で気絶するとは思わなかったからさ。

「おいゲンガー。あいつら本当に新米探検隊なのか？」

「ケッ……ちよつと見ない間にまさかあんなに強くなっていやがったとはな……」

「次はお前達の番だぜ」

俺はゲンガー達を挑発する。

「ククク……ずいぶんと威勢が良い奴だな。おいゲンガー、こいつらを潰すのを手伝え」

「ケケッ良いぜ！」

ゲンガー達が戦闘体勢に入った。

「今度は僕からやらせてもらおうよ！ ハイドロポンプ！」

ポツチャマが口から大量の水を勢い良く吐き出し、ゲンガー達に向けて放った。

「ククク……火炎放射！」

ずんぐりとしたポケモンが口から炎を吐き出した。ハイドロポンプと火炎放射はぶつかり合い、大きな水蒸気が発生した。

「嘘っ！？ 僕のハイドロポンプが相殺された！？」

「ケッ！ 敵は一人じゃねえんだよ！」

くっいつの間にかゲンガーがポツチャマの背後に回り込んで！？

間に合ってくれ!

「10万ボルト!」

俺は身体から電気を放出させ、ゲンガーに向けて放った。

「おっと!」

「なっ地面に消えた!?!」

俺の10万ボルトが当たる寸前で、ゲンガーは地面に溶け込むようにして消えた。まるで影に潜り込んだみたい……

「影打ち!」

「ぐっ!?!」

は、背後から攻撃だ?!?!

「ケケケ! 俺は影に入り込む事が出来んだよ! おらもう一発!」

「電光石火!」

俺は突っ込んできたゲンガーを電光石火で回避した。

「ドリル嘴くちばし!」

ポツチャマが身体を回転させながら、自分の嘴でゲンガーを攻撃しようと突っ込んでいった。

「ケツくらうかよ！」

ポッチャマのドリル嘴が当たる寸前で、またゲンガーは影の中に潜り込んでしまった。

「ククク、悪の波動！」

ずんぐりとしたポケモンが口から黒いエネルギー波を放った。螺旋状に回転しながらポッチャマに向かっていく。

「させるかよ！ 雷！」

俺は悪の波動に向けて雷を放った。俺の雷は悪の波動にぶつかり、大きな爆発が発生した。

俺の雷でも相殺かよ……こりゃあ影に入り込んで攻撃が当てずらいゲンガーを倒すより、強力な技を使うあのポケモンを先に倒した方が良さそうだな。

「電光石火！」

俺は電光石火で一気にずんぐりとしたポケモンに接近する。

「お前から先に倒す！」

「ククク、やってみな！ 火炎放射！」

「影分身！」

俺は電光石火のスピードを利用して無数の幻影を作り出した。奴が放った火炎放射は俺の幻影に直撃したが俺に直撃する事はなかつ

た。

「くられ、アイアンテール！」

俺は奴の頭に向けてアイアンテールで攻撃した。

「ケツやらせないぜ！」

「なっ!？」

俺の真下にある影からゲンガーが飛び出し、俺のアイアンテールを受け止めやがった！

「レオン！」

「ケッしっかり受け止めなよそのペンギン！ おらっ！」

俺はゲンガーに投げ飛ばされ、ポツチャマにぶつけられた。

「痛たたた……お、おいポツチャマ、大丈夫か？」

「な、なんとか……」

俺とポツチャマはゆっくりと起き上がる。

「ポツチャマ、合わせ技で決めるぞ！」

「解った、渦潮！」

ポツチャマは水の竜巻のようなものを作り出し、ゲンガー達に向

けて放った。

「さらに10万ボルト！」

俺は10万ボルトを渦潮にぶつけ、合体させた。
電気を纏^{まと}った渦潮がゲンガー達に向かっていく。

「シャドーボール！」

「悪の波動！」

ゲンガーが黒いエネルギー弾を放ってきた。

その後からずんぐりとしたポケモンが悪の波動を放ち、ゲンガーのシャドーボールに纏わりついた。俺達の攻撃とゲンガー達の攻撃はぶつかり合い、凄まじい爆発が発生した。

「くっ俺達の合体技でも相殺されるのかよ!？」

あいつらどんだけパワーが強いんだよ!

「ケケケ! これで終わらせてやるぜ！」

背後から声が……俺達が振り向くと、そこには影の中から姿を現したゲンガーが!

「催眠術！」

「しまっ……」

ゲンガーの目を見た途端、俺は急に眠くなってきてしまった……

ダメだ……立ってられない……俺はその場に倒れ込む。

「ククク……お前ら良い物を持ってやがるな？　この守りのオーブは貰っていくぞ」

トレジャーバッグから依頼品の守りのオーブを取り出されてしまった。

「……待て……よ……」

「ククク……覚えておきな。俺はスカタンク。またお前達とは会う事になるだろう……その時はよろしくな……ククク……」

くそ……眠って……たまる……か……よ……

第三十六話 チームレオンVSチームイジワルズ（後書き）

レオン

「あゝ思い出ただけでムカつく！ 次こそは必ずぶっ倒す！」

まあ落ち着いてレオン。

頭に血がのぼると、冷静な判断が出来ずに勝てる戦いも勝てなくなるよ。

アスカ

「そうよレオン。ただでさえ経験が足りないのに……」

レオン

「ぜってーぶっ倒す！」

アスカ

「人の話を聞きなさい（怒）」

レオン

「ぐ、ぐるじい……」

首絞め攻撃……効果抜群だね（汗）

第三十七話 アスカの計画。リゾートへ行って気分転換！（前書き）

レオン

「何あのタイトル？」

まんまです（笑）

第三十七話 アスカの計画。リゾートへ行って気分転換！

レオン達が依頼を失敗してしまった為に落ち込んで帰ってきてから次の日の朝。私が目を覚ましたら、部屋にはレオン達はもういなかった。

どうやらいつもの朝礼に行ったみたいね。

「……ふあゝ……おはようアスカ……」

あつりザードンが起きたみたい。うわっ眠そうな顔してるわね。

「おはよう寝坊助さん。あんた、ヒトカゲだった時は私より早起きだったのに……リザードンになってからは起きるのが遅くなったわよね？」

「……ふあゝ……あの時はアスカに早く会いたいって思ってたから……だから頑張って早起きしてたんだよ」

大きな欠伸あくびをしながらリザードンはそう言った。早起きだったのはそういう訳だったのね……一緒になってから七年経って初めて知ったわ。

「おはようございますアスカさん、リザードンさん。怪我の具合はどうですか？」

誰かが部屋に入ってきて挨拶してきた。
振り向くと、そこにはリンちゃんがいた。

「あっおはようリンちゃん！ だいぶ良くなったわ。あつレオンな

「らまだ戻ってないわよ？」

「えっ！？　な、なんで私が来るとレオンさんに会いにきたって事にな、なるんですか！？」

顔を赤面させながら声を上げるリンちゃん。

やっぱりレオンの事が気になるのねリンちゃんって。解りやすいわ。

「冗談よ冗談♪　もう、リンちゃんったらそんなに顔赤くして」

「ア、アスカさんがいきなり変な事を言うからです！？」

もう可愛いんだからリンちゃん♪

「いつの間にそんな仲良くなったの二人共？」

不思議そうな表情をしながらリザードンが聞いてきた。

「リザードンが寝てる間にいろいろ話をしてね。それで仲良くなったのよ。あっそろそろレオン達の朝礼が終わってる頃だから、依頼掲示板の所に行かない？　レオン達がいるかもしれないし」

「そうだね。リンさんも一緒に行く？」

「えっ？　あっはい！」

私はリザードンとリンちゃんと一緒に依頼掲示板があるフロアに向かった。

「あついたいた！」

依頼掲示板があるフロアに来ると、そこには依頼を探しているレオンとポツチャマがいた。

『……はあ……』

あら？　なんか二人してため息を吐いてるわ……あゝもしかしてまだ落ち込んでるのあの二人？

「レオン達、昨日の失敗をまだ気にしてるみたいだね」

「そうみたいね……もう、いつまでも失敗した事を引きずってるなんて……男なんだからもっとシャキッとしてほしいわ」

とは言っても……あの様子だと今日一日中落ち込んでそうだね……あっそうだ！

「ねえ二人共、ちょっとこっち来て」

私はリザードンとリンちゃんを連れて、レオン達がいる反対側の方へと向かう。

「な、何どうしたのaska?」

「閃いたのよ、レオン達を元気にする方法をね♪」

「どんな方法なんです?」

リンちゃんが質問してきた。

「まあ単純に気分転換させるんだけどね。まずリザードンはポツチヤマと一緒に何かして」

「何かって何すれば良いの?」

「リザードンに任せるわ」

「えゝ僕任せゝ?」

私は頷いて応えた。

「そしてリンちゃん、リンちゃんはレオンとデートして」

「デッデデデートオオオ!? むぐっ……」

「シーツ!? 声が大きいわよ!?!」

私はつるのムチでリンちゃんの口を塞いで辺りを見回す。……うん大丈夫、誰も聞いてないみたいね。それを確認した私はつるのムチをリンちゃんの口から離す。

「リンちゃんとデートしたら、きっとレオンも喜ぶから。ねっ?」

「な、なんで私なんですか? アスカさんがやれば……」

「私じゃダメよ。これは、リンちゃんにしか出来ない事なの。だから、お願い」

私はリンちゃんに頼み込む。

「うゝ……解りましたよ……」

「良かった♪ よろしくねリンちゃん♪」

よし、あとはレオン達を誘い出せばオッケーね。

「じゃ、計画を説明するわね」

「計画って……ただトレジャータウンに行けば良いんじゃないの?」

「それじゃダメよ。トレジャータウンじゃ、いつもと変わらないじゃないのよ。だから、皆でリゾートに行くのよ♪」

『リゾート!?!』

リザードンとリンちゃんは驚きの声を上げた。

「リゾートに行くんですか!？」

「そうよ。私達が初めてこっちに来る前に、途中で綺麗な島を見つけてね。あとで解ったんだけど、そこは海のリゾートって呼ばれる場所だったの」

「あゝあの島か。……ってアスカ、まさかそこまで僕が皆を運んで飛ぶの？」

「もちろん♪」

私は笑顔でそう答える。

「ハハハ……やっぱりね……はあ……」

あら、リザードンが深くため息を吐いて俯うつむいちゃったわ。

「あの……私の友達に大型で海を渡れるポケモンがいるんですけど、彼に頼めば海のリゾートまで乗せてもらえるとだと思いますよ?」

「えっ本当!？ アスカ、その人に頼もうよ!」

復活早っ!？
でも……乗せてもらえるんならありがたい事だけ
ど……

「リンちゃん、そのポケモンに私達全員乗れるの?」

「乗れますよ。何しろポケモンで一番大きいって言われるホエルオ
ーですから」

「ホエルオーなの！？ リンちゃんの友達って！？」

「はい」

あっさりと言うリンちゃん。驚いたわ……ホエルオーって言えば、リンちゃんが言うようにポケモンの中で一番大きいポケモン。そんなポケモンと友達なんて……やるわねリンちゃん。

「じゃあそのホエルオーに頼むとして……何処に行けば会えるの？」

私はリンちゃんに質問する。

「彼は海を自由に泳ぐのが好きで、決まった場所にはいないんですけど……今の時期だったら多分、トレジャータウンの近くにある海岸付近を泳いでると思います」

「……思いますって事は、ひょっとしたらいないかもって事？」

リザードンがそう質問すると、リンちゃんは申し訳なさそうに頷いた。

「でもいると思いますよ。私、先に行って捜してきますね」

そう言ってリンちゃんは先に海岸へ向かった。

「お願いだからいますようにいますように！」

リザードンが両手を合わせて祈るようにしてる……そんなに嫌なのね、運ぶの。

「じゃ、じゃあ早速行動開始よ。レオンにポツチャマ！　ちよつとこっちに來てくれない？」

私が大きな声で呼ぶと、レオン達は気づいてこっちに向かつてきた。

「……呼んだかアスカ？」

うわっテンション低っ！？　ちよつとこっちまで気分が暗くなっちゃうわよ……ってそんな事より。

「気分轉換に皆で海のリゾートに行こうって事になったんだけど……レオン達も行かない？」

単刀直入に私は言った。

「リゾート！？　あっ僕行きたい！」

ポツチャマが早速食いついたわね。

「ポツチャマが行くならレオンも行くわよね？」

「リゾートか……でもそんな気分じゃ……」

「……い・く・わ・よ・ね？」

ちよつと睨みつけながら私は強い口調で言った。

「あっはい行きます！？　行かせてもらいます！？」

「よろしい♪　じゃあ、早速行きましょ。海岸でリンちゃんが待ってるから」

私達はギルドから出て、リンちゃんがいる海岸へ向かった。

海岸。

「うわっでっけえー！」

レオンが声を上げて驚いている。気持ちは解るわ、だって海岸にはホエルオーがいたんだから。
それにしても本当に大きいわねー！

「皆さーん！　早く乗って下さーい！」

あっホエルオーの上にリンちゃんが！

「あっ今行くわ！ リザードン、彼処まではよろしく♪」

「はい」

リザードンは私とレオン達をホエルオーの上まで運んでくれた。

「じゃあホエルオー、海のリゾートまでよろしく！」

「了解なんだな」

私達を乗せたまま、ホエルオーは沖に向かって泳ぎだした。

第三十七話 アスカの計画。リゾートへ行って気分転換！（後書き）

レオン

「本当にまんまだったな（汗）」

ゲームには絶対無い完全オリジナルストーリーを展開しちゃうから

（笑）

ギャグ路線で行く予定（笑）

レオン

「どんなストーリーになるんだ？」

台本ならここに。

レオン

「どれどれ……えっ（汗）何この……むぐっ……」

それ以上は言わないで（汗）

第三十八話 海のリゾート（前書き）

帰ってきたぞー！

レオン

「っていきなり叫ぶなよ（汗）つうか、今まで何してたんだよ？」

なんていうか……充電してたって言うのかな？

まあ充電期間が長すぎたけどね（汗）

レオン

「本当だよ（汗）」

とりあえず、今日からまた一定のペースで更新していく……ように頑張ります（汗）

第三十八話 海のリゾート

陽が燦燦と降り注ぐなか、アスカ、レオン、ポッチャマ、リザードン、リンの五人はホエルオーの背中に乗ってここリゾート地、海のリゾートへとやってきていた。

「うわゝ結構綺麗な所なんだね♪」

海のリゾートに感動したのか、ポッチャマは目をキラキラとさせている。

「確かに綺麗だよな」

腕組みをしながら、レオンは辺りの景色を見回している。

「……あの、アスカさん……例の計画はいつ実行するんですか？」

リンが小声でアスカに尋ねる。

「あゝ実行するタイミングは私に任せて。いきなり実行するのは不自然だからね……まずは皆でリゾートを楽しみましょう♪」

笑顔でアスカはそう言った。

「楽しむとして……まず何するのアスカ？」

今度はリザードンがアスカに尋ねた。

「幸いにもこの砂浜には私達以外にポケモンはいないみたいだから

……まずはこれで遊ばない？」

そう言ってアスカが少し大きめのバッグから取り出したのは青と白のラインが入ったビーチボールだ。

「ビーチボール……って事はもしかしてビーチバレー？」

「そっ♪」

「でも必然的に一人余るよね？」

「細かい事は気にしないの。なんとかなるわよ」

何故か自信満々に言うアスカ。

(……毎度思うけど、アスカのこの自信は何処からくるの?)

口には出さず、心の中でそう呟くりザードンであった。

「レオンにポツチャマ〜！ 皆でビーチバレーやるわよ〜！」

つるのムチでビーチボールを持ち、レオン達にビーチバレーをやる事を告げるアスカ。

「ビーチバレー？ やるやる♪」

やる気満々のポツチャマ。しかし……

「ってリゾートにまで来てバレーやんのかよ？」

レオンは少し不満そうだ。

「……文句あるのかなレオン君？」

顔は笑っているが目が完璧に怒っているアスカ。殺気を剥き出しにしている。

「や、やります！？ やらさせていただきます！？」

恐怖したレオンは必死になってビーチバレーをやる事をアスカに言う。

「よろしい♪」

（……アスカ、昔よりも怒りっぽくなってる……）

隣にいたりザードンはまたまた口には出さずに心の中でそう呟く。

「じゃあ、始めるわよー！」

早速ビーチバレーを始めるアスカ達。

アスカはリザードンと、レオンはポツチャマとペアを組んでやる

ようだ。ちなみにリンは審判をやるようだ。

「いくわよ、それっ！」

アスカはボールを上に向けて投げ、器用につるのムチを使いボールを叩き、サーブする。

「よっと！」

レオンは素早くボールの落下地点に移動し、両手を使ってレシーブ。

「いくよレオン！」

その後ポツチャマが上手い具合にレオンの真上にボールをトスした。

「ナイストスだポツチャマ！　くらえ！」

レオンは高くジャンプして、右手でボールを思いっきり叩きスパイクする。

「ほいつ！」

そこにアスカが最初にサーブした位置から動かずにつるのムチを伸ばし、ボールを受け止め真上に上げる。

「ってアスカ！？　なんかズルくねそれ！？」

「あら？　私はつるのムチを使わないとボールを掴めないしレシー

ブも出来ないのよ。それにサーブもね……文句ある？」

「……無いです」

また怒られるのが嫌だったのか、素直にアスカの言う事を聞くレオン。

「それよりレオンにポツチャマ。ブロックの準備した方が良いわよ？」

『へっ？』

アスカがつるのムチで上を指しながら言う。

二人が上を見上げると、空高く打ち上がったボールを今にもスパイクしようとしているリザードンの姿が。

「えっ飛ぶのもありなんか!？」

「だってリザードンには翼があるもの。飛ぶのは当然でしょ？」

当たり前だとも言いたげな表情をするアスカ。

「いくよ二人共! ファイヤースマッシュ!」

リザードンはフルパワーでボールを叩く。

さらにそのボールに火炎放射を放ち、炎を纏まとわせた。

炎を纏ったボールはレオン達に向かって落下していく。

「ってこれ無理!？」

「わわわわ!？」

レオン達は慌ててその場から逃げる。そしてボールは地面にぶつかった。

「アスカ&リザードンペアに一点です！」

リンが高々と声を上げる。ちなみに十点を先に取ったチームの勝ちである。

「なにやってんのよレオンにポツチャマ？　ボールから逃げたら勝負にならないでしょ？」

「取れるかあんなもん!？　レシーブした瞬間に燃えるだろが!？　大体リザードン!　なんで火炎放射なんか使うんだよ!？」

「いや……ファイヤースマッシュって名前だから一応炎を纏わせようと……それに、アスカが技使って良いって言うから……」

アスカを指しながらリザードンはそう説明した。

「アスカ!　そんな事俺達には一言も言ってなかったよな!？」

「あゝら言ってなかったかしら?　可笑しいわねゝ言っただと思っただけど」

慌^{とほ}けるアスカ。

「……そうかそうか、だったらこっちも技使ってやっからな!　ポツチャマ、全力でやるぞ!」

「うん！」

レオンとポツチャマが本気になった。

「私達に勝てるかしら？　いくわよ……それっ！」

アスカがサーブする。

そしてアスカがサーブしたボールをポツチャマがレシーブ。

「頼むぜポツチャマ！」

レオンがポツチャマの真上にボールをトスする。

「任せて！」

ポツチャマはボールに向かってジャンプした。

そして思いっきりスパイクしようと構える。

「悪いけど邪魔させてもらうわよ！　光合成！」

そこにアスカが光合成を発動させた。身体から眩しい光が発せられた。

「わっ眩しい！？　」

あまりに眩しい光に思わず目を瞑つむってしまうポツチャマ。

その間にボールは地面に落下してしまった。

「アスカ& a m p, リザードンペアに一点！　これで合計二点です」

「残念だったわね」

少し笑みを浮かべながら言うアスカ。

「あゝなんかスツゴいムカつく!？」

とても悔^{くや}しそうにしているレオン。

「……あのゝアスカさんちょっと良いですか？」

ここで審判だったリンがアスカに声を掛ける。

「ん? どしたのリンちゃん？」

「いや、なんか凄い楽しそうなんで私もやりたいなゝって……レオンさんと……」

最後の部分だけ何故か小声になるリン。

「オツケゝ、じゃあポツチャマとチェンジって事で。ポツチャマ、良いわよね？」

「うーん……まあ良いよ。じゃあリンさん、交代だね」

急遽^{きんぐ}リンがポツチャマと交代してバレーに参加した。
そして今度はポツチャマが審判に。

「よ、よろしくお願いしますね、レオンさん」

少し緊張した感じで言うリン。

「あ、^{ああ}嗚呼よろしくな」

「リンちゃん相手でも手加減しないわよ。それっ!」

アスカがつむのムチでサーブ、そして飛んできたボールをレオンがレシーブ。

「……手加減なんか無用ですよ」

今まで優しかったリンの目つきが鋭く変わった。そしてボールに向かって高くジャンプ。

「ぶっ飛べえええ!」

リンがフルパワーでボールを叩く。^{せつな}刹那、ボールは目にも止まらぬスピードでアスカ達の陣地に落下した。

あまりに強い力だった為か、ボールが完全に地面に埋まっている。

「う、嘘……」

これにはアスカやリザードン、それにポツチャマとレオンも驚愕した。

「ふう……さあ、こっから反撃ですよレオンさん!」

またいつもの優しい目に戻るリン。

どうやらリンは怒った時以外に、勝負事の時でも人格が変わってしまうようだ。

「お、おう……」

まだレオンはリンのパワーに驚いているようだ。

「こ、これはかなりの強敵ね……リザードン、油断しちゃダメよ」

「わ、解ってるよ」

アスカ達のビーチバレーはまだまだ続く……

第三十八話 海のリゾート（後書き）

レオン

「リンって力が強っ!？」

なにせNARUTOのサクラちゃんを参考にしてますから（笑）

レオン

「マジか（汗）ってかさ、アスカがまたさらに怖くなったような気がするんですけど（汗）」

気のせい……ではないな、うん（汗）まあ歳を取ればあゝなると……

アスカ

「誰がババアよこら（怒）」

ぐ……ぐるじ……（汗）

レオン

「……失礼します（汗）」

第三十九話 激闘！ ビーチバレー！（前書き）

やっと出来た（汗）

レオン

「やっとかい（汗）」

なかなか前みたいなペースに戻せないな（汗）
あっそうだ。

前回書き忘れてたので今回こそは（汗）
また三人称です。

レオン

「何故に一人称から三人称に？」

海のリゾート編は、三人称の方が都合が良い為（笑）
本当は人称は統一した方が良いんだけどね（汗）
実力不足ですわ（汗）

レオン

「頑張れや（汗）」

第三十九話 激闘！ ビーチバレー！

海のリゾートにやってきて、砂浜でビーチバレーを始めたレオン達。

技を上手く使い、レオン&ポッチャマペアをほんろう翻弄して点数を稼ぐアスカ&リザードンペア。二点のリードを許してしまったレオン達だが、リンがポッチャマと交代して試合に参加したところ……リンは女の子とは思えないパワーで凄まじいスパイクを決め、試合の流れを変えた。

現在のスコアは二対一でアスカ達がまだリードしている……が。

「おらあああ！」

リンがフルパワーでボールを叩く。ボールは目にも留まらぬ速さでアスカ達の陣地に落下した。

「レ、レオン&リンチームに一点！」

ポッチャマはリンの恐ろしいパワーに驚愕しながらも、レオン達に点数が入った事を告げる。

「は、反応出来ないよ……」

リンが放つ超高速スパイクに手も足も出ないリザードン。

「これは負けペースね……何か策を考えなきゃ……」

アスカは策を練り始めた。

「レオンさん、この調子でガンガンいっちゃいましょう♪」

「お、おう……」

（って言われても、俺ほとんど何もしてないんだけどさ……）

リンのパワーに圧倒されっぱなしのレオン。

そんなレオンを余所^{よそ}に、リンはサーブをする為^{ため}に位置に着く。

「いきますよアスカさん……」

リンはボールを高く上げる。そしてボールに向かって思いっきりジャンプする。

「一球……入魂！」

リンはフルパワーでボールを叩く。刹那^{せつな}、ボールは目にも留まらぬ速さでアスカ達の陣地に落下した。

「レ、レオン&リンチームにまた一点！」

これで三対二、リンの活躍で遂に逆転した。

「……アスカ、もしかして僕達、あのサーブを止めない限り……」

「……私達にサーブ権がくる事は無いし、試合にも負けちゃうわね」
苦笑いしながら答えるアスカ。ラリーポイント制の為、アスカ達が一点でもポイントを取らない限り、ずっとリンがサーブを打ち続ける事になるのだ。

「アスカさん、次いきますよ？」

もうサーブをする体勢に入っているリン。
それを見たアスカ達は慌てて配置に着く。

（リンちゃんのあの高速サーブを止めるにはやっぱり光合成で妨害するしか……いえ、それはさっき使ったから同じ手段は通用しないわね……せめてレシーブをする事が出来れば……）

アスカは頭の中をフル回転させて、打開策を考える。その間に、
リンは再びボールを高く上げる。

「一球……入魂！」

リンの超高速サーブが放たれた。そしてアスカ達が反応するよりも速く、ボールはアスカ達の陣地に落下した。

これで四対二、点差が開き始める。

「もう速すぎるわよ!? ……あら？」

ここでアスカは何かに気づいたのか、ボールが落下した所を見つめる。

（そういえば……今までリンちゃんが攻撃したボールが落下した場所って全部同じね……）

リンが放つ超高速のボールは、常にアスカとリザードンの間に落下している事にアスカは気づいた。

「……試してみる価値はありそうね……」

何か思いついたのか、アスカは笑みを浮かべる。

「アスカさん、準備良いですか？」

「ええ良いわ、来なさい！」

アスカ達は配置に着く。それを確認したリンは、再びボールを高く上げる。

「一球……」

（今だわ！ 光の壁！）

アスカは今までリンが放ったボールが落下した場所にエネルギーの壁を作り出し、ボールが地面に接触しないようにした。

「入魂！」

刹那、リンの超高速サーブが放たれる……だが、アスカが思った通り同じ場所にボールは落下、光の壁に阻まれてボールは地面にぶつからず、上へ大きく跳ねた。

「えっ!？」

自分のサーブが決まらなかった事に驚くリン。

「大成功！ リザードン、思いっきりやっちゃって！」

「任せて！」

リザードンは高く跳ね上がったボールを追いかける為に素早く上昇。

そしてボールの真上を取る。

「いっけえ！ ファイヤースマッシュ！」

リザードンは思いっきりボールを叩き、ボールに火炎放射を放って炎を纏まとわせる。

炎のボールはレオン達の陣地に向かって落下していく。

「熱いの嫌だけど、そんな事言ってられねえ！」

レオンは落下してくる炎のボールに向かってジャンプした。

「アイアンテール！」

レオンは尻尾を鋼のように硬くして、尻尾を思いっきりボールに叩きつけ、ボールを打ち返す。

だが、上手くコントロール出来なかったせいか、レオンが打ち返したボールはアスカ達の陣地から大きく外れてしまった。これで四対三、差が縮まった。

「熱っ！？ し、尻尾が火傷したっ！？」

レオンは自分の尻尾を両手で掴み、息を吹きかけている。少しレオンの尻尾が焦げている。

「ポツチャマ、尻尾に水鉄砲頼む！？」

「わ、解った!」

ポツチャマは口から水を吐き出し、レオンの火傷した尻尾に掛ける。

「あゝ……冷たくて気持ち良い」

本当に気持ち良さそうな顔をするレオン。

「大丈夫ですかレオンさん?」

心配そうな表情でレオンに聞くリン。

「あっうんなんとか」

「良かったです……でも、私が打つコースが良く解りましたねアスカさん?」

少し不思議そうな表情をするリン。

「今までリンちゃんが攻撃したボールは、全部同じ場所に落下していた事に気づいてね。それでもしかしたら、リンちゃんはサーブのコントロールが上手く出来ないから同じ場所に落下するんじゃないのかって考えたのよ」

「……さすがアスカさん。その通りです」

アスカの推理がその通りだった事にリンは少し驚く。

「さあ、反撃開始よりザードン！」

「うん！」

「簡単にやらせませんよアスカさん！ レオンさん、頑張りましたよ
うね！」

「おう！」

それからしばらくして……レオン達とアスカ達の試合は、どちら
も一步も譲らない一進一退の攻防が続いた。

一点を取られたらまた一点を取り返す……それを繰り返し、遂に
スコアは九対八にまでなった。

リードしているのは、レオン&リンのペアだ。
そしてサーブはリンが打つ。

「あと一点……もらいますよアスカさん！」

リンはボールを高く上げる。

「一球……入魂!!」

リンはフルパワーの超高速サーブを放つ。

「簡単にやらせないわよ、光の壁!」

アスカはボールの落下地点に光の壁を張り、ボールが地面に触れないようにする。

そして、ボールは大きく跳ね上がる……が、光の壁の角度が悪かったせいか、ボールはレオン達の頭上へ。

「よっしゃ、これで決める!」

レオンはボールに向かって思いっきりジャンプ、そして身体から電気を放出し始める。

「決まれ、ライジングシュート!」

レオンは思いっきりボールを蹴った。蹴った際にレオンが放出していた電気はボールに纏わりつき、バチバチと音を立てながらボールは落下。

ボールはリザードンの右肩に直撃する。

そして右肩にぶつかったボールは今度はポツチャマの方へ向かっていく。

「えっ……えゝ!?」

突然の事に対処出来ず、ポツチャマは顔面にボールを受ける。

「な……なんでこうなる……の……ガクッ」

ポツチャマは目を回して倒れてしまった。

第三十九話 激闘！ ビーチバレー！（後書き）

レオン

「一応俺とリンがバレーに勝ったけど……ポツチャマ大丈夫か？（汗）」

あの子は丈夫だから平気さ（笑）

レオン

「マジか（汗）」

そして次回は、そろそろアスカの計画が……

レオン

「計画？」

あっ君は知らなくて良いからね（笑）

レオン

「なんで〜？（汗）」

第四十話 レオンとリン 前編（前書き）

やっと出来た（汗）

更新スピード、極端に遅くなって申し訳ないです（汗）

第四十話 レオンとリン 前編

「おいしい、ポツチャマ〜？ 生きてるか〜？」

「……うん……」

リンが放った強烈なスパイクを顔に受け、完全に伸びてしまっているポツチャマに呼び掛けるレオン。相当強烈なスパイクだったのか、ポツチャマの顔は赤く腫^はれている。

「……ちよつとやりすぎてしまったでしょうか？」

レオン達から少し離れた場所にいたアスカ達の中で、申し訳なさそうにしながらリンが呟く。

「ちよつと心配だね」

リザードンはポツチャマの事を心配そうに見つめる。

「まあアクシデントが起きたけど、とりあえずポツチャマをレオンから離す事はこれで出来るわね」

（ってポツチャマの事心配しないんだねアスカ……）

まさかのアスカの発言に苦笑いしながら心の中で呟くりザードン。

「リンちゃん、そろそろ例の計画を実行するわよ」

少し笑みを浮かべながら、アスカはリンにそう言った。

「こ、このタイミングでやるんですか！？ あ、ポツチャマさんは……？」

「あゝあの子ならリザードンが見張ってるから大丈夫よ」

「アスカ、看病するの間違いなんじゃない？」

腕組みをして、アスカに質問するリザードン。

「細かい事は気にしないの。さあ、早速行動開始よリンちゃん」

「解りましたけど……どうやってレオンさんを連れ出すんです？」

首を傾げながらアスカに質問するリン。

「それは私に任せなさい♪ さあ行動開始よ！」

何故か楽しそうな感じのアスカ。アスカはレオンの所へと駆け寄る。

リンとリザードンも慌ててアスカについていく。

「レオン、これから私とリンちゃんと一緒に買い物行くわよ」

「買い物？」

アスカの言葉に首を傾げるレオン。

「そっ。近くに土産物とかが売ってる市場があるのよ。そこにだつたら、ポツチャマのその腫れた顔に効く薬とかも売ってるかもしれない」

ないわよ？ だから、一緒に行きましょう？」

「で、でもポツチャマをここに置いてく訳にはいかないし……」

伸びているポツチャマを見つめながらレオンはそう言った。

「それならリザードンがちゃんと見張っ……いや、看病してくれるから大丈夫よ」

「だけど……」

「……行くわよね、レオン君？」

なかなか行くと言わないレオンに対して、アスカは少し強い口調で言う。その時のアスカの表情は笑顔であったが、目が完璧に怒っていた。

「い、行きます！？」

恐怖したレオンは、冷や汗を流しながら行くと返事をする。

「よろしい♪」

（……半強制的だねこれ……）

苦笑いを浮かべながら、心の中でそうリザードンは呟く。

「じゃあ私達は行ってくるから、リザードンはポツチャマをよろしくね」

リザードンにそう言い、アスカはレオン、リンと一緒に市場に向けて出発した。

リザードンとポツチャマと別れてからしばらくして、アスカ達は海のリゾートにある市場にやって来ていた。

市場にはポケモン達が店を開いていて、様々な商品を売っていた。

「へー、意外にたくさんあるんだな」

店に置かれている商品を眺めるレオン。

「……リンちゃん、ちょっと……」

商品を眺めているレオンに気づかれぬよう、アスカは小声でリンを呼び寄せる。

「なんです？」

「今から私がポツチャマの薬を買いに行くから、リンちゃんはレオンと二人で楽しくデートしちゃって」

リンにそう耳打ちするアスカ。

「……わ、解りました」

少し顔を赤面させながら、リンは頷く。

「じゃ、あとは任せたわよリンちゃん♪」

そう言ってアスカはウィンクし、リン達から離れいった。

「……よ、良し……頑張らなくっちゃ私！」

気合いを入れるリン。

そしてリンはゆっくりとレオンの隣へ。

「あれ？ アスカは？」

「ア、アスカさんならポツチャマさんの薬を買いに行きましたよ？」

少し緊急しているのか、声が震えるリン。

「なんだアスカだけで行っちゃったのかよ……」

「し、しばらくしたら戻ってくるからって言っていました。あ、あの……アスカさんが戻ってくるまで……わ、私と一緒にい、市場を見て回りませんか？」

「うーん……まあ他にやる事無いし、良いよ」

リンの提案を了承するレオン。

「じゃあまずはあっちから見て回るか？」

「あっは、はい！」

リンはレオンと一緒に市場を見て回る為に歩き出した。

「ようやくデートを始めたわね」

そんな二人の様子を遠くで見つめるポケモンが一人……アスカである。

アスカはすぐにポツチャマの薬を買いには行かず、リン達の様子を見ていたのだ。

「……ちゃんと上手くやるかしらリンちゃん？ ……ちょっと気になるわね」

アスカのリンとレオンの偵察が始まった。

一方その頃、ポツチャマと一緒に留守番していたリザードンは……

「……ふあ……暇だなあ……」

大きな欠伸あくびをしながら海を眺めるリザードン。隣では、まだ伸びてしまっているポツチャマがいる。

「……ポツチャマがこんなじゃ話し相手にならないし……かと言
ってポツチャマを置いてここから離れる訳にはいかないし……」

目を閉じ、腕組みをして一人考えるリザードン。

「……寝よ」

一言そう呟くと、リザードンは横になって昼寝を始めた。

リザードンが昼寝を始めてしまった頃、リンとレオンは……

「あっこれ可愛い♪」

リンは店に置かれている、手の平サイズのピチューを象かたどったガラス細工の商品を見つめている。

「確かに可愛いなこれ。おっこっちにも良さげなのがあるぞ」

「どれですか？」

レオンが指差す先をリンが見てみると、そこにはルカリオを象ったガラス細工の商品が置いてあった。

「これはルカリオみたいですネ？」

「ルカリオって言うのかこのポケモンは……格好良いな」

どうやらレオンはこのルカリオのガラス細工が気に入ったようだ。

「……なかなか良い感じじゃないのよあの二人」

二人を尾行していたアスカは、レオン達に気づかれないように物陰に隠れながら様子を見ていた。

「あの感じなら大丈夫そうね。よし、私はちゃっちゃと買い物済ませて来よっと！」

アスカはポツチャマの菓を買う為によやくその場から離れる。

「これっていくらなんだろう？」

レオンはルカリオのガラス細工に付いている値札を確認する。

(……ん！？　ゼロが一つ、二つ、三つ、四つ……えっと俺の所持金は……)

どうやらルカリオのガラス細工はかなり高かったらしい。

レオンは慌てて自分が持っているバッグの中に入れてあるお金を数え始める。

(……た、足りねえ……依頼者からもらったお礼のお金、ほとんどギルドに取られるから貯まらないんだよなあ……)

持っている所持金ではガラス細工を買えない事が判明し、がつくりと肩を落とすレオン。

「泥棒ー!？」

その時、市場に悲鳴が響いた。何事かと思い、レオンとリンは声がした方に振り向く。

「どけどけー!」

そこには店から奪ったと思われる商品を握りしめて全力で走っている、人型で逞しい身体をした筋肉体質のポケモン……ゴーリキーがいた。

そのゴーリキーはレオンとリンがいた店を通り過ぎ、市場からどんどん離れていく。

「もしかして今のが泥棒か？　よし、追いかけるぜリン!」

「はい!」

レオンとリンは泥棒のゴーリキーを追いかける為に走り出した。

第四十話 レオンとリン 前編（後書き）

レオン

「前編と後編に分けんのか？」

そうだよ。

次回は君とリンがタッグで泥棒を追いかけるのさ。

レオン

「久々に俺、活躍出来んのか？」

うーん……リンが一緒だからそれはどうかな？（汗）

レオン

「マジかい（汗）」

第四十一話 レオンとリン 後編（前書き）

なんとか出来た（汗）

さて、投票で3点しか取れなかったレオンは活躍出来る……のかな？

レオン

「疑問系かい（汗）」

第四十一話 レオンとリン 後編

「こらー！ 待ちやがれその泥棒！」

海のリゾートにある市場で泥棒のゴリキーに遭遇したレオンとリンは、その泥棒ゴリキーを追いかけていた。

「待てと言われて待つ奴がいるかってんだよ！」

市場の店から奪った商品を片手に握りしめ、全速力でレオン達から逃げるゴリキー。

「ちっ！ あいつ見掛けによらず速いぞ！」

「私に任せて下さい！」

リンは近くに転がっていた丸い岩石の所へ向かう。

「いい加減に止まりなさいよ筋肉バカ！ おらあああ！」

リンは自分の尻尾で岩石を叩く。刹那^{せつな}岩石は物凄い勢いで吹き飛び、ゴリキーに向かっていく。

「ごはっ!？」

リンが放った岩石はゴリキーの後頭部に直撃、ゴリキーは前方に吹き飛びうつ伏せになって倒れる。

「良しっ命中！」

リンはガッツポーズして岩石がゴーリキーに命中した事を喜ぶ。

「う、嘘……」

軽く自分の倍以上ある岩石を吹き飛ばしたリンの力に驚くレオン。

「さあレオンさん、泥棒を捕まえましょう！」

「お、おう」

レオンとリンはうつ伏せになったまま倒れているゴーリキーの所へ駆け寄る。

「……爆裂パンチ！」

倒れていたゴーリキーがいきなり起き上がり、地面を思いっきり殴りつける。すると地面が砕け、細かい岩石がレオン達に襲いかかった。

「くっ！」

「マジかよ!?!」

レオン達はその場で急停止、すぐにバックステップして岩石を回避する。

「そう簡単に捕まるかよ!」

再びゴーリキーは逃走する。

「あの野郎……待ちやがれ！」

レオンとリンは急いで逃げたゴースキーを追いかける。

一方その頃、市場で買い物をしていたアスカは……

「ポツチャマに付ける薬は買ったし、プクリンが好きだって言ってたセカイイチに、ギルドの皆のお土産も買ったと……よし、あとは私の買い物をしよっと♪」

ショッピングを楽しんでいたアスカ。

「なあ聞いたか？ 向こうの方で店の商品が盗まれたってさ」

「あゝ聞いた聞いた。悪い奴ってのは絶えないよな」

その時、市場に買い物しに来ていたゴルダックとルンパツパが話しながらアスカの近くを通り過ぎようとしていた。

（店の商品が盗まれた？）

ポケモン達の会話に聞き耳を立てるアスカ。

「それで、その店の商品を盗んだ奴はどうなったんだ？」

ゴルダックがロンパッパに質問する。

「逃げ出したんだと。その泥棒を捕まえようとピカチュウとライチュウが追いかけてるって事だぜ？」

（ピカチュウとライチュウ？ ……それってレオンとリンちゃんじゃないのよ！ こうしちゃいられないわ！）

「ねえちよつとそこの二人！ その泥棒がどっちに逃げていったか解る？」

会話していたゴルダックとロンパッパに泥棒がどっちに逃げていったのかを質問するアスカ。

「えっ？ 泥棒なら市場から東の方角に向かって逃げたって事だけど……あんた誰だ？」

首を傾げるロンパッパ。

「市場から東ね？ ありがとう！」

情報を聞いたアスカはその場から走り去っていった。

「せっかくのデートを滅茶苦茶にしちゃって……その泥棒、見つけたらタダじゃおかしいわよ！」

アスカがレオン達の応援に向かっている頃、リザードンとポツチ
ヤマは……

「……………くく……………くく……………」

「……………うん……………」

……………リザードンは昼寝中、ポツチヤマはまだ伸びていた。

その頃レオンとリンは、とある洞窟の入り口前に来ていた。
この洞窟の中にゴリキーが逃げ込んだのだ。

「絶対逃がさねえぞ……行こうぜリン」

「はい！」

レオンとリンは洞窟の中へと入っていった。

「うわっ暗いなこん中」

洞窟の中は薄暗く、前が良く見えない状況だ。

「私に任せて下さいレオンさん。フラッシュ」

リンの頬にある電気袋が眩しい光を発せられ、暗かった洞窟の中を照らしだす。

「おゝ滅茶苦茶明るいな！ リンってこういう技も使えるんだな？」

「探検家としていろんな所へ行きますからね。そこではどんな事が待ち受けているか解りません。だから、どんな状況でも対処出来るようにこういった技も使えるようにしてるんですよ」

自分の経験をレオンに説明するリン。

「へ」

「レオンさんもフラッシュを使えるようにすると良いですよ、役に立つ筈ですから」

「うーん……でもどうやって使えるようになるのか解んねえしなあ」
腕組みをして少し困った表情を浮かべるレオン。

「でしたら、私が教えてあげますよ」

笑顔で自分が教えると言うリン。

「じゃあよろしく頼むよリン」

「もちろんですよ。……あっレオンさん、彼処を見て下さい」

リンが洞窟の奥を指差す。レオンはリンが指す方に目を向ける。
洞窟の奥にうつすらと明かりが見える。

「彼処に奴がいるのかもな……行こうリン」

「はい」

レオンとリンは洞窟の奥に進んでいく。

洞窟の奥へとやってきたレオン達。洞窟の奥は広い空間があり、天井には大きな穴が空いていて太陽の光が中を照らしている。

「やっぱりここまで追ってきやがったな！」

その広い空間の中に、泥棒のゴリキーがいた。

「追い詰めたぞ泥棒野郎！ さあ、盗んだ商品を返しすんだ！」

頬の電気袋から電気をバチバチと放出しながらゴリキーを威嚇するレオン。

「追い詰めた？ 追い詰められたのはお前達の方さ！」

「その通りだ」

レオン達の背後から突然声が。レオン達が振り向くとそこには四人のワンリキーと、ワンリキーとゴリキーの最終進化系である四本の腕が特徴的なポケモン、カイリキーがいた。レオン達がこの空間に入ってきた唯一の出入り口である場所を塞ぐように立っている。

「げっ！？ 仲間がいたのか！？」

「俺の弟の仕事を邪魔してくれたみたいだな？ ……覚悟は出来てんだろうな？」

レオン達を睨みつけるカイリキー。

「行け野郎共！」

カイリキーの指示で、四人のワンリキー達がレオン達に襲いかかった。

「来ますよレオンさん！」

「解ってるさリン！」

レオン達は戦闘体勢に入る。その時、二人のワンリキーがレオンに向かって空手チョップで攻撃してきた。

「高速移動！」

レオンは素早い身の熟しこなでワンリキー達の空手チョップを回避する。一方リンの方にも別の二人のワンリキー達が空手チョップで攻撃してきた。

「はっ！」

リンは避けずに両手を使ってワンリキー達の空手チョップを受け止める。自分達の攻撃を受け止められ、ワンリキー達は驚愕する。

「それで全力？ だったら私に勝てないわね……うらあああ！」

ワンリキー達の手を掴んだまま、リンは二人を振り回す。そして勢いをつけたところで二人を投げ飛ばす。投げ飛ばされた二人は重なり合い、壁にぶつかる。

「気合いパンチ！」

そこにリンの渾身の一撃が炸裂。このリンの気合いパンチを受けたワンリキー達は目を回してその場に倒れ込む。

「弱いわね」

一方のレオンは二人のワンリキー達の空手チョップを高速移動で回避しながら反撃のチャンスを待っていた。

（こいつらパワーはあるけどスピードが無い……そのうち攻め疲れて動きが鈍くなる筈だ）

レオンはひたすら攻撃を回避し続ける。

なかなか攻撃が当たらず、焦り始めるワンリキー達。そのうちワンリキー達は息を切らし始める。

「今だ！」

動きが鈍くなった一瞬の隙を突き、ワンリキー達の懐に飛び込む。
ふじしろ

「10万ボルト！」

懐に飛び込んだレオンは、強力な電撃を放出。

ワンリキー達に直撃させる。強力な10万ボルトを受けたワンリキー達はその場に倒れ込む。

「良し！」

「ちっ！ 情けない奴らだ……兄貴、やっちまおうぜ！」

「そうだな」

ゴリキーとカイリキーが戦闘体勢に入る。

「おら行くぞ！ 爆裂パンチ！」

「高速移動！」

ゴリキーの爆裂パンチを回避する為、素早い身の熟しでバックステップしたレオン。だが、ゴリキーの爆裂パンチが地面に当たり、地面が砕けて細かい岩石がレオンに襲いかかってきた。

「くっまたかよ！？」

この岩石の奇襲に思わず怯んでしまうレオン。

「炎のパンチ！」

レオンが怯んだ一瞬の隙を突いてゴリキーはレオンに接近、右手に炎を纏^{まと}わせてレオンの腹部を殴る。

「がはっ！？」

ゴリキーの炎のパンチを受けたレオンは大きく後方へ吹き飛ばされる。

「レオンさん！？」

「お前の相手は俺だぜ！ 気合いパンチ！」

カイリキーの渾身の右ストレートがリンに襲いかかる。

「はっ！」

だがリンはそれを左手で受け止めてしまう。

「ならもう一発！」

今度は左手で気合いパンチを放つカイリキー。

だがそれをリンは右手で受け止める。

「……力勝負なら負けないわよ」

「小さいくせにやるじゃねえか……だがな、俺にはまだ腕はあるんだよ！」

カイリキーは右のもう一本の腕を使って気合いパンチを放つ。

すでに両手を使ってしまっているリンに防ぐ手段は無く、ついに気合いパンチを受けてしまう。

気合いパンチを受けたリンは後方へ吹き飛ばされる。

「くっ……あの四本の腕は厄介ね……」

吹き飛ばされたリンだが、なんとか耐えていた。

「痛っ……くっそ、効いたぜ……」

腹部を右手で押さえながらレオンが立ち上がる。

「どうした？　もうお終いか？」

レオン達を挑発するように言うカイリキー。

「んな訳ねえだろう！　勝負はこっからだ！」

「その通りよ！」

再び戦闘体勢に入るレオン達。

「次で終わらせてやるぜ！」

ゴーリキーがレオンに向かっていく。

「真っ向勝負がダメなら、これでどうだ！　電磁波！」

レオンは向かってきたゴーリキーに軽い電撃を浴びせる。刹那、ゴーリキーは動きを止める。

「か、身体が……動かねえ……」

電磁波を受け、ゴーリキーは身体が麻痺してしまったのだ。

「電光石火！」

麻痺したゴーリキーにレオンは素早い身の熟しで接近、体当たりしてゴーリキーを後方へ吹き飛ばす。

「これで決める！　雷！」

レオンは今自分が出来る最強の攻撃をゴーリキーに直撃させる。
雷を受けたゴーリキーは目を回して倒れた。

「ゴーリキー！ 貴様！」

弟のゴーリキーを倒された事に怒り、カイリキーはレオンに向かって突進していく。

「相手を間違えるんじゃないわよ！ フラッシュュ！」

リンはカイリキーの前に先回りし、フラッシュュを使って眩い光を発する。

「ぐああ……目、目がああ……」

両手で目を押さえるカイリキー。

「はああああ！」

リンは強烈なアッパーをカイリキーの顎あごに炸裂させる。
カイリキーは空中へ吹き飛ばされる。

「まだよ！」

リンは尻尾をまるでバネのように使って高くジャンプ、吹き飛ばしたカイリキーの上を取る。

「気合いパンチ！」

渾身の一撃をカイリキーの顔面に直撃させるリン。気合いパンチを受けたカイリキーは地面に落下、身体を地面に打ちつける。

「これで終わりよ！ 気合いパンチ！」

リンは落下しながらさらにもう一撃をカイリキーの腹部に炸裂させる。

落下スピードも加わった事で威力が倍増、強力な気合いパンチを受けたカイリキーの身体は地面にめり込んでしまった。

さすがにこの一撃は耐えられなかったカイリキーは目を回している。

「ふう〜……ようやっと終わりましたね」

「だな……はあ、疲れた〜」

さすがに疲れたのか、その場に座り込むレオン。

「レオン！ リンちゃん！」

その時、アスカがようやくレオン達の所へ到着した。

「あっアスカさん」

「……助太刀しようと思って来たけど……この様子だと必要なかったみたいね」

周りに倒れているカイリキー達を見ながらアスカはそう言った。

「それで、盗まれた商品はどうだったの？」

「商品なら、彼処にあるぞ」

レオンが指差す方には、無造作に置かれた商品が存在していた。

「じゃあ早く持ち主のところに返してあげなくちゃ。リンちゃんとレオンはその商品持って先に戻ってて」

「えっ？ アスカはどうすんだ？」

首を傾げながら質問するレオン。

「私はこいつらを捕まえて警察に届けてくるわよ……その前にちょっとお仕置きするけど」

倒れているカイリキー達を見つめながらアスカは言った。

「じゃあ二人共、商品の方は頼んだわよ」

「あっはい。レオンさん、行きましょ」

「お、おう」

レオンはリンと一緒に商品を持って持ち主に返しに向かった。

第四十一話 レオンとリン 後編（後書き）

レオン

「……リン強いっす（汗）」

女の子は強いんです。

さて、そろそろ海のリゾート編も終わり……かも？

レオン

「だから何故疑問系（汗）」

第四十二話 帰ってきたら……（前書き）

レオン

「久しぶりの更新だな」

新人をデビューさせちゃったから余計に時間掛かっちゃいましたわ
（汗）

第四十二話 帰ってきたら……

盗まれた商品を取り返し、泥棒を退治する事が出来たレオンとリン。

その後合流したアスカに泥棒達を任せてレオンとリンは盗まれた商品を持ち主に返す為、市場に向かって歩いていた。

「なあリン、ちょっと聞いても良いか？」

両手を組んだまま後頭部に当て、隣にいるリンに聞くレオン。

「なんです？」

「リンってさ、もの凄い力あるよな？　なんでそんなに力があるんだ？」

「あゝ……それは、師匠の特訓のおかげなんですよ」

「師匠の特訓？」

首を傾げるレオン。

「ええ。全ての生き物は波動と呼ばれるエネルギーを持っていて、その波動を上手くコントロール出来るようになれば、私みたいに身体能力を向上させて凄い力を出せるようになるんです。私は師匠に、波動をコントロールする方法を教えてもらったんです」

「へゝ……じゃあ、俺も特訓したらその波動ってのをコントロール出来るようになるのかな？」

「レオンさんならきつと出来ますよ」

笑顔で答えるリン。

その後レオンとリンは自分の事や探検で起きた出来事など、様々な事を話して会話を楽しんでいた。そんな楽しい会話をしている間にレオン達は目的地である市場に到着した。市場に到着した二人は早速商品の持ち主である店主に盗まれた物を返してあげた。

店主は盗まれた商品が返ってきた事を非常に喜び、レオンとリンにお礼の言葉を贈った。

店主に商品を返した後、レオンとリンはリザードンとポッチャマが待っている砂浜に戻る事にして、市場から出発しようとしていた。

「レオン、リンちゃん！」

その時、レオン達に向かって一人のポケモンが駆け寄ってきた。アスカである。

「あっアスカ。泥棒達は？」

「当然警察に届けたわよ。まあちょっと届ける前に、軽く締め^しめたいけどね」

笑みを浮かべながら言うアスカ。

「締めたって……一体何したんだよ?」

「つるのムチを首に巻き付けて締め付けたり、宿り木の種とか毒の粉で体力奪ったり……」

（容赦ねえなおい……）

アスカが泥棒達にしたという行動に、レオンは少し恐怖を感じながらそう心で呟くのであった。

「アスカさん、締めるんだったら私にも言って下さいよ。私も協力してあげたのに、泥棒達に電磁波使って動けなくしてからサンドバックにしたり……」

残念そうにしながらアスカに言うリン。

「あゝごめんねリンちゃん。じゃあ次また悪い事した奴見つけたら、今度は一緒にやりましょ?」

「約束ですよ?」

（……アスカとリンの前でバカな事するの止めよ、殺される……）

この時レオンはそう心に誓うのであった。

それからしばらくして、レオン達はリザードンとポツチャマが待つ砂浜に戻ってきた……のだが。

「ただいま、今帰った……」

「く……く……く……」

まだ伸びてしまっているポツチャマの隣で、幸せそうな表情で寝息を立てているリザードン。

「ま……たりザードンは寝ちゃってるのね……ほら、起きなさいよ」

アスカはつるのムチを伸ばし、リザードンの身体を揺さぶる。

「うーん……あっお帰りアスカ」

眠そうに目を擦りながら上体を起こすリザードン。まだ眠いのか、目がとろんとしている。

「あんたねえ、ポツチャマの事見ててねって言ったのに寝てちゃ意味無いでしょ！」

「ふあ……だって暇だったんだもん」

大きく欠伸あくびをしながら言うリザードン。

「全くもう……まあ、リザードンらしいと言えぱりザードンらしいけどね。それで、ポツチャマは？」

アスカはリザードンのすぐ近くにいたポツチャマを見つめる。

「……痛いよ……」

リザードンが寝ている間にポツチャマは意識を取り戻していたようだ。

ただ、まだ顔は赤く腫れている。

「おい大丈夫かよ？」

レオンは心配そうな表情をしている。

「ちょっと待っててね、今買ってきた薬塗ってあげるから」

アスカは市場で買ってきた塗り薬をポツチャマの顔に塗り始める。

「あっヒンヤリする」

気持ち良さそうなポツチャマ。

「さて、ポツチャマに薬を塗ったし、買い物も済ませたし……そろそろ帰りましょうか？」

ポツチャマに薬を塗った後、アスカはレオン達に聞く。

「そうだな。充分気分転換出来たし」

「私も良いですよ」

「久しぶりにゆっくり寝れたし、僕も良いよ」

「えっ、僕ほとんど気絶してたから楽しんで……」

「じゃあ帰りましょ♪」

ポツチャマの意見を見無視して皆は帰る準備をし始める。

「……最近僕の扱いが酷くなってるのは気のせい？」

それからレオン達は帰る準備を済ませた後、リンの友達であるホエルオーの背中に乗って帰ってきたのであった。

「乗せてくれてありがとうねホエルオー」

「別に良いんだな。じゃあリン、またなんだな」

ホエルオーは沖の方に向かって泳ぎだした。

それを見送ったレオン達は、荷物を持ってプクリンのギルドに向かって歩き出した。

「あっそういえばアスカ、良く俺達が海のリゾートに行く事をペラップが許してくれたな？　どうやって許しをもらったんだ？」

首を傾げながらレオンはアスカに聞く。

「許し？　そんなもんもらってないわよ」

『えっ？』

思いもしない返答にレオンとポツチャマは驚いてしまう。

「も、もらってねえのか！？」

「だってあのペラップが許しをくれる訳無いもの。大丈夫、ペラップの事は私に任せなさいって」

自信満々に言うアスカ。

「あっ……皆さん、あれ見て下さい」

その時、リンがギルドやトレジャータウンへの道になっている十字路を指差す。レオン達が見てみると、ちょうど道の真ん中に一人

のポケモンがうつ伏せで倒れている姿が。

「おいおい、ポケモンが倒れてるじゃんかよ!？」

レオン達は慌てて倒れているポケモンに駆け寄る。

「ちょっと君! 大丈夫?」

アスカが倒れているポケモンに声を掛ける。

刹那^{せつな}、そのポケモンのお腹からぐぐつという音が鳴り響く。

「あゝ……腹減ったゝ」

どうやらこのポケモンはお腹が空いて倒れてしまったようだ。

「な、なんだ、誰かにやられた訳じゃなかったのか」

事件じゃなさそうなので、レオンはホッとした表情を浮かべる。

「腹減って力出ねえゝ……」

またそのポケモンのお腹からぐぐつという音が鳴り響く。

「君、私達これからこの坂の上にあるギルドに行くんだけど一緒に来る? そこだったら食事を出してくれると思うけど?」

「マジ!? 行く行くゝ♪」

食事という言葉聞いた途端に元気になったポケモン。目をキラキラとさせながら自分も行くと言おう。

「な、なんなんだこいつ？」

あまりの変わりようにレオンは驚く。

「おい！ 何やってんだよ、早く行って飯を食おうぜ！」

ついさっきまで目の前にいた筈のポケモンは、すでに坂の所に移動していた。

『速っ！？』

その移動の速さに思わずアスカ達は声を上げて驚いてしまう。

「は～や～く～！」

「わ、解ったからちょっと待ってなさいよ！」

アスカ達はそのポケモンと一緒にプクリンのギルドに向かっていった。

第四十二話 帰ってきたら……（後書き）

レオン

「ん？　なんか最後に出たポケモン……どっかで見た事あるような？」

アスカ

「私もそんな気が……」

まあ次話で解るさ。

ってか皆もう解ってると思うけどね（笑）

第四十三話 俺の胃袋は宇宙！？ 大食いのバクフーン！（前書き）

って事で、あのポケモンとは僕の代表作『バクフーン達の冒険』の主人公してるバクフーンでした（笑）

アスカ

「発表しなくても解ってたわよ（汗）」

レオン

「いかにも先輩らしい登場の仕方だったからな（汗）」

バクフーン

「あんま誉めんなよ（笑）」

アスカ&レオン

『いや誉めてないから（汗）』

まあ、記念すべき最初の出張先をここにした訳だけど……大分馴染んでるねこっちに（汗）

第四十三話 俺の胃袋は宇宙！？ 大食いのバクフーン！

海のリゾートから帰ってきたレオン達。

ギルドへの帰り道、レオン達はお腹を空かせて倒れていた一人のポケモンと出会う。そのポケモンにご飯を食べさせる為、レオン達は一緒にギルドへと向かったのだが……

「このグミっての美味っ！ おかわり〜♪」

食堂ではあのポケモンが凄い勢いでたくさんグミを食べている。その食欲にアスカやレオン達、それにギルドの弟子達やペラップはただただ驚くしかなかった。

「余程お腹空いてたんだね君？ まだたくさんあるから、好きなだけ食べてね」

プクリンは驚きもせず、いつもと変わらない表情でそのポケモンに優しく言う。

「マジで！？ お前良い奴だなあ！」

プクリンの言葉を聞いて、またさらにグミをたくさん食べるポケモン。

「……俺達の方、残るかなあ？」

自分達の食料も食べられてしまうんじゃないかと不安になってきたレオンは思わずそう呟く。

「あの、親方様、よろしいですか？」

ペラップが小声でプクリンに話し掛ける。

「ん？　なあに？」

「貯蔵庫にあるグミがそろそろ底を突きそうなんですが……」

ギルドの貯蔵庫に蓄えていたグミが無くなりそうになっている事をプクリンに伝えるペラップ。

「おかわり頼む〜♪」

そんな事を知ってか知らずか、またしてもポケモンはおかわりを頼む。

「はぁ〜食った食った♪　ごちそうさま〜」

満面な笑みを浮かべるポケモン。結局ギルドの貯蔵庫にあるグミを全て平らげてしまったようだ。

「はい、お粗末様でした。良い食べっぷりだったね」

ギルドの貯蔵庫にあるグミを全て平らげられたにも拘^{かか}わらず、プクリンは至って冷静だ。

「まさかギルドの貯蔵庫にあるグミを全て平らげてしまうとは……これじゃあ私達の夕食は無しだな」

『えー！？』

夕食無し……ペラップの発言を聞いて弟子達は驚きの声を上げる。

「それなら心配ないわよ皆。ほら、海のリゾートで買ってきたセカイイチよ」

アスカは弟子達全員に海のリゾートで買ったセカイイチを手渡す。セカイイチを受け取った弟子達は喜びの声を上げる。もちろんセカイイチが好物であるプクリンも例外ではない。

「セカイイチだ♪ ありがとうねアスカ♪」

満面な笑みを浮かべ、プクリンはアスカにお礼を言う。

（プクリンがあんな感じに喜んでるとこ、俺初めて見たかも……）

心の中でそう呟きながら、プクリンを見つめるレオン。

「ねえ。そういえばまだあなたの名前を聞いてなかったわよね？」

弟子達やプクリンがセカイイチを美味しそうに食べている間に、アスカは両手で膨れ上がったお腹を押さえているポケモンに名前を尋ねる。

「あっそういえばそうだったな。俺はバクフーンっていうんだ。飯食わせてくれてありがとうな♪」

そのポケモン……バクフーンは笑みを浮かべながら名乗った。

「バクフーンね？ 私はメガニウムのアスカよ。そして彼処にいるのがピカチュウのレオン。隣にいるのがポッチャマで、あっちにいるのはリザードンよ。それから……」

アスカはバクフーンにレオン達やギルドの弟子達を紹介した。

「……とまあこんな感じね。そういえば、あなた良くあんなにたくさんグミを食べれたわね？」

「俺の胃袋は宇宙だからな、あれくらい余裕余裕♪」

笑みを浮かべるバクフーン。

「あんたいろんな意味ですげーよ……」

レオンは苦笑いしながらそう呟く。

「ねえバクフーン、お腹空かせて倒れてたみたいだけど、なんでそんな状態になるまでご飯とか食べなかったの？」

首を傾げながらアスカは質問する。

「いや、ここには初めて来たもんだから、何処に何があんのか全然解んなくてさ。散々歩き回っても木の実とか見つからなくて……んでついに彼処でボタンキューっと」

右手を後頭部に当て、少し恥ずかしそうにしながらバクフーンは答える。

「初めてこっちに来た……じゃあ、バクフーンさんは何処から来たんですか？」

そうバクフーンに質問したのはリンだ。

「えっ？ 何処から？」

バクフーンがそう聞き返す。それにリンは頷いて応える。

（えっとお……どう答えれば良いかなあ？ 絶対別世界から来た事をこっちの連中に喋るなってディアルガとパルキアに言われてんだよな……うーん）

返答に困り、考え込んでしまうバクフーン。

「別に良いじゃないかリン、バクフーンが何処から来たって。良い人には変わりないんだから」

そう言ってプクリンは笑みを浮かべる。

「うーん……まあ、それもそうね」

（た、助かった……）

何処から来たのか返答しないで済んだ事にホッと胸を撫で下ろすバクフーン。

「ところでバクフーン、今日は何処か泊まる所とかあるのかい？」

プクリンはバクフーンに泊まる宿があるのかを聞く。

「あっ……そういえば無かった」

「今日はもう遅いし、良かったらここに泊まっていくかい？」

「えっ！？ 良いのか!？」

泊めてもらえるとは想像してなかったバクフーンは驚きの声を上げる。

「もちろんだよ。部屋は……レオン達の部屋で良いかな？」

「俺達の？ 別に良いけど……」

「んじゃお言葉に甘えて、泊まらせていただきま〜す♪」

嬉しそうにしているバクフーン。

太陽は完全に沈み、代わりに満月が夜の世界を照らす深夜の時間。ギルドにいるポケモン達は全員眠りにについている……一人のポケモンを除いて。

「……腹減ったなあ」

レオン達と同じ部屋にいるバクフーンは、お腹を空かせてしまった目が覚めてしまったようだ。

「……良し」

何かを決めたバクフーンは起き上がり、抜き足差し足忍び足とレオンやアスカ達を起こさないようにゆっくりと歩き始める。

「食い物がありそうな場所は……」

部屋から出たバクフーンは鼻をクンクンと、まるで犬のようにしながら食べ物の匂いを嗅ぐ。

「……おっ！ この香りはリンゴだな♪」

匂いを嗅ぎ取ったバクフーンは、リンゴの香りがする部屋に向かって直行した。

バクフーンが食べ物を保存している貯蔵庫に向かった同時刻、ギルドの入り口前にとある三人のポケモンがやって来ていた。

「アニキ、ここだぜここ。俺とドガースをぶっ飛ばしやがった奴がいるギルド」

「思い出しただけでも腹が立ってきたぜ」

三人のうち二人は、以前レオンとポツチャマに倒されてしまったズバットにドガースだ。

（ブクリンのギルド……まさか、あいつが消してほしいと言っていたターゲットがいる場所に、子分共をぶっ飛ばした奴がいるとはな）

ギルドを見つめながらそう心の中で呟くポケモンは、以前ゲンガー達と一緒にいる所を目撃されたスカタンクだ。

「ククク……仕方ねえな。お前達を可愛がってくれた奴らに、お仕置きをしてやるか。ズバットにドガース、明日には始めるぞ」

「へっ？ アニキ、今じゃないんですか？」

「ククク……まあそう焦るなズバット。俺に良い考えがあるのさ」

第四十三話 俺の胃袋は宇宙！？ 大食いのバクフーン！（後書き）

レオン

「先輩、俺達が寝てる間に何してるんすか（汗）」

バクフーン

「だって腹減ったんだもん」

アスカ

「先輩らしいと言えはらしいけど……それより、最後に出たのって」

ポケダンの探検隊では同じみだね。

レオン

「あのずんぐりした野郎……今度は絶対ぶっ倒す！」

気合い充分だね。

あっそういえば……ちよつとこっちに來てくれるかなバクフーン？

バクフーン

「ほえ？ 何？」

冷蔵庫にいれといたケーキが無くなってただけど、何か知らないかな？

バクフーン

「し、知らないけど？」

……ふうん、じゃあその口についてるクリームは何かな？

バクフーン

「げっ！？ まだ付いてのか！？」

嘘さ。口にはクリームなんか付いてないよ……でもそういうリアクションをするって事は……

バクフーン

「……（滝汗）逃げる！」

待てやコラー！（怒）

アスカ&レオン

『……（汗）』

第四十四話 消えたセカイイチ（前書き）

昨日執筆を終わらせて、そして投稿するつもりが……予定通りにいかなかった（汗）

アスカ

「何してんのよ？」

いやね、いろいろとあったのよ（汗）

第四十四話 消えたセカイイチ

翌朝、ギルドの弟子達はいつも通りに集合して朝礼を始めていた。

「み〜っつ！」

『皆笑顔で明るいギルド！』

ペラップの掛け声にレオンやポッチャマを含めた弟子達は大きな声を出して答える。

「それじゃあ皆、仕事に掛かるよお！」

『おぉー！』

弟子達はそれぞれ仕事をする為にその場から離れていく。レオンとポッチャマも仕事をしようとその場から離れようとする。

「あ〜お前達ちょっと良いか？」

そんなレオン達をペラップが呼び止める。

「なんだよ？」

レオンは少し嫌そうな表情をしながらペラップに聞く。

「お前達二人に頼みがある。これは私からの依頼って事だな。実は、貯蔵庫に貯めていた親方様の好物であるセカイイチが無くなってしまったんだ。そこで、お前達二人にはセカイイチを取ってきてほし

いのだ」

ペラップはレオン達にセカイイチを取ってきてほしいと依頼する。

「なんでセカイイチが無くなっちゃったの？」

ポツチャマが首を傾げながら質問する。

「それが……良く解らんのだ。確かに昨日の昼にはちゃんと貯蔵庫に保存されていた筈なんだが……」

「それがいきなり無くなったと？」

レオンの問いにペラップは頷く。

「セカイイチは親方様の大好物。もしそのセカイイチが無い事を親方様に知られたら……」

ペラップはプクリンが怒った姿を想像してしまったようで、身体が震えている。

「とにかく、これは最重要任務だからな！ 絶対にセカイイチを確保するように。リンゴの森と呼ばれる場所にセカイイチはある。頼んだぞ二人共」

ペラップはレオン達にそう言うのと、その場から離れていった。

「リンゴの森か……ってそれ何処にあるんだよ？」

「えっと……」

徐にトレジャーバッグから地図を取り出すポツチャマ。

「ふぁー……おはようっす……」

その時、ギルドの中から大きく欠伸あくびをしながらバクフーンがやってきた。

「あつ、おはようバクフーンさん」

「嗚呼ああ呼び捨てで良いぜレオン？ 堅苦あしいのは苦手だからさ」

笑みを浮かべながらバクフーンは言う。

「じゃあそうさせてもらおうかな。そういえばアスカ達は？」

「なんかプクリンがアスカ達に話したい事があるからって、今中で話してるぜ？」

「あつ！ 解ったよレオン！ ここから東の方角に真っ直ぐ行った場所にあるみたい」

ポツチャマがリンゴの森がある場所を指し示しながらレオンに言う。

「ん？ レオン達はこれからどこかに行くのか？」

首を傾げながら質問するバクフーン。

「これからリンゴの森に行くんだ。そこでセカイイチを見つけて、

それを持ち帰るんだ。なんでも貯蔵庫にあったセカイイチがいつの間にか無くなってたみたいでさ……」

（貯蔵庫にあったセカイイチ……リンゴの森……はっ!? まさか、夜中に食ったあのリンゴがセカイイチだったのか!?）

自分が食い尽くしたリンゴがセカイイチだった事が解ると、バクフーンは額から汗を流し始める。

「そのセカイイチが親方様の好物だね。セカイイチが無いと親方様が怒っちゃうみたいなんだよね」

苦笑いしながら言うポツチャマ。

（あれプクリンの大好物だったのか……あちゃー、なんか悪い事しちゃったなあ俺……）

罪悪感を抱くバクフーン。

「じゃあ俺達はそろそろ行くよ。プクリンにセカイイチが無い事がバレないうちに持ってこなきゃならないからさ」

レオンとポツチャマはセカイイチを取りに、リンゴの森目指して出発しようとする。

「あつ、ちょっと待った！ 俺も一緒に行くぜ！」

急にバクフーンもレオン達と一緒に行くと言い出す。

「えっ？ なんで？」

首を傾げるレオン。

「あっ、いや……とりあえず暇だし、昨日の飯をご馳走してくれたお礼もしたいしさ、あはは……」

右手の人差し指で頬を掻きながら言うバクフーン。

「そういう事か。良いよ、一緒に行こうぜ。ポツチャマも良いよな？」

「全然OKだよ」

二人はバクフーンと一緒に来る事を承諾する。

「よろしくな二人共。じゃあ、リンゴの森目指してしゅっぱーっ！」

元気良く歩き出すバクフーン。しかし……

「っておいバクフーン！ そっちは反対方向だぞ！」

「……あり？」

バクフーンはリンゴの森とは全く違う方向に歩いていたのだ。

「ほら、早く来ないと置いてっちゃうぜ？」

「あっ、待てよお前ら！」

気を取り直してレオンとポツチャマとバクフーンは三人でリンゴ

の森に向かって出発した。

そんなレオン達を物陰に隠れながら見つめているポケモンが三人……

「ククク……そうか、奴らはリンゴの森に向かうのか。おいドガス、ズバット。先回りしてリンゴの森に行くぞ」

物陰に隠れながらずっと今までの会話を聞いていたスカタンク、ズバットにドガス。

スカタンクは何かを思いついたようで、二人を引き連れてレオン達よりも先にリンゴの森へ到着しようと走り出す。

レオン達がリンゴの森に向かって出発した頃、ギルドの中ではアスカとリザードン、そしてリンがプクリンと話をしていた。

「……プクリン、その情報は確かなの？」

首を傾げながらアスカはプクリンに聞く。

「確かだよ。暗夜の森でヤミラミを目撃したって、ペリッパから聞いたからね」

「……暗夜の森ね」

「行くのかいアスカ？」

アスカに暗夜の森へ行くのかを聞くリザードン。

「もちろんよ。あいつらが一体何者なのか、見つけたら吐かせてやるわ」

「私も協力しますよアスカさん」

リンもアスカ達と一緒に行動するつもりようだ。

「暗夜の森はここから南東の方角にあるよ。三人共、何が起こるか解らないんだから、無茶しちゃダメだよ？」

「解ってるわよプクリン。リザードン、リンちゃん、行くわよ」

アスカ達はヤミラミ達が目撃されたという、暗夜の森に向けて出発した。

第四十四話 消えたセカイイチ（後書き）

レオン

「俺達と先輩がリングの森に向かって……」

アスカ

「私達が暗夜の森に向かうと……」

やっぱり三人称だとかこういう展開がやりやすいな、うん。

バクフーン

「次回はどうなんだ？」

次回はレオン達の方からやるつもりだよ。

第四十五話 リンゴの森には危険がいっぱい？（前書き）

今回は……うん、ちょっと遊びました（笑）

レオン

「いや遊んだって（汗）」

とりあえず君達にはいろんな災難が降り注ぐよ（笑）

ポツチャマ

「えゝ（汗）」

バクフーン

「どんな災難も乗り切ってやるぜ！」

おっさすが先輩だねえ！

バクフーン

「……でも程良く頼むぜ？」

うおい（汗）

第四十五話 リンゴの森には危険がいっぱい？

「ここがリンゴの森か」

ペラップからの依頼でセカイイチを取ってくる事になったレオンとポッチャマ。現在彼らは一緒に行動する事になったバクフーンと共に目的地であるリンゴの森にやってきていた。

「へー、名前がリンゴの森だけあってリンゴがたくさんあるなあ！」

木に実っているたくさんさんのリンゴを見てバクフーンは目を輝かせている。口からは涎よだれが。

「バクフーン、俺達リンゴ食いに来たんじゃないぞ？」

「わ、解ってるさレオン」

苦笑いしながら言うバクフーン。

「ククク……なんとか先回りする事が出来たな」

そんなバクフーン達を草木に隠れながら見つめているポケモンが三人……スカタンク、ズバット、ドガースである。

「アニキ、これからどうするんで？」

ズバットがスカタンクに質問する。

「奴らより先にセカイイチを確保する。だがその前に、奴らがセカ

「イイチにたどり着けないように罠を仕掛けるんだ。お前達、行くぞ」
スカタンク達はバクフーン達に気づかれないう静かに森の奥へと進んでいった。

「ポツチャマ、セカイイチはどの辺にあるんだ？」

「ちょっと待っててねレオン……」

ポツチャマはバッグから地図を取り出す。

「えっと……セカイイチがあるのは森の一番奥みたいだよ？」

「奥か。よし、じゃあ行くか……ってバクフーン？」

出発しようとした時、隣にいた筈のバクフーンがいなくなっている事に気づくレオン。バクフーンを探す為辺りを見回す。

「あついた」

「うーん、このリングゴ美味しいなあ♪」

ポツチャマが指し示した方向には美味しそうにリングゴを食べているバクフーンが。

「バクフーン……」

目を細め、呆れた表情をしながらバクフーンを見つめるレオンとポツチャマ。それに気づいたバクフーンはレオン達の方に振り向く。

「あっ……悪い、我慢出来なくてつい」

右手を後頭部に当て、苦笑いするバクフーン。

「あのな……まあ良いや。それよりそろそろ出発するぜ」

「あいよ」

気を取り直し、レオン達はセカイイチを求めて森の中へと入っていく。

「ん？　なんだろあれ？」

森の奥へと続く道を歩き続けたレオン達の前に、不自然に置かれた山盛りのリンゴが。

「怪しすぎだろあれ、近づかない方が……」

「うん、このリンゴも美味しい♪」

レオンが注意するよう言おうとした時には、すでにバクフーンはリンゴの所にいた。

「つておいっ!？」

「大丈夫だって、普通に食えるし……」

バクフーンがそう言いかけた時、急にバクフーンの足下からミシツと嫌な音が。

『ミシツ?』

三人が口を揃えて言った時、バクフーンの足下が突然崩れた。

「つて嘘おおお!？」

バクフーンはそのまま落下してしまう。

「バクフーン!？」

レオン達は慌ててバクフーンの所に駆け寄る。

「痛たたた……こ、腰打った」

穴の中でバクフーンは両手で腰を押さえて痛みに耐えていた。

「これ、落とし穴……だよね？」

ポツチャマはバクフーンが落ちた穴を見ながらそう呟く。

「落とし穴だな……バクフーン、大丈夫か？」

「な、なんとか……くそ、こんな巧妙な罠が仕掛けられてるなん

て！」

「いや単純な罠だから」

呆れた表情をしながらレオンはツツコミを入れる。

「でも誰がこんな罠を仕掛けたんだろ？」

首を傾げるポツチャマ。

「それは解らねえけど、注意して進んだ方が良さそうだな」

バクフーンを落とす穴から引き上げた後、レオン達は再びセカイイチを求めて森の奥へと歩きだしていた。

その道中、レオン達は様々な罠に遭遇する。

「つてうわああ!？」

バクフーンが歩いている時、地面に隠れていたロープに足が引っかけり宙吊りにされたり……

『なんでマルマインがこんなに!？』

何処からやって来たのか、大量のマルマインにレオン達は追いかけられたり……

『スパアーこっちにこないで!？』

バクフーンが落ちていたグミを拾おうと木に近づいたらそれがスパアーの巣がある木で、住処を荒らされたと思った大群のスパアーに襲われたり……散々な目に合うのであった。

「はあ、はあ……もう無理、ちょっと休もうぜ……」

疲れ果てたバクフーンは大の字になって倒れ込む。

「ぼ、僕も疲れちゃったよ……」

「俺も……」

レオンとポツチャマはその場に座り込む。

「はあ、はあ……い、今どの辺まで来たのかな……？」

「解んない……でも結構進んできたと思うけど……」

ポツチャマはバッグから地図を取り出して現在の位置を確認しようとする。

「はあ、しんどい……あつ、セカイイチだ」

『えっ？』

バクフーンが見つめている先をレオン達も見てみる。そこには探し求めていたセカイイチが存在していた。

「あつ、本当だ！」

「やっと見つけたなあ。あとはあれをギルドに持ち帰るだけだな」

もうすぐで依頼を達成出来る……そう思ったレオンは少しホッとした表情を浮かべる。

「ククク……案外早く来たなお前達」

その時、セカイイチが実っている木の後ろからスカタンク達が姿を現した。

「あっ！？ お前はあん時の！？」

スカタンクを見た瞬間表情を陰しくするレオン。

「レオン、あいつら誰？」

「前に俺達の依頼を邪魔しやがった嫌な奴らさ」

スカタンク達の事をバクフーンに簡単に説明するレオン。

「ククク……悪いがお前達にセカイイチを渡す訳にはいかないな」

「おいあんた、なんで俺達の邪魔をするんだよ？」

バクフーンはスカタンクに聞く。

「子分共がそいつらに世話になったみたいでな、仕返しをしようとしてるだけさ」

レオンとポツチャマを睨むスカタンク。

「……あっ！ さては今までの罠はお前達が仕掛けたんじゃないだろうな！」

強い口調で言うレオン。

「ククク……だとしたらどうする？」

「やっぱりか……もう許さねえ、お前達全員ぶっ倒す！」

戦闘体勢に入るレオン。それに続いてポツチャマも構える。

「ククク……お前達に俺達が倒せるかな？ ドガス、あれやるぞ」

「了解だぜアニキ」

スカタンクとドガスが攻撃体勢に入る。

（何かくるなあれは……）

スカタンク達が何か仕掛けてくると予想したバクフーンは身構える。

「くらえ！ 毒ガススペシャルコンボ！」

第四十五話 リンゴの森には危険がいっぱい？（後書き）

バクフーン

「作者〴、俺すっげー罨に掛かったんだけど」

いや、あんな単純な罨に引っ掛かる君が悪いよ（汗）

レオン

「そして俺達は巻き添え（汗）」

ポツチャマ

「先輩〴（汗）」

バクフーン

「……すんませ〴ん（汗）」

さて、次回はスカタンク達の毒ガススペシャルコンボが炸裂、君達はどうなっちゃうのかな？

レオン

「原作通りなら……」

あつ、ちなみに原作通りになるとは限らない……かもよ？

ポツチャマ

「曖昧（汗）」

バクフーン

「いつもの事だろ？」

第四十六話 リンゴの森での戦い、VSスカタンク! (前書き)

レオン

「なあ作者、この台本マジかよ(汗)」

マジだよ、文句ある？

レオン

「だって、俺が主人公なのに……」

はいそこから先は言っちゃダメ、アスカよろしく(笑)

アスカ

「はいはい、つるのムチ!」

レオン

「ぐえっ!?!」

バクフーン

「って作者、あれはやりすぎだって(汗)」

気にしない気にしない(笑)

第四十六話 リンゴの森での戦い、VSスカタンク!

スカタンクとドガースはお互いの毒ガスを合わせた強烈なガスをレオン達に向けて噴射、ガスに包まれてレオン達の姿が見えなくなる。

「ククク……俺とドガースの毒ガススペシャルコンボを受けて無事だった奴らはいない」

この攻撃に絶対の自信を持っているようで、スカタンクは勝ち誇った顔をする。

「うゝ……」

そんなスカタンクの隣で、毒ガスの強烈な臭いにやられてしまったズバットが倒れて伸びている。

「……アニキ、ズバットがまた伸びてるぜ?」

「ほっとけ、いつもの事だ。そのうち目を覚ますだろうよ……そろそろガスが晴れるな」

スカタンクが言うように、レオン達を包んでいたガスが晴れていく。

そして完全にガスが晴れた時、そこにはうつ伏せで倒れているレオンとポッチャマ、仰向けで倒れているバクフーンが。

「ククク……完全に伸びているな。良しドガース、こいつらが伸びている間に俺達はセカイイチを……」

「セカイイチをどうすんだ？」

突然スカタンク達の背後から声が。スカタンク達が振り向くと、そこには倒れていた筈のバクフーンが立っていた。

「バ、バカな！？ お前は毒ガススペシャルコンボを受けて気絶していた筈！？」

「残念、そこに倒れてるのは俺が身代わりで作った分身なのさ」

「何っ！？」

スカタンクは先程バクフーンが倒れていた場所を見る。そこには今もバクフーンが倒れていたが、そのバクフーンは光の粒子となつて消滅していった。分身が消えた時、そこには大きな穴が地面に空いていた。

「お前らが毒ガスを噴射する時に、俺は穴を掘るで地面に潜って毒ガスを回避したんだ。そんな時に、俺が回避した事がすぐバレないように身代わりを作って穴を隠したんだ」

「……なるほどな、どうやらお前はただ者じゃないようだ……だが、お前一人で俺達を倒す事など出来まい」

スカタンクとドガスはじりじりとバクフーンに迫る。

「出来ないかどうか……試してみるか？」

バクフーンは戦闘体勢に入る。

「貴様……調子に乗るな！　ヘドロ爆弾！」

スカタンクは口から泥の塊を数発吐き出してバクフーンに向けて放つ。

「おっと！」

それをバクフーンは左右にステップする事で難無く回避する。

「体当たり！」

ドガースが全速力でバクフーンに突っ込んでいく。

「火炎放射！」

バクフーンは口から強力な炎を吐き出してドガースを攻撃、火炎放射は直撃してドガースを火だるまにになってしまう。

「熱っ！？　アチチチ！？」

あまりの熱さにドガースは思わずガスを身体から噴射してしまう。そしてそのガスはドガースを包んでいた炎に引火、小規模の爆発が発生する。爆発の衝撃でドガースは吹き飛ばされて地面に激突、目を回してその場に倒れる。

「あゝあ……ガス出して自滅しちゃったよ」

まさか自滅するとは思ってなかったバクフーンは苦笑いする。

「ヘドロ爆弾！」

「危なっ！」

余所見していたバクフーンに向かってスカタンクはヘドロ爆弾を放つが、またしてもバクフーンに難無く回避されてしまう。

「やったなこいつ！ 火炎放射！」

「くっ、悪の波動！」

バクフーンが放った火炎放射に向けて、スカタンクは口から黒いエネルギー波を放つ。

螺旋状に回転しながら悪の波動は火炎放射に直撃、爆発が発生する。

「俺の火炎放射を相殺するか……お前結構やるじゃんか！ こいつは面白くなってきたぜ！」

火炎放射を相殺されたにも拘わらず、バクフーンは楽しそうにしている。スカタンクとのバトルを楽しんでいるようだ。

（このままこいつのバトルに付き合っていたら、俺がやられるな……仕方ない、ここは退くか）

「悪いがこれ以上お前と付き合うつもりはない、煙幕！」

スカタンクは口から黒い煙を吐き出し、バクフーンの視界を遮る。

「うわっ、何も見えね！？」

「ククク……じゃあな」

煙幕で姿を隠しながら、スカタンクはその場から逃げていった。

「……うゝん……」

それからしばらくして、ようやくレオンとポツチャマが意識を取り戻した。

「よっ。お目覚めか？」

レオンの隣にはバクフーンがいた。

「うゝ、頭が痛え……あれ、スカタンクは？」

右手で頭を押さえながらレオンは辺りを見回す。

「あいつなら俺とバトルしてて、途中で逃げ出しやがったよ。せつかく盛り上がってきたのに、なんで逃げ出すかねえ？」

バトルを途中で放棄され、少し不満そうな表情を浮かべるバクフーン。

「あつ、そうだ！ セカイイチはどうなったの？」

セカイイチの事を思い出したポツチャマはバクフーンに聞く。

「あゝ、それならほら」

バクフーンはレオン達を持っていたバッグを見せる。中にはセカイイチがいくつも入っていた。

「お前達が気絶してる間に入れといたよ。ちょっと三個位食っちゃまったけどよ♪」

笑いながらバクフーンは言う。レオン達が目覚める間に我慢出来ずに食べてしまったらしい。

「うゝん……」

その時、スカタンク達の毒ガススペシャルコンボで倒れていたズバットと自滅してしまったドガースが目を覚ました。

『あつ……』

そしてレオン達とドガース達は目が合う。

それからドガス達は辺りを見回し、スカタンクがない事に気づく。

『……待って下さいよアニキ〜!?!』

慌ててドガス達はその場から逃げ出し、スカタンクを追いかけていった。

「……結局あいつらなんだったんだ?」

首を傾げるバクフーン。

「さ、さあな……それより、早くセカイイチをギルドに持って帰らないと」

「そうだね」

レオンとポツチャマはセカイイチが入ったバッグを持つ。

「よし、んじゃギルドに向かって出発……ってうわっ!?!」

歩き出そうとした時、突然レオン達の目の前からバクフーンが消えた。

『バクフーン!?!』

二人は慌ててバクフーンがいた場所に駆け寄る。そこには先程バクフーンが穴を掘るで空けた穴が……

「あ、あははは……お、俺が掘った穴に落ちちゃった……」

苦笑いするバクフーン。

『……え〜』

呆れるしかないレオンとポツチャマてあった。

第四十六話 リンゴの森での戦い、VSスカタンク！（後書き）

レオン

「……身体が持たないっす（泣）」

首絞められすぎてグロッキー状態だ（汗）

アスカ

「加減してるんだけどねえ。それにしても、先輩目立ってるわねえ」

気がついたらほとんどレオン放置になってました（汗）

レオン

「……主人公なのに（泣）」

バクフーン

「なんか悪いなレオン（汗）」

さてと次回は……

アスカ

「私達の出番ね」

そう。そしてアスカ達が行く先には、困難があったりなかったり……

アスカ

「いやどっちよ？（汗）」

第四十七話 暗夜の森（前書き）

アスカ

「今回は私達ね」

リン

「暴られますかね？」

うーん……それは本文で解るよ。

第四十七話 暗夜の森

「……ここね、暗夜の森は……」

暗夜の森に以前アスカ達を襲ったヤミラミ達が目撃されたという情報をプクリンから貰ったアスカ達は今、暗夜の森にやってきた。

暗夜というだけあって、森の中は昼間にも拘らず夜のよう^{かかわ}に暗かった。

「うわあ、すごいい不気味な感じなんですけど……」

森の雰囲気になんぞビビり気味のリザードン。

「何言ってるのよりザードン。ほら、あんたが先頭よ」

アスカにつるのムチで引っ張られるリザードン。

「な、なんで僕が!？」

「だってあんたが先頭じゃないと暗くて上手く歩けないでしょ？」

「そうですよ。よろしくお願いしますね、リザードンさん？」

アスカとリンは笑みを浮かべながらリザードンを先頭に立たせる。

「……わ、解ったよ」

渋々リザードンは二人の言う事を聞き、先頭に立って尻尾の炎で

前を照らす。

「じゃあ、行くわよ」

リザードンの炎で前を照らしながら、アスカ達は暗夜の森に入っていく。

「あつ、そういえばリンちゃん。結果はどうだったの？」

暗い森の中を進んでいる途中、不意にアスカがリンに尋ねる。

「何がです？」

何を聞かれたのか理解出来なかったリンは首を傾げる。

「レオンよ。バッチリあいつのハートを掴んだの？」

笑みを浮かべながら聞くアスカ。

「うーん……どうでしょう？ デートは楽しむ事が出来ましたがど
……」

右手を右頬に当て、少し考え込むリン。

「そんなんじゃないダメよりリンちゃん。バッチリあいつのハートを掴まないで、将来レオンのお嫁さんになれないわよ？」

「お、お嫁さん！？　な、何言ってるんですかアスカさん！？」

顔を赤面させて大きな声を上げるリン。

「だ、大体、あのデートはレオンさんを元気づける為にアスカさんが考えた事でしょ！？　なんか目的が違って……」

「細かい事は気にしないの、絶対リンちゃんとあいつはお似合いよ。結婚式には絶対呼んでよ？」

「だからアスカさん！？」

益々（ますます）顔を赤面させるリン。

「あのー、お二人さん？　敵がいるかもしれないんだからもう少し緊張感持った方が良くないじゃ……？」

二人の緊張感の無さに苦笑いしながら言うリザードン。

「ずっと緊張してたら気が滅入るでしょうよ？」

「そりゃそうだけどアスカ……」

「しっ！　二人共静かに！　……聞こえませんか？」

二人の会話に割って入ったリンは会話を中断させ、耳を澄^すませる。アスカとリザードンも同じように耳を澄ませる……すると、遠くの方で物音が聞こえてきた。

「この音、技と技がぶつかり合う音……かな？」

首を傾げながら音の正体を考えるリザードン。

「多分ね……あっちの方から聞こえてくるみたい」

北の方角を見つめるアスカ。

「行きましょう」

アスカ達は音が聞こえる方に向かって走り出す。

しばらく走り続けたアスカ達は、ようやく音が聞こえてきた場所

の近くまでやってきた。

近くまできたアスカ達は走るのを止め、ゆっくりと現場に近づく。

「……あれは」

現場でアスカ達が見た光景、それは……

『シャドークロー！』

「リーフブレード！」

そこでは以前アスカ達を襲ったヤミラミ達がジュプトルを倒そうと襲いかかっていた。

五人いるヤミラミ達は鋭い爪にエネルギーを集めてジュプトルを引き裂こうと攻撃を仕掛けるが、ジュプトルは両腕にある葉っぱにエネルギーを集めて鋭く尖らせ、まるで剣のようにしてヤミラミ達のシャドークローを全て受け止める。

「いい加減しつこいぞお前ら！」

ジュプトルは身体を回転させ、ヤミラミ達を弾き飛ばす。だがヤミラミ達はすぐに体勢を立て直し、身構える。

「あれはあの時のジュプトル……」

「知ってるんですかアスカさん？」

ヤミラミ達に気づかれないように身を潜めながら、リンはアスカに尋ねる。

「前に私とリザードンを助けてくれたのよ。でもなんで彼がヤミラミ達に……」

ジュプトルが何故ヤミラミ達に襲われているのか解らないアスカは考える。

「そんな事よりアスカ、助けなくて良いの？」

「あっ、そうだったわ。二人共、行くわよ！」

アスカの合図と共に三人は一斉に飛び出す。

「エナジーボール！」

「火炎放射！」

「雷パンチ！」

アスカは口から緑のエネルギーを吐き出し、リザードンは口から炎を、そしてリンは拳に電気を集めてそれぞれヤミラミに向かって攻撃を放つ。

アスカ達の攻撃は三人のヤミラミに直撃、ヤミラミ達を吹き飛ばさせる。

「お前達は……」

アスカ達を見て少し驚いた表情をするジュプトル。

「また会ったわねジュプトル。助太刀させてもらおうわよ」

アスカ達は戦闘体勢に入る。

『自己再生!』

その時、アスカ達が吹き飛ばしたヤミラミ達の身体が光り輝き出す……刹那^{せつな}、身体中にあった傷があつという間に治ってしまった。そして何事も無かったかのようにヤミラミ達は立ち上がる。

「相変わらずしつこいわねえ……ねえジュプトル、こいつら一体何者なのよ?」

「あいつらは狙った獲物を仕留めるまで何処までも追いかけてくる……“処刑人”とでも言っておこうか。それより気をつける、奴ら仕掛けてくるぞ」

ジュプトルが見つめる先には、今にも攻撃を仕掛けようとしているヤミラミ達が。

「この前の借り、倍にして返してやるわ」

ヤミラミ達を睨みつけるアスカ。

「……全員殴り倒す!」

完全に戦闘モードに入ったリン、両手からは電気がバチバチと放出されている。

『……死ね!』

ヤミラミ達が一斉にアスカ達に飛びかかる。

第四十七話 暗夜の森（後書き）

アスカ

「ジュプトルと共闘？」

そつ。次回はアスカ達とジュプトルが共闘してヤミラミ達とバトルだよ。

リン

「潰します」

怖いよリン（汗）

第四十八話 VS ヤミラミ（前書き）

アスカ

「ちょっと遅めの、明けましておめでとう」

明けましておめでとうアスカ。元旦に更新するつもりが、遅くなっちゃった（汗）

アスカ

「まあ良いわよ。お年玉くれるならね♪」

うっ（汗）

わ、解ったよ……あとで渡すから（汗）

第四十八話 VS ヤミラミ

「散れ！」

ジュプトルの合図で襲いかかってきたヤミラミ達の攻撃を回避するアスカ達。

「つるのムチ！」

すかさず反撃するアスカ。首からつるのムチを二本伸ばし、一人のヤミラミに巻きつける。

「吹っ飛びなさい！」

つるのムチを巻きつけたままヤミラミを振り回し、勢いがついたところで投げ飛ばすアスカ。

投げ飛ばされたヤミラミは木に身体を打ちつける。

「火炎放射！」

リザードンは口から炎を吐き出し、ヤミラミに直撃させる。

「雷パンチ！」

リンはヤミラミの懐に飛び込み、電気を纏わせた右手で鋭いアツパーを決め、ヤミラミを空中に吹き飛ばす。

「……落とす！」

リンは尻尾をバネのように使って高くジャンプ、ヤミラミの上を取る。

そして再び雷パンチをヤミラミの腹部に直撃させるリン。ヤミラミは吹き飛ばされて地面に叩きつけられる……リンのパワーが強かったせいで、身体が地面にめり込んでいる。

「リーフブレード！」

ジュプトルは腕にある葉っぱにエネルギーを集め、剣のように鋭く尖らせる。そしてリーフブレードを二人のヤミラミに直撃させ、大きく後方へ吹き飛ばす。

アスカ達はあっという間に五人のヤミラミ達を一掃してしまった。だがこれで終わらない事を知っているアスカ達は戦闘体勢を解かない。

しばらくしてヤミラミ達は起き上がる。

『自己再生！』

ヤミラミ達の身体は光り輝き始め、今まで受けた傷が治ってしまった。

「無駄だ。貴様らを始末するまで俺達は何度でも――」

「雷パンチ！」

起き上がったヤミラミが言い切る前に、リンは容赦なく雷パンチを叩き込む。一撃を受けたヤミラミは後方へ大きく吹き飛ばされ、木に身体を打ちつける。だがヤミラミはすぐに自己再生して体力を回復、何事も無かったかのように立ち上がる。

「無駄だと言っただろ」

（やっぱりあの自己再生で回復して持久戦に持ち込む戦法は厄介ね……でも、攻略法は考えてあるのよね）

前回ヤミラミ達と戦った時から攻略法を考えていたアスカ。自信があるようで、少し笑みを浮かべている。

「……何か策でもあるのか？」

アスカが笑みを浮かべているのを見て、ジュプトルが尋ねる。

「まあね。だけど、これをやるにはまずあいつらを一ヶ所に集める必要があるわ。協力してくれる？」

「……良いだろ。奴らを一ヶ所に集めれば良いんだな？」

ジュプトルの問いにアスカは頷いて応える。

「リザードンにリンちゃんもお願いね」

「了解だよアスカ」

「任せて下さい」

リザードンとリンも頷いて答える。

「よし……行くぞ！」

合図を出したジュプトルが飛び出し、それに続いてリザードンと

リンも飛び出す。

「散開！」

ジュプトルはそのまま真っ直ぐ突っ込み、リザードンは右、リンは左とそれぞれ別方向へ。

『シャドーボール！』

迎え撃つヤミラミ達。

ヤミラミ達は両手で黒いエネルギー弾を作り出し、ジュプトル達に向けて放つ。

「リーフブレード！」

「ドラゴンクロー！」

「雷パンチ！」

ジュプトルはリーフブレードでシャドーボールを一刀両断、リザードンは鋭い爪で打ち消し、リンは雷パンチでシャドーボールを弾き飛ばす。

「エナジーボール！」

ジュプトルは両手で緑色のエネルギー弾を作り出し、ヤミラミに向けて放つ。

「エアスラッシュ！」

リザードンは両翼を力強く羽ばたかせ、空気の刃を作り出す。

「ボルテッカー！」

リンは身体から電気を放出しながらヤミラミ達に向かって突っ込む。

それぞれが放った技はヤミラミ達に直撃、一ヶ所に集まるように吹き飛ばされる。

「つるのムチ！」

ヤミラミ達が一ヶ所に集まったところでアスカはつるのムチを伸ばし、ヤミラミ達にしっかりと巻きつけて動きを封じる。つるのムチから抜け出そうともがくヤミラミ達だが、アスカは力を強めてキツく拘束する。

「宿り木の種！」

アスカは拘束しているヤミラミ達に向かって小さな植物の種を飛ばし、身体に張り付かせる。

張り付いた種から植物が芽生え、ヤミラミ達の身体に絡みついていく。

植物が全身に絡みついた刹那、せつなヤミラミ達は身体から力が抜けるような脱力感に襲われる。

「こ、これは……」

「宿り木の種、それはあんた達の体力を奪っちゃう種よ。そしてこれはおまけ……毒の粉！」

つるのムチで拘束、宿り木の種で体力を奪っているヤミラミ達に向いてアスカは首にある花びらから粉を放出する。

その粉を吸ったヤミラミ達は急に顔色が悪くなる。粉の効果で毒を受けたのだ。

「これでいくら自己再生しても回復しきれないでしょ？」

笑みを浮かべながら動けないヤミラミ達を見つめるアスカ。

「なるほど。それならいくらこいつらでも回復しきれないな」

腕組みをしてアスカが考えた攻略法に感心しているジュプトル。

「さあて、あんた達には色々と言いたい事があるのよ。まず一つ、なんで私やリザードンを殺そうとしたの？」

「何っ！？ お前達、こいつらに命を狙われたのか！？」

アスカ達がヤミラミ達に命を狙われた……それを聞いたジュプトルは驚きの声を上げる。

「そ、そうだけど……なんであんたがそんなに驚くのよ？」

首を傾げるアスカ。

「い、いや別に……」

言葉を濁し、視線を逸らすジュプトル。

「変なジュプトルね？ ま、良いわ。さあ、あんた達早く答えなさ

い！　なんで私達を殺そうとしたのかを！」

「……ターゲットであるお前達を殺すよう命令された……俺達は命令された事を実行しようとしただけだ」

弱々しくヤミラミは答える。宿り木の種と毒の粉がかなり効いているようだ。

「命令された？　一体誰に命令されたのよ？」

「……そいつは言えないな……」

答えようとしないうヤミラミ。

「答えなさいよ！　あんた達に命令したのは誰よ！」

強い口調でヤミラミ達に迫るアスカ。

「言わないと……また痛い目に遭いますよ？」

頬の電気袋から電気を軽く放出しながらヤミラミ達を脅すリン。だが、それでもヤミラミ達は喋ろうとしない。

「喋らないってんなら、また痛い目に――」

「シャドーボール！」

アスカがヤミラミ達に技を放とうとした刹那、何処からかシャドーボールが放たれる。

不意を突かれた為アスカは回避出来ずにシャドーボールをまとも

に食らってしまう。シャドーボールを受けた衝撃でヤミラミ達を拘束していたつるのムチが緩み、ヤミラミ達は抜け出してしまった。

「アスカ大丈夫!？」

心配そうに見つめるリザードン。

「な、なんとかね……」

「ケケケ、悪いなアスカ。こいつらは逃がさせてもらうぜ」

茂みの中からゲンガーが現れた。つるのムチから抜け出したヤミラミ達はゲンガーの後ろに下がっている。

「ゲンガー! あんたまた邪魔して……一体何考えてんのよ!」

「ケケツ、そんなのお前が知る必要は無いな。あばよ、黒い霧!」

ゲンガーは口から黒い煙を吐き出し、アスカ達の視界を遮ってしまふ。

「こんな霧!」

リザードンは力強く翼を羽ばたかせて突風を作り出し、黒い霧を吹き飛ばす。黒い霧が消えた時、すでにそこにはゲンガー達はいなくなっていた。

「……逃げられたな」

「ゲンガーの奴……なんでヤミラミ達と?」

何故ゲンガーがヤミラミ達と一緒にだったのか……それが解らない
リザードンは首を傾げる。

「奴もヤミラミ達の仲間なんだろう……俺はもう行くぞ。やらなきや
ならない事があるからな」

ジュプトルはその場を立ち去ろうとする。

「待つてジュプトル！ あなたは何故時の歯車を集めているの？」

立ち去ろうとしたジュプトルをアスカが呼び止める。

「……必要だからだ。悪いが時間が無いんだ……じゃあな」

そう言ってジュプトルは走り去ってしまった。

第四十八話 VS ヤミラミ (後書き)

宿り木の種に毒の粉につるのムチ……恐怖の組み合わせっすな (汗)

アスカ

「それにリンちゃんが加われば完璧よ♪」

リン

「ですね」

怖いよ (汗)

第四十九話 別れは突然に（前書き）

いやゝ、来月になるとこのアスカ&Leon, レオンは連載して1周年になる事がわかりましたよ。

Leon

「もう1年なんか」

アスカ

「早いわねえ」

だがしかし、他の小説も執筆しなきゃならんから1周年企画とかやらないから。

Leon

「えゝ（汗）」

そこは勘弁ね（汗）

第四十九話 別れは突然に

リンゴの森でスカタンク達が仕掛けた様々な罠に引っかかり、散々な目にあったレオンとポツチャマ、そしてバクフーンの3人。しかし、それをなんとか乗り越えスカタンク達を撃退し、ペラップから依頼されたセカイイチの確保に成功する。

そしてレオン達はセカイイチをギルドに持ち帰り、ペラップに引き渡して仕事を終える。

「ふう〜……とりあえずなんとか仕事終わったな」

仕事を無事終える事が出来て、ホッとした表情を浮かべるレオン。

「でもあのスカタンク達、結局なんだったんだろうね？」

首を傾げながら、自分達の邪魔をしてきたスカタンク達の事を考えるポツチャマ。

「さあな。でも、次に会った時は絶対に倒してやるさ」

右手で握り拳を作り、リベンジを誓うレオン。

「あら、あんた達帰ってたのね？」

その時、アスカとリザードン、そしてリンが暗夜の森から帰ってきた。

「ようアスカ。何処行ってたんだ？」

「ちょっと暗夜の森で調査をね。まあ、肝心な事は何もわからなかったけどね」

苦笑いしながらアスカはレオンの問いに答える。

「そっちはどうなの？　ちゃんと依頼は達成出来たの？」

「もちろんだぜ。いろいろ大変だったんだぜ？　スカタンク達がやってきて俺達の邪魔——」

レオンがリンゴの森で起きた出来事をアスカ達に説明しようとした時、何処からか“ぐうぐう”という音が鳴り響く。

「は、腹減った」

バクフーンの腹の虫が鳴いたらしい。

両手でお腹を押さえながらその場に座り込んでしまうバクフーン。

「……散々リンゴの森でたくさん食べたのにもう腹が減ったんか……」

呆れた表情を浮かべてバクフーンを見つめるレオン。その時、食堂から“チリリンチリリン”と、食事の用意が出来た事を知らせる音が鳴り響いてきた。

「あつ、ご飯の準備が出来たみたいだね。皆、食堂に——」

「飯ーっ！」

ポツチャマが食堂に行こうと言い切る前に、ついさっきまで空腹

でへばっていたバクフーンはシャキッと起き上がり、食堂に向かって凄い速さで走っていった。

「……食い物が絡むと変わる奴がいるのは知ってたけど……」

「あれは変わりすぎよね……」

翌日の朝。いつも通りレオンとポツチャマはギルドの朝礼に出ていた。

「あー……お前達に知らせる事がある。遠征に出発するまであと1週間となった。メンバー発表をするのは当日の朝。皆、これがラストスパートだ。遠征メンバーに選ばれるように頑張るように。それじゃ、仕事に掛かるよーっ!」

『オオーツ!』

残り1週間……それを聞いた弟子達は張り切って仕事をしに向か
っていった。

「あと1週間か……よしポツチャマ！ 気合い入れていこうぜ！」

「もちろんだよ！」

遠征メンバーに選ばれたレオンとポツチャマは気合いが入る。

「おはよーっす。なんか気合い入ってんじゃんか2人共？」

そこにバクフーンがやってきた。手には何かが入ったバックが握
られている。

「当然だろ……ってバクフーン、どっかに行くのか？」

「嗚呼、あんまりここに長居するのは良くないから、そろそろ帰ろ
うと思っあてよ」

バクフーンはここから離れ、帰ろうとしていた。それを聞いたレ
オンとポツチャマは驚きの表情を浮かべる。

「も、もう帰っちゃうの!？」

ポツチャマの問いに頷いて応えるバクフーン。

「もう少しここにいても良いのに……」

「悪いなレオン。でもさ、お前らと一緒に過ごせてすっげー楽しか

ったぜ♪　じゃあな、探検頑張れよ！」

笑顔でそう言うと、バクフーンは前へ歩き始めて坂を下っていく……が、何か思い出したのかバクフーンは立ち止まり、レオン達の方に振り向く。

「お前らに言うの忘れてた！　レオンにポツチャマ！　どんなに厳しくて辛い事があっても、絶対に諦めんなよ！　諦めなければ、良い事ってのは絶対起こる！　それを忘れんなよ！」

諦めるな……大きな声でレオン達に伝えたと、バクフーンは手を振りながら再び歩き始めた。

「諦めるな……か」

「バクフーン、なんであんな事言ったんだろ？」

何故急にバクフーンは諦めるなど言ったのか、それが気になったポツチャマは首を傾げながら考える。

「わかんねえけど、でも良い事言ってくれたには違いない。それで良いんじゃないのか？」

「……そだね」

「よし、それじゃ張り切って仕事しようぜ！」

レオンとポツチャマは依頼を受ける為、依頼掲示板があるギルドの中へと戻っていった。

「うーん、やっぱりセカイイチは美味いなあ♪ プクリン、やっぱり良い奴だよなあ♪」

レオン達と別れたバクフーンは、バックの中に入っていたセカイイチを食べながらとある草原を歩いていた。

帰る事をプクリンに伝えた時、プクリンはバクフーンに自分が持っていたセカイイチを少しだけプレゼントしてくれたのだ。

「えっと……確かこの辺りでディアルガとパールキアが迎えにきてくれる筈……ん？」

辺りを見回していたバクフーンは、草原のド真ん中で1人佇んでいるポケモンを発見する。

「あいつは……」

気になったバクフーンはそのポケモンの所へ駆け寄っていく。

（風が気持ちいい……これが、本来あるべき姿の世界なんだな。こんな世界を、あんな未来にする訳には……）

佇んでいたポケモン……それは“時の歯車”を集めているジュプトルだった。

「おーい！」

考え事をしていたジュプトルにバクフーンは声を掛ける。それに気づいたジュプトルはバクフーンの方へ振り向く。

「こんな所で何してんだ？」

首を傾げながらバクフーンはジュプトルに尋ねる。

「……別になんだって良いだろ。お前には関係ない」

ジュプトルは冷たくそう言い、バクフーンから顔を背ける。

「……用が無いなら、俺は行かせてもらうぞ」

「あゝちよつと待った！ 迎えが来るまで暇なんだ、俺とバトルしねえか？」

立ち去ろうとしたジュプトルを呼び止め、バトルをしないかと言いつ出すバクフーン。

「お前とバトル？ 悪いが俺にはそんな時間はない」

「そう言うなって、なっ？ 1回だけで良いからさ！」

両手を合わせて頼み込むバクフーン。

（しつこい奴だな……仕方ない、手荒な事はしたくなかったが……気を失ってもらおう！）

ジュプトルはバクフーンを気絶させようと背後に回り込み、バクフーンの首筋に手刀で攻撃する。

「おっと！」

だがしかし、バクフーンは素早くしゃがんで手刀を回避する。

（何！？）

確実に直撃すると思っていたジュプトルは、この攻撃を回避された事に驚いている。

驚いている間にバクフーンはジュプトルから離れ、戦闘体勢に入る。

「不意打ちしてくるなんてヒドい奴だなあ。バトルは正々堂々とやるもんだぜ？」

（こいつ……出来る）

不意打ちが失敗した今、バトルするしかないと判断したジュプトルは戦闘体勢に入る。

「……お前、名前は？」

「俺か？　俺はバクフーンだ。さあ、楽しいバトルをしようぜ！」

第四十九話 別れは突然に（後書き）

アスカ

「あつ、バクフーン先輩がジュプトルとバトルしようとしてる」

レオン

「なんでこうなる？」

だってさ、やらせてみたいじゃないか。

バクフーンとジュプトル、この2人のバトル（笑）

アスカ

「まあ見たいとは思うけど……相性の問題と、経験の差でジュプトルが圧倒的に負けると思うんだけど（汗）」

レオン

「確かに（汗）」

いやいや、そこはバクフーン流。僕が執筆するバトルにタイプの相性なんて関係ないよ。

アニメでサトシ君はいつもタイプの相性を覆してきたじゃないか（笑）

アスカ

「まあ彼だからねえ」

とにかく、次話のバクフーンとジュプトルのバトル、良いバトルになるよう頑張るよ。

第五十話 バクフーンVSジュプトル! (前書き)

アスカ

「先輩とジュプトルの対決ね」

レオン

「どうなるんだ?」

それは本編にて (笑)

第五十話 バクフーンVSジュプトル!

「いくぜ、気合い玉!」

バクフーンは両手でエネルギー弾を作り出し、それをジュプトルに向けて放つ。

「エナジーボール!」

それに対してジュプトルは両手で緑色のエネルギー弾を作り出して放ち、バクフーンが放ったエネルギー弾にぶつける。ぶつかり合った2つのエネルギー弾は小規模の爆発を起こす。

「高速移動!」

ジュプトルは素早い身の熟しでバクフーンに向かって走り、一気に距離を詰めようとする。

「火炎放射!」

バクフーンは口から炎を吐き出す。吐き出された炎は一直線にジュプトルへと向かっていく。

しかし、炎が当たる寸前でジュプトルは体を屈めて回避する。^{かが}そして低い姿勢のままバクフーンに向かって走る。

「リーフブレード!」

ジュプトルは両腕に生えている葉っぱにエネルギーを集める。集められたエネルギーは葉っぱを覆い、まるで剣のように鋭くな

る。

ジュプトルは両腕に発生させたエネルギーの剣でバクフーンに切り掛かる。

「おっと！」

バクフーンは炎を吐くのを中断してバックステップして後方に下がる。これによりジュプトルの攻撃はバクフーンを捉える事が出来ずに空を切る。

「タネマシンガン！」

すかさずジュプトルは次の攻撃を仕掛ける。

口から無数のエネルギー弾を吐き出してバクフーンに向けて連射する。

「火炎放射！」

これに対してバクフーンは再び炎を吐き出し、ジュプトルが放った攻撃にぶつける。

バクフーンが放った炎は無数のエネルギー弾を弾き飛ばしながらジュプトルに向かっていく。

「電光石火！」

エネルギー弾の連射を中断したジュプトルは素早い身の熟しで炎を回避。バクフーンの背後に回り込む。

「強力な火炎放射だが……当たらなければ問題ない。リーフブレード！」

背後に回り込んだジュプトルは再び両腕の葉っぱにエネルギーを纏^{まと}わせ、バクフーンに切り掛かる。

「フレアドライブ！」

バクフーンの背中から大量の炎が吹き出す。

その炎は一瞬でバクフーンの体全体を包み込む。ジュプトルは構わずそのまま攻撃を叩き込むが、バクフーンを包む炎がバリアの役割をして攻撃を阻み、本体に攻撃が届く事はなかった。

「ジャイロボール！」

バクフーンは炎を纏ったまま体を高速で回転させる。これにより阻まれていたジュプトルの攻撃は弾かれ、大きく体勢を崩されてしまう。

「これでどうだ！」

体勢を崩したジュプトルに向かって、バクフーンは炎を纏ったまま体当たりを仕掛ける。

「守る！」

ジュプトルは前方にエネルギーの壁を作り出してバクフーンの攻撃を防ぐ。バクフーンのパワーが強くて後方へと吹き飛ばされるが、ジュプトルは慌てる事なく体勢を立て直して安全に着地する。

「あちゃー、今のカウンター技“フレイムシールド”は決まったと思ったんだけど……やっぱお前強いな♪」

フレイムシールド、それは炎を体全体に纏わせて物理攻撃を防ぎ、それから体を回転させて敵の体勢を崩させてから体当たりを決める……バクフーンが考えたオリジナル技である。

そのオリジナル技を防がれたバクフーンだが、このバトルを楽しんでいるようで、満面な笑みを浮かべている。

「……お前も強いな。決まると思った攻撃が全て防がれてしまう……お前みたいな奴は初めてだ」

一方ジュプトルもこのバトルを楽しんでいるようで、自然と笑みが零れる。
こぼ

「さて、続けっか♪」

バクフーンは背中から炎を吹き出し、姿勢を低くして戦闘体勢に入る。

「嗚呼、ああ続けよう」

ジュプトルも両腕にある葉っぱにエネルギーを纏わせ、いつでも攻撃出来るように準備する。

「んじゃいくぜ！ 火炎——」

『おいバクフーン、何遊んでんだ？』

バクフーンが攻撃を仕掛けようとした時、突然何処からか声が聞こえてきた。しかしバクフーンやジュプトルが周囲を見回しても、2人以外には誰もいなかった。

「あつ、もしかしてパルキアか？」

『当たり前えだろ。俺以外に誰がいるってんだよ？』

バクフーンが名前を呼ぶと、声の主は少々乱暴な口調で返事をする。

「おいバクフーン、これはどういう事だ？」

状況が把握出来ないジュプトルはバクフーンに尋ねる。

「えっと、俺の仲間が迎えに来てくれたみたいなんだけど……なあパルキア、もうちょい待っててくれないか？ 今すっげー良いところなん——」

『ダメだ、もうとつくにリミットは過ぎてんだぞ。これ以上でめえがこの世界に干渉すんのは良くねえんだ』

ジュプトルとバトルを続けたいバクフーンは声の主に少し待っていてもらおうと頼もうとするが、声の主はすぐにダメだと拒否する。それを聞いたバクフーンはがっくりと肩を落とす。

『おら、扉開いてやつから早く来い』

声の主がそう言った時、バクフーン達の間で空間に歪みが発生する。

歪みは徐々に大きくなり、まるで扉が開くように空間が裂け、別世界への入口が出来上がる。

「はあ……悪いな。なんかもう帰らないといけないうまいなんだ」

バクフーンは両手を合わせ、申し訳なさそうにしながらジュプトルに謝る。

「バクフーン……お前はまさか、この世界のポケモンじゃないのか？」

この世界のポケモンじゃない……そう問い掛けてきたジュプトルに、バクフーンは頷いて応える。

「まあそんな感じかな。バトルの途中だったのに、本当ごめんな。じゃ、俺そろそろ行くよ。あんまり待たせると、パルキアの奴が怒るからさ」

再びジュプトルに謝ると、バクフーンは空間の裂け目に向かって歩き出す。しかし何か思い出したのか、急にバクフーンは立ち止まってジュプトルの方へ振り向く。

「そういえば言うの忘れてたよ。1人だけで頑張ろうとすんなよ？ 1人だけじゃ、どうしようもない事っていうのが絶対起こる。だけど仲間を作って、その仲間と力を合わせれば……出来ない事も出来るようになる」

「仲間……」

「そう、仲間だ。んじゃ、俺はもうそろそろ行くから。負けんなよ、ジュプトル」

最後にそう言って、バクフーンは空間の裂け目の中へ入っていく。

『もう、良いんだな？』

「嗚呼、レオン達やジュプトルにも伝えたい事は伝えた。あとはあいつら次第さ」

声の主の問いにバクフーンは頷きながら答える。

『そうか……じゃあ、帰るぞ』

声の主がそう言うと、空間に出来た裂け目は閉じていき、歪んでいた空間は元に戻っていった。

第五十話 バクフーンVSジュプトル! (後書き)

アスカ

「なんかまた、先輩が意味深な発言を……」

伏線……とでも言っておきましょうか。

まあでも気にしなくて良いよ (笑)

レオン

「いや気になるから (汗)」

アスカ

「そうよ作者さん (汗)」

2人共、気にしたら負けだよ? (笑)

第五十一話 選ばれし遠征メンバー

「よし、皆集まったな？　それでは、今から遠征に選ばれたメンバーを発表していくぞ」

バクフーンがギルドを去ってから数日後、レオンやポツチャマを含めたギルドの弟子達全員が集まり、これから遠征メンバーを発表するペラップに注目する。

レオンとポツチャマは遠征メンバーに選ばれる為にこの数日間、自分達に出来る仕事を精一杯やってきた。きっと選ばれると心の中では思っているが、やはり不安なようでレオンとポツチャマは両手を合わせて祈るようにしている。

「じゃあまず1人目だな……」

ペラップは親方であるプクリンから受け取ったメモ用紙を見つめ、それに書かれている名前を読み上げようとする。

弟子達は固唾^{かたず}を呑んでペラップが名前を呼ぶのを待つ。

「1人目は……ってちょっと待った？　これは……えっ、どゆ事？」

読み上げようとしたペラップだが、メモ用紙に書かれている名前を見て思わず首を傾げてしまう。見間違いかもしれないと思い、ペラップは何回もメモに書かれている名前をチェックする。

（見間違い、じゃないよなあ。何回チェックしても同じだ……それより親方様、字が凄く汚くて読みづらいよ……あいつの名前とか隅っこに小さく書かれてるし）

プクリンが書いた字があまりに汚い事に苦笑いを浮かべるペラップ。

「どうしたんだいペラップ？」

なかなかメモに書かれた名前を読み上げないペラップを不思議そうな表情を浮かべながらプクリンが尋ねる。

「親方様、本当にこのメンバーでよろしいんですか？」

念の為にペラップは遠征メンバーはこれ良いのかとプクリンに尋ねる。

それに対してプクリンは笑みを浮かべながら頷いて応える。

「うん、それで良いよ」

「は、はあ……わかりました。では改めて遠征メンバーを発表するぞ。メンバーは……この場にいる全員だ！」

この場に集まっている弟子達全員……それを聞いた弟子達は驚き、全員きよんとした表情をしている。レオンやポツチャマも皆と同じ表情を浮かべている。

「ほ、本当に全員なの？」

「そうだポツチャマ。しかし……親方様、何故また全員なんですか？」

プクリンが出した考えにイマイチ納得出来ないペラップは何故全員にしたのか、その理由をプクリンに尋ねる。

「だって、皆で一緒に行った方が楽しいでしょ？」

返ってきた答えはなんとも単純なものだった。

プクリンはただ皆と一緒にの方が楽しいからという理由だけで弟子達全員を遠征メンバーに選んだようだ。

「は、ははは……ですよねえ、皆で一緒の方が楽しいですよねえ、聞いた私がバカでしたよはは♪ はあ……」

プクリンに対して突っ込みたい事がたくさんあるペラップだったが、親方であるプクリンにそんな事を言える訳もなく、ただ笑うしかないペラップであった。

「僕達、遠征メンバーに選ばれたんだ……やったあーっ！」

一方ポツチャマは遠征メンバーに選ばれた事がかなり嬉しいようで、その場で飛び跳ねて喜んでいる。そんなポツチャマが喜ぶ姿を見て、自然とレオンの顔からは笑みが零れる。こぼ

「えー、皆注目！　これから遠征する場所を発表するぞ」

ペラップが皆に呼び掛けると、弟子達全員はペラップに注目する。

「今回我々が遠征先に選んだのは“霧の湖”と呼ばれる場所だ。そこはまだ誰も見つけた事がないと言われる秘境……そこには美しいお宝が眠っているらしいのだ。我々は“霧の湖”を探し出し、そこに眠るお宝を見つけ出す……それが今回の目的だ。わかったな？」

ペラップの説明をしっかり聞いていた弟子達は元気良く「はい！」

と言って答える。

「よろしい、では次だ。出発する時にいくつかチームを作っておこうと思う。まず最初に……」

遠征に向かう為の準備をするレオン達。

そんなレオン達を、物陰からこっそりと覗き込んでいるポケモンが3人いた。スカタンク、ドガース、ズバット……“リングの森”でレオン達やバクフーンに様々な罠を仕掛けて邪魔してきたチームドクローズである。

「アニキ、あいつら“霧の湖”って場所に向かうみたいですぜ？」

「らしいなズバット……よし、そこにある美しいお宝つてのを俺達がいただこうじゃねえか。ついでにレオン達の始末もそこでやる、ククク……早速出発の準備だ、いくぞお前達」

『了解!』

スカタンク達は“霧の湖”に向かう為の準備をする為、レオン達に気づかれぬよう静かにギルドを抜け出した。

同時刻、ギルドから離れた場所にある“暗夜の森”……そこにあるポケモン達が集まっていた。

1人はイジワルズのリーダーであるゲンガー、そしてアスカ達を襲ったヤミラミ達もいる。

「ジュプトルを倒す事も捕まえる事も出来ないとは……お前、やる気があるのか？」

「ケッ、うるせえよ。今回は運が悪かったただけだ」

ゲンガーに対して威圧的な態度を取るのは暗褐色あんかつしよくを基調とした体色で赤い目が1つ、少し太めな胴体部分には黄色いラインがあり、そのラインが恐ろしげな顔みtainな模様に見える幽霊みtainなポケモンだ。

「ふん、まあいい。だが、もしまた失敗したら……わかっているだろうな？」

怪しい笑みを浮かべながらゲンガーに迫るポケモン。“もしまた失敗したら……”それを聞いたゲンガーの表情は険しくなる。

「ケッ……わかっているさ。今回はあんたの部下を使わせてくれ、アーボもチャーレムもジュプトルにやられて動ける状態じゃねえからな」

「……良いだろ」

「サンキュー、いくぞヤミラミ共！」

ゲンガーはヤミラミ達を連れ、その場を去っていく。

「まあ精々頑張ってもらわねばな……さて、私もそろそろ行動を起こすか……」

第五十一話 選ばれし遠征メンバー（後書き）

レオン

「やっとメンバーに選ばれた（汗）」

ポツチャマ

「長かったよ（汗）」

アスカ

「そして最後に出てきたあのポケモン……間違いないなくあいつね（汗）」

五十話過ぎたからそろそろ良いかなあと思ひましてね。
さて次回は、いよいよ遠征だよ。

レオン

「気合い入れるぜ！」

第五十二話 遠征出発（前書き）

ようやく更新……あらま、最後に更新してからひと月過ぎてた（汗）

アスカ

「遅いわよ（怒）」

すみません（汗）

第五十二話 遠征出発

「これでよしと……そっちも準備出来たか？」

遠征出発当日の早朝、バッグに必要な道具を詰め終えたレオンはそれを背中に背負い、チームメンバーであるポツチャマ達に準備出来たかを尋ねる。

「僕も準備出来たよ」

「こっちもでゲス」

ポツチャマとビッパも準備出来たようでも出発出来る状態だ。

今回レオンとポツチャマはギルドの先輩にあたるビッパと一緒に行動し、目的地に向かう事になったようだ。

「よし、じゃあそろそろ出発するか。他のチームよりも先に濃霧の森に到着してやろうぜ！」

「うん！」

「頑張るでゲスよ！」

誰よりも先に目的地に到着してやろうと思い、気合いが入るレオン達。

「あら、なんだか気合い入ってるじゃないあなた達？」

そんなレオン達に誰かが声を掛けてきた。

声がした方にレオン達が振り向くと、そこにはアスカにリザードン、そしてリンがいた。

「当然だろアスカ、初めての遠征なんだからさ……ってか、アスカ達これからどっか行くのか？」

「情報集めよ、ゲンガーやらジュプトルやらいろいろと調べなきゃならない事があるから。じゃ、私達はそろそろ行くわ、遠征頑張るなさいね。土産ちゃんと持ってくんのよ？」

レオン達にそう言うのアスカはリザードン達と一緒にその場を去っていった。

「アスカさん達、情報が手に入ると良いでゲスね」

「そうだな。よし、んじゃ出発しようぜ！」

アスカ達を見送った後、レオン達は張り切ってギルドを出発した。

「うーん……もうそろそろ来ても良い頃だと思っただけど……」

レオン達と別れたアスカ達はギルドから少し離れた場所にある海岸にやってきていた。

どうやら誰かが来るのを待っているようだ。

「アスカさん、これから来られる人達ってどんな方達なんですか？」

これからやって来る者達と面識がないリンはアスカにどんな人達なのかと首を傾げながら尋ねる。

「そうねえ……1人は妹思いなお兄さんってどこかしら？ でもちよっと心配しすぎる事があるわね。もう1人はそのお兄さんの妹、とっても優しい子よ。最後の1人はクールな感じかなあ？」

アスカは首から伸ばした1本の蔓を顎あごに当てながらこれから来る者達の事をリンに説明した。

「あっ、来たよ！」

海の上を指差しながらリザードンはアスカ達に知らせる。

アスカとリンがリザードンの指差す方に目を向け、こちらに向かって飛んで来ている3人のポケモン達を確認する。

「本当だわ！ おーい、ここよー！」

向かってくる3人にアスカは大きな声を出す。

その声に気づいた3人はゆっくりとアスカ達の所へと降下する。

その3人とは以前アスカ達と一緒に行動していたラティオスとラティアス、そしてアブソルだ。

地上近くまで降下すると、ラティオスの背中に乗っていたアブソルはそこから飛び降りて地上に着地する。

「お久しぶりですアスカさん」

しばらくぶりの再会に、ラティアスは嬉しそうな笑みを浮かべる。

「久しぶりねラティアスちゃん、戻ってきてもらったばかりで悪いけど早速仕事をお願いしたいのよ」

アスカは真剣な表情になってラティアス達に頼みたい仕事があると言う。それを聞いたラティアス達も真剣な表情になる。

「大体の事はお前が手紙に書いた内容で把握している。ゲンガーに、それからジュプトルって奴を捜し出すんだろ？」

「そうよアブソル、ゲンガーの奴は見つけたらボコボコにしても良いから捕まえて。ジュプトルは……何か訳有りみたいで“時の歯車”を集めているみたいなのよ。何故それを集める必要があるのか、それを知りたいから見つけたら聞き出してほしいの」

アスカは仕事内容を簡単にアブソル達に説明する。

「了解した。じゃあ早速仕事に取り掛かるか……先に行くぞ」

仕事内容を確認すると、アブソルは1人で先に走り出してしまった。

「あっ、ちょっとアブソルさん！？ ……行っちゃった……アスカさん、アブソルさん1人だけで大丈夫なんですか？」

1人で行ってしまったアブソルが心配でラティアスは大丈夫なのかとアスカに尋ねる。

「アブソルなら大丈夫よ。彼のバトルスタイルだと複数でいるより1人の方が強さを発揮出来るから……それに、経験も豊富だから何も心配ないわよ」

何も心配はないと言い切るアスカ。余程アブソルの事を信用しているようで、全く心配していないようだ。

「そ、それなら良いですけど……」

「さあ、私達も仕事に掛かるわよ、ラティアスちゃんはラティオスと一緒に空から捜してね。集合場所はプクリンのギルド……皆、気をつけてね？」

「アスカさん達も気をつけて」

ラティアスはラティオスと一緒に空へ向かって飛び立つ。そしてアスカ達もゲンガー、もしくはジュプトルを捜し出す為に出発した。

第五十二話 遠征出発（後書き）

レオン

「俺ら出番少なっ（汗）」

今回はそうだけど、あとでちゃんと出番は用意してあるから……しかし、眠気と戦いながらだとなんだか文章が酷い事になっているよ
うな……？（汗）

アスカ

「作者さんの文章が酷いのは昔からじゃないのよ」

うぐっ（汗）

第五十三話 それぞれの戦い（前書き）

うお、またしても前回更新してからひと月……いやそれ以上経過してる（汗）

アスカ

「……………（怒）」

……アスカさん、無言で見つめられると余計に怖いっすよ（汗）

第五十三話 それぞれの戦い

「レオンにビッパ、早くおいでよ！」

ギルドが遠征先を選んだまだ誰も足を踏み入れた事が無い秘境“霧の湖”……そこを見つけ出して調べる為にギルドを出発したレオン、ポツチャマ、ビッパの3人。

他の弟子達とは別ルートで進む事になった3人は、まずはベースキャンプを張る場所になっている“濃霧の森”に向かって歩いていた。

現在彼らがいる場所は海がよく見える沿岸。

初めての遠征で張り切っているポツチャマが先頭を歩いていて、ゆつくりと歩いているレオンとビッパに大きな声で呼び掛ける。

呼び掛けられた2人は駆け足でポツチャマの所へ向かう。

「なんかいつもより張り切ってんなポツチャマ」

「当然だよレオン、だって初めての遠征だよ？　もう僕嬉しくって」
♪

とびきりの笑顔でレオンに答えるポツチャマ。

それにうんうんと頷きながら「わかるでゲスよ」とビッパが言う。

ビッパはレオンやポツチャマよりも先輩だが、実は2人と同じで今回が初めての遠征だったりするのだ。

「さあ、陽があるうちに先に進もうよ。えっと今いる場所が……」

おもむろ

徐にバッグから地図を取り出して地面に広げるポツチャマ。

そして自分達が今何処にいるのかを確認し始める。

「えっと今いるのが沿岸だから、ここだね。それで濃霧の森がここだから……“ツノ山”を越えないといけないみたいだね」

「ツノ山？ ひょっとしてあの山かポッチャマ？」

レオンは近くに見える大きな角のような形をした山を指差しながらポッチャマに尋ねる。

ポッチャマはその問いに頷きながら「そうだよ」と言って答える。

「あの山を越える事が出来たら、濃霧の森まですぐに到着出来るんだよ。さあレオンにビッパ、張り切っていくよ！」

地面に広げていた地図を綺麗に畳^{たた}んでからバッグに入れ、ポッチャマは張り切ってツノ山目指して歩き出す。

ポッチャマに続くようにレオンとビッパも歩き始める。

レオン達がツノ山目指して進み始めた頃、アスカ達と別れ単独でゲンガーやジュプトルの搜索をしているアブソルはある森を目指して通り道である草原を疾走していた。途中で出会った探検隊のポケモン達から、森の近くでジュプトルらしきポケモンを目撃したという情報を得たからだ。

「まだ近辺にいれば良いんだが……ん？」

森を目指していたアブソルだが突然走るのをやめてその場で急停止する。そして戦闘体勢に入って周囲を見回し、警戒する。

（ポケモンの気配を感じる……何処だ？）

何者かが近くにいた気配をアブソルは感じ取ったらしく、意識を集中して相手が何処にいるのかを探る。

「……そこか！ シャドーボール！」

アブソルは口から黒くて丸いエネルギー弾を吐き出して相手がいられると思われる場所に向かって放つ。

「ちっ！」

そこには確かにポケモンがいた。アブソルが放ったシャドーボールが直撃する寸前でそのポケモンは素早く後方へバックステップする事でシャドーボールを回避する。

対象を失ったシャドーボールは地面にぶつかり小規模の爆発を発生させる。

「……よく俺の居場所がわかったな？」

アブソルの攻撃を回避したポケモンは彼が捜していたジュプトルだった。アブソルに悟られないよう気配を消して隠れていたつもりだったジュプトルは、アブソルに見つかった事に少しだけ驚いている。

「俺は他のポケモンよりも少しばかり感覚が鋭いんでな……お前がジュプトルだな？ 俺の名はアブソル、救助隊チームアスカに所属

している。ジュプトル、お前には聞きたい事がたくさんあるんだ。俺と一緒に来てもらいたい」

自己紹介を簡単に済ませ、アブソルは単刀直入に自分と一緒に来てほしいとジュプトルに頼む。

だがジュプトルは首を横に振って一言「断る」ときっぱり言い切る。

「俺にはあまり時間が残されていない……アスカ達やお前と関わっている暇はないんだ。悪いが俺は行くぞ」

アブソルに背を向け、その場から立ち去ろうとするジュプトル。しかし、ジュプトルの行く手を阻むようにアブソルが回り込んできて目の前に立ち塞がる。

「一緒に来るのが無理ならせめて理由だけでも教えてくれ、何故お前は時の歯車を集めているんだ？ 集めて一体何をするつもりだ？」

「言っても信じないだろ。そこを退いてくれ」

時の歯車を集めている理由だけでも聞き出そうとしたアブソルだが、ジュプトルは何も喋ってはくれない。

それどころかジュプトルはアブソルを睨みつけながら退いてくれと言いつ出す。

「信じる信じないはお前が歯車を集める理由を聞いてから判断する。だから教えて——」

「しつこい！ エナジーボール！」

なんとか時の歯車を集める理由を聞き出そうとしたアブソルだったが、突然ジュプトルは両手で作り出した緑色の丸いエネルギー弾をアブソルに向けて放つ。

とっさにアブソルは右へ素早くステップする事でジュプトルが放ったエナジーボールを回避する。対象を失ったエナジーボールはそのまま空高く飛んでいった。

「言っただろ、俺にはあまり時間が残されていないと……まだ退かないと言うのであれば……俺はお前を倒す！」

ジュプトルは両腕から生えている草にエネルギーを集める。

エネルギーが集まると草は緑色の光に覆われ、まるで鋭利な刃物のように鋭くなる。

リーフブレードと呼ばれる技をジュプトルは発動したのだ。リーフブレードを発動したまま、ジュプトルは戦闘体勢に入る。

「……仕方がない、手荒な真似はしたくなかったが……お前がその気なら、俺はお前を倒してアスカ達の所へ連れて行く！」

バトルするしかないと判断したアブソルも戦闘体勢に入る。

アブソルとジュプトルがバトルを始めようとしていた同時刻、アスカ、リザードン、リンの3人は……

「あーっもう！ しつこいのよあんた達！ エナジーボール！」

アスカ達は数人のヤミラミ達を引き連れたゲンガーを発見、交戦中だ。

持久戦が得意なヤミラミ達用にアスカが考案したコンボもゲンガーに邪魔されてしまい上手く決まらず、苦戦を強いられている。

「ケケ、シャドーボールだ！」

アスカがヤミラミに向けて放ったエナジーボールをゲンガーは両手で作り出して放ったシャドーボールをぶつけて相殺させる。

「くっ、またあんたは邪魔を――」

「危ないアスカさん!？」

リンが大きな声でアスカに危険を知らせる。

アスカが振り向くと、1人のヤミラミが両手にある鋭い爪でアスカを攻撃しようとしていた。

「させるかぁーっ！」

そこへリザードンが素早くヤミラミに接近、背後からヤミラミの体を両手でしっかりと締め付けて攻撃を中断させる。

「アスカには指一本触れさせない！ フレアドライブ！」

ヤミラミの事を締め付けたまま、リザードンは翼を力強く羽ばたかせて空へ急上昇。そしてリザードンの尻尾に灯る炎が勢いよく燃え上がり、自身とヤミラミごと炎で体を包み込む。

あまりの炎の熱さにヤミラミはもがくが、リザードンは締め付けたままヤミラミを放さない。

ある程度上昇すると、リザードンはまるで円を描くようにぐるぐると高速で回り始める。

「地球投げ！」

ぐるぐると回る事で勢いをつけたリザードンはヤミラミを地面に向けて渾身の力を込めて投げる。フレアドライブの炎が体にまとわりついたまま、ヤミラミは頭から地面に激突する。

かなりのダメージを受けた為、ヤミラミは気絶してしまう。

地球投げと呼ばれる技は、本来ゴーストタイプを持つヤミラミには効果が無い。しかし、リザードンはフレアドライブと一緒に使用する事でヤミラミにも効果がある技に変化させたのだ。

ヤミラミが気絶した事を確認すると、リザードンはゆっくりと地上へ着地する。

「助かったわりザードン、ありがとう」

「いいんだよ。それよりアスカ、まだ戦闘は終わってないんだから気を抜かないでよ？」

「わかってるわよ」

アスカとリザードン、そして2人の近くまで移動したリンはゲンガーを睨み、戦闘体勢に入る。

「ケッ、俺はもう引き下がれねえんだよ……決着をつけてやるぜアスカ！」

第五十三話 それぞれの戦い（後書き）

レオン

「アスカ達がゲンガーやジュプトルと戦ってる時に俺らはわくわくしながら遠征か……（汗）」

物語の流れ的にしょうがないっしょ。

アスカ

「そういえばリザードンが地球投げを使ってたような……」

今は覚えてくれないけど、赤・緑・青の時代はしっかり覚えてくれたんですよ。

角ドリルを覚えてくれたケンタロスみたいに！

アニメでも無印時代にサトシのリザードンがよく決め技で地球投げを使ってましたし……懐かしいなあ（笑）

最近無印時代のポケモンアニメでグレンジムのリーダーカツラさんのエースポケモン、ブーバーとまだサトシの言う事を聞いてくれなかったリザードンの対決を観ましてね……「あっ、そういえば昔のリザードンは地球投げ使えたな……よし、これ小説で使おう！」って事になって今回使用させました（笑）

リザードン

「また僕の決め技が増えたから嬉しいな♪」

さて、次回の更新はいつになる事やら……なるだけ早く出来るよう頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0549g/>

ポケモン不思議のダンジョン・レオンの探検隊+アスカの救助隊

2010年10月16日13時51分発行